

よし たけ

吉武遺跡群

XIII

飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書 6

—第Ⅰ・Ⅱ次調査の縄文時代・

古墳時代から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集

2001

福岡市教育委員会

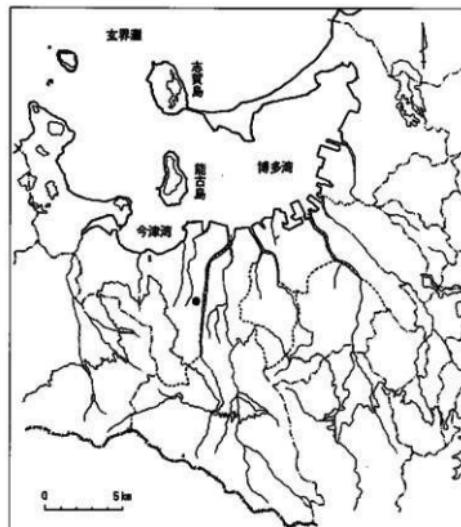
よし たけ
吉 武 遺 跡 群
XIII

飯盛・吉武遺跡整備事業関係調査報告書 6

—第Ⅰ・Ⅱ次調査の縄文時代・

古墳時代から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集



遺跡番号: YST

1・2次

調査番号

8102, 8234

2001

福岡市教育委員会



VII区全景（手前がSD-02）（北から）



IX区西侧遠景（SC-80他）（南東から）

卷頭図版

序

古来より大陸の門戸であった福岡市域には、アジアとの交流を示す多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも特に、市西郊の室見川左岸に広がる吉武遺跡群は、弥生～奈良時代にわたる長期の遺跡が数多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では昭和56年度より飯盛・吉武地区農業基盤整備事業の施工に伴い、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀に遡る弥生時代の豊富な青銅器を多く副葬した特定集団の墓地や大型建物群、紀元前後の弥生時代の墳丘墓、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群及び集落址、奈良時代末～平安時代にかけての官衙あるいは寺院址など各時代の遺構が検出されました。本書は第Ⅰ・Ⅱ次調査の内、縄文時代・古墳時代から平安時代までの遺構を収録したものです。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める手助けとなり、また学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にかかる飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員および市農林水産局の方々、報告書にかかわった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定について強力なご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対し、心より感謝申し上げる次第です。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　　言

1. 本書は飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する吉武遺跡群、第Ⅰ・Ⅱ次調査の内、縄文時代・古墳時代から平安時代の遺構についての発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財課が昭和56年度から昭和60年度にわたって実施した。
3. 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土壙をS K、溝状遺構をS D、竪穴住居址をS C、掘立柱建物をS B、ピットをS P、斂棺墓をKと表記した。
4. 本書は調査された各時代遺構の内、縄文時代の貯蔵穴、古墳時代から平安時代の遺構について報告するものである。
5. 本書に使用した遺構実測図の作成は、二宮忠司が行い、また、遺物実測は大庭友子が行った。
6. 本書に使用した図面類の整図および製図は、大庭友子が行った。
7. 本書に使用した写真は、二宮忠司が行った。
8. 本書で使用した方位は、すべて磁北である。真北は西偏に6°21'である。
9. 本書の執筆・編集は、二宮忠司・大庭友子が行った。
10. 発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基づき整理し、埋蔵文化財センターに保管・管理する予定である。
11. 掘図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。又、写真図版内にある番号は遺物登録番号・掲図番号・写真番号である。
12. 表紙題字は杉山悦子氏にお願いした。記して感謝いたします。

本文目次

第一章 はじめに	1
第二章 第一次調査	9
第一節 第一次調査の概要	9
第二節 第一次調査の記録	11
1. 第一次調査Ⅱ区—古墳時代の遺構—	11
住居址	11
掘立柱建物	15
S X (不整形土壙)	21
出土遺物	24
2. 第一次調査IV区—奈良時代以降の遺構—	27
第三章 第二次調査	29
第一節 第二次調査の概要	29
第二節 第二次調査の記録	30
1. 第二次調査V区—縄文時代の遺構—	30
貯藏穴	30
出土遺物 (1) 土器	53
(2) 石器	59
(3) 木材	59
(4) 種子	59
2. 第二次調査V区—奈良時代以降の調査	62
S X (不整形土壙) と埋甕	62
第三節 第二次調査VI区—奈良時代以降の遺構—	62
第四節 第二次調査VII区—奈良時代以降の調査	65
第五節 第二次調査VIII区—古墳時代の遺構—	71
検出遺構	71
掘立柱建物	71
S X (不整形土壙)・井戸状遺構	81
出土遺物	84
第六節 第二次調査IX区—古墳時代の遺構—	99
検出遺構	99
住居址	99
掘立柱建物	99
S X (不整形土壙)・井戸状遺構	119
溝状遺構	123
出土遺物	123
第七節 第二次調査X区—古墳時代の遺構—	152
検出遺構	152
溝状遺構	152
出土遺物	152
第四章 まとめ	153

挿 図 目 次

Fig. 1 吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000).....	4
Fig. 2 吉武遺跡群位置図(縮尺1/20,000).....	5
Fig. 3 吉武遺跡群と周辺遺跡(縮尺1/4,000).....	6
Fig. 4 調査区配置図(第一～第六次調査)(縮尺1/4,000).....	7
Fig. 5 調査区配置図(第1次調査)(縮尺1/1,000).....	8
Fig. 6 第1次II区全体図(縮尺1/400).....	10
Fig. 7 古墳時代遺構全体図(縮尺1/300).....	12
Fig. 8 古墳時代住居址実測図一1(縮尺1/60).....	13
Fig. 9 古墳時代住居址実測図一2(縮尺1/60).....	14
Fig.10 古墳時代掘立柱建物実測図一1(縮尺1/80).....	16
Fig.11 古墳時代掘立柱建物実測図一2(縮尺1/80).....	17
Fig.12 古墳時代不整形土壙塗実測図一1(縮尺1/60).....	19
Fig.13 古墳時代不整形土壙塗実測図一2(縮尺1/60).....	20
Fig.14 古墳時代不整形土壙塗実測図一3(縮尺1/60).....	22
Fig.15 古墳時代不整形土壙塗実測図一4(縮尺1/60).....	23
Fig.16 第1次II区出土遺物実測図(縮尺1/1,1/3).....	24
Fig.17 第1次IV区遺構配置図(縮尺1/300).....	25
Fig.18 溝状遺構実測図(縮尺1/200).....	26
Fig.19 第2次調査V・VI区全体図(縮尺1/300).....	28
Fig.20 第V区绳文時代貯蔵穴配置図(縮尺1/200).....	31
Fig.21 SU-01～05・07・45平面・断面図(縮尺1/40).....	32
Fig.22 SU-06・08・09平面・断面図(縮尺1/40).....	34
Fig.23 SU-43・44平面・断面図(縮尺1/40).....	35
Fig.24 SU-21・36・42平面・断面図(縮尺1/40).....	36
Fig.25 SU-10・11・13平面・断面図(縮尺1/40).....	38
Fig.26 SU-12・32・35平面・断面図(縮尺1/40).....	39
Fig.27 SU-37・38・41平面・断面図(縮尺1/40).....	40
Fig.28 SU-19・23・39・46平面・断面図(縮尺1/40).....	42
Fig.29 SU-15・16平面・断面図(縮尺1/40).....	43
Fig.30 SU-14・17・18平面・断面図(縮尺1/40).....	44
Fig.31 SU-20・22・40平面・断面図(縮尺1/40).....	46
Fig.32 SU-29・30・34平面・断面図(縮尺1/40).....	47
Fig.33 SU-28・31・33平面・断面図(縮尺1/40).....	49
Fig.34 SU-24～27平面・断面図(縮尺1/40).....	51
Fig.35 V区出土遺物実測図一1(縮尺1/3).....	54
Fig.36 V区出土遺物実測図一2(縮尺1/3).....	56
Fig.37 V区出土遺物実測図一3(縮尺1/2, 1/3).....	57
Fig.38 V区出土遺物実測図一4(縮尺1/2, 1/3).....	60
Fig.39 第2次調査V区土壤平面・断面図(縮尺1/3, 1/10, 1/100).....	63
Fig.40 第2次調査VI区溝平面・断面図(縮尺1/100).....	64
Fig.41 第2次調査Ⅵ区検出遺構全体図(縮尺1/300).....	66
Fig.42 溝平面・断面図・木器実測図(縮尺1/3, 1/250).....	67
Fig.43 溝・蛙咲状遺構実測図(縮尺1/50, 1/100).....	68
Fig.44 Ⅵ区遺構配置図(縮尺1/300).....	69
Fig.45 Ⅵ区掘立柱建物実測図一1(縮尺1/80).....	70
Fig.46 Ⅵ区掘立柱建物実測図一2(縮尺1/80).....	72
Fig.47 Ⅵ区掘立柱建物実測図一3(縮尺1/80).....	73

Fig.48	Ⅷ区掘立柱建物実測図—4 (縮尺1/80).....	74
Fig.49	Ⅷ区掘立柱建物実測図—5 (縮尺1/80).....	76
Fig.50	Ⅷ区掘立柱建物実測図—6 (縮尺1/80).....	77
Fig.51	Ⅷ区掘立柱建物実測図—7 (縮尺1/80).....	78
Fig.52	Ⅷ区不整形土壤実測図—1 (縮尺1/60).....	82
Fig.53	Ⅷ区不整形土壤実測図—2 (縮尺1/40,1/60,1/80).....	83
Fig.54	Ⅷ区不整形土壤実測図—3 (縮尺1/80).....	85
Fig.55	Ⅷ区出土遺物実測図—1 (縮尺1/3,1/4).....	86
Fig.56	Ⅷ区出土遺物実測図—2 (縮尺1/3,1/4).....	88
Fig.57	Ⅷ区出土遺物実測図—3 (縮尺1/3,1/4).....	90
Fig.58	Ⅷ区出土遺物実測図—4 (縮尺1/3).....	91
Fig.59	Ⅷ区出土遺物実測図—5 (縮尺1/3,1/6).....	93
Fig.60	Ⅷ区出土遺物実測図—6 (縮尺1/3).....	94
Fig.61	Ⅷ区出土遺物実測図—7 (縮尺1/3).....	96
Fig.62	Ⅷ区出土遺物実測図—8 (縮尺1/4,1/8).....	97
Fig.63	Ⅸ区遺構検出状態—1 (縮尺1/400).....	100
Fig.64	Ⅸ区遺構検出状態—2 (縮尺1/400).....	101
Fig.65	Ⅸ区検出堅穴住居址実測図 (縮尺1/80).....	102
Fig.66	Ⅸ区掘立柱建物実測図—1 (縮尺1/80).....	104
Fig.67	Ⅸ区掘立柱建物実測図—2 (縮尺1/80).....	105
Fig.68	Ⅸ区掘立柱建物実測図—3 (縮尺1/80).....	106
Fig.69	Ⅸ区掘立柱建物実測図—4 (縮尺1/80).....	108
Fig.70	Ⅸ区掘立柱建物実測図—5 (縮尺1/80).....	109
Fig.71	Ⅸ区掘立柱建物実測図—6 (縮尺1/80).....	110
Fig.72	Ⅸ区掘立柱建物実測図—7 (縮尺1/80).....	112
Fig.73	Ⅸ区掘立柱建物実測図—8 (縮尺1/80).....	113
Fig.74	Ⅸ区掘立柱建物実測図—9 (縮尺1/80).....	114
Fig.75	Ⅸ区掘立柱建物実測図—10 (縮尺1/80).....	116
Fig.76	Ⅸ区掘立柱建物実測図—11 (縮尺1/80).....	117
Fig.77	Ⅸ区不整形土壤実測図—1 (縮尺1/60).....	118
Fig.78	Ⅸ区不整形土壤実測図—2 (縮尺1/60).....	120
Fig.79	Ⅸ区不整形土壤実測図—3 (縮尺1/60).....	121
Fig.80	Ⅹ区検出SD—07平面・断面図 (縮尺1/80).....	122
Fig.81	Ⅹ区出土遺物実測図—1 (縮尺1/3).....	124
Fig.82	Ⅹ区出土遺物実測図—2 (縮尺1/3).....	126
Fig.83	Ⅹ区出土遺物実測図—3 (縮尺1/4).....	128
Fig.84	Ⅹ区出土遺物実測図—4 (縮尺1/4).....	129
Fig.85	Ⅹ区出土遺物実測図—5 (縮尺1/4).....	130
Fig.86	Ⅹ区出土遺物実測図—6 (縮尺1/4).....	132
Fig.87	Ⅹ区出土遺物実測図—7 (縮尺1/3).....	133
Fig.88	Ⅹ区出土遺物実測図—8 (縮尺1/3).....	134
Fig.89	Ⅹ区出土遺物実測図—9 (縮尺1/4).....	137
Fig.90	Ⅹ区出土遺物実測図—10 (縮尺1/4).....	138
Fig.91	Ⅹ区出土遺物実測図—11 (縮尺1/3,1/4).....	139
Fig.92	Ⅹ区出土遺物実測図—12 (縮尺1/3).....	141
Fig.93	Ⅹ区出土遺物実測図—13 (縮尺1/3).....	142
Fig.94	Ⅹ区出土遺物実測図—14 (縮尺1/3).....	143
Fig.95	Ⅹ区出土遺物実測図—15 (縮尺1/3).....	145
Fig.96	Ⅹ区出土遺物実測図—16 (縮尺1/4).....	146

Fig.97	IX区出土遺物実測図—17(縮尺1/3,1/8).....	147
Fig.98	IX区出土遺物実測図—18(縮尺1/3).....	148
Fig.99	X区遺構検出状態(縮尺1/200).....	150
Fig.100	X区出土遺物実測図(縮尺1/3).....	152

図版目次

巻頭図版 第2次Ⅸ区全体写真	第2次Ⅸ区全体写真	
PL. 1 II区検出遺構—1	PL. 2 II区検出遺構—2	PL. 3 II区検出遺構—3
PL. 4 IV・V区検出遺構	PL. 5 V区検出遺構	PL. 6 V区検出貯蔵穴—1
PL. 7 V区検出貯蔵穴—2	PL. 8 V区検出貯蔵穴—3	PL. 9 V区検出貯蔵穴土層断面
PL. 10 V区検出貯蔵穴土層断面と柱穴	PL. 11 V区貯蔵穴柱穴と遺物検出及びVI区溝状遺構	
PL. 12 VI区検出遺構	PL. 13 VI・VII区検出遺構とVI区遺物検出状況	
PL. 14 VII区検出遺構—1	PL. 15 VII区検出遺構—2	
PL. 16 VII区検出遺構—3	PL. 17 VII区検出遺構—4	
PL. 18 VII区検出遺構と遺物検出状況	PL. 19 IX区検出遺構—1	
PL. 20 IX区検出遺構—2	PL. 21 IX区遺物検出状況—1	
PL. 22 IX区出土遺物とX区検出遺構	PL. 23 出土遺物—1	
PL. 24 出土遺物—2	PL. 25 出土遺物—3	
PL. 26 出土遺物—4	PL. 27 出土遺物—5	
PL. 28 出土遺物—6	PL. 29 出土遺物—7	
PL. 30 山土遺物—8	PL. 31 出土遺物—9	
PL. 32 出土遺物—10	PL. 33 出土遺物—11	
PL. 34 出土遺物—12	PL. 35 出土遺物—13	
PL. 36 出土遺物—14	PL. 37 出土遺物—15	
PL. 38 出土遺物—16	PL. 39 出土遺物—17	
PL. 40 出土遺物—18		

表目次

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧	2
Tab. 2 吉武遺跡2次V区検出貯蔵穴一覧	61
Tab. 3 1・2次(II区・IX区)住居址計測一覧	155
Tab. 4 1次II区掘立柱建物計測一覧	156
Tab. 5 1次II区不整形土壙計測一覧	157
Tab. 6 2次V区掘立柱建物計測一覧—1	158
Tab. 7 2次V区掘立柱建物計測一覧—2	159
Tab. 8 2次VII区掘立柱建物計測一覧—3	160
Tab. 9 2次IX区掘立柱建物計測一覧—1	161
Tab. 10 2次IX区掘立柱建物計測一覧—2	162
Tab. 11 2次IX区掘立柱建物計測一覧—3	163
Tab. 12 2次IX区掘立柱建物計測一覧—4	164
Tab. 13 2次IX区掘立柱建物計測一覧—5	165
Tab. 14 2次VII・IX区不整形土壙・Pit・井戸計測一覧	166

付図目次

付図—1 吉武遺跡群第1・2次全体図
付図—2 吉武遺跡群第1次余体図(縮尺 1/400)
付図—3 吉武遺跡群第VII区全体図(縮尺 1/200)
付図—4 吉武遺跡群第IX区全体図(縮尺 1/300)

第一章　はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群発掘調査のきっかけとなったのは、昭和55(1980)年6月11日に農林水産局農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課に提出された福岡市西区の『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』計画である。

当初の整備計画では、対象面積46.4haの内、昭和55年度—3.6ha・昭和56年度—9.0ha・昭和57年度以降—33.8haを整備するものであった。このうち昭和55年度対象地区は、地形的に明らかに東側を流れる室見川の比較的新しい氾濫源であることと、工事施工の上で殆ど影響を受けないために本調査からは除外した。

昭和56年度以降の対象地は、昭和44年に行われた九州大学による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって、全域に弥生～古墳時代の遺物が散布することがしられていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地(対象7.5ha)について試掘調査(56年6月16～19日・7月8～10日)を実施して遺構内容の把握を行ったところ、弥生時代前期～中期にかけての壺棺墓群や、竪穴式住居址・溝・柱穴群など弥生時代～古墳時代にかけての遺構が、全体に広がっていることが明らかとなった。この後、この成果をもとに対象地のうち、造成工事に伴って遺構の失われる切土・構造物(道路・水路)部分などの範囲を確定するために事業者と協議を重ね昭和56年11月1日より本格的な調査を開始した(第一次調査)。

第一次調査以後、工事施工と発掘調査が時期的に重複するため、各事業年度での発掘調査規模を設計変更などで調査面積を最低に押さえための協議が土地改良組合、文化課、事業指導課(農業土木課)と定期的にもたれ、事業の円滑な推進が計られた。

また、圃場整備で六次にわたって調査された吉武遺跡群のうち、豊富な青銅製武器・鏡・玉などの副葬品を伴う吉武高木弥生墓地(第四・五次)や吉武大石弥生墓地(第六次)の一部は、弥生時代の墓制を考える上で学術的に非常に価値が高く、地権者の理解をえて国史跡「吉武遺跡」として永久に保存されることとなった。

2. 調査の組織

昭和56年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化課 甲能貞行

埋蔵文化財係長 柳田純孝

【調査庶務】 文化課 岡島洋一

【調査担当】 発掘調査 二宮忠司、田中壽夫、小林義彦 試掘調査 横山邦雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、齊藤美紀枝、真名子順子、太田順子、武田祐子

【調査作業員】 齐柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧（平成13年1月現在）

次数	調査番号	次 数 名	所 在 地	調査期間	調査面積 (m ²)	担 当 者	報 告 書
1	8102	国場整備第1次	西区大字板盛字本郷内	19811101～ 19820315	12,000	二宮忠司・小林義彦 田中寿夫	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第437-514-580-600-650-675集
2	8234	国場整備第2次	西区大字板盛地内	19820901～ 19830215	21,000	二宮忠司	437-514-580-600-650-675集
3	8235	田・板盛整備第1次	西区大字板盛字トイ地内	19820922～ 19830212	5,200	山崎龍雄	127集
4	8335	国場整備第3次	西区大字吉武字板町110他地内	19830912～ 19840324	25,000	横山邦彌 下村 智	143-461-514-580-600-650集
5	8415	田・板盛整備第2次	西区大字板盛地内	19840413～ 19840531	1,600	浜石哲也	194集
6	8416	国場整備第4次	西区大字吉武字高木194他地内	19840701～ 19850320	26,000	横山邦彌・下村 智 常松幹雄	143-437-461-514-580-600-650集
7	8426	野方・金武縫第2次	西区大字吉武三十六145他地内	19850326～ 19850531	2,300	横山邦彌 下村 智	187集
8	8518	国場整備第5次	西区大字吉武字高木地内	19850702～ 19850724	470	横山邦彌	143-461-514-580-600-650集
9	8535	国場整備第6次	西区大字吉武字大石地内	19850801～ 19860331	28,000	力武卓治・下村 智 常松幹雄・加藤良彦	143-461-514-580-600-650集
10	8650	国場整備第7次	西区大字吉武字大石36他地内	19861116～ 19870227	5,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
11	8662	野方・金武縫第6次	西区大字板盛地内	19860301～ 19860510	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	303集
12	8714	野方・金武縫第7次	西区大字板盛字トイ地内	19870601～ 19870909	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	303集
13	8752	国場整備第8次	西区大字吉武地内	19880301～ 19880331	1,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
14	8838	国場整備第9次	西区大字吉武高木地内	19880725～ 19880916	724	山崎龍雄	未刊

尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
 倉光三保、倉光ユキエ、菰田洋子、横スミ子、横太郎、横光雄、柴田大正、
 白坂フサヲ、新町ナツ子、惣慶トミ子、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、
 中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、能美八重子、浜田澄美枝、
 林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友紀、細川ミサヲ、
 又野栄子、真名子千恵子、真名子時雄、八尋君代、山下サノエ、結城君江、
 結城千賀子、結城信子、横溝恵美了、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、
 吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、
 米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和57年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化課 生田征生

埋蔵文化財係長 柳田純孝

【調査庶務】 文化課 岡島洋一

【調査担当】 発掘調査 二宮忠司、山崎龍雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、齊藤美紀枝、真名子順子

太田順子、武田祐子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、
牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大槻朝子、大穂栄子、尾崎達也、
尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
倉光三保、倉光ユキエ、小林ツチエ、眞田洋子、樋スミ子、樋太郎、樋光雄、
坂田セイ子、柴田大正、柴田常人、清水フミ代、白坂フサヲ、新町ナツ子、
懇慶トミ子、高田マサエ、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、舍川春江、
中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、西納トシエ、西納テル子、
能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、
藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、松尾鉢子、松尾キミ子、松尾久代、
真名子千恵子、真名子時雄、真鍋チエ子、八尋君代、山下サノエ、山西人美、
結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝エキエ、吉岡あつ子、
吉岡アヤ子、吉岡昌代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡遼江、吉岡フサエ、
吉岡文子、米島ハツネ、脇坂ミサヲ

凡 例

第一・二次調査での遺物登録番号を下記のように定めた。

福岡市では、遺物に対して五桁の番号を与える。そこで今回、第一・二次の遺構と遺物に対して区別を与えるため下記のように記した。ただし、10区は区の番号を0とする。

区	遺構	0	0	1
---	----	---	---	---

- 遺構は 0—掘立柱建物
1—住居址内遺物
2—溝出土遺物
3—甕棺墓及び副葬品
4—土壤墓
5—井戸
6—縄文時代貯藏穴
7—石器
8—木製品
9—不明土壤

甕棺墓出土のうち、下棺、上棺の順で登録番号を付している。

ただし10区は0とした。

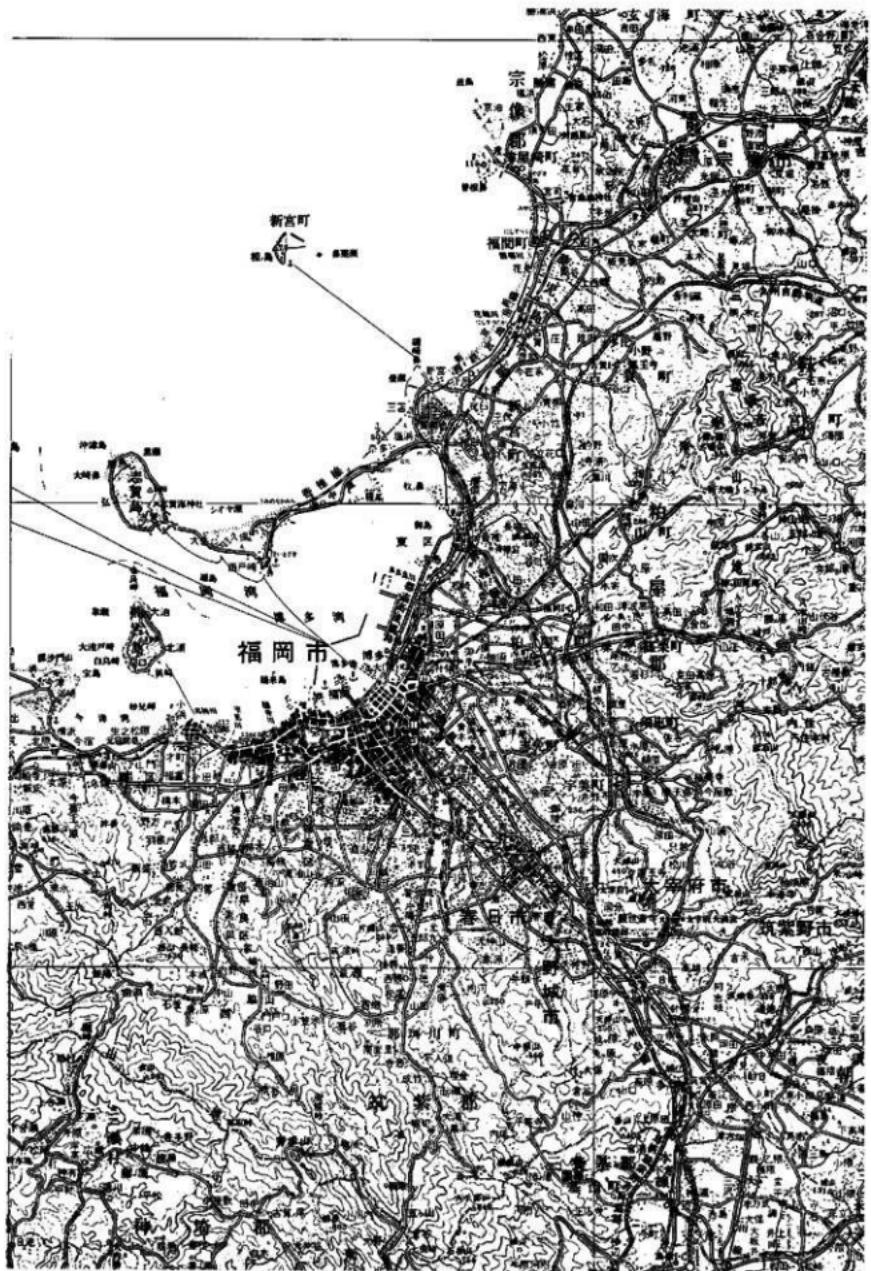


Fig. 1 吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000)

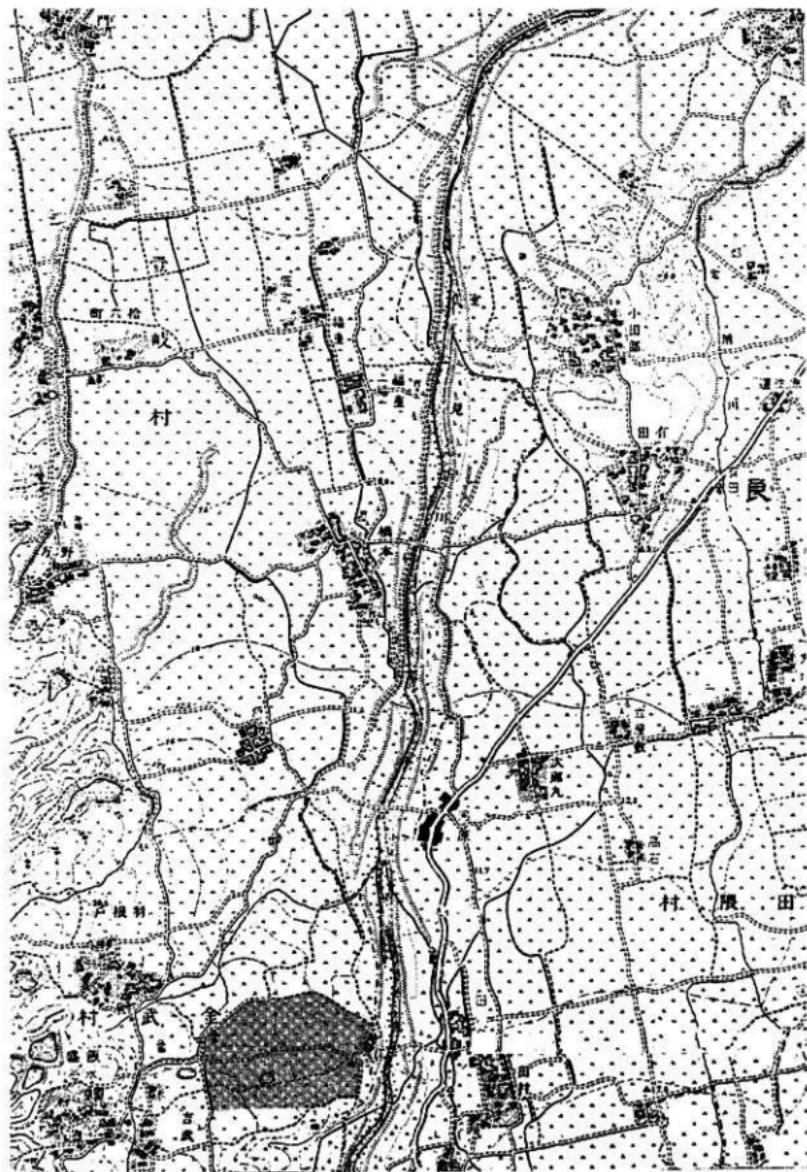


Fig. 2 吉武遺跡群位置図(縮尺1/20,000)

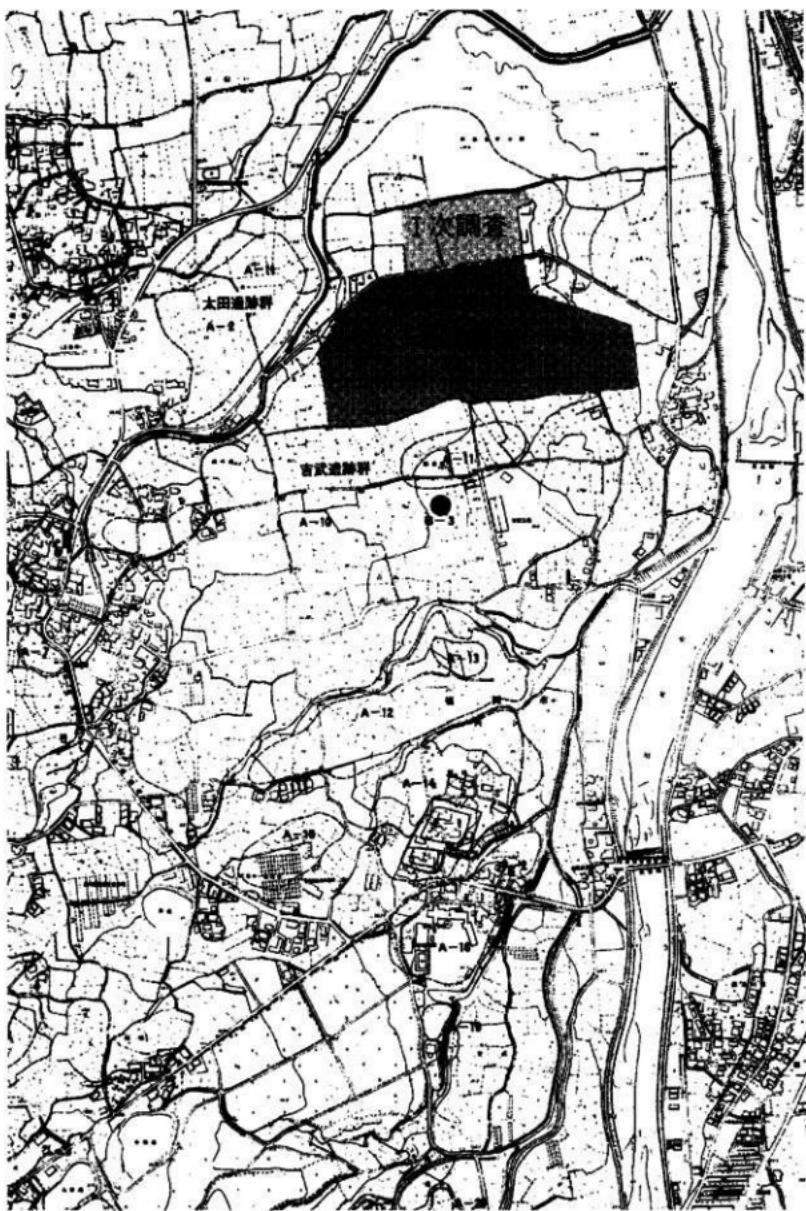


Fig. 3 吉武遺跡群と周辺遺跡 (縮尺1/4,000)



Fig. 4 調査区配置図(第一～第六次調査)(縮尺1/4,000)

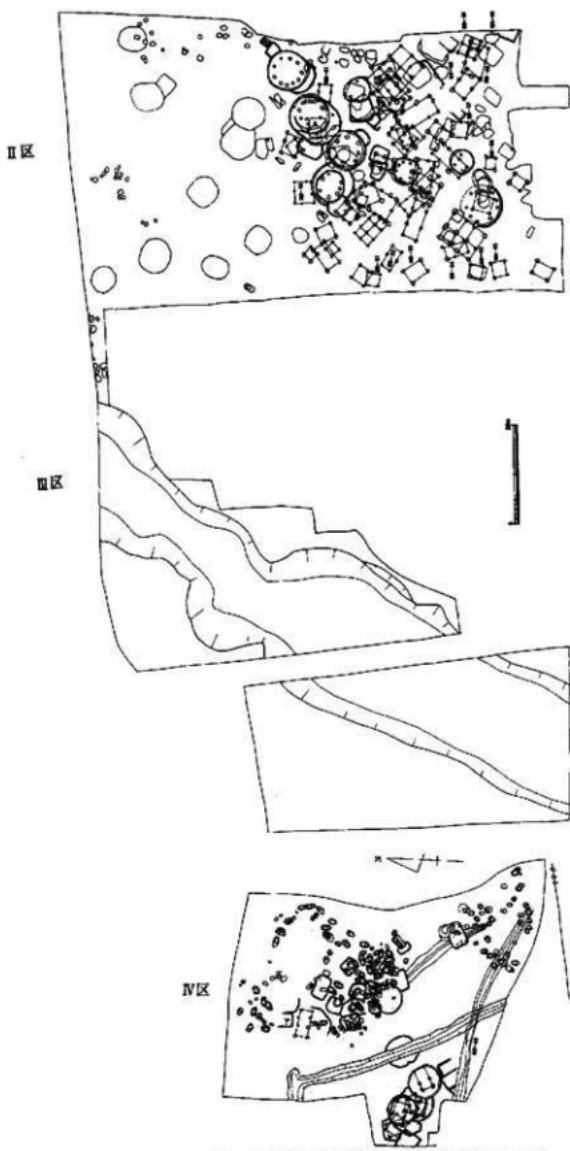


Fig. 5 調査区配置図(第一次調査)(縮尺1/1,000)

第二章 第一次調査

第一節 第一次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地 : 福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積 : 61 ha

発掘調査対象面積 : 2.5 ha

発掘調査年月日 : 昭和 56 年 11 月 9 日～昭和 57 年 3 月 10 日

昭和 56 年 7 月に試掘調査を行い、発掘対象面積を盛上する部分を除いた 2.5ha の内で著しく削平を受ける 1.2ha を実際の調査面積とした。ただ耕作土排除後にすぐ検出される甕棺墓は破壊を免れないと想定した。全体の 2.5ha の内、区割りにより I 区から IV 区とした。これとは別に磁北を区割りの中心線として東西・南北に 100m 単位でグリッドを設定し、将来の基準線とした。

I 区の調査

掘立柱建物 1 棟と欄列を検出した。東側は段落ちとなり、竪見川の氾濫源か、もしくは水田の可能性が考えられたが、削平されず土盛り対象地であることから調査から除外した。

II 区の調査

今回の対象区の中で IV 区とともに最も削平される部分が多く、8,000m²ある。この内、完掘の必要な面積は 4,000m²であった。IV 区とともに II 区も遺構の遺存状態がよく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層からは弥生時代後期・中期の住居址等が検出された。また、弥生時代前期末の甕棺墓が 44 基と木棺墓 4 基を検出した。

古墳時代初期の住居址・掘立柱建物・祭祀遺構・土器塗等が検出でき、弥生時代後期の住居址 9 軒を検出したが、その内の 1 軒 (S C - 06) から石戈・石劍を出土した。弥生時代中期の円形住居址は 16 軒検出した。遺構の遺存状態は非常によく壁高が 40 ~ 50cm 程度残っているものも少なくない。弥生時代中期の小尻甕棺墓を 2 基検出した。

弥生時代に属する掘立柱建物は 33 棟、古墳時代に属する掘立柱建物は 13 棟検出した。なお從来の報告書で古墳時代の掘立柱建物は 20 棟としていたが、明らかに古墳時代のものは 13 棟であった。

III 区の調査

III 区全体で表上排除作業を行った面積は、4,000m²であるが、検出した遺構は甕棺墓 14 基と台地を切断する幅 12 ~ 20m の河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に杭列を検出し、底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土していることから河川を人工的に使用した可能性がある。また、人手による手を加え使用した時期は、底面から出土した上器を基準に考えてよい。ただ最上層から須恵器片が出土していることから、河川は急激に埋まったものと考えられ、時期も弥生時代から古墳時代の時期に人工的な河川として利用した可能性が高い。甕棺墓は河川を挟んで弥生時代中期中葉の 5 基が西側にあり、東側に弥生時代中期後半の 9 基が検出された。

IV 区の調査

IV 区の調査対象面積は、6,000m²で表上排除作業面積が 4,500m²である。検出した遺構は、弥生時代前期末の甕棺墓・住居址・溝・弥生時代中期初頭～後半にかけての住居址・甕棺墓・井戸・掘立柱建物・中世の溝・井戸等を検出した。甕棺墓は 165 基検出し、その内 24 基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓であり、122 基が中期、19 基が後期に属する。



Fig. 6 第1次Ⅱ区全体図(縮尺1/400)

第二節 第一次調査の記録

1. 第一次調査Ⅱ区 一古墳時代の遺構一

第一次調査の内、古墳時代の遺構が検出されたのは、Ⅱ区とⅢ区の河川のみである。Ⅱ区も全体に広がるものと思われるが、中央部から北側は、遺構検出面での観察で詳細には確認できないが、円形住居址や壇塚墓を切る住居址が検出されているが古墳時代の可能性もある。調査区は全体的に広がるが、削平を受けていることから散発的ではある。Ⅱ区は全体的に弥生時代の遺構が主体であり、古墳時代の遺構は南側に広がるものと思われる。検出された遺構は住居址8棟、掘立柱建物13棟、土塙墓15基、上塙47基が確認された。

住居址 (Fig. 8・9 Tab. 3)

古墳時代の住居址には1000番台の記号を付した。SC-1000～1007の8軒である。このほかに北側表土剥ぎ作業段階で、古墳時代の住居址が数件検出された。住居址番号が精査した段階で、吉武遺跡群区(福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 1997)の番号と異なる。ⅩのSC-1015が1002、1017が1003、1010が1004、1013が1006に変更する。

SC-1000 (Fig. 9 Tab. 3 PL. 1・2)

調査区中央部東側から弥生時代のSC-24を切る形で検出された。また、SX-04から切られる。形状は方形、主軸は北東～南西、長軸方向はN-22°30'-Eである。規模は3.15m×3.0mで、床面積9.6m²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.12mしかない。主柱穴は4穴で、円形3・方形1で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

SC-1001 (Fig. 9 Tab. 3)

SC-1001はSC-1000の建替えで、同じ場所からわずかに方向をずらして検出された。形状は方形、主軸は北西～南東、長軸方向はN-66°30'-Eである。規模は3.6m×3.3mで、床面積11.9m²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.13mしかない。主柱穴は2穴で、方形2で構成される。細片の土師器が壁溝覆土内より出土している。

SC-1002 (Fig. 8 Tab. 3 PL. 1・3)

調査区中央部の弥生時代円形住居址SC-18・19を切る形で検出された。また、不整形土塙から切られる。形状は方形、主軸は東～西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は3.8m×3.5mで、床面積12m²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.20mしかない。主柱穴は不整形土塙の擾乱で不明であるが、恐らく4穴で構成されると思われる。不整形土塙から土師器が出土しているところからこの時期より古い時期と考えられる。

SC-1003 (Fig. 9 Tab. 3 PL. 3)

調査区中央部の弥生時代円形住居址(SC-20)中に位置し、SC-20を切る形で検出された。また、SX-07～09・20から大半を切られる。形状は方形、主軸は北～南、長軸方向はN-8°-Wである。規模は5.18m×1.2+αmで、床面積6.21+αm²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は不明。出土遺物はないが、SX-07～09から土師器が出土していることからこれよりも古い時期と考えられる。

SC-1004 (Fig. 8 Tab. 3 PL. 2)

調査区の南東側隅から検出された。形状は方形、主軸は北西～南東、長軸方向はN-44°-Wである。規模は4.7m×4.5mで、床面積21.15m²を測る。削平が著しい為、遺構の遺存状態は悪く深さ0.12mし

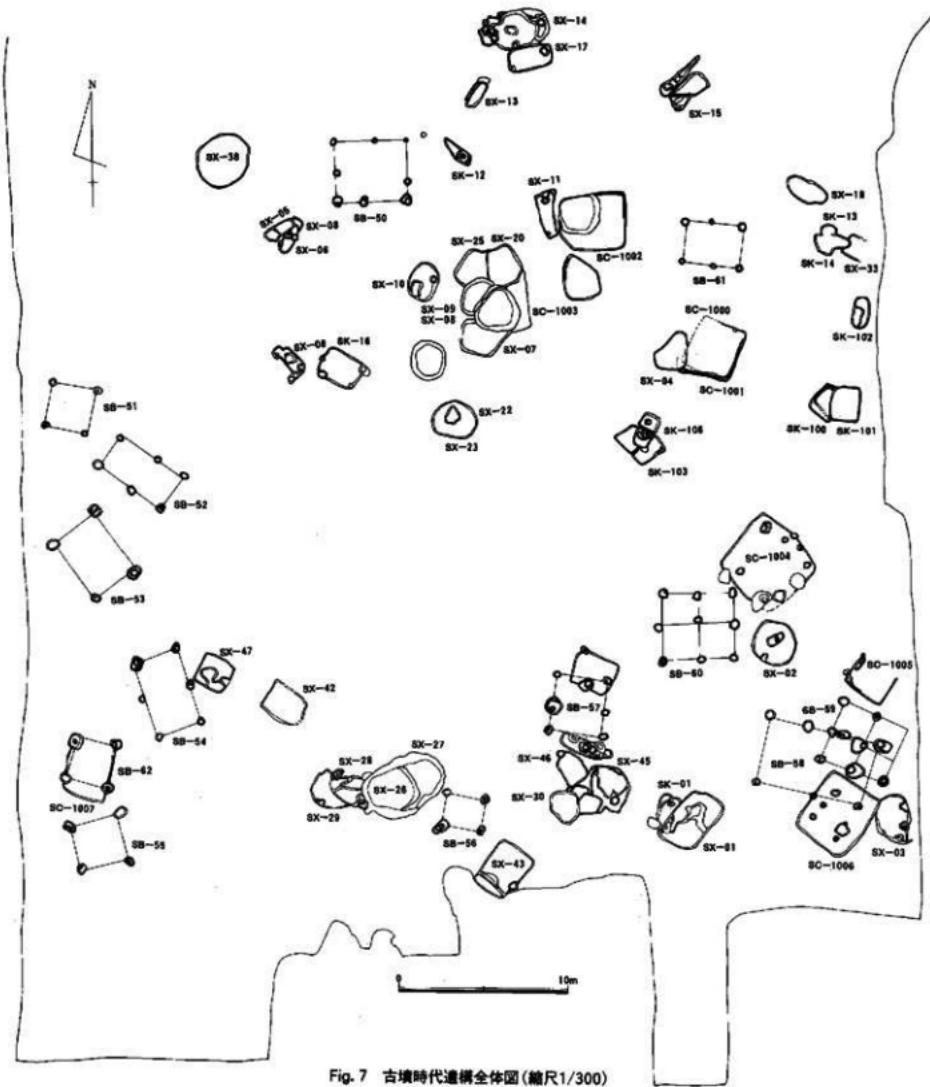


Fig. 7 古墳時代遺構全体図(縮尺1/300)

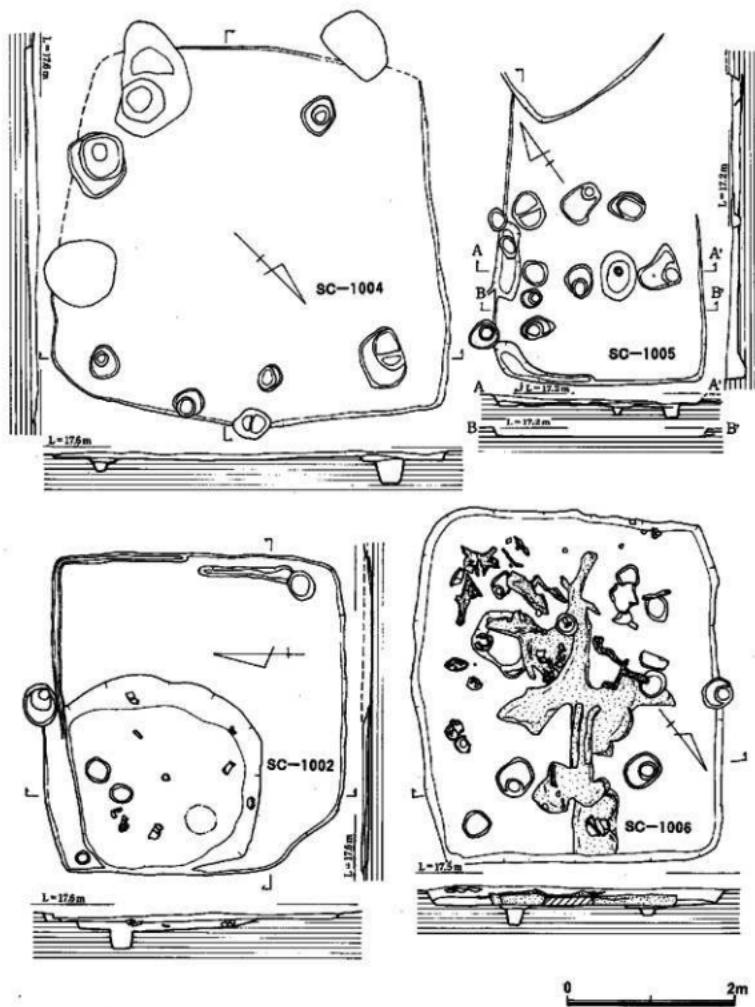


Fig. 8 古墳時代住居址実測図-1(縮尺1/60)

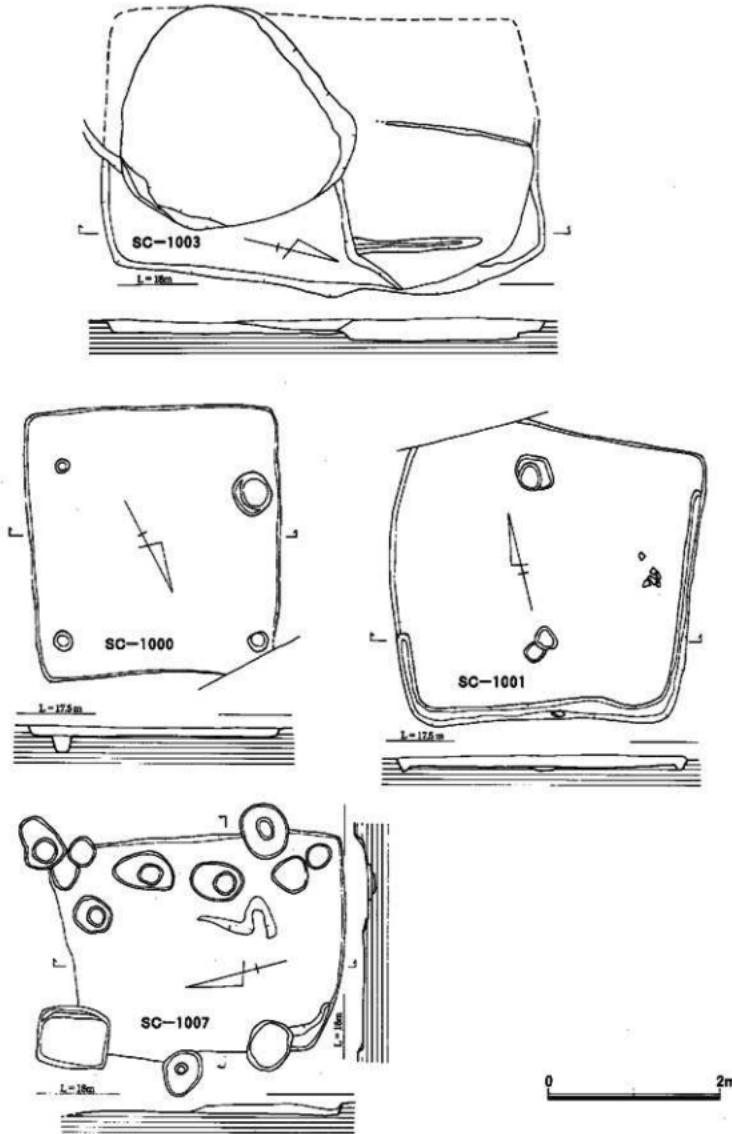


Fig. 9 古墳時代住居址実測図-2 (縮尺1/60)

かない。主柱穴は4穴で、方形3・不整方形1で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

SC-1005 (Fig. 8 Tab. 3 PL. 1・2)

調査区南東隅から北側半分が削平されて検出された。切り合い関係は無い。形状は長方形を呈し、主軸は北西-南東、長軸方向はN-40°-Eである。規模は3.9+αm×2.55mで、床面積9.95+αm²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は2穴と思われるが、明確には不明。壁溝より土師器の破片が出土している。

SC-1006 (Fig. 8 Tab. 3 PL. 1)

調査区南東隅から検出され、SX-03から壁面の一部を切られる。形状は方形、主軸は北東-南西、長軸方向はN-34°-Eである。規模は4.3m×3.7mで、床面積15.91m²を測る。遺構の遺存状態は良い方で深さ0.22m残っている。主柱穴は4穴で、方形2・不整方形2で構成される。住居址内には炭化材及び焼土・土器が散乱しており、また、全体的に炭化物を含む覆土で覆われているところから焼失住居の可能性が高い。

SC-1007 (Fig. 9 Tab. 3 PL. 2)

調査区南西隅から検出された。切り合い関係はない。形状は長方形を呈し、北側が著しく削平を受けしており壁面はない。主軸は北-南、長軸方向はN-12°30'-Eである。規模は3.46m×2.56mで、床面積6.02m²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.1mしかない。主柱穴は削平が著しいため不明。覆土より須恵器片が出土している。

掘立柱建物 (Fig. 10・11 Tab. 4)

II区より検出された掘立柱建物は13棟であるが、このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱痕内から出土したものに基づいており住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はSB-50からを古墳時代の掘立柱建物の番号としている。なお、桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 4に表示している

SB-50 (Fig. 11 Tab. 4)

調査区中央部から検出された2間×2間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形を呈し、全体的に残りが良好で、深さ24~44cmを測る。(5)の柱穴には18×30cmの柱痕が残る。主軸は東-西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は4.2m×3.6mで、床面積15.1m²を測る。桁行・梁行の間隔が不揃いで、狭いところで1.2m、広いところで2.6mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

SB-51・53・55・56・62 (Fig. 10 Tab. 4)

この5棟は1間×1間であるが、柱間の間隔が広いSB-53を除いてほぼ同間隔である。これらは竪穴住居址が削平され、柱穴だけが残った可能性は否定できないが、一応掘立柱建物として捉えておく。51は調査区南西隅から検出された1間×1間の掘立柱建物である。弥生時代の掘立柱建物との切り合い関係はあるが、出土遺物から区別した。柱穴の形状は円形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北-南、長軸方向はN-15°-Eである。規模は2.6m×2.5mで、床面積6.5m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。53は調査区南西隅から検出された1間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は梢円形が主で、全体的に著しく削平を受けおり遺存状態は悪い。主軸は北西-南東、長軸方向はN-34°-Wである。

規模は4.0m×2.8mで、床面積11.2m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

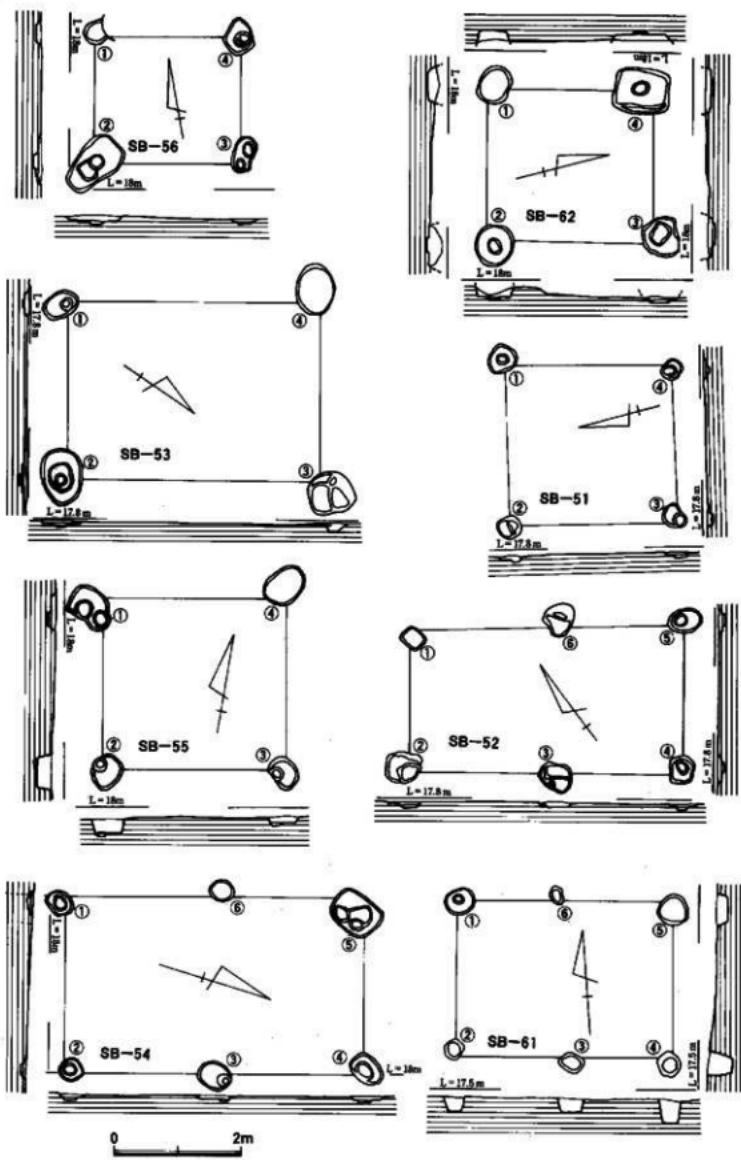


Fig. 10 古墳時代掘立柱建物実測図-1(縮尺1/80)

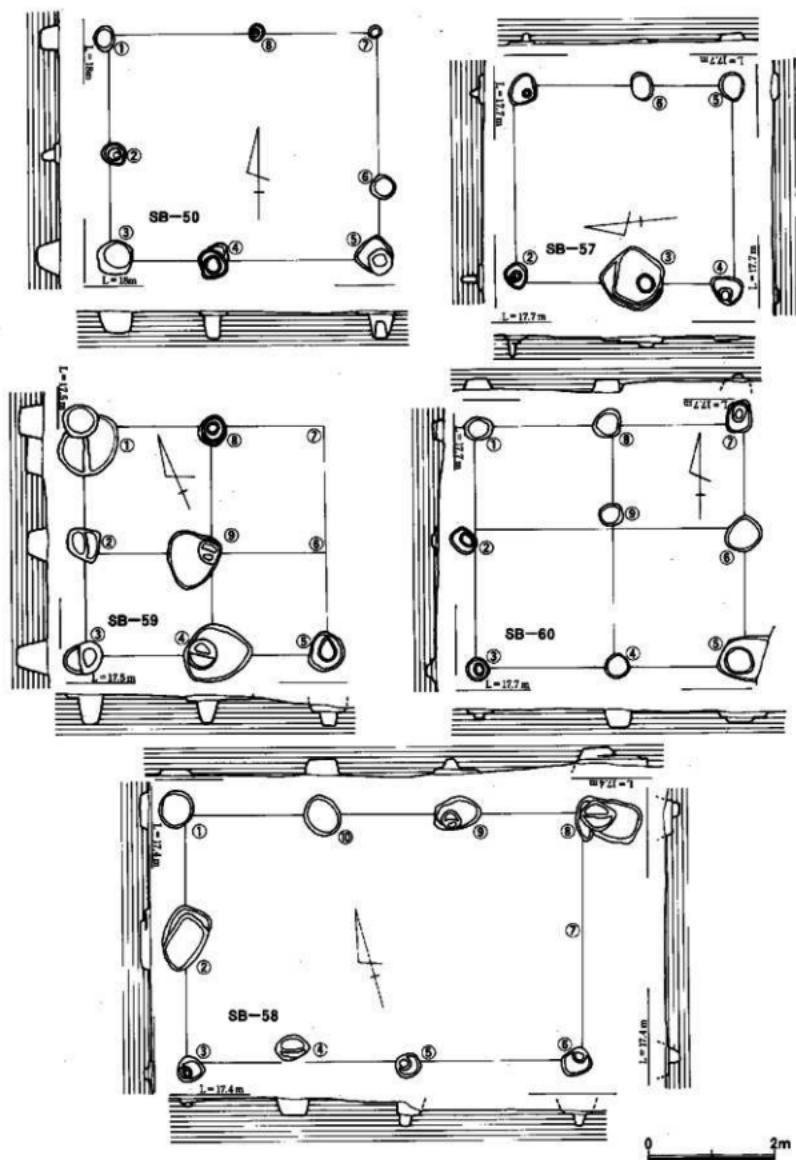


Fig. 11 古墳時代掘立柱建物実測図-2(縮尺1/80)

55は調査区南西隅から検出された1間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東-西、長軸方向はN-81°-Eである。規模は2.9m×2.7mで、床面積7.83m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

56は調査区南側中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。他の遺構との切り合い関係はなく、西側にS X-26・27が隣接する。柱穴の形状は不整方形で、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は西-東、長軸方向はN-80°-Wである。規模は、2.3m×2mで、床面積46m²を測る。柱痕内より土師器が出土している。62は調査区南西隅から検出された1間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係はS C-1007の壁面を破壊するところから住居址より新しい。柱穴の形状は長方形・円形・不整形と様々である。全体的に削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北東-南西、長軸方向はN-16°30'-Eである。規模は2.6m×2.4mで、床面積6.24m²を測る。柱痕内より土師器片が出土している。

S B-52・54・55・61 (Fig. 10-11 Tab. 4 PL. 2)

この4棟は2間×1間であるが、柱間の間隔が広いS B-57を除いて長方形を呈する構造である。

52は調査区中央西隅から検出された2間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・長方形・楕円形等様々である。全体的に削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北西-南東、長軸方向はN-52°30'-Wである。規模は4.3m×2.8mで、床面積12.04m²を測る。桁行の間隔が2.0mと2.3mで梁行は2.8mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。54は調査区南西隅から検出された2間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係は弥生時代の掘立柱建物S B-25と切り合はあるが、他の古墳時代の遺構とは切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・長方形・円形等がある。全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北西-南東、長軸方向はN-17°30'-Wである。規模は4.8m×2.8mで、床面積13.44m²を測る。桁行の間隔は2.2～2.5mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

61は調査区中央東隅から検出された2間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係は弥生時代のS C-18を切る形で検出された。柱穴の形状は方形・円形・長方形・楕円形と様々な形状を呈する。全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東-西、長軸方向はN-86°-Wである。規模は3.4m×2.5mで、床面積8.5m²を測る。桁行は1.8・1.5mの間隔である。柱痕内より土師器片が出土している。57は調査区南隅から検出された2間×1間の掘立柱建物である。切り合い関係はS D-24を切る形で検出された。柱穴の形状は方形であり、全体的に削平を受けており遺構存状態は悪い。主軸は北-南、長軸方向はN-6°-Eである。規模は3.5m×3.1mで、床面積10.85m²を測る。桁行の間隔が不揃いで、狭いところで1.5m、広いところで2.0mの間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

S B-59・60 (Fig. 11 Tab. 4 PL. 1-2)

この2棟は2間×2間の総柱建物である。59は調査区南東隅から検出された2間×2間の掘立柱建物である。他の遺構との切り合い関係はないが、調査区隅である為削平が著しく、主柱穴⑥⑦は確認できなかった。他の柱穴は遺存状態が良く、形状および大きさに統一性がないが、ほとんどの柱穴が40cm以上の深さをもつ。主軸は北西-南東、長軸方向はN-67°-Wである。規模は3.8m×3.6mで、床面積13.68m²を測る。桁行・梁行の間隔は1.8～2.0m間隔がある。柱痕内より土師器片が出土している。

60は調査区南東部から検出された2間×2間の掘立柱建物である。上面の検出であることから切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は東-西、長軸方向はN-90°-Eである。規模は4.2m×3.8mで、床面積15.96m²を測る。桁行・梁行の間

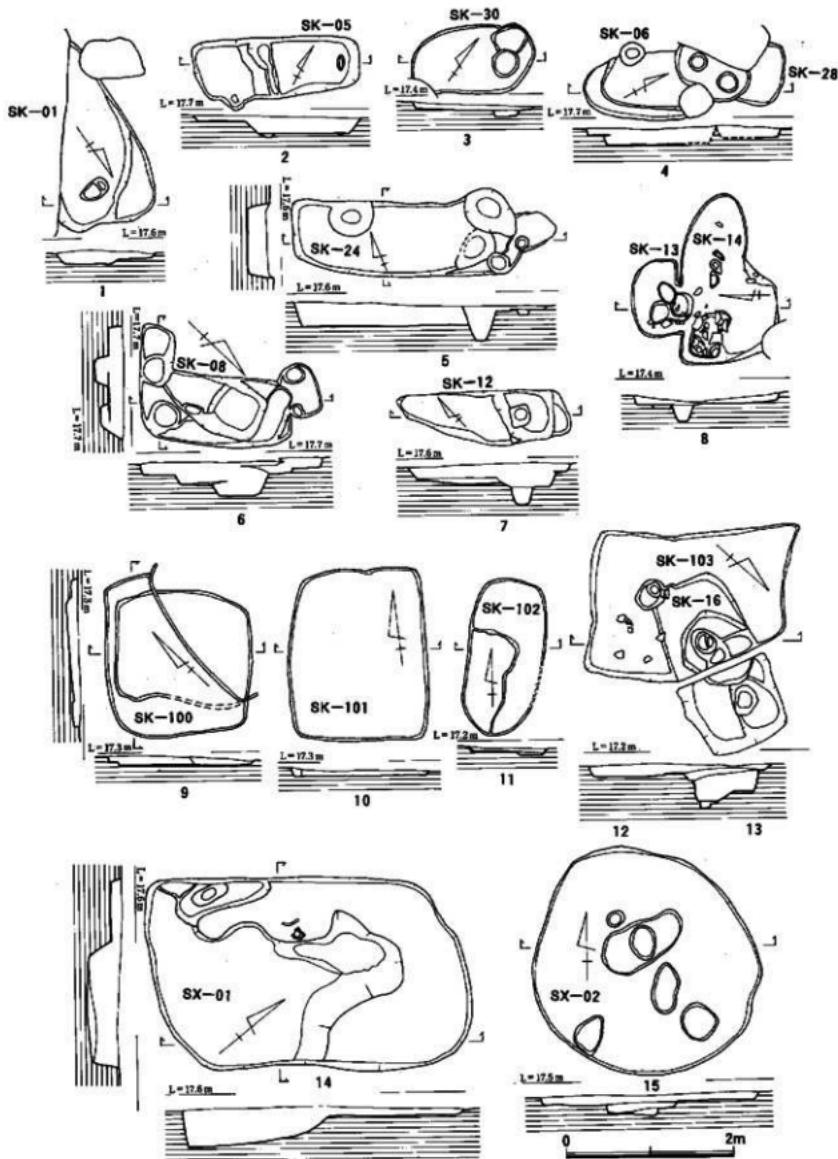


Fig. 12 古墳時代不整形土壤実測図-1(縮尺1/60)

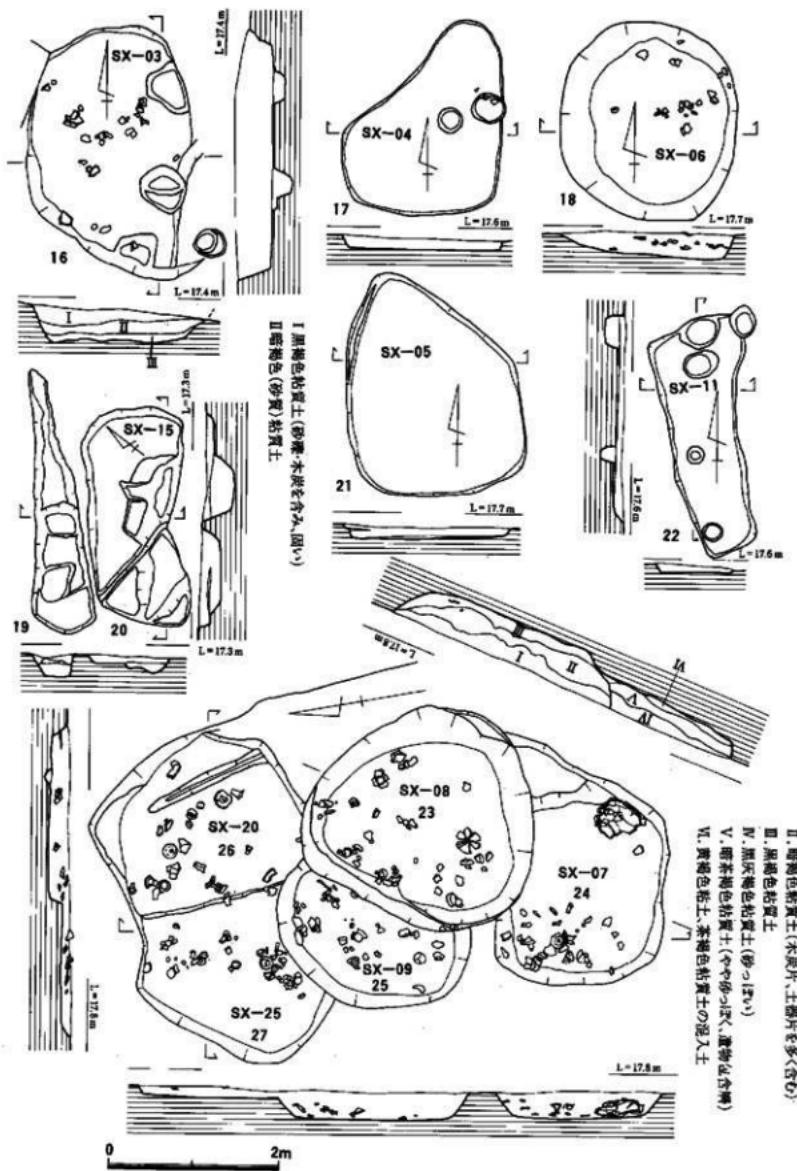


Fig. 13 古墳時代不整形土壤実測図-2 (縮尺1/60)

幅は1.8～2.1mを測り、柱穴の形状も円形・長方形が主体である。柱痕内より土器片が出上している。

S B - 58 (Fig. 11 Tab. 4 PL. 1)

58は調査区南東隅から検出された3間×1間の掘立柱建物である。切り合ひ関係はSC-1006とSB-59があるが、SC-1006との関係は上面から柱穴が検出されているところから、SC-1006より新しい。SB-59との関係は不明である。柱穴の形状は長方形であり、部分的に著しく削平を受けているところと残りが良い所がある。主軸は西-東、長軸方向はN-75°-Wである。規模は6.3m×4.0mで、床面積25.2m²を測る。桁行の間隔が不規則で狭いところで1.8m、広いところで2.8mの間隔がある。柱痕内より土器片が出上している。

S X (不整形土壙) (Fig. 12～15 Tab. 5 PL. 1～3)

不整形土壙は52基検出したが、図示したものは50基である。図示した中でSKとSXを表示しているが、区別は形状により区別しただけで、SKとしたものも最終的には不整形土壙(SX)としてとらえた。ただ図面等の整理上SKの表示は残しておく。混乱を招く恐れがあるため表示は図面下に1からの番号を付し、遺構内には従来の遺構名称(SK・SX)を表示している。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 5に表示しているので、参照していただき、土器が多量に出土している土壙について記述する。ただ遺物は、台風時に上器が散乱し出土地点がわからなくなつたため、今回は遺構のみの記述とした。

1～22 (Fig. 12・13 Tab. 5 PL. 1～3)

1～8の形状は不整形で他の遺構及びPit等によって切られる形状を呈する。長径も230～380cm様々で短径も同様である。深さも浅いものが殆どである。用途的には不明。9～14は長方形・方形の形状を呈す。15～22は形状が様々円形・楕円形・不整形の形状を呈す。

23～27 (Fig. 13・14 Tab. 5 PL. 3)

調査区中央部SC-20を切る形で検出した。形状は円形・隅丸方形で、各遺構に切り合ひ関係がある。新しいものから番号を付しているが、各遺構とも多量の土器が出土している。23は楕円形を呈し、最も新しい土壙である。24～26を切り、その下のSC-20の床面まで破壊している。

23・24の十層を図示しているが、第I層が砂混じりの暗灰褐色粘質土、第II層が炭化物・土器片を多く含む暗褐色粘質土、第III層が黒褐色粘質土、第IV層が砂粒を多く含む灰黑褐色粘質土、第V層がやや砂が多い暗茶褐色粘質土で、遺物を多量に含んでいる、第VI層が茶褐色粘質土を含む黄褐色粘土である。24は23の南側に位置し、23から切られ、SC-20を切る。隅丸方形を呈し、床面に土器が散乱していた。25は23の西側に位置し、23から約半分削平を受けている。この遺構にも高窓等の上器が床面に散乱していた。26は23の北側に位置し、方形の形状を呈する。これも床面に高窓等の土器が散乱して出土した。27は25・26によって切られ恐らく最初に造られた土壙と考えられる。形状は方形を呈し、SC-20を切る。調査時の所見では古い方から27→26→25→24→23の順となるが、時期的には殆ど差がないと考えられた。土器は台風時に散乱し出土地点がわからなくなつたため今回も遺構のみの記述とした。

37・38 (Fig. 15 Tab. 5 PL. 3)

調査区南側SC-27を切る形で検出した。形状は楕円形・方形で、各遺構に切り合ひ関係がある。新しいものから番号を付しているが、各遺構とも多量の土器が出土している。37は方形を呈し、38を切り床面も破壊している。38は楕円形を呈し、深さは深くない。両方とも土器を包蔵するが時期的には殆ど差がない。

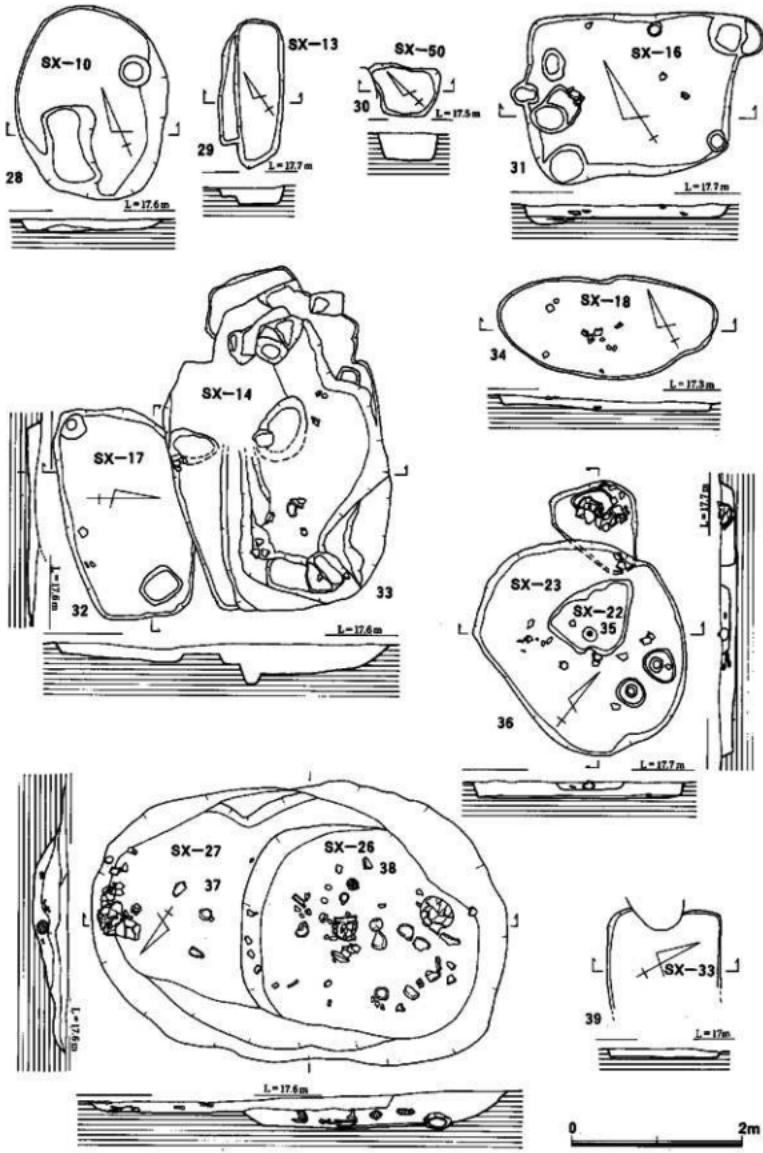


Fig. 14 古墳時代不整形土壤実測図-3(縮尺1/60)

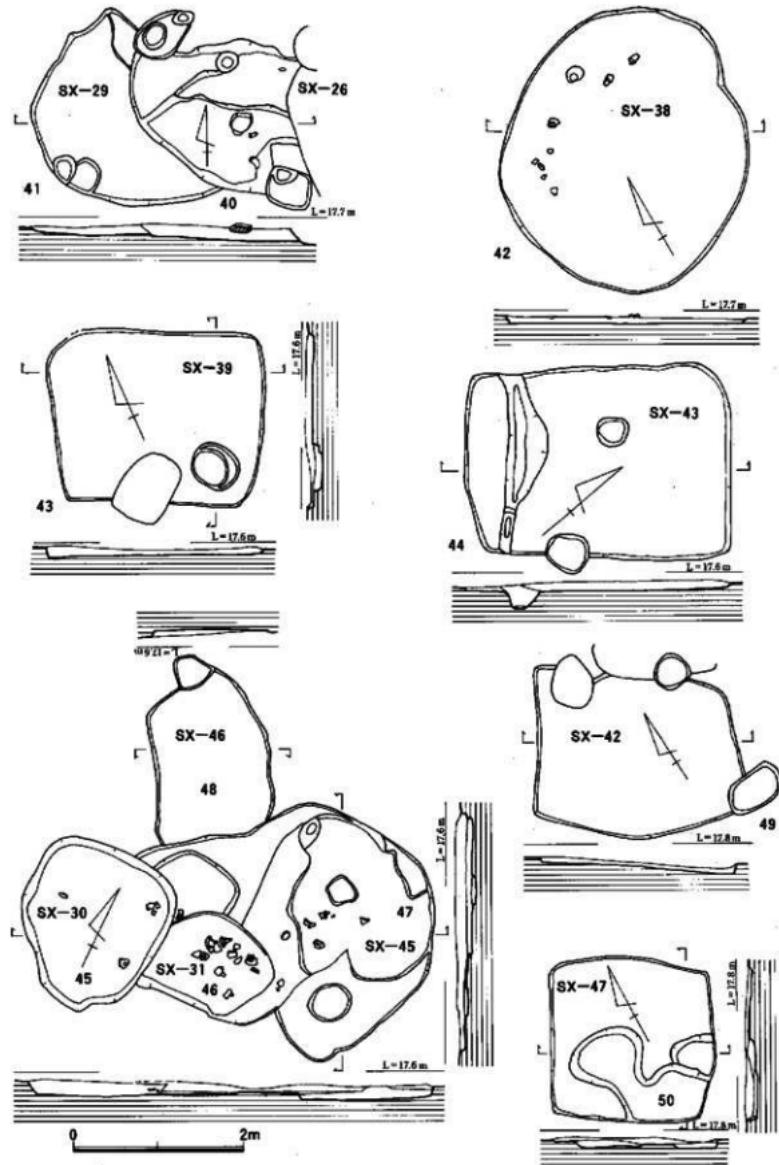


Fig. 15 古墳時代不整形土壤実測図-4 (縮尺1/60)

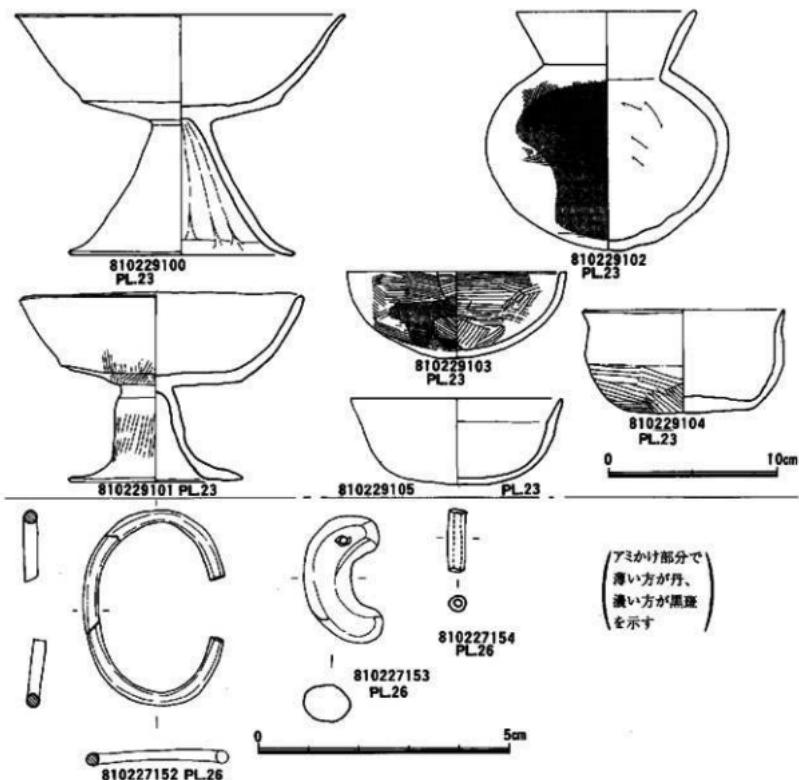


Fig. 16 第1次II区出土遺物実測図(縮尺1/1,1/3)

S X - 28 ~ 36 • 39 ~ 50 (Fig. 14 · 15 Tab. 5 PL. 3)

その殆どが不整形の形状を呈するがその内 31 · 39 · 43 · 44 · 49 · 50 はどちらかといえば方形を呈する。むしろ S K (土壤状遺構)として登録されてよいものである。この中で 45 ~ 48 は調査区の南側中央端に位置し、切り合ひ関係がある。新しい順に番号を付しているが、ほぼ同時期（時間差はあるが）に掘られたものであろう。また 43 · 44 · 49 · 50 は遺存状態が悪いが、形状だけをみるとかぎり竪穴住居址の形状を呈し、大きさも約 2m から 3m、床面積では 43 が 5.35m^2 、44 が 7.3m^2 、49 が 6.0m^2 、50 がやや小さく 3.82m^2 である。ただ柱穴がまったく認められないことから S X とした。

出土遺物 (Fig. 16 PL. 23 · 26)

住居址・掘立柱建物・不整形土壙から出土した遺物は台風時に土器が散乱し出土地点がわからなくなつた。管理が不十分で誠に申し訝ない。この中で、一部埋蔵文化財センターに展示していたものだけが出土場所が判明しているので図示した。



Fig. 17 第1次IV区造構配図(縮尺1/300)

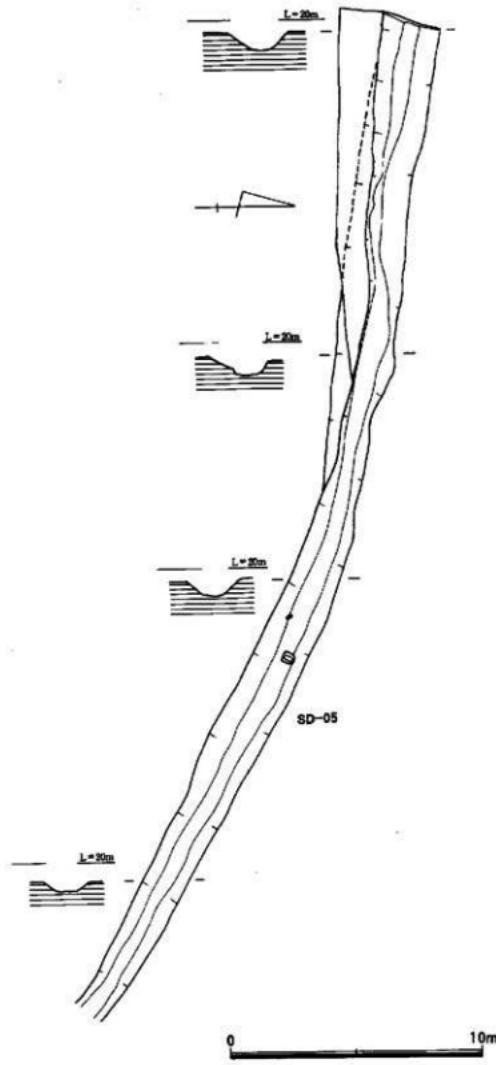


Fig. 18 溝状橋実測図(縮尺1/200)

高坏(Fig. 16 PL. 23) SX-07-20から土器の高坏が出土した。07からは登録番号810229100が出土し、口径19.6cm、器高14.1cm、脚高9.2cm、脚袖径13.4cmを測る。坏部の外面仕上げは回転ナデを施し、一部に煤が付着している。内面は表面剥落のため仕上げは不明。脚部外面は横ナデを施す。内面は横からの箝削りとナデ仕上げである。胎土は細砂及び2~4mm人の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が黄褐色+赤茶褐色+暗赤茶褐色を呈し、内面は暗赤茶褐色+暗褐色+明黄褐色を呈する。20からは810229101の高坏が出土した。口径16.9cm、器高11.3cm、脚高5.5cm、脚袖径10.2cmを測る。坏部の外面仕上げは全体に摩耗しており明確ではないが、僅かに刷毛目痕が認められる。内面はナデ仕上げ。脚部外面はナデと刷毛目を施す。内面はナデ仕上げである。胎土は1~3mm人の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も含む。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。

臺形土器(Fig. 16 PL. 23) 27からは810229102が出土し、口径10.7cm、器高14.1cmを測る。丸底を呈し、最大径が胴部中位に位置し、14.1cmを測る。頸部は縮まり、口縁部は大きく外反し「く」字口縁を呈する。外面調整は口縁部が横ナデ、胴部上位が縱方向の刷毛目を施し、胴部中位では横・縱の刷毛目を施す。胴部外面4分の1強に黒斑が認められる。内面は口縁部が横ナデ、胴部が粗い箝削りを施す。胎土は細砂及び2~5mm人の石英・長石を多く含み赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が淡赤黄褐色+暗黄褐色+黒斑を呈し、内面は淡赤黄褐色を呈する。

塊形土器(Fig. 16 PL. 23) 塊形土器は、SX-27から810229103、SX-20から810229104、SX-07から810229105が出土した。810229103は底部が丸底を呈し、口径13.0cm、器高5.1cmを測る。外面仕上げは横刷毛目をやや雜に施し、一部に黒斑が認められる。内面は横刷毛目の後、口縁部付近では箝削きを施している。胎土は細砂及び2~5mm人の石英・長石を多く含み雲母も混入している。色調は外面が黄褐色+明赤茶褐色+黒斑、内面は暗赤茶褐色を呈する。810229104は、底部が平底を呈し、胴部がやや内湾しながら真っ直ぐに立ち上がり、口縁部が僅かに外反し端部は丸く納める。口径12.0cm、器高6.1cm、底径7.3cmを測る。外面仕上げは全面に刷毛目を施した後、胴部中位まで横ナデを施し刷毛目を消している。内面はナデ仕上げを行っているが、底面に煤が付着している。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、また4~6mm人の長石・赤色粒・雲母も混入している。色調は外面が赤茶褐色+暗赤茶褐色+黒斑を呈し、内面は暗赤茶褐色+煤付着を呈する。810229105は、底部がやや丸底を呈し、胴部からやや外反しながら立ち上がり、内面に段を有し口縁端部は丸く納める。口径12.6cm、器高5.1cmを測る。外面仕上げはナデを施す。内面もナデ仕上げを行っている。内外面に黒斑が認められる。胎土は0.5mm人の砂粒を多く含み雲母も含む。色調は外面が赤茶褐色+黒斑、内面は暗赤茶褐色+黒斑を呈する。

銀環・勾玉・管玉(Fig. 16 PL. 26) 銀環がSX-07、勾玉・管玉がSX-08から出土した。SX-07-08はFig. 13のSX-07~09、20、25の切り合い関係の激しい不整形土壙でSX-08がSX-07を切っている。銀環は長さ3.9cm、径2.8cmを測り、楕円形を呈する。両端部はきれいに研磨されている。勾玉は全面に研磨が施され光沢を持つ。長さ2.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cmである。硬玉製と思われるが分析はしていない。管玉は長さ1.25cm、幅0.35cm、厚さ0.35cmである。碧玉製と思われるが分析はしていない。

2. 第一次調査IV区 一奈良時代以降の遺構一

溝(Fig. 17, 18 PL. 4)

IV区は弥生時代前期~中期にかけての住居址・臺棺墓・溝等が検出されたが、これらを切る形で、古代の溝が調査区南側から1条検出された。ほぼN-72°-Wにやや弧を描きながら西から東に流れている。現長は42m、幅2.1m、深さ0.8~0.5mを測る。出土遺物は青白磁が出土している。

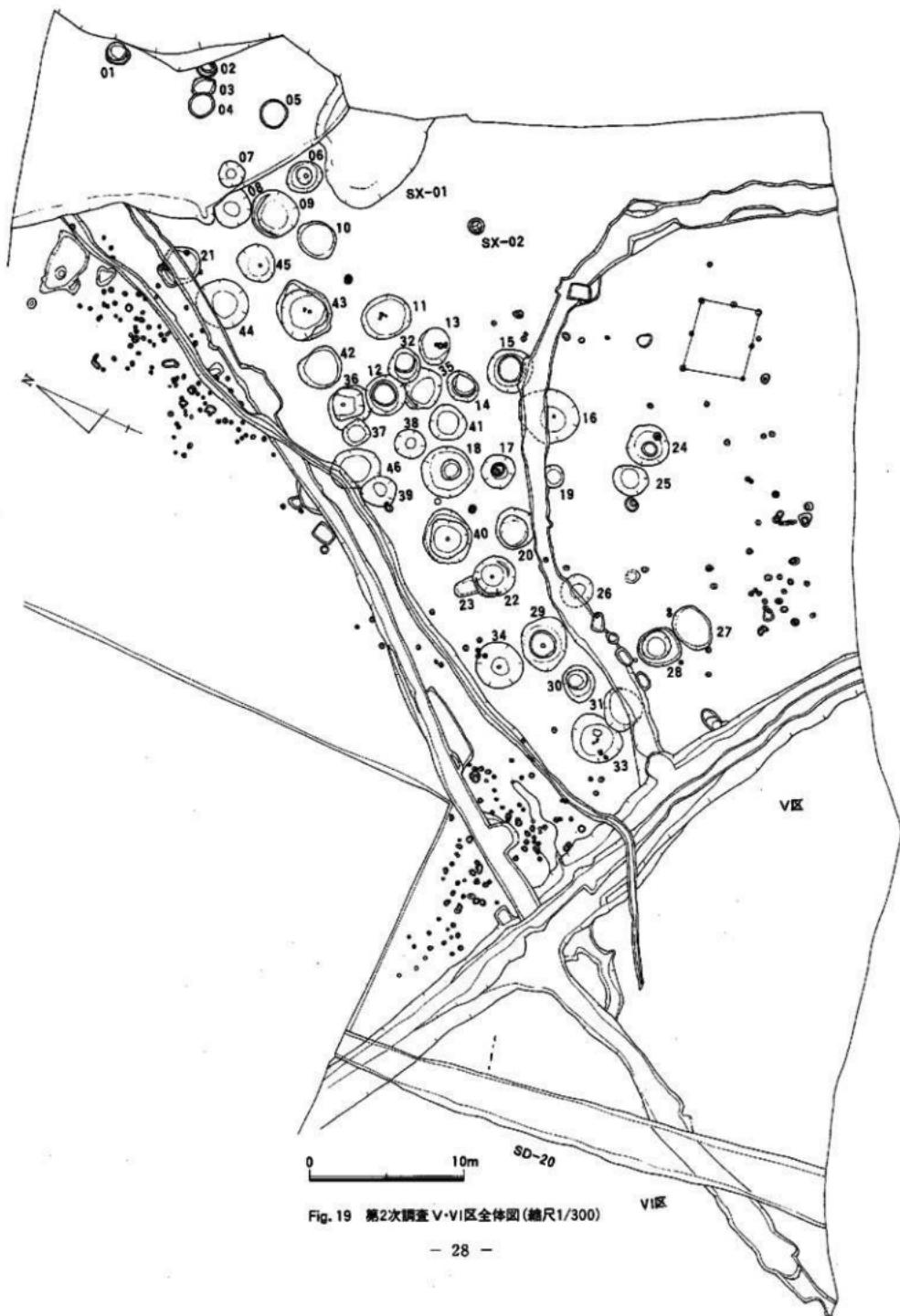


Fig. 19 第2次調査V・VI区全体図(縮尺1/300)

第三章 第二次調査

第一節 第二次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地 : 福岡市西区飯盛字本名地区
圃場整備面積 : 61ha
発掘調査対象面積 : 7.8ha
発掘調査面積 : 2.1ha
発掘調査年月日 : 昭和57年9月15日～58年2月15日

試掘調査の結果、約6haに遺構を確認し、その内の約4haについては盛上、2.1haが削平することとなり、発掘調査面積を2.1haとした。調査区は五ヶ所となり、第二次調査はVからX区の調査区を設定した。V・VI区が3,400m²、VII区が3,300m²、VIII区が2,800m²、IX区が7,100m²、X区及び道路・水路部分の調査で4,168m²、計20,768m²を調査した。

V・VI区の調査

検出された主な遺構は、縄文時代中期から後期初頭の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・掘立柱建物と奈良時代の溝である。

縄文時代後期の遺構

貯蔵穴を46基検出した。中央部に柱・柱痕を残すものが約半数ある。最大の物はSU-16で、径3.9m、深さ1.6mである。最小のものはSU-38で、径1.9m、深さ1.8mである。形状は壺鉢状やわずかに袋状を呈するもの、ほぼ垂直に立ち上がるものの三種類に大別できる。出土遺物は土器のほか種子(ドングリ等)が約1/3の貯蔵穴から出土した。土器形式は中期から後期初頭に比定される阿高式土器、鐘崎式土器、北久根式土器を中心に出土している。早良平野で縄文時代中期から後期初頭の遺構が発見されたのは四箇遺跡・有出遺跡について三例目である。

弥生時代中期の遺構

五条の溝と掘立柱建物一棟を検出した。溝は台地を北西から南東に切断するSD-10にSD-11・12が流れ込む状態で検出された。SD-10の南東端は台地が段落ちする部分まで続く形状を呈する。上器は多量に出土し、特に祭祀用に使用された丹塗りの高杯形土器・壺形土器・壺形土器が多い。

SD-10は幅3m、深さ1.5mの大溝であり、溝より多量の土器と共に三叉鋤・平鋤の柄・用途不明の木器が出土した。SD-11が幅1.9m、深さ0.4m、SD-12が幅1.6m、深さ0.27mである。掘立柱建物は2間×2間の建物で、SD-11に囲まれた中に検出した。

VII区の遺構

弥生時代中期の遺構と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構

溝五条・壺棺墓1基・掘立柱建物2棟・ピット多数を検出した。溝はSD-14・15・16・17・18が弥生時代中期に属する。SD-14は調査区中央部の約6mに入口が設けられ、両側に巡る環濠である。SD-16はSD-02の下層から検出したもので、二叉・三叉鋤や浮舟等が出土した。

壺棺墓はただ1基のみしか検出されていない。時期は弥生時代中期に属する。遺構が散発的にあるため理解しやすいが、壺棺墓が1基だけしか検出されていないところが、不可解である。

SD-15は台地の端部に造られたものであるが、両端に杭を打ち込み取水口状遺構としている。この中からスコップ状木器等が出土した。壺棺墓は1基だけ出土したが、殆ど削平され約1/4しか遺存していない。掘立柱建物はSD-14内から2棟検出した。

V区の遺構

V区の調査で検出した遺構は旧河川SD-02と掘立柱建物33棟、不整形土壙状遺構32基、井戸状遺構1基を検出した。北側に位置し、東西に流れるSD-02は幅14~21mで台地を二分する。下層から出土する土器は城ノ越式土器が主である。ただ、この旧河川の上面にあるSX-21・27から出土する土器は須恵器出現の初期段階のものであることからこの以前に埋まつたことが明らかである。この他には弥生時代に属する遺構は見られない。古墳時代の掘立柱建物が旧河川を境にして、北側は古式土器を主体とするのに対して、南側は須恵器を主体とした掘立柱建物群である。

VI区の調査

VI区は7,100m²を発掘調査した。VI区はSD-01(旧河川:おそらく旧日向川及びその支流と思われる)SD-02(SD-01と同様に旧河川)に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複している。特に古墳時代初期の遺構はVI区全域に広がっている。

この台地を三分する溝が四条(SD-05~08)がある。この二つの溝は合流してSD-05となりSD-01に流れ込む。これによって台地が三分される。時期は弥生時代中期に形成されており、合流点には堰状遺構が検出された。

SD-01は第一次調査のIII区から検出された旧河川の上流部分であり、時期はIII区の下層で出土した弥生時代前期から中期初頭と考えられる。

古墳時代の遺構は堅穴式住居址1軒、掘立柱建物64棟、溝状遺構23条を検出した。

第二節 第二次調査の記録

1. 第二次調査V区 一 繩文時代の遺構一

貯蔵穴

第一次・二次発掘調査を通して、縄文時代の遺構を検出したのは、第二次調査の第V区だけである。V・VI区は弥生時代中期の環濠集落と奈良時代の溝を検出したが、調査中に弥生時代中期の溝に切られる円形の土壙を検出した。これにより再度精査した結果、埋土が弥生時代の基盤層である小石・砂を含む褐色土であるため非常に検出しにくく、弥生時代の遺構調査終了後に再度一面下げ、遺構検出を行った。その結果、縄文時代の中期から後期初頭にかけての貯蔵穴46基が北東から南西の方向に列をして検出された。南限は弥生時代の環濠であるSD-11で、北限は台地が落ちる部分まで検出された。台地の落ち際は人工的に削除された部分であることから北に延びる可能性も考えられる。南北方向約60m、東西方向約20mの範囲に位置する。時期、中央部に1個の柱穴が有るところから落とし穴とも考えたが、あまりにも集中していることや、土器・石器・種子等が検出されることから貯蔵穴として捉えた。貯蔵穴間で切合関係が認められるものとして、SU-03が02と04に切られ、36が37と12に切られる。12は32に切られ、35は12・32に切られる。また46は39に、23は22に、31は33によって切られる。

貯蔵穴から出土する遺物は少量であるため時期を決定できる資料は少ないが、遺物が出土した貯蔵穴はSU-02・05・08~11・13・15・16・20・22・28~36・38~41・43~46の二十八ヶ所から土器、SU-10・17・22・38・40から石器、柱痕及び建築材はSU-9・30・33・35・40・42・44の七ヶ所から検出した。また種子は06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44の十三ヶ所から出土した。

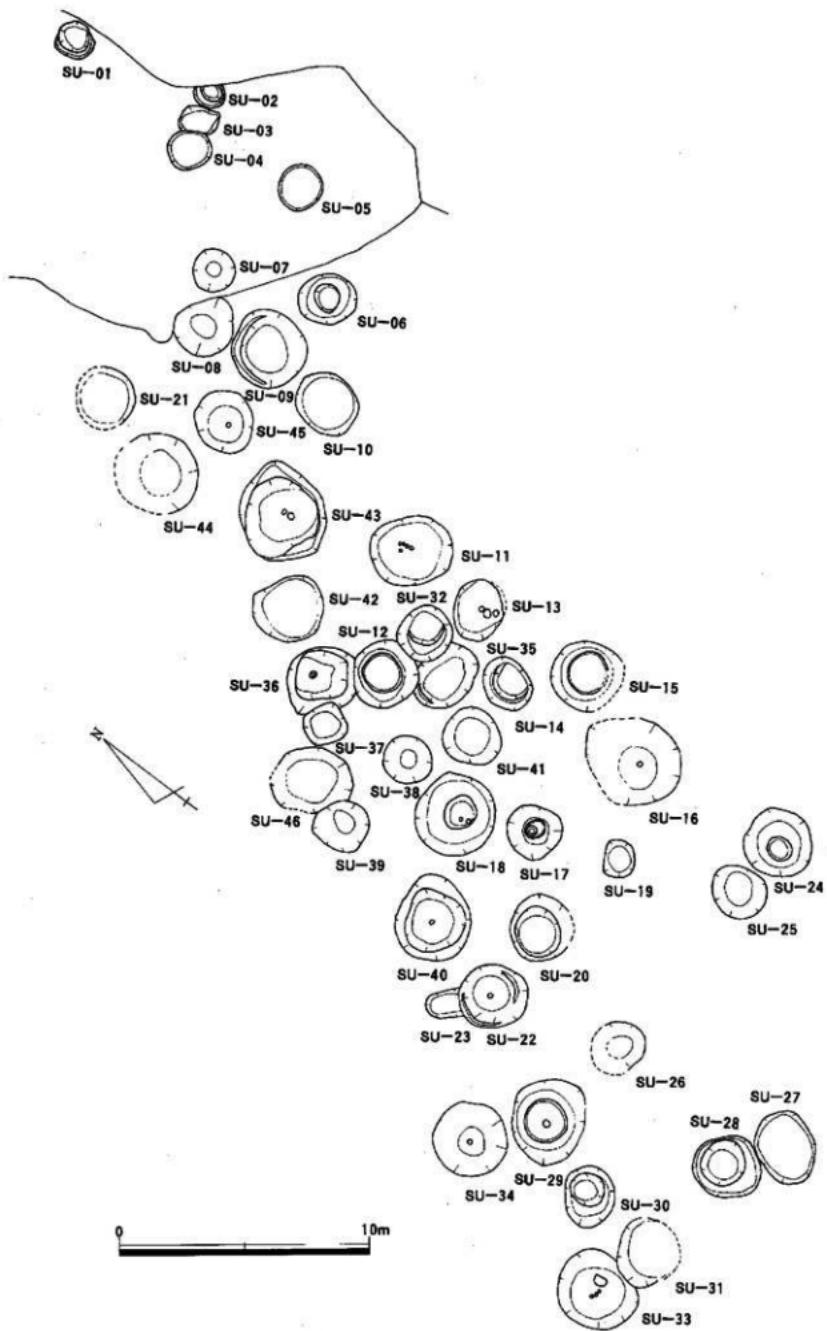


Fig. 20 第V区縄文時代肝臓穴配置図(縮尺1/200)

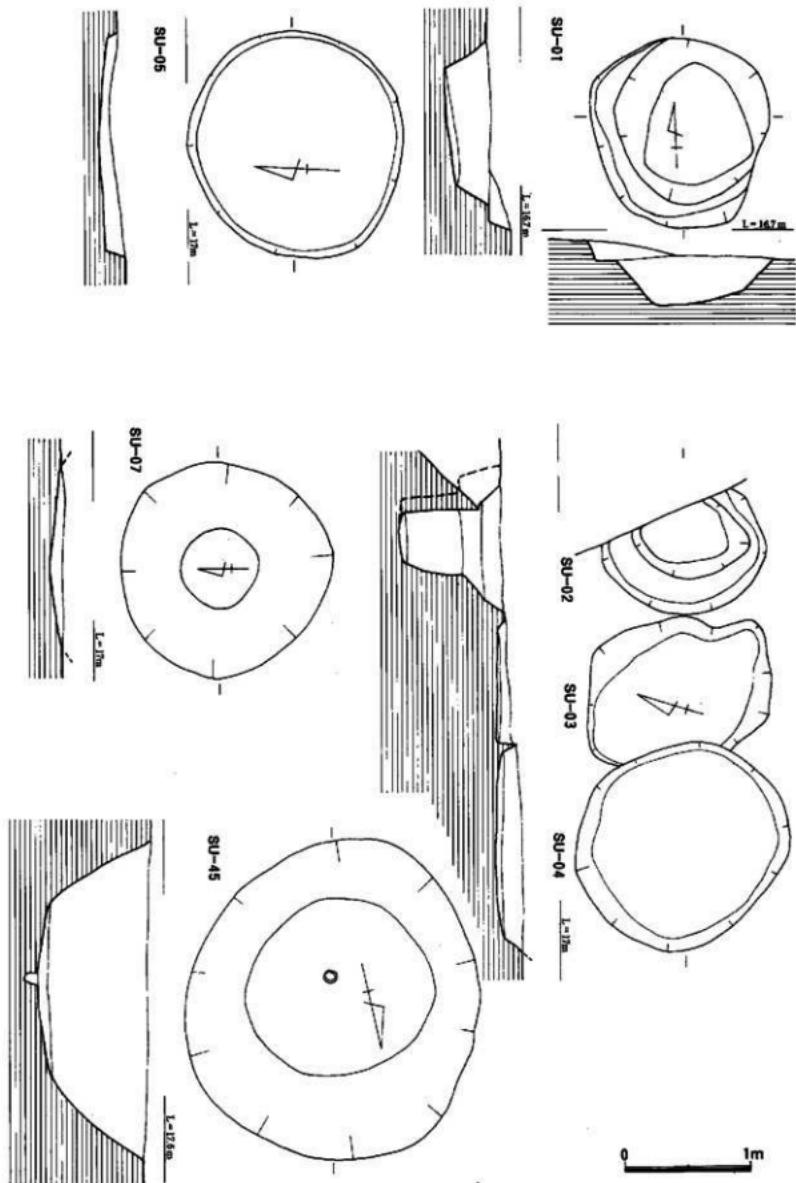


Fig. 21 SU-01~05-07-45平面・断面図(縮尺1/40)

S U - 01 ~ 05・07・45 (Fig. 21)

調査区の一番北側から検出されたもので、全体的に削平を受けている。二段掘りされているが、片方は削平のため一段となっている。形状は不整形の楕円を呈する。長さ154cm×幅140cm×深さ50cmを測る。底面はやや斜めの傾斜をもち平坦である。出土遺物はない。

02~04は調査区の北側、01の南東側に位置し、一直線に並ぶ。04→03→02の切り合い関係を持つ。全体的に削平を受けしており、03・04は約10cmから30cm程度しか残っていない。

02 02はそれでも深さ80cmが遺存する。形状は東側が台地削平時に破壊されていることから大まかにしか判断できないが、円形で二段に形成され二段目はほぼ垂直に掘込まれている。底面は平坦で、柱穴等はない。規模は長軸125cm×短軸80+ α (120)cm×深さ80cmを測る。二段目は長軸100cm×短軸70cm+ α ×深さ50cmを測る。02は縄文時代中期に属する。03 03は出土遺物がないが02により、中期以降であることが判明した。形状は不整形の楕円形で、長軸150cm×短軸135cm+ α ×深さ24cmで04から切られる。04 04はほぼ円形を呈し、規模は長軸170cm×短軸165cm×深さ19cmを測る。出土遺物がないため時期は確定できないが、03を切ることから最も新しいと考えられる。

05・07は02から一段、段落ちした部分から検出された。

05 段落ち部分からの検出であるため削平が著しく底面しか残っていない。規模は長軸185cm×短軸170cm×深さ15cmを測る。柱穴等は検出されていない。出土遺物は細片であるが、土器が出土している。07 07も削平が著しく遺構の残りは悪く、規模は長軸175cm×短軸170cm×深さ8cmを測る。遺物・柱穴等は検出されていない。

45 45は07等より一段高い部分、調査区の北側で、8~10の西側、44の東側に位置する。規模は長軸255cm×短軸230cm×深さ101cmを測る。柱穴は中央に位置し、規模は10×10cm、深さ15cmを測る。出土遺物は細片であるが鐘ヶ崎式土器であることから時期は縄文時代中期に比定できる。

S U - 06・08・09 (Fig. 22 PL. 6・8・9)

06・08・09は台地北側の段落ちする手前に位置し、45の東側に位置する。

06 06はS X - 01の西側、09の東側に位置する。二段に構築され、規模は長軸226cm×短軸200cm×深さ146cmを測る。柱穴は中央に位置し、規模は26×20cm、深さ12cmを測る。出土遺物は炭化物・ドングリ等が出土したが、時期を決定する土器の出土はない。土層は第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が黒褐色土、第III層が炭化物を含む淡褐色粘質土、第IV層が暗青灰色粘質土、第V層が炭化物を含む暗黒灰粘質土、第VI層が青灰色粘質土、第VII層がドングリ等を含む砂、第VIII層が青灰色シルトである。

08 08は北側の一段目の段落ち部分に北東部分が一部削られているが、09の北側に位置し、09と接する。形状は円形を呈し、やや浅い。規模は長軸253cm×短軸248cm×深さ80cmを測る。上面第I層に弥生土器を混入するが、この第I層の小石混じりの褐色土は弥生時代の基盤層であることから、混入したと思われる。出土遺物はドングリ等および、鉢型土器の底部が出土した。土層は第I層が小石混じりの褐色土、第II層が暗褐色粘質土、第III層が褐色粘質土、第IV層が黄褐色粘質土、第V層が炭化物を含む砂、第VI層が灰褐色粘質土である。09 09は南に10、北に08、東に06、西に45の十字部分の中央に位置する。08と接するが切り合い関係はない。北側部分に僅かな平坦面を有するがほぼ円形の形状を呈し、柱穴はない。規模は長軸300cm×短軸296cm×深さ122cmを測る。上層は第I層が小石混じりの暗褐色土、第II層が暗褐色土、第III層が暗褐色土、第IV層が褐色粘質土、第V層が暗褐色土、第VI層が茶褐色粘質土、第VII層が暗褐色シルト土、第VIII層が砂砾、第IX層が黄褐色土、第X層が砂、第XI層がドングリ等を含む暗褐色粘質土、第XII層が暗褐色粘質土、第XIII層が砂

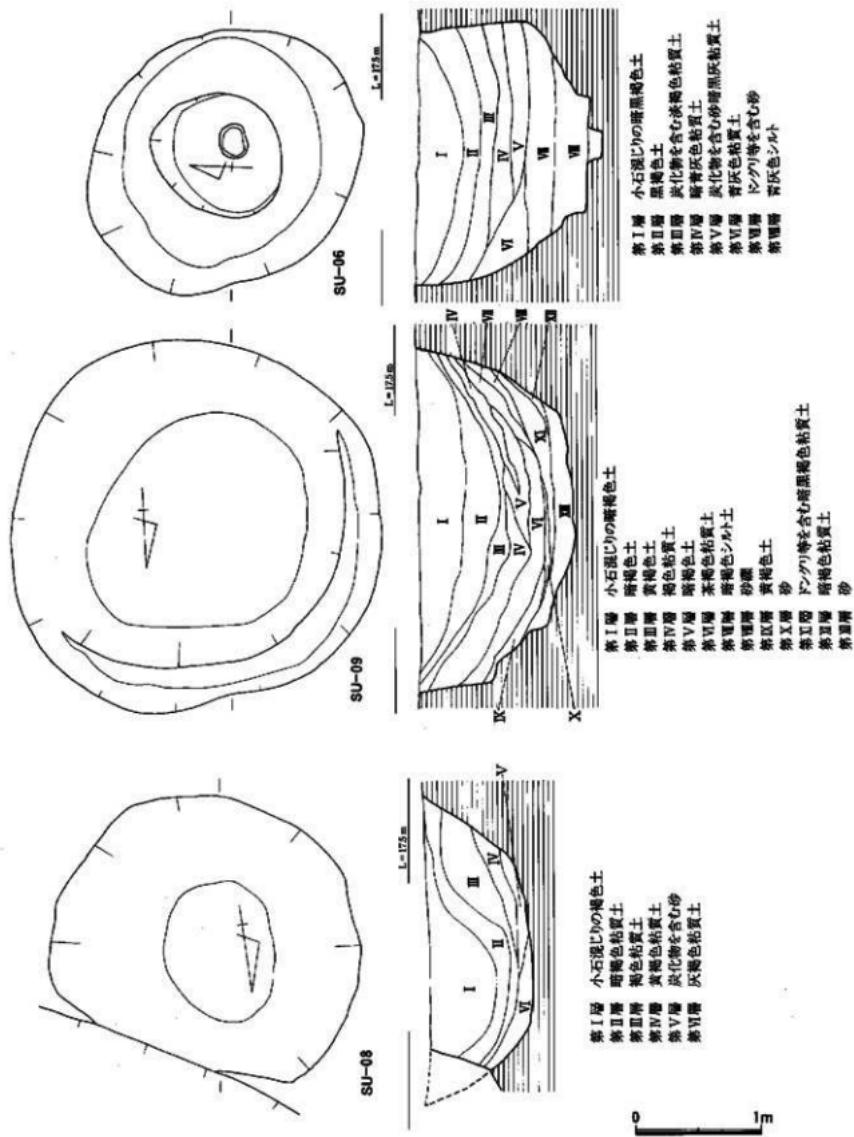


Fig. 22 SU-06-08-09平面・断面図(縮尺1/40)

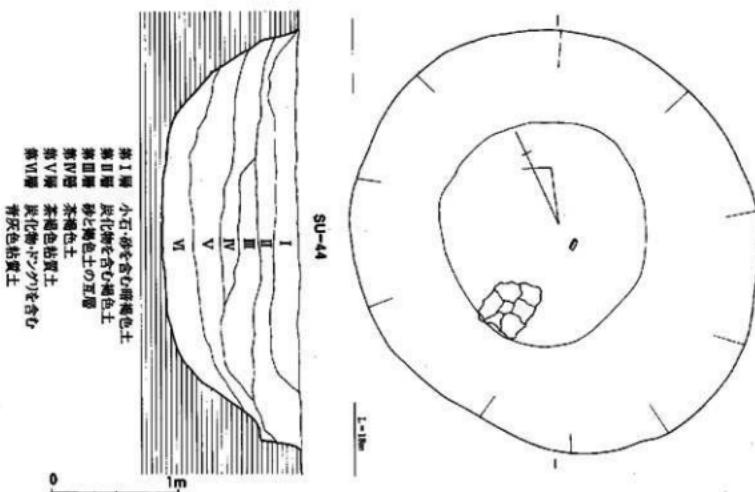
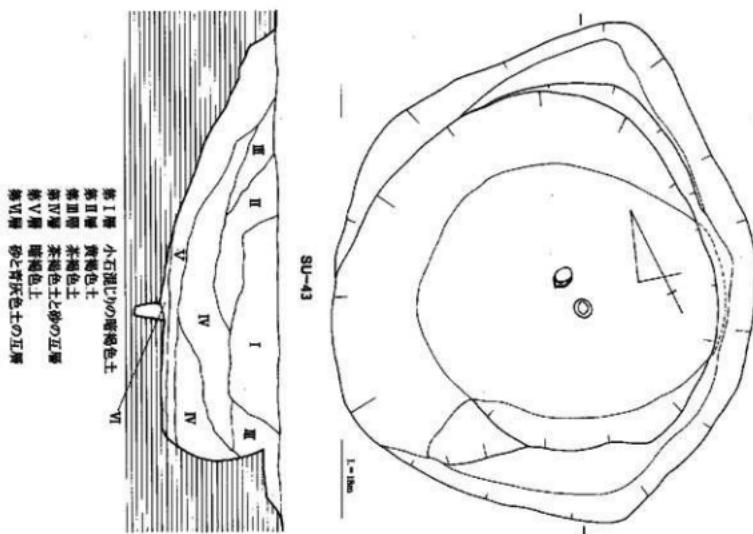


Fig. 23 SU-43・44平面・断面図(縮尺1/40)

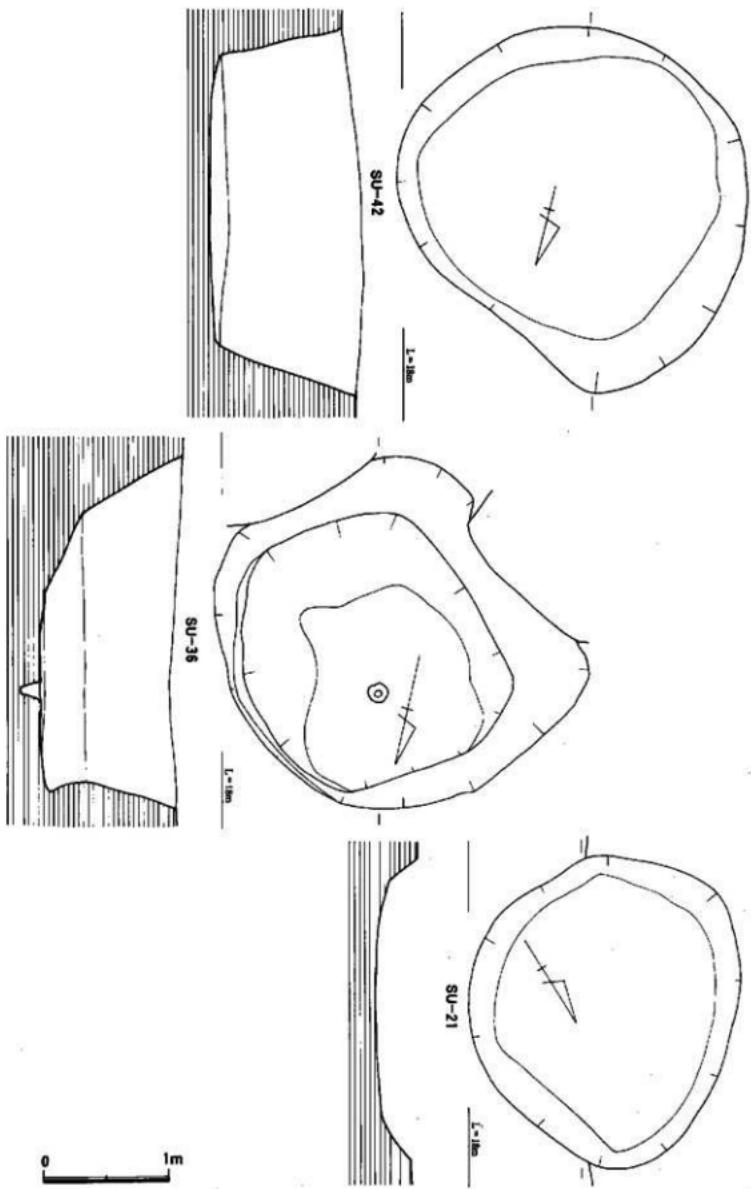


Fig. 24 SU-21-36-42平面・断面図(縮尺1/40)

である。出土遺物はドングリの他に土器が出土しているが、この遺物が44出土の土器と接合するところから、両方とも北久根式土器で、時期は縄文時代後期初頭に比定できる。

S U - 43・44 (Fig. 23 PL. 5・10・11)

43・44は台地北側部分に位置し、43は42の北側に位置する。44は45の西側、21の南側に位置する。43・43は隅丸の楕円形を呈するが、北東側が浅く、南西側が深くオーバーハングした形状を呈する。中央部に2個の柱穴をもつが、柱材はない。規模は今回検出された貯蔵穴の内2番目に大きなもので、長軸393cm×短軸335cm×深さ118cmを測る。柱穴の大きさは、13×13cm、深さ24cmと20×13cm、深さ24cmを測る。出土遺物は上器底部が出土しているが、この上器から時期は縄文時代中期に比定できる。土層は単純で第I層が小石混じりの暗褐色土、第II層が黄褐色土、第III層が茶褐色土、第IV層が茶褐色と砂の互層、第V層が暗茶褐色土、第VI層が砂と青灰色土の互層である。44 44は弥生時代中期の溝であるSD-12によって約半分を切られる。形状は円形を呈し、柱穴はない。長軸335cm×短軸327cm×深さ98cmを測る。出土遺物は炭化物・種子の他に鉢形土器 (Fig. 36) 及び09出土の土器と接合した台座状の形状を呈する土器 (Fig. 37) で、時期は縄文時代後期初頭に比定できる。土層は単純で、第I層が小石・砂を含む暗褐色土、第II層が炭化物を含む褐色土、第III層が砂と褐色土の互層、第IV層が茶褐色土、第V層が茶褐色粘質土、第VI層が炭化物・ドングリを多量に含む青灰色粘質土である。

S U - 21・36・42 (Fig. 24 PL. 5)

21・21は44の北側に位置し、弥生時代の溝SD-12によって切られる。全体的にこの部分は台地が下がり気味で、遺構の遺存状態は悪い。形状は楕円形を呈し柱穴はない。規模は長軸250cm×短軸220cm×深さ24cmを測る。36・36は貯蔵穴が一番集中する中央部の北側に位置し、12・37から切られる。形状は本来は隅丸方形を呈していたものと考えられるが、12・37から切られるため不整形を呈する。規模は長軸280cm×短軸250cm×深さ125cmを測る。北側底面は抉れた状況を呈しており、これに反して南側は緩やかな斜面となっている。中央部に柱穴がある。規模は18×18cmで、深さ16cmを測る。出土遺物は縄文時代中期の底部が出土していることからこの貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。42・42は36の北側、43の南側に位置する。不整形の形状を呈し、規模は長軸286cm×短軸250cm×深さ117cmを測り、柱穴はない。最下層からドングリが出土している。土層は44とほぼ同じである。

S U - 10・11・13 (Fig. 25 PL. 5・6・9・10)

10・10は台地の北側で、9の南側、SX-01の西側に位置する。形状は円形を呈し、南側底面は抉り込んでいる。柱穴はない。底面付近の第V層から土器の細片が出土している。規模は長軸265cm×短軸226cm×深さ85cmを測る。土層は単純で、第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が黒褐色土、第III層が茶褐色土、第IV層が砂疊、第V層が砂である。11・11は中央部の貯蔵穴が集中する一角の北東隅に位置し、13の北側、32の北東側にある。形状は隅丸方形を呈し、底面中央部の僅かに北側にずれた部分から小さな柱穴がまとまって5個検出した。壁面の立ち上がりは、ほぼ垂直である。規模は長軸320cm×短軸293cm×深さ125cmを測る。柱穴の大きさはいずれも13×13cmで深さ9cmを測る。出土遺物は土器底部等とドングリが出土した。土層はやや複雑で埋まり方にやや時間がかかる形跡が見られる。第I層が茶褐色土、第II層が小石・土器を含む茶褐色土、第III層が炭化物を多量に含む褐色土、第IV層が砂、第V層が黄褐色粘質土、第VI層が炭化物を多量に含む黄褐色シルト、第VII層が暗茶褐色粘質土、第VIII層が炭化物を含む黄褐色粘質土、第IX層が砂と黄褐色土の互層、第X層が暗茶褐色粘質土、第XI層・砂・炭化物を混入する青灰色シルト、第XII層が明黄褐色粘質土、

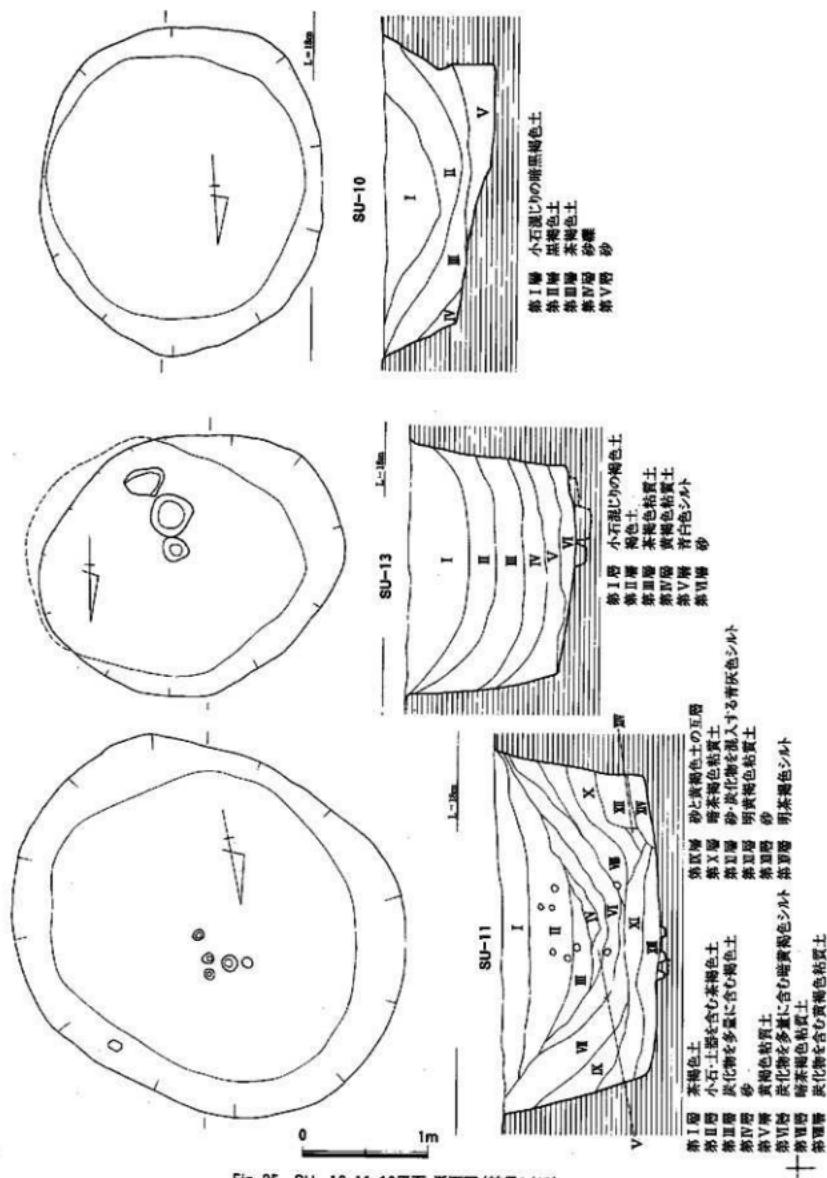


Fig. 25 SU-10-11-13平面・断面図(縮尺1/40)

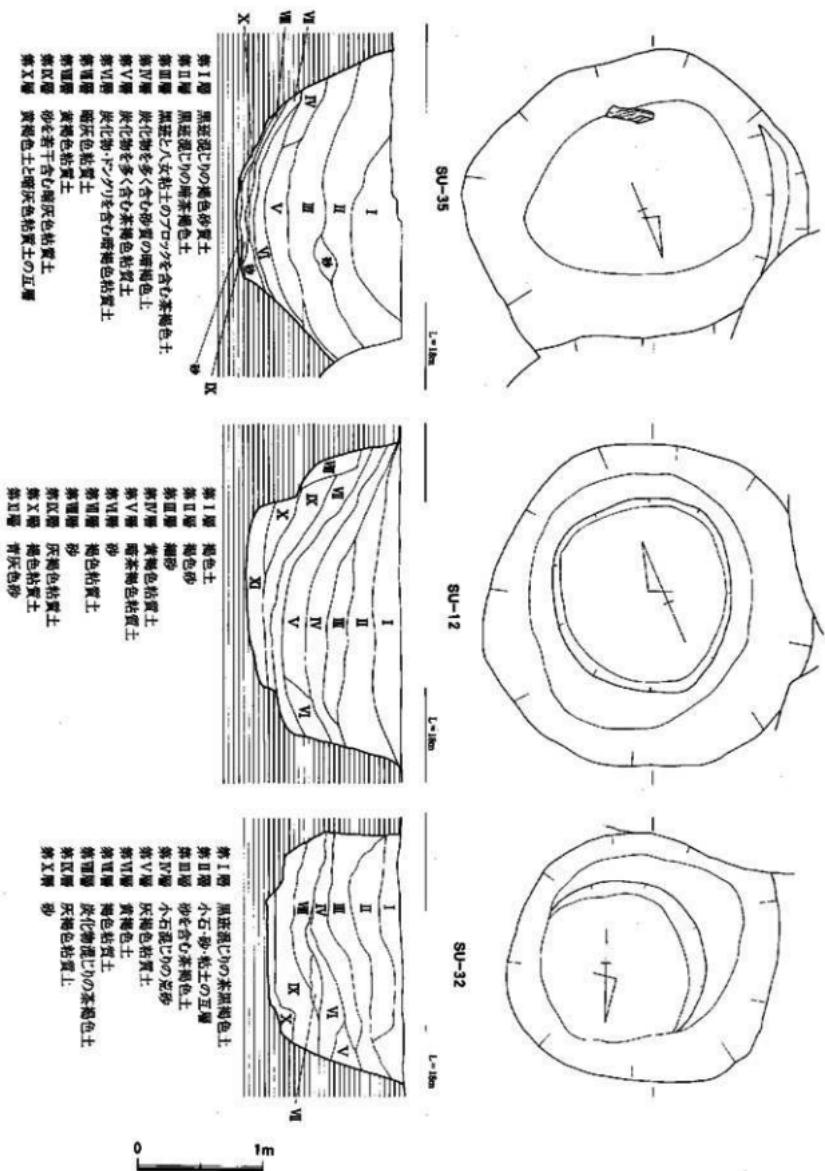


Fig. 26 SU-12-32-35平面・断面図(縮尺1/40)

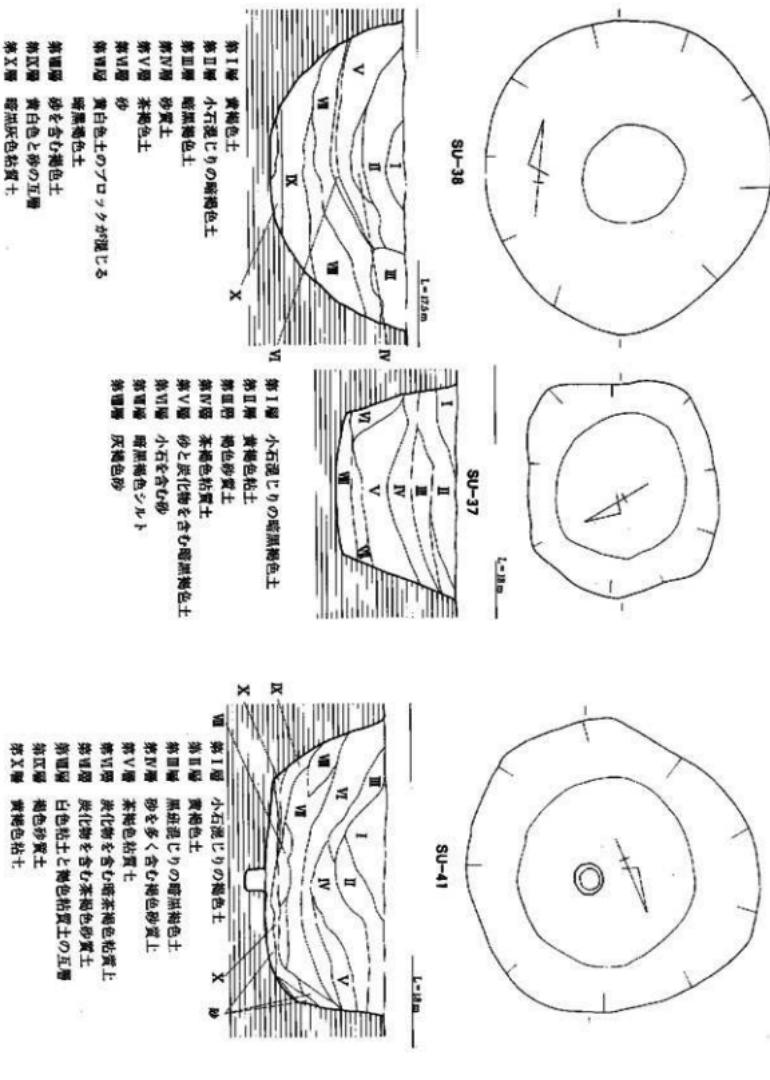


Fig. 27 SU-37-38-41平面・断面図(縮尺1/40)

第Ⅲ層が砂、第Ⅳ層が明茶褐色シルトである。13-13は台地中央部の貯蔵穴が集中する一角の東側に位置し、32・35の東側、14の北側にある。形状は、やや長い円形を呈し、南北の壁面の立ち上がりは垂直であるが、東側が抉り込んでいる。底面は平坦で、柱穴が中央部から南側に3個一直線に排列する。規模は長軸245cm×短軸208cm×深さ145cmを測る。柱穴の大きさは中央から20×20cm、深さ9cmと35×30cmで深さ15cmと32×20cmで深さ9cmである。出土遺物は土器底部が出土した。土層は単純で、基準となる土層を呈する。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が褐色土、第Ⅲ層が茶褐色粘質土、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が青白色シルト、第Ⅵ層が砂である。

S U - 12・32・35 (Fig. 26 PL. 5・6)

12-12は台地中央部に位置し、32に切られ、35・36を切る形で検出された。この4基の貯蔵穴の内、2番目に新しい貯蔵穴である。形状は円形で、底面近くで平坦部をもつ二段構造になっている。底面は平坦で、柱穴はない。規模は長軸260cm×短軸255cm×深さ123cmを測る。土層は第Ⅰ層が褐色土、第Ⅱ層が褐色砂、第Ⅲ層が細砂、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅵ層が砂、第Ⅶ層が褐色粘質土、第Ⅷ層が砂、第Ⅸ層が灰褐色粘質土、第Ⅹ層が褐色粘質土、第Ⅺ層が青灰色砂である。32-32は12-35を切る形で検出された。形状は隅丸方形を呈し、底面近くに平坦部をもつ二段構造になっている。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は長軸210cm×短軸200cm×深さ108cmを測る。土層は第Ⅰ層が黒斑混じりの茶褐色土、第Ⅱ層が小石・砂・粘土の互層、第Ⅲ層が砂を含む茶褐色土、第Ⅳ層が小石混じりの荒砂、第Ⅴ層が灰褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色土、第Ⅶ層が褐色粘質土、第Ⅷ層が炭化物混じりの茶褐色土、第Ⅸ層が灰褐色粘質土、第Ⅹ層が砂である。出土遺物は炭化物と繩文土器の口縁部が出土しており、これによって貯蔵穴の時期が決定される。35-35は12-32から切られ、この3基のうち一番古い貯蔵穴である。形状は隅丸方形と思われるが、両方から切られているため定かではない。底面はやや丸味をもち柱穴はない。底面近くに炭化材が出土している。規模は長軸278cm×短軸227cm×深さ132cmを測る。土層は第Ⅰ層が黒斑混じりの褐色砂質土、第Ⅱ層が黒斑混じりの暗茶褐色土、第Ⅲ層が黒斑と八女粘土のブロックを含む茶褐色土、第Ⅳ層が炭化物を多く含む砂質の暗褐色土、第Ⅴ層が炭化物を多く含む茶褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物・ドングリを含む暗褐色粘質土、第Ⅶ層が暗灰色粘質土、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が砂を若干含む暗灰色粘質土、第Ⅹ層が黄褐色土と暗灰色粘質土の互層である。出土遺物は炭化物・炭化材・鉢形土器で、時期は繩文時代中期に属する。

S U - 37・38・41 (Fig. 27 PL. 5・7・9)

37-37は台地中央部の西側に位置し、4-6と接し、36を切る形で検出された。形状は隅丸方形で、底面形は円形に近い。底面は平坦で柱穴等は検出されていないが、炭化物が出土した。規模は小型で、長軸170cm×短軸150cm×深さ95cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が褐色砂質土、第Ⅳ層が茶褐色粘質土、第Ⅴ層が砂と炭化物を含む暗黒褐色土、第Ⅵ層が小石を含む砂、第Ⅶ層が暗黒褐色シルト、第Ⅷ層が灰褐色沙である。土層の埋まり方は西側からである。

38-38は台地中央部の中央、12の南側、46の東側、41の西側に位置する。上面形状は円形を呈し、底面は壇状を呈し、柱穴等は検出できなかったが、底面近くで繩文時代中期の底部が出土していることから、この貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。規模は長軸250cm×短軸230cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が黄褐色土、第Ⅱ層が小石混じりの暗褐色土、第Ⅲ層が暗黒褐色土、第Ⅳ層が砂質土、第Ⅴ層が茶褐色土、第Ⅵ層が砂、第Ⅶ層が黄白色土上のブロックが混じる暗黒褐色土、第Ⅷ層が砂を含む褐色土、第Ⅸ層が黄白色土と砂の互層、第Ⅹ層が暗黒灰色粘質土である。

41-41は台地中央部の貯蔵穴が集中する部分から検出された。西側に38、東側に14北側に35が

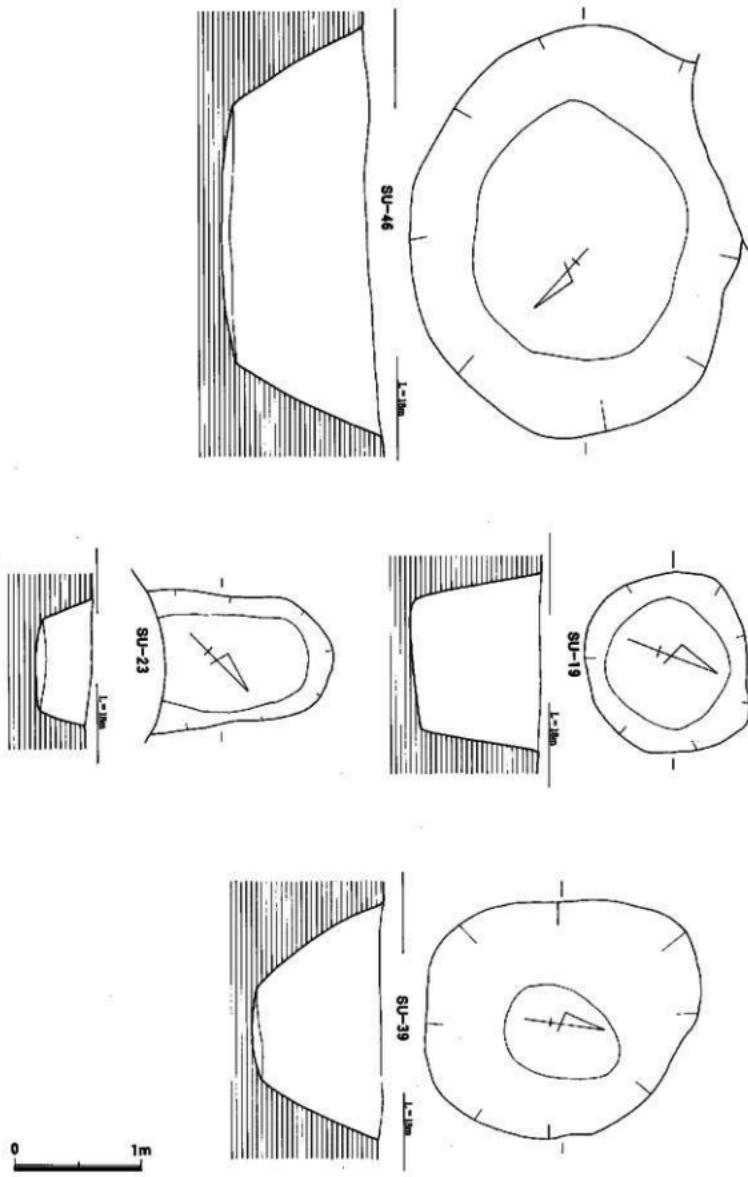
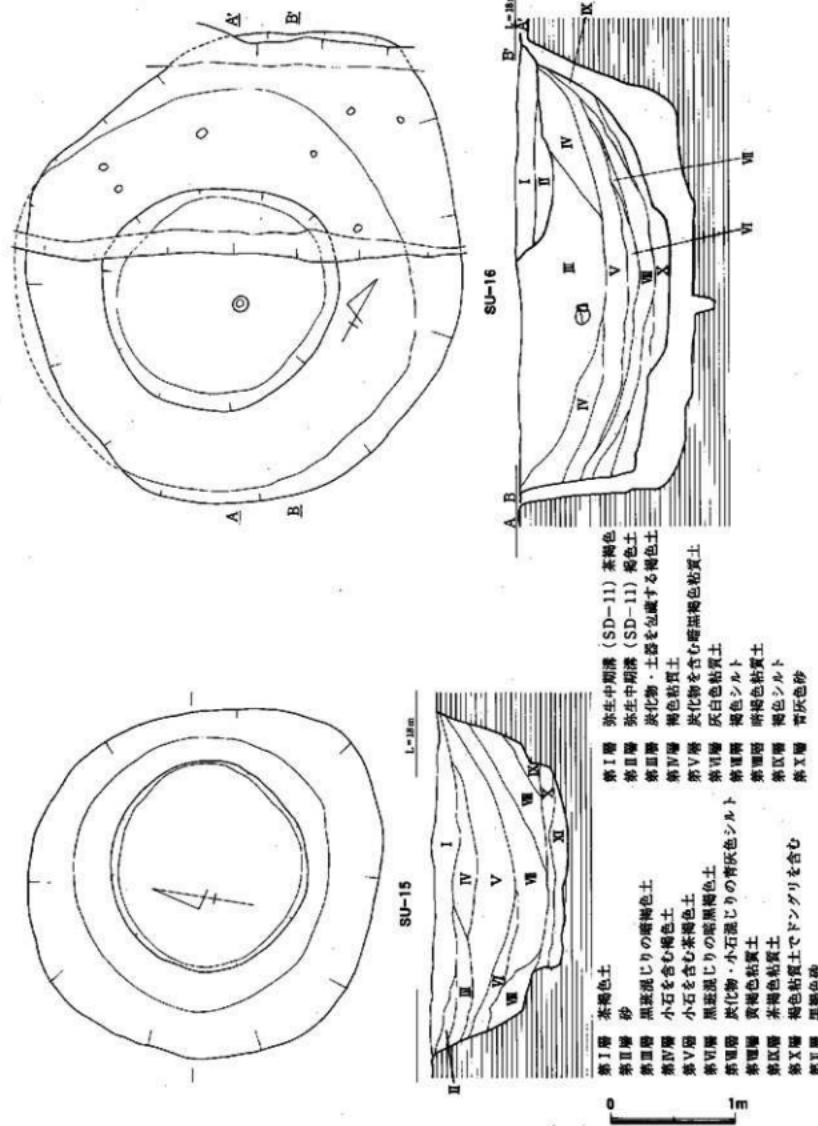


Fig. 28 SU-19·23·39·46平面・断面図(縮尺1/40)



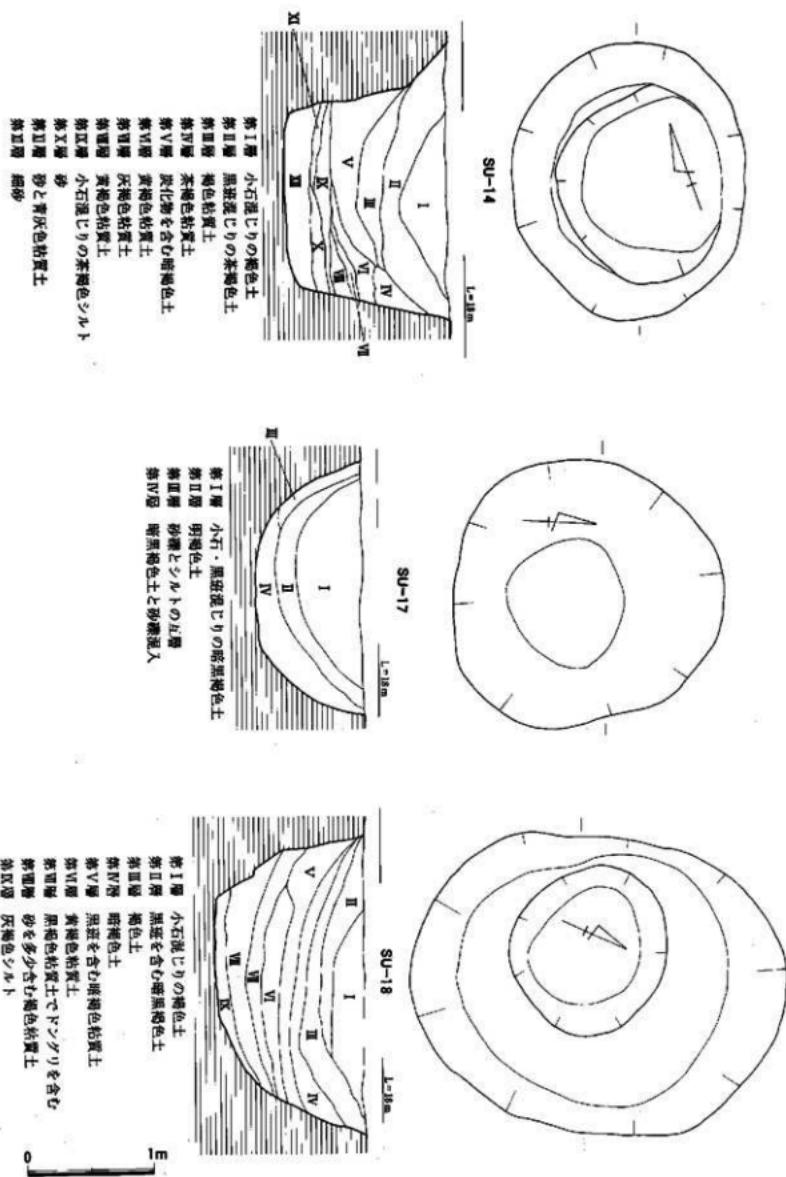


Fig. 30 SU-14・17・18平面・断面図(縮尺1/40)

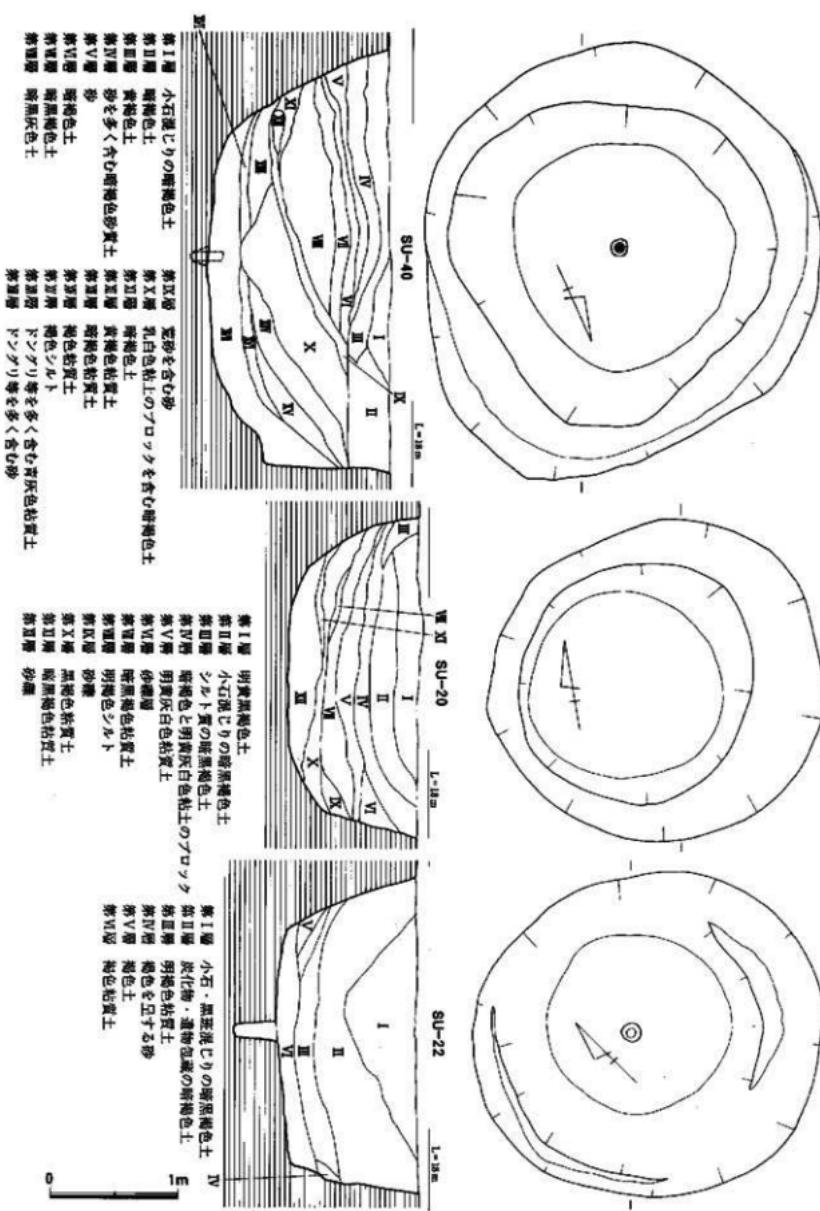
ある。上面形状はやや不整形な円形を呈するが、底面は円形で平坦を呈する。中央部に柱穴が検出された。出土遺物は炭化物・繩文時代中期の土器が出土している。土器は底面近くの出土であることからこの貯蔵穴の時期もこの時代と考えて良い。規模は長軸233cm×短軸230cm×深さ112cmを測る。また柱穴は25cm×25cm×深さ15cmを測る。土層は非常に複雑で、底面になるほど細かい。砂の部分には土層名を記さず図面に表示した。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が黒斑混じりの暗黒褐色土、第Ⅳ層が砂を多く含む褐色砂質土、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が炭化物を含む暗茶褐色粘質土、第Ⅶ層が炭化物を含む茶褐色砂質土、第Ⅷ層が白色粘土と褐色粘質土の互層、第Ⅸ層が褐色砂質土、第Ⅹ層が黄褐色粘土で、最下層及び第Ⅶ層からX層にかけて砂の堆積が認められる。土砂の堆積は南側からが多く流入している。

S U - 19 · 23 · 39 · 46 (Fig. 28 PL. 5 ~ 7)

19 19は弥生時代中期のSD-11によって切られる。北東側に16、西側に20の貯蔵穴がある位置関係にある。上面形状は不整形の円形を呈し、底面は隅丸方形を呈する。底面は平坦で、柱穴等はない。断面形は台形を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸143cm×短軸125cm×深さ99cmを測る。23 23は台地の中央部のやや南側に位置し、22によって約1/3程度を切られている。形状は隅丸長方形を呈し、底面は平坦面を有し、柱穴等は検出できなかった。規模は、長軸132cm+a×短軸110cm×深さ43cmを測る。39 39は台地中央部の西側に位置し、46を切る形で検出された。上面形状はやや不整形な隅丸長方形を呈し、底面形状は楕円形を呈し、底面は平坦である。柱穴は検出できなかった。出土遺物は土器片が出土したが、この土器がSU-05出土の土器と接合した。この土器は繩文時代中期の阿高式土器であり、貯蔵穴の時期もこの土器の時期と考えられる。規模は、長軸224cm×短軸206cm×深さ105cmを測る。46 46は弥生時代中期のSD-14によって切られ、また39によっても切られる。台地中央部の貯蔵穴が集中する西側に位置する。上面形状は不整形な円形を呈し、底面形状も同じ不整形な円形を呈する。底面は平坦で柱穴はない、断面形状は台形を呈する。規模は長軸270cm×短軸246cm×深さ128cmを測る。

S U - 15 · 16 (Fig. 29 PL. 5 · 8 ~ 10)

15 15は台地中央部の東側に位置し、弥生時代中期の環濠であるSD-11によって切られている。上面形状は円形を呈し、底面形状も円形を呈するが、柱穴は検出できなかった。底面近くで平坦面をもつ。出土遺物は炭化物と底面近くから繩文時代後期初頭の土器（口縁部）が出土した。貯蔵穴の時期もこの土器の時期と考えられる。規模は長軸280cm×短軸275cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が茶褐色土、第Ⅱ層が砂、第Ⅲ層が黒斑混じりの暗黒褐色土、第Ⅳ層が小石を含む褐色土、第Ⅴ層が小石を含む茶褐色土、第Ⅵ層が黒斑混じりの暗黒褐色土、第Ⅶ層が炭化物・小石混じりの青灰色シルト、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が茶褐色粘質土、第Ⅹ層が褐色粘質土上でドングリを含む、第Ⅺ層が黒褐色砂である。16 16は今回検出された貯蔵穴の中で平面的（約11m²）にも体積的（約17m³）にも最大である。15の南側、台地中央部の東側に位置し、弥生時代中期の環濠であるSD-11によって約1/2を切られている。上面形状はやや不整形な円形を呈し、底面形状も円形を呈する。底面近くで平坦面を持ち、中央部に柱穴を持つ。断面形状は東側が垂直に立ち上がり、西側はやや傾斜をもって立ち上がる。断面土層を残した部分が中央部ではなかったため断面図は二ヶ所を切った。出土遺物は炭化物と土器が出土した。この土器から時期は繩文時代後期初頭の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸374cm×短軸374cm×深さ155cmを測る。これは今回検出された貯蔵穴の中で最大の規模である。柱穴の大きさは、13cm×13cm×深さ16cmを測る。土層は第Ⅰ層が弥生中期溝（SD-11）茶褐色土、第Ⅱ層が弥生中期溝（SD-11）褐色土、第Ⅲ層が炭化物・土器を包藏する褐



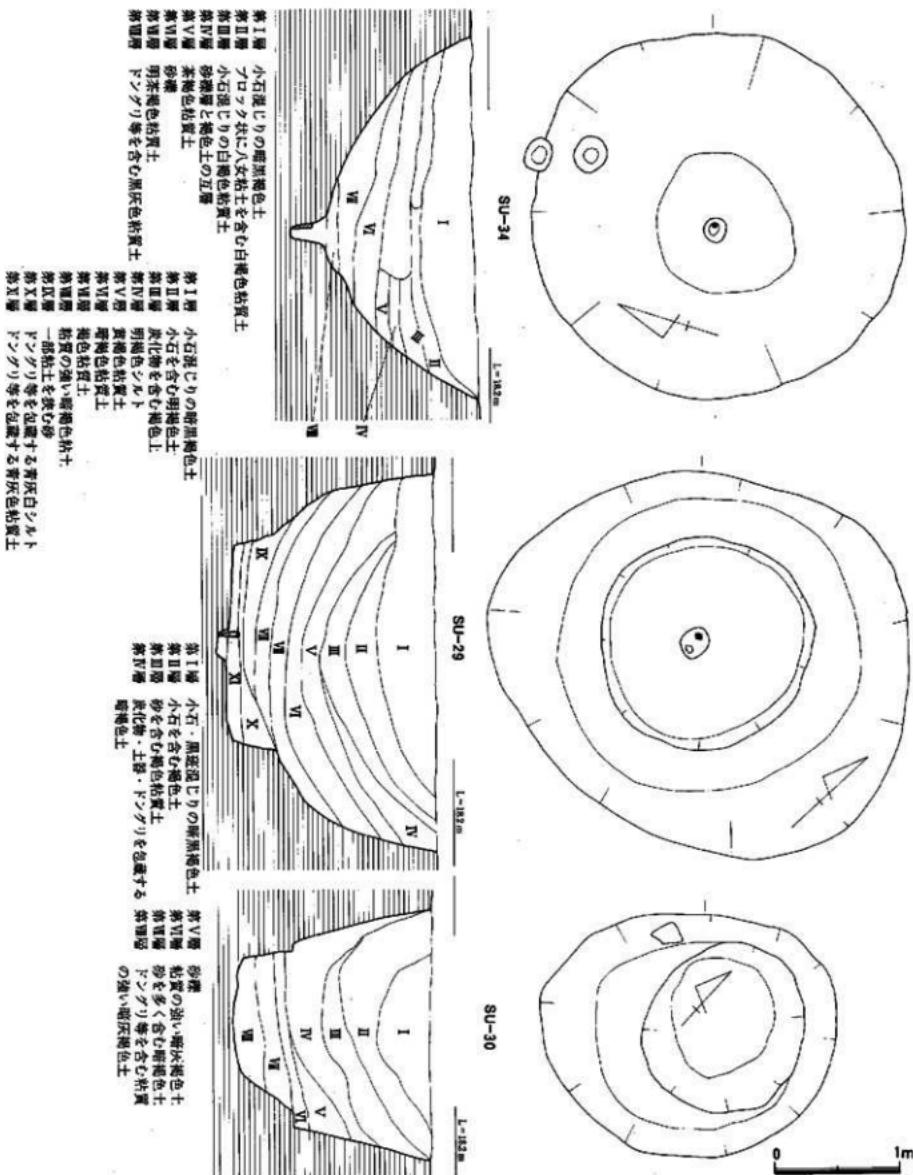


Fig. 32 SU-29-30-34平面・断面図(縮尺1/40)

色土、第Ⅳ層が褐色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む暗黒褐色粘質土、第Ⅵ層が灰白色粘質土、第Ⅶ層が褐色シルト、第Ⅷ層が暗褐色粘質土、第Ⅸ層が褐色シルト、第Ⅹ層が青灰色砂である。

S U - 14 · 17 · 18 (Fig. 30 PL. 5 · 7 · 8 · 10)

14 14は台地中央部の東側に位置し、北側に13、東側に15、西側に41の貯蔵穴に挟まれた位置にある。上面・底面形状は円形を呈し、上部の一部に段を有するが、断面形は台形状を呈し、立ち上がりはほぼ垂直である。出土遺物は炭化物だけで土器は出土しなかった。規模は長軸220cm×短軸185cm×深さ137cmを測る。土層は第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黒班混じりの茶褐色土、第Ⅲ層が褐色粘質土、第Ⅳ層が茶褐色粘質土、第Ⅴ層が炭化物を含む暗褐色土、第Ⅵ層が黄褐色粘質土、第Ⅶ層が灰褐色粘質土、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が小石混じりの茶褐色シルト、第Ⅹ層が砂、第Ⅺ層が砂と青灰色粘質土、第Ⅻ層が細砂である。17 17は南側に20、北西側に18、東側に16の貯蔵穴に挟まれた位置にある。上面・底面形状は円形を呈し、断面形は塊形で、立ち上がりは丸い。遺物は石器が出土した。規模は長軸215cm×短軸215cm×深さ85cmを測る。土層は単純で第Ⅰ層が小石・黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が明褐色土、第Ⅲ層が砂礫とシルトの互層、第Ⅳ層が暗黒褐色土と砂礫混である。18 18は台地の中央部に位置し、南西側に40、北側に38、北東側に41、南東側に17がある。上面・底面形状は円形を呈し、西側に段を有するが、東側は緩やかに立ち上がる。断面形はやや塊形を呈し、種子が出土した。規模は長軸295cm×短軸240cm×深さ118cmを測る。土層は下層にいくほど細かいが、緩やかに堆積していることから完全に埋没するまでには時間がかかったものと思われる。第Ⅰ層が小石混じりの褐色土、第Ⅱ層が黒班を含む暗黒褐色土、第Ⅲ層が褐色土、第Ⅳ層が暗褐色土、第Ⅴ層が黒班を含む暗褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色粘質土、第Ⅶ層が黒褐色粘質土でドングリを含む、第Ⅷ層が砂を含む褐色粘質土、第Ⅸ層が灰褐色シルトである。

S U - 20 · 22 · 40 (Fig. 31 PL. 5 ~ 7 · 9 · 11)

20 20は台地中央部よりやや南に位置し、弥生時代中期の環濠であるSD-11に切られる。東側に19、西側に22、北側に40がある。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は塊形を呈する。南側はほぼ垂直に立ち上がるが、北側は緩やかである。出土遺物は石器・土器が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸264cm×短軸257cm×深さ105cmを測る。土層は第Ⅰ層が明黄黒褐色土、第Ⅱ層が小石混じりの暗黒褐色土、第Ⅲ層がシルト質の暗黒褐色土、第Ⅳ層が暗褐色と明黄灰白色粘土のブロック、第Ⅴ層が明黄灰白色粘質土、第Ⅵ層が上層砂礫、第Ⅶ層が暗黒褐色粘質土、第Ⅷ層が明褐色シルト、第Ⅸ層が砂礫、第Ⅹ層が黒褐色粘質土、第Ⅺ層が暗黒褐色粘質土、第Ⅻ層が砂礫である。22 22は台地中央部南側に位置し、北側に40、東側に20、南側に29があり23を切る形で検出した。上面・底面形状とも円形を呈し、断面形状は台形を呈する。底面は平坦面で、ほぼ垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配する。東西二ヶ所に底面からやや上方に平坦面を有する。出土遺物は土器が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸276cm×短軸252cm×深さ144cmを測る。上層は非常に急速に埋まった状況が観察される。特に第Ⅰ・Ⅱ層が他の貯蔵穴(例えば20・40)と埋まり方が異なる。第Ⅰ層が小石・黒班混じりの暗黒褐色土、第Ⅱ層が炭化物・遺物包藏の暗褐色土、第Ⅲ層が明褐色粘質土、第Ⅳ層が褐色を呈する砂、第Ⅴ層が褐色土、第Ⅵ層が褐色粘質土である。柱穴の規模は16cm×16cmの丸い形状を呈し、深さ34cmと深い。40 40は台地中央部に位置し、北側に39、東側に18、南側に22・23に囲まれた位置から検出した。上面・底面形状とも円形を呈し、断面形状はやや台形を呈する。底面はやや丸味を持つ平坦面で、南側はやや傾斜を持ちながら立ちがり、北側は底面から緩やかに立ち上がり、一部に平坦面を有する。壁面は垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配し、

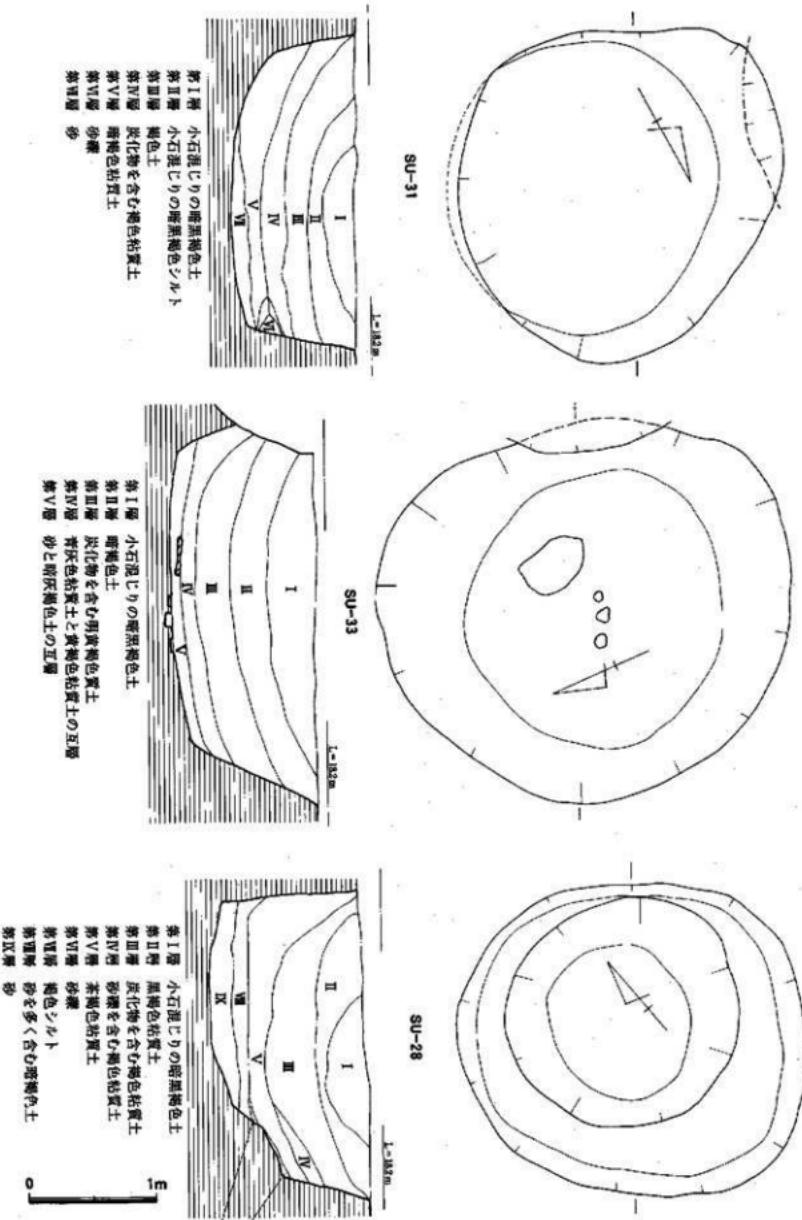


Fig. 33 SU-28-31-33平面・断面図(縮尺1/40)

柱痕が遺存していた。出土遺物は土器・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は今回検出された貯蔵穴の中で、平面的には3番目に大きく、体積では2番目に大きい。長軸357cm×短軸320cm×深さ160cmを測る。柱穴の大きさは長軸18cm×短軸13cm×深さ15cmで、柱の大きさは26cmの丸、長さ8cmで端部は平坦な仕上げである。土層は複雑で、第I層が小石混じりの暗褐色土、第II層が暗褐色土、第III層が黄褐色土、第IV層が砂を多く含む暗褐色砂質土、第V層が砂、第VI層が暗褐色土、第VII層が暗黒褐色土、第VIII層が暗黒灰色土、第IX層が荒砂を含む砂、第X層が乳白色粘土のブロックを含む暗褐色土、第XI層が暗褐色土、第XII層が黄褐色粘土質土、第XIII層が暗褐色粘土質土、第XIV層が褐色粘土質土、第XV層が褐色シルト、第XVI層がドングリ等を多く含む青灰色粘土質土、第XVII層がドングリ等を多く含む砂である。

S U - 29 · 30 · 34 (Fig. 32 PL. 5 ~ 11)

29 29は台地南側に位置し、北側に22、東側に26、南側に30、西側に34に開まれた位置から検出した。上面形状は不整円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は上面が縮形、底面は台形を呈する。底面は平坦面で、東側は底面からすぐに垂直に立ち上がりやや平坦面を有しながら緩やかに立ち上がり、西側は底面から垂直に近い角度で立ち上がる。壁面はやや垂直に立ち上がり、中央部に柱穴を一個配し、柱痕が遺存していた。出土遺物は土器底部・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は今回検出された貯蔵穴の中で、平面的には5番目に大きく、体積では3番目に大きい。長軸345cm×短軸300cm×深さ172cmを測る。柱穴の大きさは長軸25cm×短軸23cm×深さ8cmで、柱の大きさは5cmの丸、長さ16cmで端部は平坦な仕上げである。土層は細かくいろんな土が入り込み埋まった時間が長時間であったことが窺える。第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が小石を含む明褐色土、第III層が炭化物を含む褐色土、第IV層明褐色シルト、第V層が黄褐色粘土質土、第VI層が暗褐色粘土質土、第VII層が褐色粘土質土、第VIII層が粘質の強い暗褐色粘土、第IX層が一部粘土を挟む砂、第X層がドングリ等を包蔵する青灰白シルト、第XI層がドングリ等を包蔵する青灰色粘土質土である。30 30は南側に位置し、北側に29、東側に28、南側に31・33に開まれた位置から検出した。上面形状は不整円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。底面はやや丸味を持った平坦面で、両側に段を有し、西側は垂直に立ち上がり、東側は底面から緩やかな傾斜で段の部分に達し、平坦部分から垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸238cm×短軸197cm×深さ157cmを測る。土層は第I層が小石・黒斑混じりの暗黒褐色土、第II層が小石を含む褐色土、第III層が砂を含む褐色粘土質土、第IV層が炭化物・土器・ドングリを多量に包蔵する暗褐色土、第V層が砂礫、第VI層が粘質の強い暗灰褐色土、第VII層が砂を多く含む暗褐色土、第VIII層がドングリ等を含む粘質の強い暗灰褐色土である。34 34は台地南側に位置し、北側に23、東側に29、南側に33に開まれた位置から検出した。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は縮形を呈する。底面中央部に柱穴がある。両面とも緩やかな傾斜を持つ。出土遺物は土器・ドングリ等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸300cm×短軸292cm×深さ145cmを測る。柱穴の大きさは、長軸20cm×短軸18cm×深さ27cmを測り、柱痕が僅かに確認できた。土層は第I層が分厚く堆積しているが、これは台地南側でよく見られる状況で、S U - 29 · 30 等にも見られる。第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層がブロック状に八女粘土を含む白褐色粘土質土、第III層が小石混じりの白褐色粘土質土、第IV層が砂礫層と褐色土の互層、第V層が茶褐色粘土質土、第VI層が砂礫、第VII層が暗茶褐色粘土質土、第VIII層がドングリ等を含む黒灰色粘土質土である。

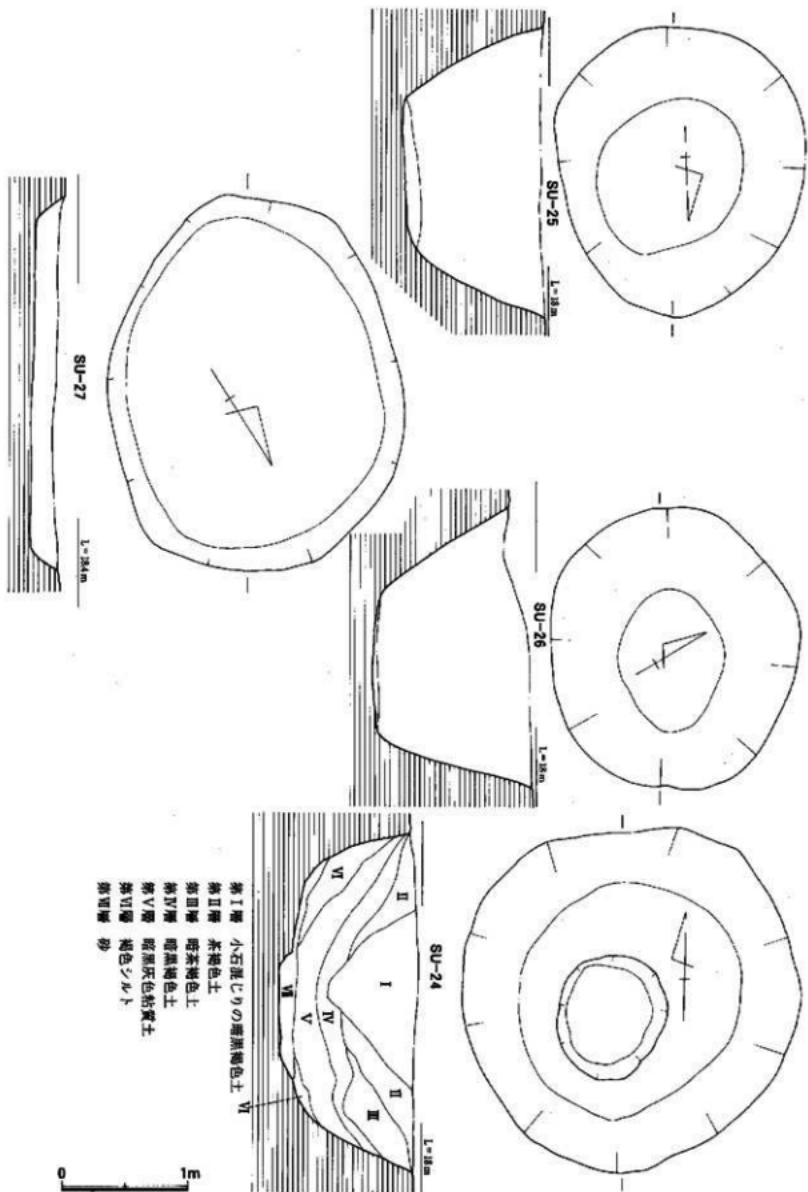


Fig. 34 SU-24~27平面・断面図(縮尺1/40)

S U - 28 · 31 · 33 (Fig. 33 PL. 5 · 7 · 9 · 10)

28 28は台地南側に位置し、北側に26、東側に27、西側に31・33、南側ではなく27・28・31・33が南限と考えられる位置から検出した。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。北北東側を除いて中間部に段を有する。底面はやや丸味を持った平坦面で、両側に段を有し、北北東側は垂直に立ち上がり、他は底面から緩やかな傾斜で段の部分に達し、平坦部分から垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸280cm×短軸247cm×深さ127cmを測る。土層は第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が黒褐色粘質土、第III層が炭化物を含む褐色粘質土、第IV層が砂礫を含む褐色粘質土、第V層が茶褐色粘質土、第VI層が砂礫、第VII層が褐色シルト、第VIII層が砂を多く含む暗褐色土、第IX層が砂である。31 31は33を切り、弥生時代中期の環濠に切られる形をとる。東側に28、西側に33、北側に30がある。上面形状は不整形の円形、底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等が出土しているが、土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸264cm×短軸264cm×深さ96cmを測る。土層は第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が小石混じりの暗黒褐色シルト、第III層が褐色土、第IV層が炭化物を含む褐色粘質土、第V層が暗褐色粘質土、第VI層が砂礫、第VII層が砂である。33 33は31と共に台地の最も南側に位置する部分から検出された。31との前後関係は31から切られることから33の方が古い。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈するが東側を31によって切られている。柱穴は小さく浅いものが三ヶ所一列に並んで検出された。出土遺物は土層断面にみられるごとく第V層直上から土器・炭化物・加工材等が出土した。土器から時期は縄文時代中期の貯蔵穴であることが窺える。規模は長軸333cm×短軸306cm×深さ120cmを測る。柱穴の大きさは10cm×10cm×深さ6cmと10cm×10cm×深さ6cm、10cm×10cm×深さ6cm。土層は単純で平均的に堆積している。第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が暗褐色土、第III層が炭化物を含む明黄褐色粘質土、第IV層が青灰色粘質土と黄褐色粘質土の互層、第V層が砂と暗黒褐色土の互層である。

S U - 24 ~ 27 (Fig. 34 PL. 5 · 7 · 10)

24 24は台地中央部東側から25と共に検出された。24と25は切り合い関係はないが非常に接近している。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は塊形を呈する。底面中央部に柱穴状の浅い掘込みがみられる。両側は緩やかに立ち上がるが、北側はやや垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴は中央部の窪みを柱穴としてとらえておきたい。規模は長軸100cm×短軸90cm×深さ10cmを測る。出土遺物はない。貯蔵穴の規模は長軸273cm×短軸271cm×深さ110cmを測る。土層は第I層が中央部で塊状に堆積している。第I層が小石混じりの暗黒褐色土、第II層が茶褐色土、第III層が暗茶褐色土、第IV層が暗黒褐色土、第V層が暗黒灰色粘質土、第VI層が褐色シルト、第VII層が砂である。25 25は24に接近して検出された。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。両側とも緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等は出土していない。規模は長軸230cm×短軸200cm×深さ107cmを測る。土層はほぼ24と同じ層位を示す。

26 26は台地南側の29の東側、28の北側に位置し、弥生時代中期の環濠であるSD-11によって切られている。上面・底面形状は円形を呈し、断面形状は台形を呈する。西側は緩やかに立ち上がるが、東側はほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。底面は平坦で、柱穴はない。出土遺物は土器・炭化物等は出土していない。規模は長軸226cm×短軸200cm×深さ137cmを測る。土層はほぼ29と同じ層位を示す。27 27は28と近接している。ただ非常に浅く貯蔵穴とするには問題がある。浅いものとしてこの他にSU-1~5・7があるが、これらは1m以上も削平された部分からの検出である。

これにたいして 27 は、近接して検出された 28 の深さが 127cm もあり同レベルでの 27 が深さ 25cm しかないことから貯蔵穴としての認定はできないが、調査時に番号をえていたので、一応規模だけを記す。長軸 304cm × 短軸 230cm × 深さ 25cm を測る。

出土遺物

縄文時代貯蔵穴からの出土遺物は、土器・石器・種子・材等であるが、その量は少量であった。そのため貯蔵穴の時期を決定する材料が乏しく切り合ひ関係、出土土器から判断した。

遺物が出土した貯蔵穴は S U - 02・05・08 ~ 11・13・15・16・20・22・28 ~ 36・38 ~ 41・43 ~ 46 の二十八ヶ所から土器、S U - 10・17・22・38・40 から石器、柱痕及び建築材は S U - 9・30・33・35・40・42・44 の七ヶ所から検出した。また種子は 06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44 の十三ヶ所から出土した。

(1) 土器 (Fig. 35 ~ 37 PL. 23 ~ 25)

1 (56001) S U - 05 から出土した底部で、底面に草を纏んだ(塗状圧痕か?)圧痕を有する底部である。一部分の圧痕で底底とも考えたが、粘土で圧痕を採ると草痕で有ることが判明した。平底で立ち上がり丸みを持ち、緩やかに立ち上がり、その部分に指押圧痕を有する。胎土に赤色粒と 3 ~ 5 mm 大の石英・長石を多量に含み、色調は外面が一部赤褐色を呈する茶褐色、内面は褐色を呈する。縄文中期の大型鉢形土器の底部で、厚みがあり底径 13.8cm を測る。2 (56002) S U - 08 から出土した鉢形土器の底部である。端部はシャープな造りで指押圧痕が認められ上げ底を呈する。胎土は 2 ~ 3 mm 程度の砂粒を含んでいる。色調は外面が赤褐色、内面が黒色を呈し、底径 10.6cm を測る。3 (56010) S U - 16 から出土した鉢形土器の底部である。半底を呈し、底部の端部はシャープに欠けている。端部からやや外反しながら立ち上がるものと思われる。胎土は 2 ~ 5mm 程度の石英・長石粒を多く含み、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈し、底径 9cm を測る。4 (56003) S U - 11 から出土した縄文時代中期の大型鉢形土器の底部片で、やや上げ底を呈する。端部の造りはシャープで、周縁部に指押圧痕が残る。底部端部から大きく外反しながら立ち上がる。調整は内外面とも僅かではあるが貝殻条痕が認められ、その後ナデ・指オサエを施している。胎土は 1 mm 前後の砂粒を多く含むが、精製された粘土を使用している。色調は外面が淡褐色、内面が黒褐色を呈し、底径 13.5cm を測る。5 (56004) S U - 11 上部から出土した磨消縄文の浅鉢形土器の胴部と考えられる。二本の沈線を平行に引き、その間の縄目文様を残したもので、上部に沈線により U 字形の文様を三列配置する。形状は胴部で一度内に入るが、口縁部に向けて更に外反する形状を呈する。平行沈線部で復元径 22cm を測る。胎土は精製された粘土を使用しており、1 mm 程度の石英・長石等を多く含んでいる。色調は外面が淡褐色、内面が淡黒褐色を呈する。6 (56005) これも S U - 11 から出土した鉢形土器の底部片である。細片のため詳細には明らかにしないが、半底で、底部の端部を指押圧により整形している。底径 12cm で、胎土は 2 ~ 3 mm 程度の砂粒を含んでいる。色調は外面が淡褐色、内面が淡黒褐色を呈する。7 (56006) S U - 13 から出土した鉢形土器の底部片である。やや上げ底を呈し、端部はシャープな造りである。一度内に入り、すぐに外反して胴部へつづく。底部端部外面に押圧痕を有し、胎土は 2 mm 前後の砂粒を多く含んでいる。色調は内外面とも赤褐色を呈するが、内面の一部に黒褐色が認められる。内面には甕による押さえ痕が残っている。8 (56009) S U - 16 から出土した鉢形土器の底部(浅鉢)片である。端部には指押圧痕が全面に認められ、内部にも指オサエが認められ、底径 13cm を測る平底である。胎土は 2 ~ 5 mm 程度の長石粒を含み石英粒は少ない。色調は外面が濃い茶褐色、内面が褐色を呈する。

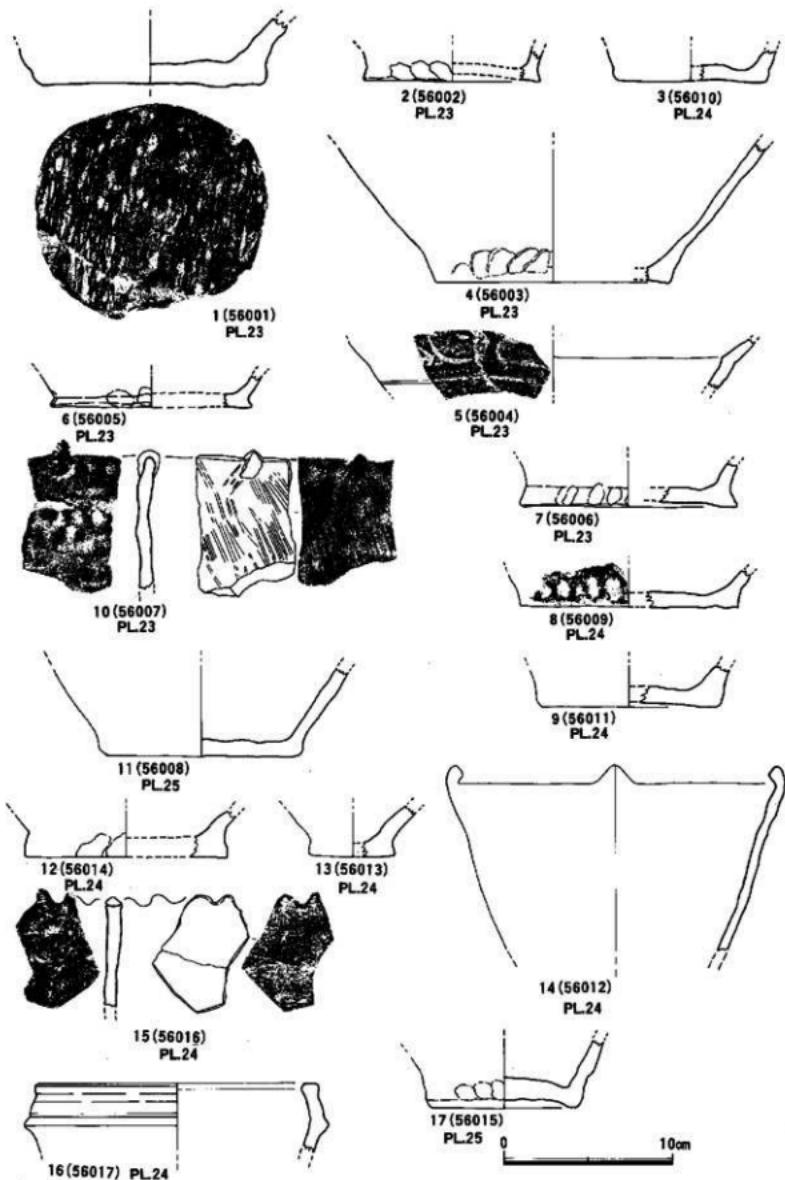


Fig. 35 V区出土遺物実測図-1(縮尺1/3)

9 (56011) これも S U - 16 から出土した鉢形土器の底部片で、端部は丸味をもつ。やや上げ底を呈し、内外面ともナデ仕上げを行っている。胎土は 2 ~ 3mm 以下の砂粒・金雲母を含んでいる。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈する。底面は黒色に変色している。底径 10.7cm を測る。

10 (56007) S U - 15 から出土した鉢形土器の口縁部である。口縁端部の内外面に山形状に粘土を貼り付け、山形口縁に仕上げている。調整は、外面が貝殻条痕を綴に施紋し、山形部分には斜日方向にナデを行っている。内面は指ナデ・オサエを口縁部下まで行っている。口縁端部は横ナデを施し、山形部分では横方向に流れる様なナデ方をしている。胎土は 1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む精製された粘土を使用している。色調は外面が暗赤褐色、内面が明るい赤褐色を呈する。時期は施文方法から繩文時代後期初頭に位置付けられる。

11 (56008) S U - 15 から出土した大型鉢形土器の底部片である。端部に部分的ではあるが、指押圧痕が認められ、平底を呈する。内面は基本的にナデ仕上げであるが、一部に横方向の条痕や鎌によるオサエ等が認められる。また、底部内面には指で強くナデの痕跡が認められる。胎土は 2 ~ 5mm 程度の長石粒を多く含み石英粒は少ない。色調は外面が赤褐色と黒褐色、内面が黒褐色を呈し、底径 12.3cm を測る。

12 (56014) S U - 28 から出土した鉢形土器の底部で、底径 12.2cm を測る。底部の端部は指押圧痕が多く残り、内外面ともナデ仕上げである。胎土は 1 ~ 2mm 程度の長石粒を多く含み石英粒はない。色調は内外面とも褐色を呈するが、内面がやや黒ずんでいる。

13 (56013) これも S U - 28 から出土したもので、小型の鉢形土器の底部片である。底径は 5cm と小さい。外面は貝殻条痕の後ナデ仕上げ、内面は表面剥落のため定かではないが、ナデ仕上げと思われる。底部はやや丸味を持ち、端部はやや中に入りその後大きく外反している。胎土は 1 ~ 2mm 程度の長石粒を多く含み石英粒は少ない。また金雲母も僅かではあるが含む。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡暗黒褐色を呈する。

14 (56012) S U - 16 から出土した山形口縁を呈する深鉢形土器で、胴部下位から底部は欠損している。四方向に山形を配し、山形部分が内側に入る形状を呈する。内部に爪か鎌及び棒状工具によるオサエが施されている。外面は縦の条痕の後ナデ仕上げを施しており、内面はナデを施す。胎土は 1 ~ 2mm 程度の長石粒を多く含み石英粒・金雲母も僅かに含んでいる。色調は外面が暗赤褐色を呈し、内面が淡褐色を呈するが、下面(下地)は黒色を呈することから淡褐色の粘土は化粧粘土と考えられる。

15 (56016) S U - 29 から出土した鉢形土器の口縁部片である。口縁端部に棒状工具及び指による押圧がやや斜めから加えられ、波状口縁を形づくっている。この形態は阿高式土器の口縁部に数多く認められるものであるが、この 15 は滑石を全く含まないタイプである。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は 1mm 大の砂粒を含む精製された粘土を使用している。色調は内外面とも暗褐色を呈する。

16 (56017) S U - 32 から出土した鉢形土器の口縁部である。胴部上位に突帯状の三角帯を巡らせ、その上部に二条の沈線を配する。口縁端部は平坦で、内側にやや引っ張る形状を呈する。口径 17cm を測り、調整は内外面とも表面剥落のため定かではない。胎土は 1 ~ 2mm 程度の長石・石英粒を含み、また赤色粒を多く含む。色調は外面が暗赤褐色、内面が赤褐色を呈し、今回出土の十器の胎土とはまったく異なる土器である。

17 (56015) S U - 29 から出土した鉢形土器の底部である。底部の端部は丸く、周縁に指押圧痕が巡る。また底面の内・外側には、指ナデを強く施す。上げ底で底径 8.5cm を測る。胎土は 2 ~ 5mm 程度の石英・長石粒を多く含み、一部金雲母も少量混じっている。色調は外面が赤褐色と暗褐色、内面が暗褐色を呈する。

18 (56019) S U - 36 から出土した鉢形土器の底部である。底面が丸みをもつためやや不安定である。底部の端部はやや丸みを持ち立ち上がるが、すぐに大きく外反しながら胴部に続くと思われる。調整は、表面剥落のため定かではないが、内面は指オサエによって整形している。胎土は 2 ~ 5mm 程度の石英・長石粒を多く含む。色調は内外面とも褐

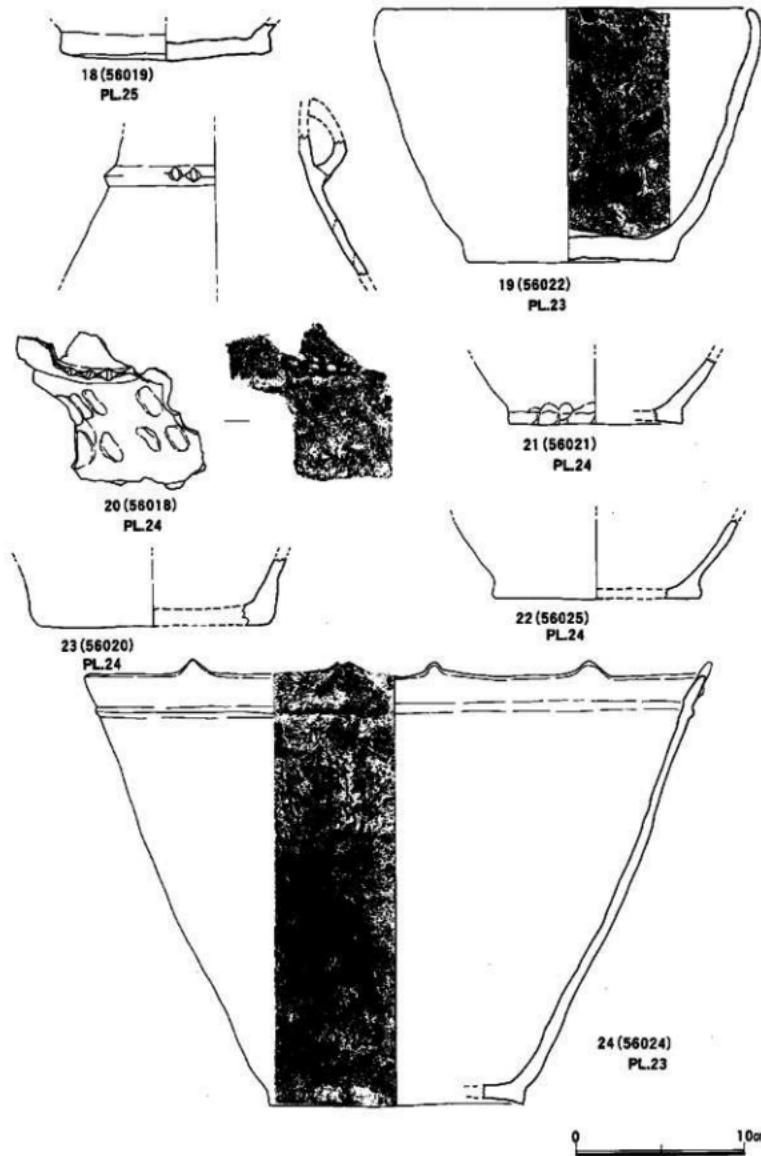


Fig. 36 V 区出土遺物實測圖—2 (縮尺1/3)

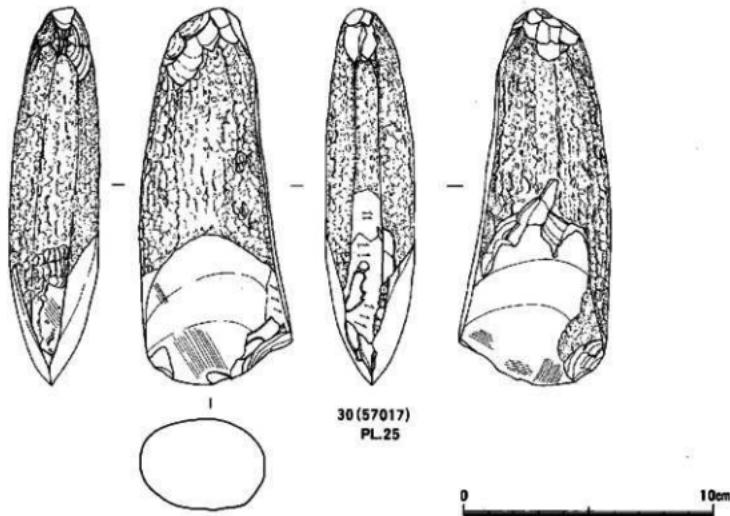
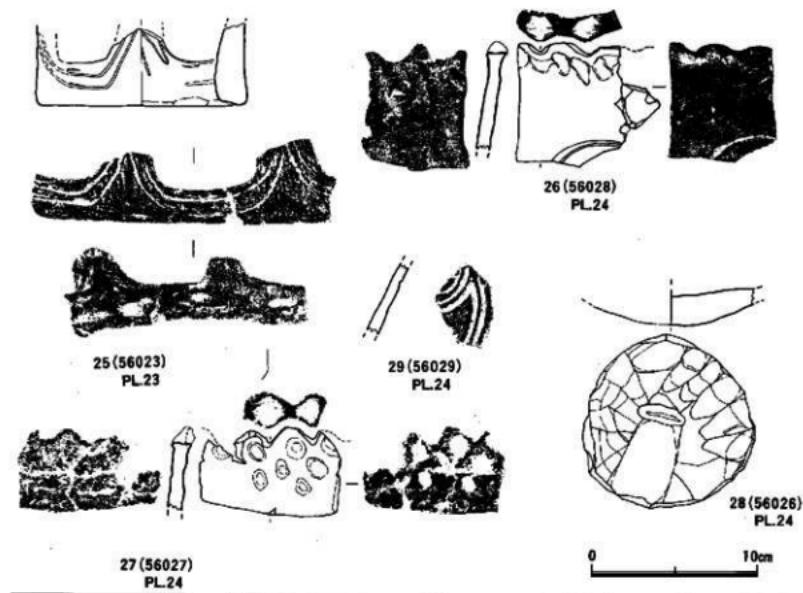


Fig. 37 V 区出土遺物実測図-3 (縮尺1/2, 1/3)

色を呈するが、内面の一部に黒褐色の部分がある。底径12.6cmを測る。19(56022) SU-43から出土した鉢形土器で、口径21cm、器高15.2cm、底径12.3cmを測る。底部はやや上げ底で、端部は指押圧痕が周縁部に多く残る。底部からやや外反しながらそのまま立ち上がり、口縁部では内に入り、口縁端部を丸く納めている。調整は、表面剥落のため定かではないが、内面は指オサエ及びナデ仕上げを行っている。胎土は2~5mm程度の砂粒を含み、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈する。中期の時期に比定できる。20(56018) SU-35から出土した把手付壺形土器の胴部片である。頸部に一条の突帯を巡らせ、その部分に棒状工具により刻目を施す。把手はその突帯から幅約2.3+αcmで、上部に取り付けられている。突帯下部に指によるオサエが認められる。全体的にナデ仕上げを行っている。胎土は2~5mm程度の石英・長石粒を多く含む。色調は外面、内面とも黒褐色である。

21(56021) SU-43から出土した浅鉢形土器の底部で、底径10.5cmと小さくやや上げ底で、端部はシャープな造りである。周辺部に指押圧痕が多く残り、立ち上がりは大きく外反していくものと思われる。内外面ともナデ仕上げである。胎土は1~3mm程度の砂粒を多く含む。色調は外面が一部赤褐色で他は褐色を呈し、内面が茶褐色を呈する。22(56025) SU-45から出土した鉢形土器の底部で、平底を呈し、底径12.3cmを測る。底部の端部はやや丸みを持ち、一度内に入りその跡大きく外反する。器面は薄く仕上げている。調整は、内外面とも指オサエ及びナデ仕上げである。胎土は2~3mm程度の砂粒を僅かに含み、色調は外面が赤褐色、内面が一部赤褐色で他は茶褐色を呈する。

23(56020) SU-38から出土した阿高式土器の底部片である。胎土に多くの滑石を含むため、光沢のある色調を呈する。底部の端部は丸く仕上げられている。内外面ともナデ仕上げを行っている。胎土は滑石の他にはほとんど含まれていない。色調は光沢のある赤褐色を内外面とも呈する。底径14.7cmを測る。

24(56024) SU-44から出土した深鉢形土器である。口径37.5cm、器高26.6cm、底径15cmを測る。底部は上げ底で、端部の造りはシャープである。周辺部に指押圧痕が多く残る。口縁部には六つの山形を配し、その山形も平坦な口縁部に三角形を張り付けた程度のものである。口縁下には、三角形を呈する突帯を一条巡らせている。内外面に縦及び横方向の条痕が認められ、条痕のあとナデ仕上げを施している。胎土は1~2mm程度の砂粒を含む精製された粘土を使用し、器面を薄く仕上げている。色調は外面が黒褐色、内面の上部が黒斑混じりの茶褐色を呈する。内部の一部に煤?の付着が認められる。この山形口縁土器は形状から繩文時代後期の磨消繩文土器の初期段階のものと考えられる。ただ内外面に貝殻条痕を施す方法が残っていること、底部に指押圧痕が残ることから後期初頭に位置づけられる。25(56023) SU-9-44から出土した透かし入りの台座(器台状)状土器である。外面に二条の沈線を透かし部分に沿って描かれており、内面にも同じように二条の沈線を巡らすが、これは途中で切れている。一時は天地逆で、装飾のある土器とも考えたが、形状から台座状土器とした。調整は内外面とも指オサエ及びナデ仕上げを行っている。胎土は2mm前後の砂粒を多く含み金雲母も混入している。色調は外面が明黄茶褐色と明茶褐色を呈し、内面が暗茶褐色と一部黒斑がある。底径14cmを測る。26(56028) SU-46から出土した阿高式土器の口縁部片である。口唇部に棒状工具及び指により凹凸をつくり波状口縁を造りだしている。口縁下には指によるオサエが認められる。また、胴部に沈線が弧状に描かれている。胎土は滑石を含むが、その他にも1mm前後の砂粒を含む。色調は滑石の量が少ないため外面が黒褐色、内面が褐色を呈する。27(56027) これもSU-46から出土した阿高式土器の口縁部であるが、26とは別個体である。口唇部に棒状工具か指により凹部を造り、形状を波状口縁に仕上げている。口縁下にこれも指か棒状工具で列点文を三列配している。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は1~2mm前後の砂粒と滑石を多く含んでいる

め光沢がある。色調は外面が赤褐色、内面が褐色で、表面が剥落しているため内部の地肌が認められるがこれは黒色を呈する。

28 (56026) これも S U - 46 から出土したもので、底部を再利用したメンコの未製品と考えられる底面に削り痕が認められ、周辺部にも加工が加わっている。胎土は滑石の粉末が多量に含んでいる。色調は内外面とも光沢のある赤褐色を呈する。29 (56029) これは S U - 46 の上部から出土したものである。胴部片であるが、沈線により文様を構成している。この種の文様形態は本遺跡及び周辺遺跡には出土例がない。胎土は 1 ~ 3mm 前後の砂粒を含むが、精製された粘土を使用。色調は内外面とも茶褐色。

(2) 石 器 (Fig. 37・38 PL. 25)

石器は S U - 10・17・22・38・40 から出土した。30 (57017) 磨製石斧 S U - 10 から出土した局部磨製石斧である。刃部のみに研磨が施され、他の部分は敲打面が残るが、これで完成品と考えられる。側面にも部分的に研磨が施されている。刃部が破損しているところから使用されていた可能性が高い。刃部を復元すると撥形の形状を呈し、頁岩を石材としている。重量は 439.5g、全長 15cm × 幅 5.8cm × 厚さ 3.6cm を測る。31 (57021) 磨石 S U - 38 から出土した玄武岩製の磨石である。周辺部には敲打痕が残るが、正面中央部には研磨痕がある。石斧の破損品を磨石に転用したものと考えられる。重量は 2.4g、全長 3.2cm × 幅 1.5cm × 厚さ 1.1cm を測る。32 (57019) 凹石 S U - 17 から出土した花崗岩製の凹石である。表面は三個の凹面を有するが、裏面は一個の凹面である。凹面は表裏対象ではなく表面がやや右にずれている。左側辺部・上下側辺部に使用痕が認められる。重量は 447.5g、全長 9.7cm × 幅 8.3cm × 厚さ 4.0cm を測る。33 (57020) 砥石 S U - 40 から出土した粘板岩製の上下二面を砥石面として使用した砥石の破片である。34 (57018) 剥片 S U - 22 から出土した黒曜石製の剥片である。風化はやや進んでいる方でアメ色を呈する。

(3) 柱 材 (Fig. 38 PL. 25)

柱痕及び建築材は S U - 09・33・35・40 の四ヶ所から検出した。30・42・44 からは材が出土している。35 (58013) S U - 33 から出土した柱材で約 1/4 は欠損している。全面に面取りを行っている。樹脂は不明。幅 4.2cm × 厚さ 4cm × 長さ 7.4cm を測る。36 (58014) S U - 35 から出土した柱材である。芯持ち材の周辺部を加工して台形状に成形し、端部を片面から削り尖った部位を造る。出土状態は横位であった。樹脂は不明。幅 5.8cm × 厚さ 4cm × 長さ 31cm を測る。37 (58010) S U - 29 から出土した柱材で、クヌギ材を約 1/6・1/8 に割ったものか、先端部だけ削り取ったものは不明であるが、中心部の柱穴に建った柱材の一部である。幅 6.4cm × 厚さ 2.9cm × 長さ 19.4cm を測る。38 (58012) S U - 40 の中央部の柱穴から出土した。端部を僅かに削り、先端部を造りだし、他は未加工である。樹脂は不明。径が 8cm × 長さ 19cm を測る。39 (58011) S U - 30 から出土したが柱材は検出されず、最下層から出土した。芯持ち材を加工し、先端部を尖らせている。樹脂は不明。幅 5cm × 厚さ 3.6cm × 長さ 8cm を測る。

この他に木材が出土した貯蔵穴は 30 から 1 片、35 から 2 片、42 から 3 片、44 から 9 片である。

(4) 種 子 (PL. 26 ~ 28)

種子は S U - 06・08・09・11・15・18・29・30・34・35・40・42・44 の十三ヶ所から出土した。種子同定をおこなっていないため定かではないが、その殆どがアラガシ・シラカシ? である。特に 30 からは多量に出土した。06 から カシが 141 個体、08 からは種々の種子が出土した。カシが 216 個体、ヘチマ? 片 2 個、モモの種 6 個、椿の実 8 個、種子 1 個、エゴノミ 182 個、不明 17 個、09 はカシが 27 個、11 から カシ 78 個、エゴノミ 93 個、15 から カシが 16 個、18 から 7 個、29 から 39 個、30 から 2,042 個、34 から 182 個、35 から 32 個、40 から 385 個、42 から 8 個、44 から 997 個のカシ類の種子が出土した。合計 4,479 個が出土した。

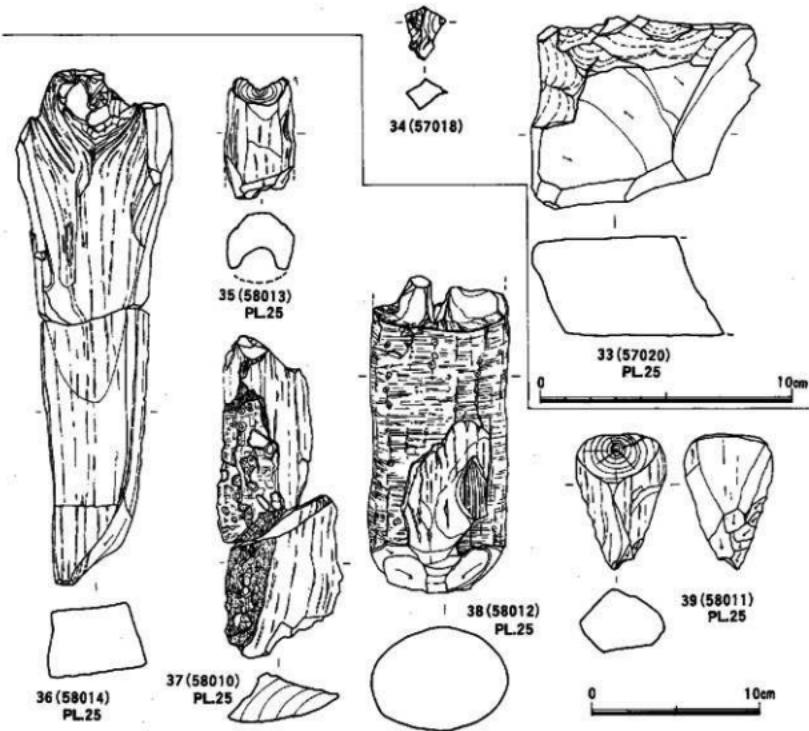
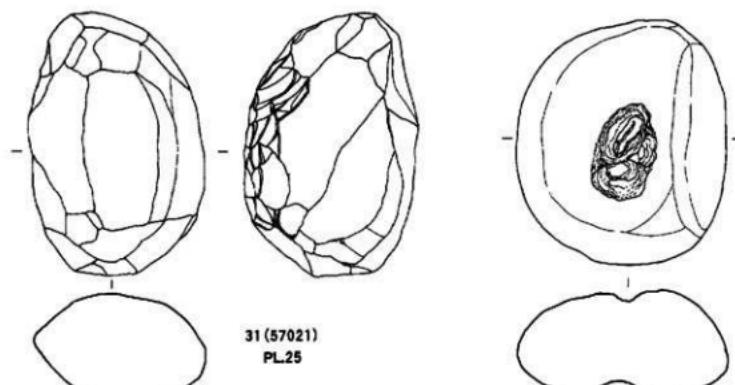


Fig. 38 V 区出土遺物実測図一4 (縮尺1/2,1/3)

Tab. 2 吉武遺跡2次V区検出貯藏穴一覧

(単位: cm)

番号	規格 長×幅×深	柱穴の有無	柱の有無	出土遺物の有無	備考	Fig.	Pl.
SU-01	154×140×50	無			削平されている	21	
02	125×80×80	無		土器底部		21	
03	150×135+×24	無			04に切られ、削平	21	
04	170×165×19	無			削平されている	21	
05	185×170×15	無		土器底部	削平が著しい	21	
06	226×200×146	有26×20×12			ソングリ・炭化物	22	6
07	175×170×8	無			削平が著しい	21	
08	253×248×80	無		赤生土質混入	炭化物・種子	22	6-8
09	300×296×122	無	無	土器SU-44と接合	ソングリ・柱材	22	6-8-9
10	265×226×85	無		土器・石器		25	9
11	320×293×125	有13×13×9		土器口縁	炭化物・種子	25	6-10
12	260×255×123	無				26	9
13	245×208×145	有30×35×15		土器底部		25	6-10
14	220×185×137	無			炭化物	30	8-10
15	280×275×105	無		土器口縁	炭化物・種子	29	8-10
16	374×374×165	有13×13×16		土器・炭化物	赤キSD-11に切斷	29	8-9
17	215×215×85	無		石器		30	8
18	295×240×118	無			種子	30	7-9
19	143×125×99	無			SD-11に切られる	28	7
20	264×257×105	無		上器・石器	SD-11に切られる	31	6-7-9
21	250×220×24	無			削平が著しい	24	
22	276×252×144	有16×16×34		土器・石器	23を切る	31	6-9
23	132+×110×43	無			22に切られる	28	6
24	273×271×110	有100×90×10				34	6-10
25	230×200×107	無				34	7
26	226×200×137	無				34	5
27	304×230×25	無				34	5
28	280×247×127	無		土器底部	炭化物	33	9
29	345×300×172	有25×23×8	有5×16	土器底部	ソングリ	32	6-8-10
30	238×197×157	有	有	土器深鉢	炭化物・木材・種子	32	6-7-9
31	264×264×96	無		土器	炭化物・33を切る	33	7-10
32	210×200×108	無		土器口縁	炭化物	26	6-9
33	333×306×120	有10×10×6		上器	炭化物・柱材	33	5
34	300×292×145	有20×18×27		土器	ソングリ	32	7-10
35	278×227×132	無		土器鉢	炭化物・柱材・種子	26	5
36	280×250×125	有18×18×16		土器底部	12-37に切られる	24	5
37	170×150×95	無			炭化物・36を切る	27	9
38	250×230×105	無		土器底部・石器		27	7-9
39	224×206×105	無		土器SU-05と接合	46を切る	28	5
40	357×320×160	有18×13×15	26の丸×8	土器・石器	ソングリ・柱材	31	5
41	233×230×112	有25×25×15		土器	炭化物	27	5
42	286×250×117	無			木材・種子	24	5
43	393×335×118	有13×13×24		上器底部		23	5
44	335×327×98	無	無	上器SU-09と接合	炭化物・種子	23	10
45	255×230×101	有10×10×15		土器		21	5
46	270×246×128	無	無	土器	SD-14に切られる	28	5

2. 第二次調査V区 一奈良時代以降の調査一

S X (不整形土壙) と埋甕

不整形土壙 (S X - 01) (Fig. 39)

不整形土壙 S X - 01 は調査区の東側段落ち部に位置し、ほぼ半分は調査区外であったためその全容は不明である。詳細は不明であるが、形状は不整形な橢円を呈し、緩やかな傾斜をもち中央部で一段下がり、再度上がる。さらに緩やかに下がり、後は平坦面となる。土層は I 層 黄褐色土ブロックが入る暗褐色土で上部全体を厚く覆う II 層 ブロックで黄褐色土が入る暗褐色砂質土 III 層 中央部に見られる層で黒褐色シルト IV 層 これも中央部に見られる層で黒灰色シルト V 层 黑褐色砂質土 VI 层 II 層下に見られる層で黄褐色土 VII 层 暗褐色土でこれも II 層下に見られる層である。 VIII 层 V 层下に見られるブロック状に入る層で黑色土 IX 层 IV 层下に見られる層で砂が堆積する X 层 IX 层砂の下に凹み状に堆積した黒色土で埋甕と同じ土質である。

出土遺物は埋甕の破片が第 X 层から出土していることから埋甕と同時期の平安時代以降に属するものと思われる。

埋甕 (S X - 02) (Fig. 39)

調査区東側に 1 基だけまったく切り合ひ関係が無く検出された。上部約 2/3 は削平され、約 25cm しか遺存していない。おそらく 80cm 以上ある埋甕と考えられる。底部を打ち欠き、打ち欠いた部分(底部を除く)を底面中央部に 4 個配置する。掘方の大きさは 60cm の円形を呈し、埋甕の上部径は 45 cm、底面径は 32cm、高さ 22cm である。当初井戸とも考えたが、涌水地点がかなり下であり水を貯める施設としても底部が打ち欠かれていることから井戸ではなく、埋甕の可能性が高い。しかしながら古代に埋甕は一般的ではないことから判断に苦しんだが、応形状から埋甕としておく。

Fig. 39 に埋甕 (823459002) を図示した。瓦質土器で内外面とも荒い横・斜めの刷毛目を施すが、全体的に表面が剥落している。

第三節 第二次調査VI区 一奈良時代以降の調査一

溝 (Fig. 40)

VI区は V 区の続きで V 区の弥生時代の溝 S D - 10・12・14 と柱穴群が検出されたが、SD - 10・12 を切る形で N - 1° - W の方向を持つ SD - 20 が検出された。南北の長さ 33m、幅は南側で 3.3 m、北側で 2.1m、深さ 0.5 ~ 0.6m、底面は幅 1.5 ~ 2.6m を測り台形状を呈し、ほぼ水平であるがやや南側が深く、形状からも水は北から南に流れる様相を示していた。調査区の南側・北側は調査区外であったため確認できなかったが、恐らく区割溝と考えられる。また現在の用水路からほぼ 2m 西にずれ平行に確認されていることから条里制の境溝の可能性が考えられる。早良区の条里は、佐賀大学日野先生によると単一条里区からなり、その南北基区軸線の方向は国土地理院座標軸北から 7°20' 西に偏しているとのことで、国土地理院磁針方位は西偏約 6°20' であり、これを加算すると今回検出された溝は条里制の区割境溝に載ることになる。しかしながら、市道田・飯盛線の調査では検出されていないし、南北線・東西線が VII ~ IX 区でも検出されていない。おそらく現在の溝に載るものと考えられる。

これが田村遺跡 (1985 年田村遺跡 3・田村遺跡 5 福岡市教育委員会) のような里境溝になるのか、坪割溝になるか (幅 5m、長さ 150m、深さ 2.5m の台形状を呈する里境と西に 108m の地点に坪境溝 2m、長さ 100m、深さ 1.5m の台形状を呈する坪境溝が検出されている) は不明であるが、地図上で復元していくと里境ではなく、坪境と考えられ、遺跡の状況からも刷辺部の削平はせいぜい 1m 程度と考えられることから復元すると幅 3 ~ 3.5m、深さ 1.5m 程度で田村遺跡の区割溝と同規模であ

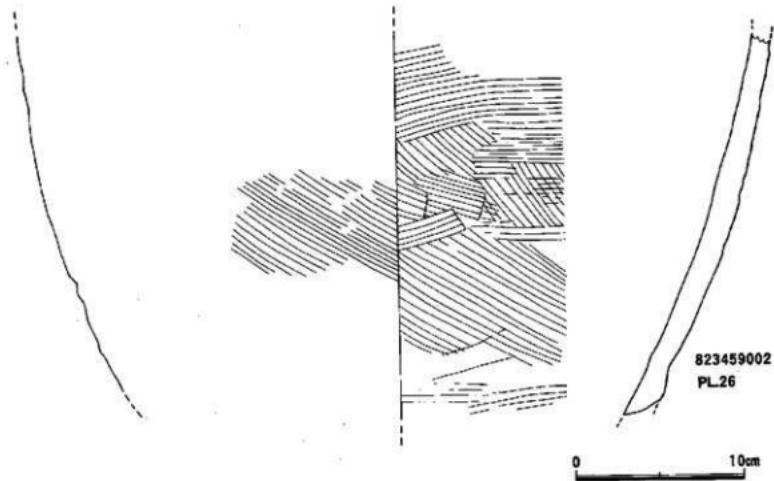
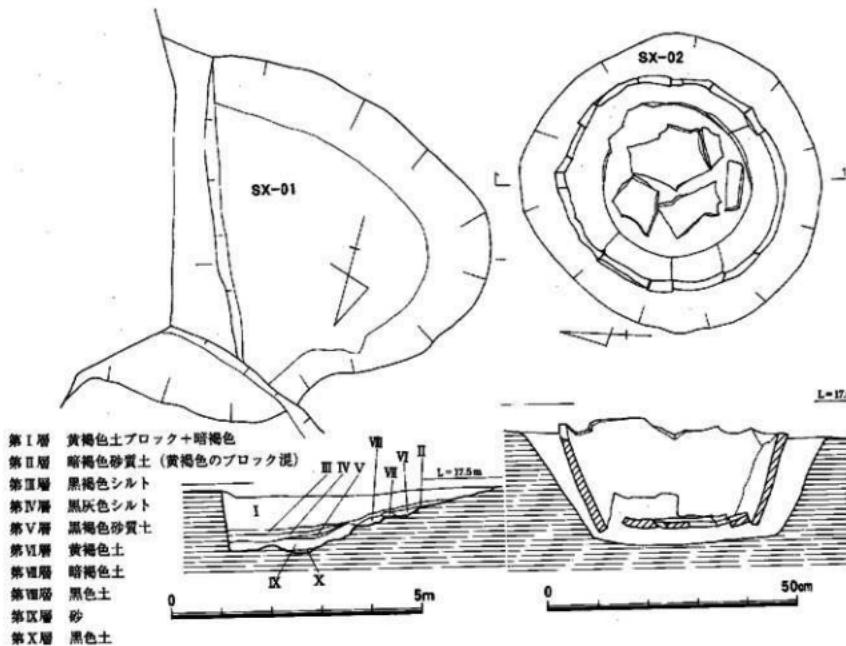


Fig. 39 第2次調査VI区土壤平面・断面図(縮尺1/3,1/10,1/100)

り、里塙溝ではなく、坪境溝の可能性が高い。

この他、時期的には様々であるが、早良地区には免遺跡(1985年 福岡市教育委員会)、橋本櫻田遺跡(1985年 福岡市教育委員会)、入部遺跡(1985年入部遺跡3・入部遺跡5 福岡市教育委員会)から条里割に伴う区割溝が検出されている。

今回検出されたSD-20からは図示できる出土遺物はない。時期を確定できないが、細片から奈良～平安時代にかけての時期と考えられる。

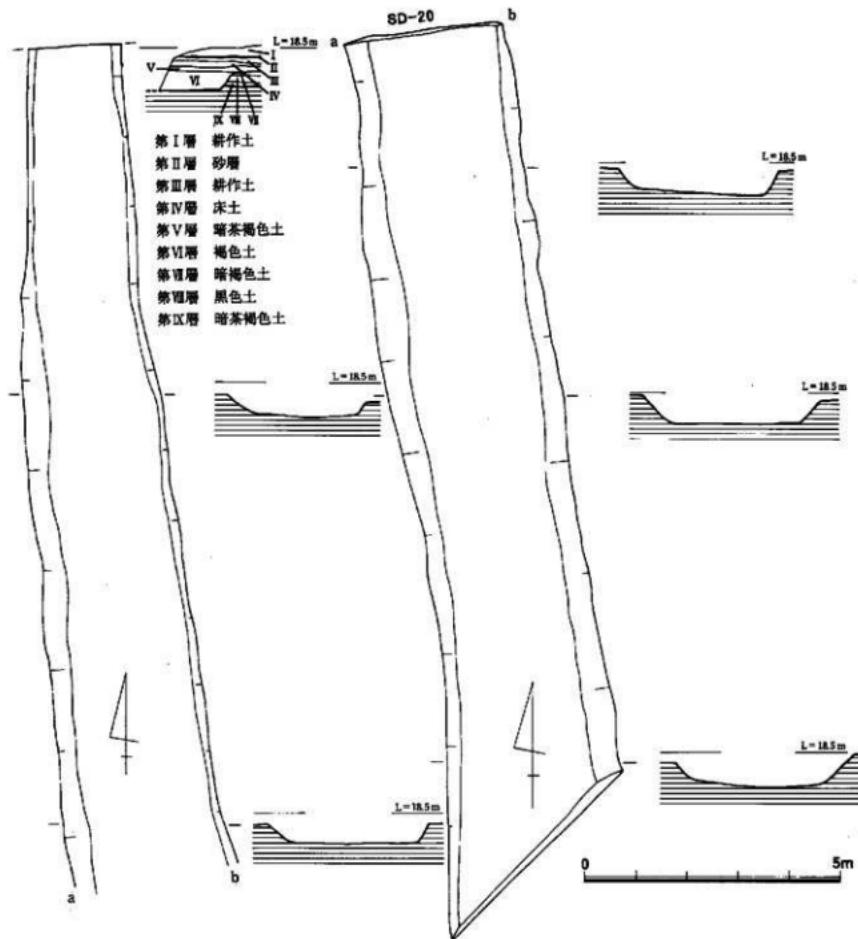


Fig. 40 第2次調査VI区溝平面・断面図(縮尺1/100)

第四節 第二次調査Ⅶ区 一奈良時代以降の調査一

Ⅶ区からは弥生時代の遺構(臺・溝・掘立柱建物)が検出されたが、この他平安時代の溝、水田の配・排水施設、畦畔状遺構、SX等が検出された。図版のPL. 29の種子は弥生時代SD-06(15)から出土。溝(Fig. 41・42 PL. 12・13)

溝状遺構は3条検出された。SD-02は調査区の西側に位置し、南北に流れN-26°-Wの方向をとる。確認された長さは43m、幅3.5m、深さは南側で1.2m・北側で1.2mである。底面標高から水の流れは北から南に流れることが判明した。この溝に流れ込む3条の排水・止水溝が検出された。第1排水・止水溝にはSD-02に13本の杭が打ち込まれていた。出土遺物から平安時代の溝と考えられる。ただ条里制の溝とは異なり、条里制の区画溝はこの溝から西に現在の排水溝が南北に走っていることから、おそらくこの溝が条里制の溝と合致するものと思われる。この溝から波及した溝がこのSD-02であろう。

SD-04は調査区の南西に位置し、南から西に弧を描きながら調査区外に延びている。現在長は9m、幅4.4m、深さ0.6mを測るが、時期は出土遺物がないため不明である。

SD-03は調査区の西側から検出された。細い溝でN-20°-Eの方向をとる。確認された長さは8m、幅0.6m、深さは1.1mである。この溝も出土遺物がないため時期を確定できない。

排水・止水溝(Fig. 42・43 PL. 12)

SD-02から3条の排水・止水溝が検出された。北側から第1溝、第2溝、第3溝とした。第1溝はSD-02に弧を描きながら8本の杭が打ち込まれ水の調整施設を造っている。またここにはSD-02の対岸に南北に2条の杭列を造り計3条の杭列を施す。これによって本流のSD-02の水を調整したものと思われる。第2溝は第1溝より1.2m南に位置する。東西溝でSD-02に流れ込む形状を呈し、長さ6.5m、幅1.5m、深さ0.25mを測る。第3溝は第2より15m南に位置する。東西溝でSD-02に流れ込み長さ5.5m、幅1.5m、深さ0.4mを測る。この他にも2と3溝の間に3条の溝状構造らしきものがある。第3溝の対岸にも溝を検出した。

SX(不整形土壙)(Fig. 43 PL. 12)

不整形土壙は第3溝西側に集中して検出された。この他にSD-04南側にSX-103がある。

SZ-100 SZ-101・2・3の南側に位置し、円形を呈し、径1.5m、深さ0.3mを測る。

SZ-101 SZ-102を切る形で検出された。不整形な円形を呈し、長さ2.2m、幅1.8m、深さ0.2mを測る。SZ-102 SZ-101から切られる形で検出された。梢円形を呈し、長さ2.75m、幅1m、深さ0.22mを測る。SZ-103 SZ-101の西側で101に接するように検出された。梢円形を呈し、長さ1.8m、幅1.15m、深さ0.22mを測る。SZ-104 SD-04の南側で検出された。円形を呈し、径0.9m、深さ0.42mを測る。SX-100 第3溝の延長上に位置する細長い形状を呈する。溝の深い部分だけが残ったと思われる。長さ3.1m、幅0.8m、深さ0.35mを測る。SX-101これも二又になる形状を呈する。長さ3.7m、幅0.7m、深さ0.14mを測る。SX-102 これも同様で、長さ2.8m、幅1m、深さ0.18mを測る。SX-103 SD-04の南側から検出されたが、半分は調査区外で詳細は不明。すべて遺物は出土しなかった。

出土遺物(Fig. 42 PL. 29)

出土遺物のうち図示できたものは木製品だけである。他の溝出土の土器は細片か胴部のみで図示できるものはない。1 木製の人形(人方)と思われる。はじめは荷札木簡とも思ったが、表面が荒れ文字の痕跡が見当たらないため形状から人形とした。2 木製の漆塗り椀である。底部付近しか遺存しない。内外面とも黒漆であるが、内面底部に赤漆で文様を記している。3 第1溝に打ち込まれていた杭である。材を3分1に半截し杭としている。1・2とも第1溝とSD-02との境で出土した。



Fig. 41 第2次調査VI区検出造構実測図(縮尺1/300)

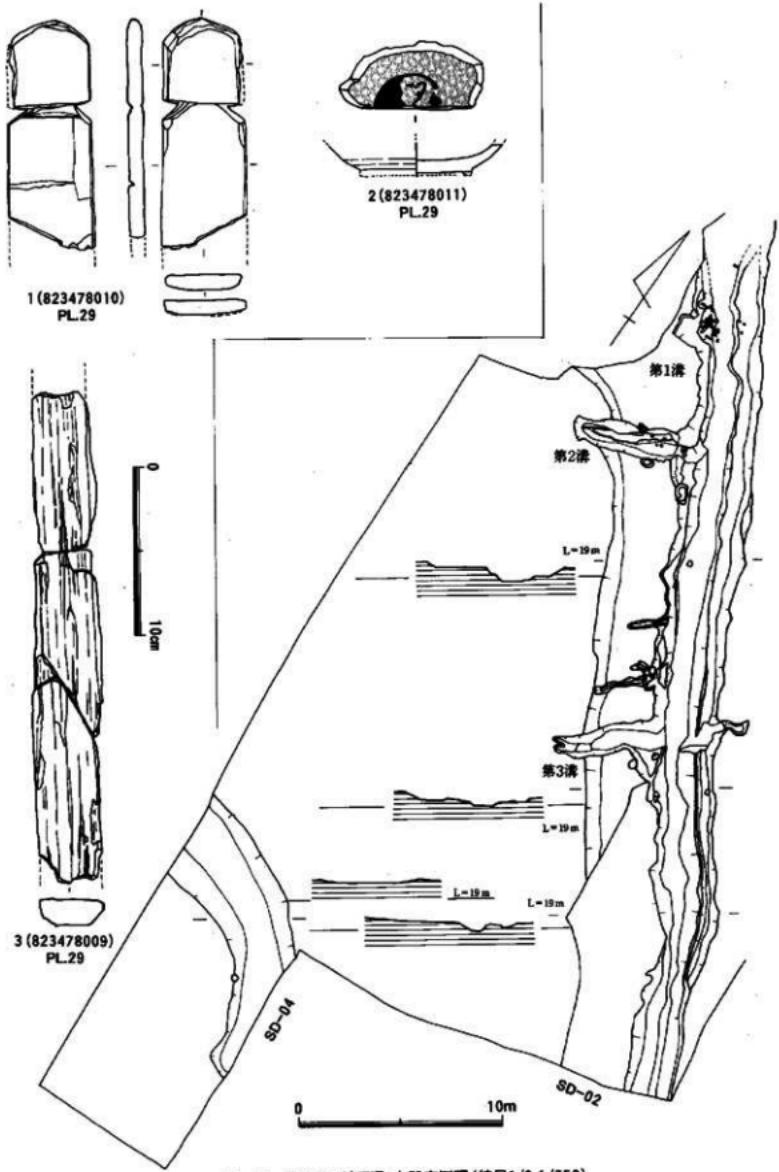


Fig. 42 溝平面・断面図、木器実測図(縮尺1/3,1/250)

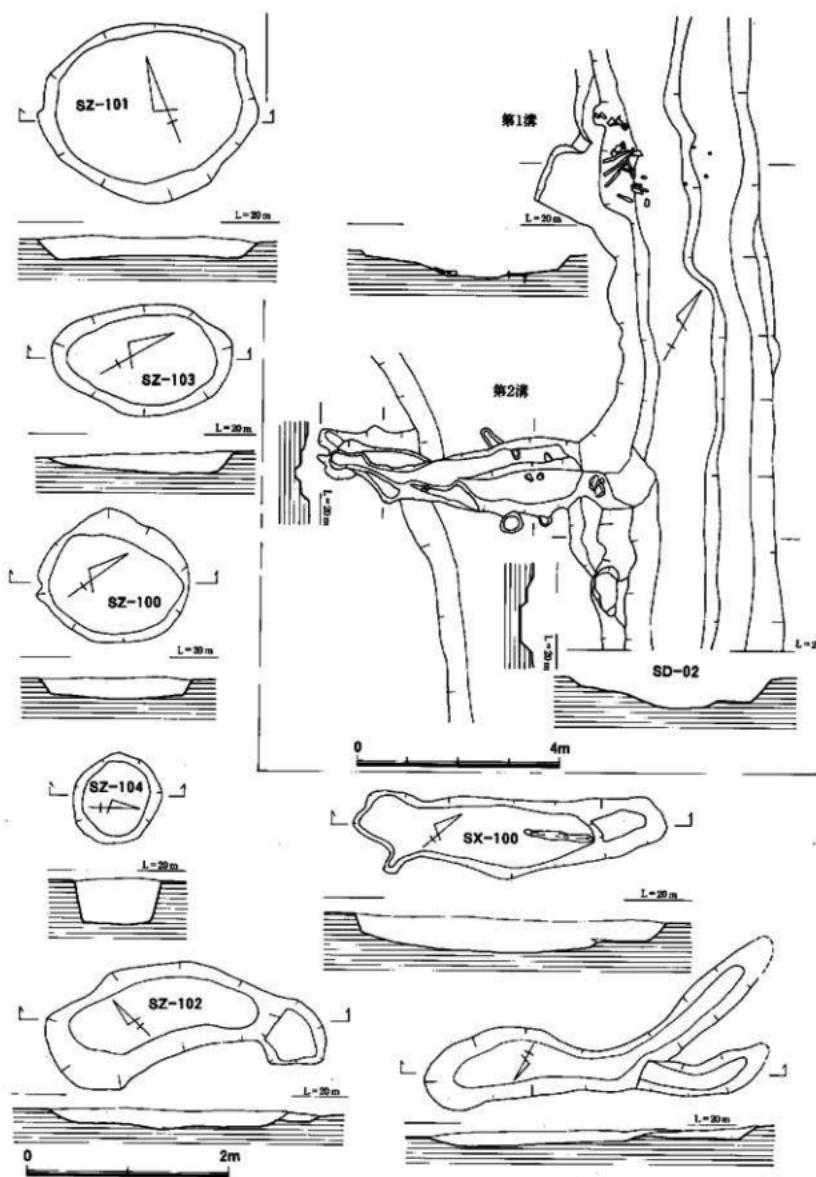


Fig. 43 清・吐畔状造構実測図 (縮尺1/50,1/100)

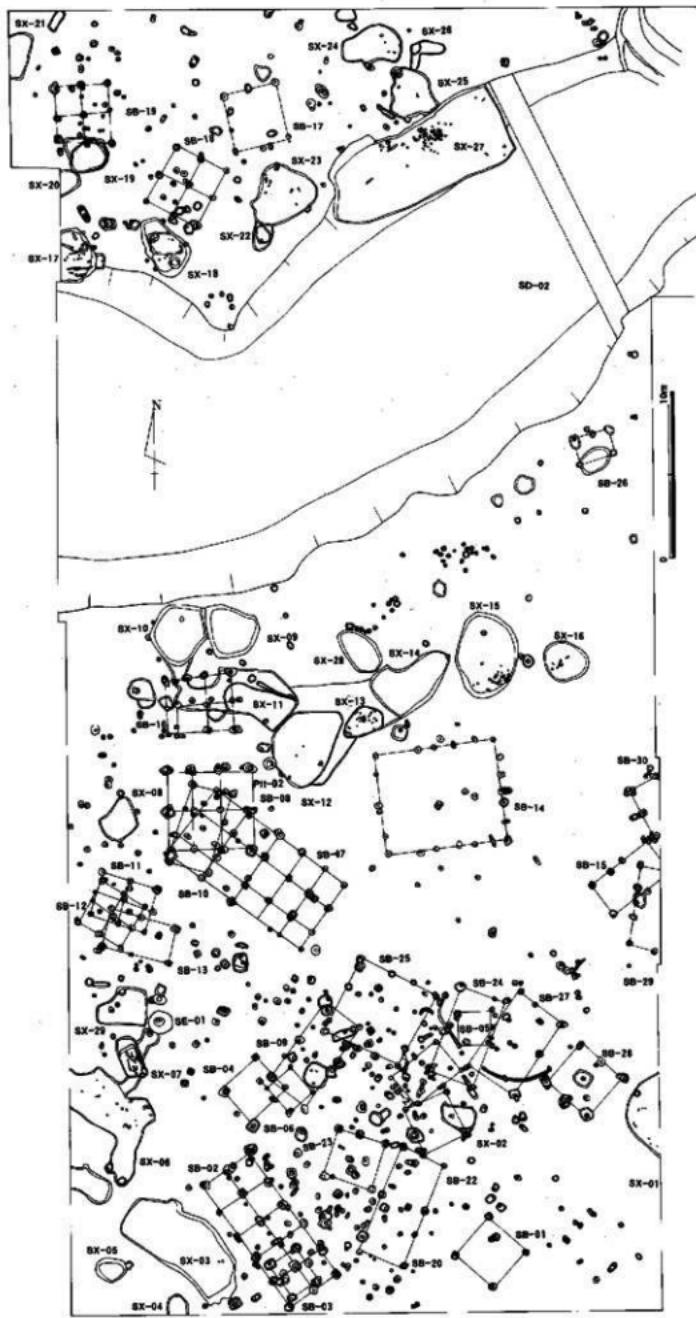


Fig. 44 VII区造構配図 (縮尺1/300)

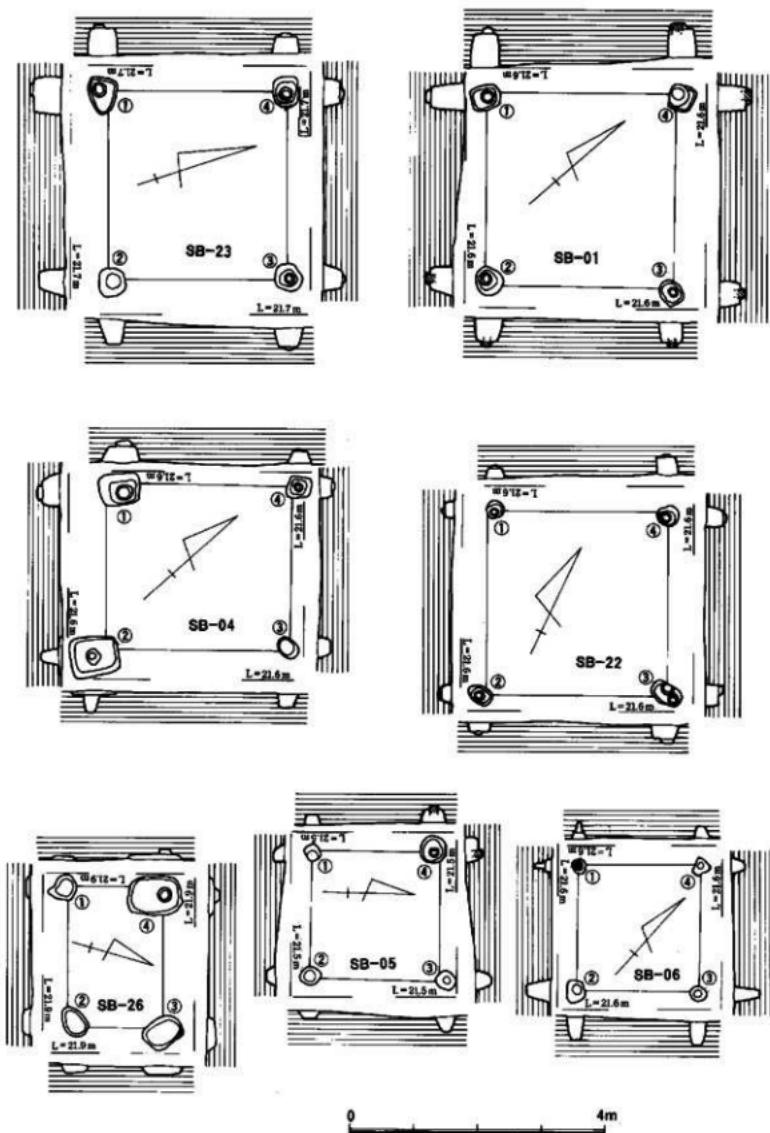


Fig. 45 VII 区櫻立柱建物実測図-1(縮尺1/80)

第五節 第二次調査図区 一古墳時代の遺構一

検出遺構

図区はIV区の南側・市道田・飯盛線の南側に位置した約2,800m²を調査した。北側に弥生時代の大溝であるSD-02が幅20mで北東から南西に流れるが、古墳時代には幅1m程度の溝となって流れている。このSD-02を境として図区には弥生時代の遺構は検出されなかった。図区で検出された遺構は掘立柱建物30棟、井戸状遺構1基、不整形土壙29基、溝状遺構2条である。

掘立柱建物 (Fig. 45 ~ 51 Tab. 6 ~ 8 PL. 13 ~ 16)

図区より検出された掘立柱建物は30棟であるが、このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱痕内から出土したものに基づいているため、時期が多少下がる可能性がある。建物の内、1間×1間も図示したが、削平が著しいため住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はSB-01からを掘立柱建物の番号としている。

1間×1間の掘立柱建物 (Fig. 45 Tab. 6 ~ 8 PL. 13 ~ 14 ~ 16)

1間×1間の掘立柱建物は7棟検出された。SB-01 調査区南端から検出され、切り合ひ関係はない。桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 4に表示しているが、柱穴の形状は長方形・方形であり、掘方自体は深く柱痕が3ヶ所から検出された。柱穴通番号②は径が15cm、長さ10cm③は径が12cm、長さ10cm④は径が18cm、長さ15cmである。主軸は北東-南西、長軸方向はN-48°30'~Wである。規模は2.95m×3.05mで、床面積9.0m²を測る。SB-04 調査区南側から検出され、SB-06・09と切り合ひ関係がある。柱穴の形状は③を除いて他は方形であり、二段掘りで深い。主軸は北東-南西、長軸方向はN-42°~Eである。規模は2.9m×2.6mで、床面積7.54m²を測る。

SB-05 調査区南側中央から検出され、SB-24・27との間に切り合ひ関係がある。柱穴の形状は円形であり、主軸は東-西、長軸方向はN-90°~Wである。規模は2.0m×2.0mで、床面積4m²を測る。

SB-06 調査区南側中央から検出され、SB-04・09との間に切り合ひ関係がある。柱穴の形状は円形・不整形であり、柱穴通番号④から径が15cm、長さ10cmの柱痕が検出されている。主軸は南東-北西、長軸方向はN-41°~Wである。規模は1.9m×2.0mで、床面積3.8m²を測る。SB-22 調査区南側中央から検出され、SB-20・21と接し、SX-02との間に切り合ひ関係がある。柱穴の形状はほぼ円形であり、二段掘されている。主軸は北西-南東、長軸方向はN-25°~Wである。規模は2.85m×2.9mで、床面積8.26m²を測る。SB-23 調査区南側から検出され、SB-20と接する。柱穴の形状は方形であり、殆どが二段掘りをおこなっているが、②だけが一段掘りである。主軸は南東-北西、長軸方向はN-75°~Wである。規模は2.8m×3.0mで、床面積8.4m²を測る。

SB-26 調査区北側東端から検出され、切り合ひ関係はない。柱穴の形状は長方形であり、主軸は北東-南西、長軸方向はN-74°~Eである。規模は2.25m×1.5mで、床面積3.38m²を測る。

1間×2間の掘立柱建物 (Fig. 46・47 Tab. 6 ~ 8 PL. 13 ~ 16)

1間×2間の掘立柱建物は9棟検出された。SB-24 調査区南側中央部から検出され、SB-05・21・27と切り合ひ関係がある。柱穴の形状は円形・長方形であるが、削平が著しい。桁行の③と⑥がやや中にに入る形状を呈するが、この種の類例は田村遺跡群（1985年福岡市教育委員会刊 田村遺跡群3）にある。主軸は北東-南西、長軸方向はN-22°~Eである。規模は2.8m×5.5mで、床面積15.4m²を測る。SB-13 調査区西側中央部から検出され、SB-11・12と切り合ひ関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、桁行の②と⑤がやや中にに入る形状を呈する。主軸は北西-南東、長軸方向

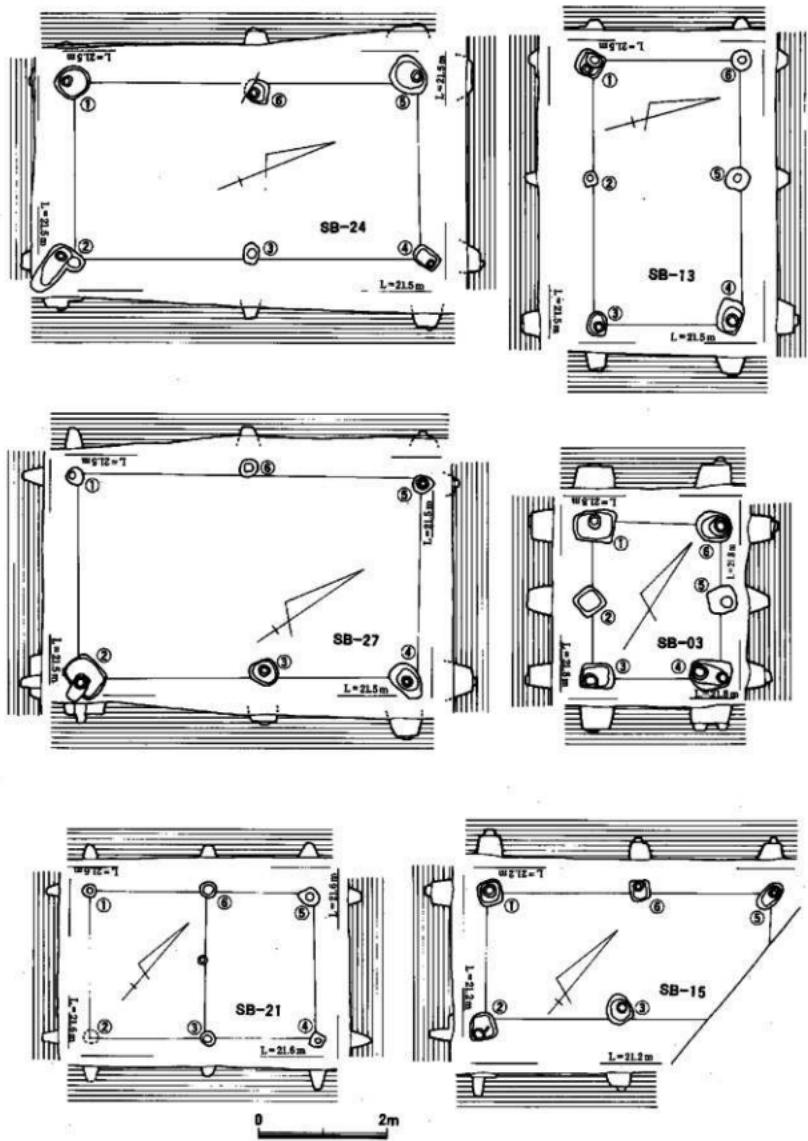


Fig. 46 VII区据立柱建物実測図-2(縮尺1/80)

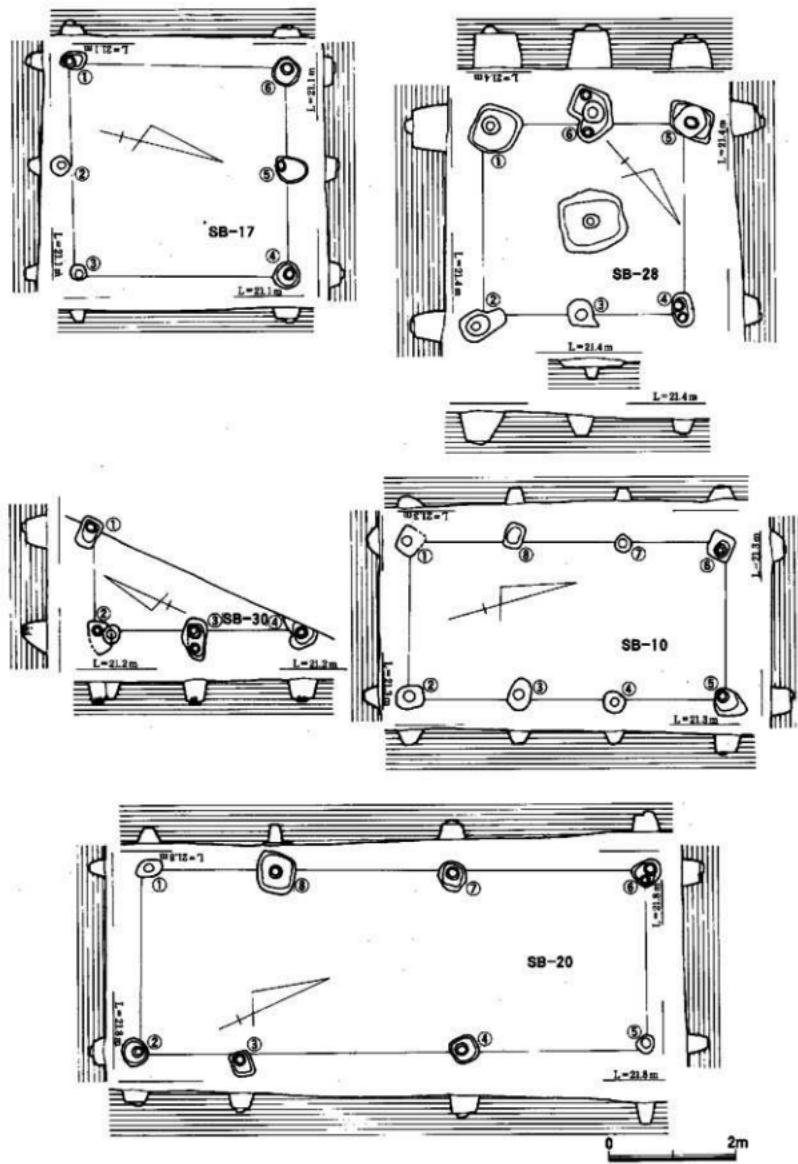


Fig. 47 VII区据立柱建物実測図-3(縮尺1/80)

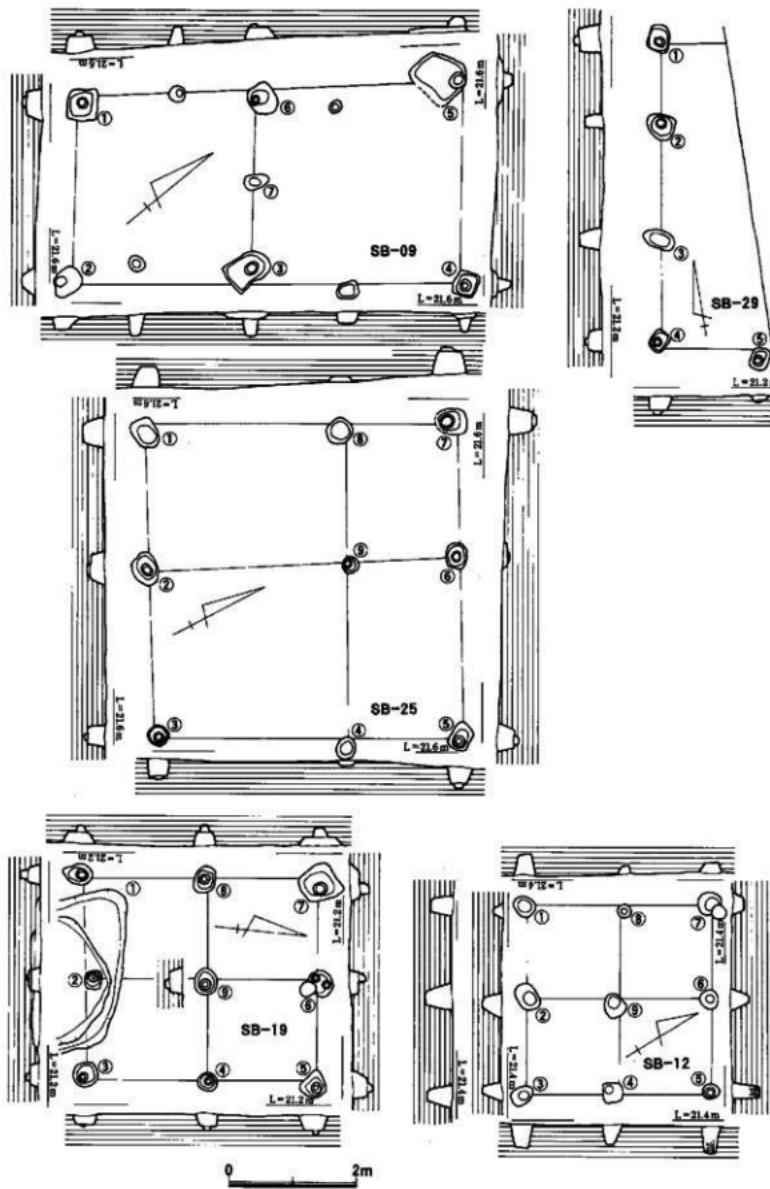


Fig. 48 VII 区獨立柱建物実測図-4 (縮尺1/80)

はN-74°30'-Wである。規模は2.4m×4.2mで、床面積10.08m²を測る。SB-27 調査区南側東端から検出され、SB-05・24との間に切り合い関係があり21と接する。柱穴の形状は1つを除いて円形であり、桁行の③と⑥がやや中に入る形状を呈する。主軸は北東-南西、長軸方向はN-34°-Eである。規模は3.2m×5.4mで、床面積17.28m²を測る。SB-03 調査区南側端から検出され、SB-02との間に切り合い関係があり、方向も02と同じ方向性をもつ。柱穴の形状は東隅の柱穴を除いて他は方形であり、大きさも他の掘立柱建物の柱穴と異なりかなり大きい。脇柱を②に持ち、掘方が深く、中心部は一段掘りであるが、四隅は二段掘りを行っている。主軸は南東-北西、長軸方向はN-32°30'-Wである。規模は2m×2.5mで、床面積5m²を測る。SB-21 調査区南側から検出され、SB-22・25と接し、SB-24との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、柱穴自体小さいがかなり深く掘られている。四隅の一部②が確認されなかった。柱痕跡から柱は径15cm前後と考えられる。中央部に床柱と考えられる柱穴がある。主軸は北東-南西、長軸方向はN-49°30'-Eである。規模は2.3m×3.5mで、床面積8.05m²を測る。SB-15 調査区東端中央から検出され、SB-30と接し、29と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、すべて二段掘りされており、深さも深い。柱痕跡から柱の径は15cmと考えられる。南東隅が調査区外である。上軸は南西-北東、長軸方向はN-50°30'-Eである。規模は2m×4.5mで、床面積9m²を測る。SB-17 調査区北側SD-02の北に位置し、市道田・飯盛線で報告した掘立柱建物群（1987年 吉武遺跡群II 福岡市教育委員会）及びIX区の掘立柱建物群との関係が考えられる一群である。切り合い関係はない。柱穴の形状は円形である。西側桁行部分に小柱穴があるが、これも床柱と考えられる。2間×2間の可能性も否定できない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-74°30'-Eである。規模は3.4m×3.4mで、床面積10.89m²を測る。SB-28 調査区南東隅から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形であり、脇柱（床柱）が④と⑥にある。掘方がしっかりとしておりその殆どが二段掘りを行っている。中央部に床柱と考えられる柱穴があるが、主柱ほど深くない。柱痕跡から径15cm前後の柱と思われる。主軸は南東-北西、長軸方向はN-49°-Wである。規模は3.0m×3.12mで、床面積9.6m²を測る。SB-30 調査区東端中央から検出され、SB-15と接し、切り合い関係はないが、約半分が調査区外であったためその全容は不明。柱穴の形状は方形であり、西側主柱穴②～④には柱痕が残っており、10～15cmの材を使用している。主軸は南東-北西、長軸方向はN-24°30'-Wである。規模は1.6m×3.15mで、床面積2.64m²と推測される。

1間×3間の掘立柱建物 (Fig. 47・48 Tab. 7・8 PL. 13・14)

1間×3間の掘立柱建物は3棟検出された。SB-10 調査区中央部から検出され、SB-7・8との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は北東-南西、長軸方向はN-16°-Eである。規模は2.5m×5mで、床面積12.5m²を測る。SB-20 調査区南側端から検出され、SB-23と接する。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は南西-北東、長軸方向はN-24°30'-Eである。規模は2.9m×8.0mで、床面積23.2m²を測る。SB-29 調査区東側端から検出され、SB-15と切り合い関係がある。約半分が調査区外であるが、柱穴の形状は方形であり、主軸は北-南、長軸方向はN-9°-Eである。規模は1.6m×4.8mで、床面積7.68m²と推測される。

1間×4間の掘立柱建物 (Fig. 48 Tab. 7 PL. 14)

1間×4間の掘立柱建物は1棟検出された。SB-09 調査区南側中央から検出され、SB-04・06・25との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は方形であり、掘方は深く柱痕跡から径が10～15cmの柱であったと考えられる。主軸は北東-南西、長軸方向はN-39°-Eである。規模は3.2m×6mで、床面積18.3m²を測る。梁行の柱穴が一直線上にならばないが、この種の類例は田村遺跡

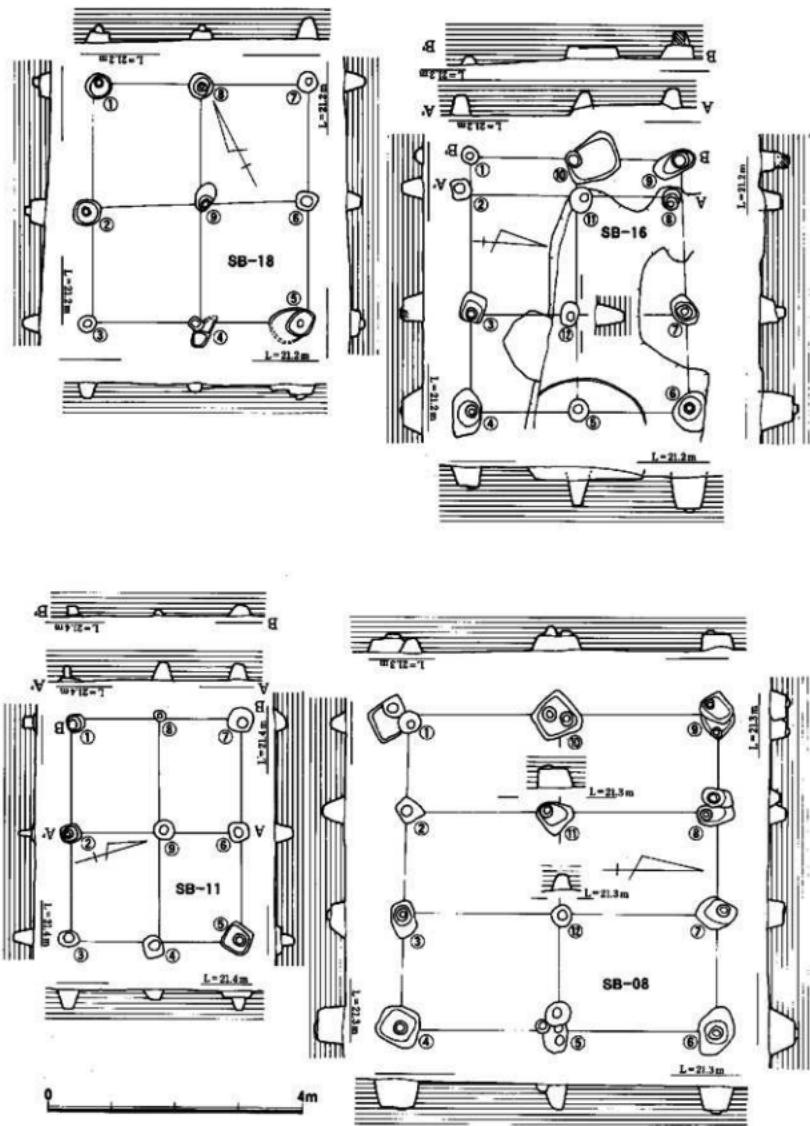


Fig. 49 VII 区据立柱建物実測図-5 (縮尺1/80)

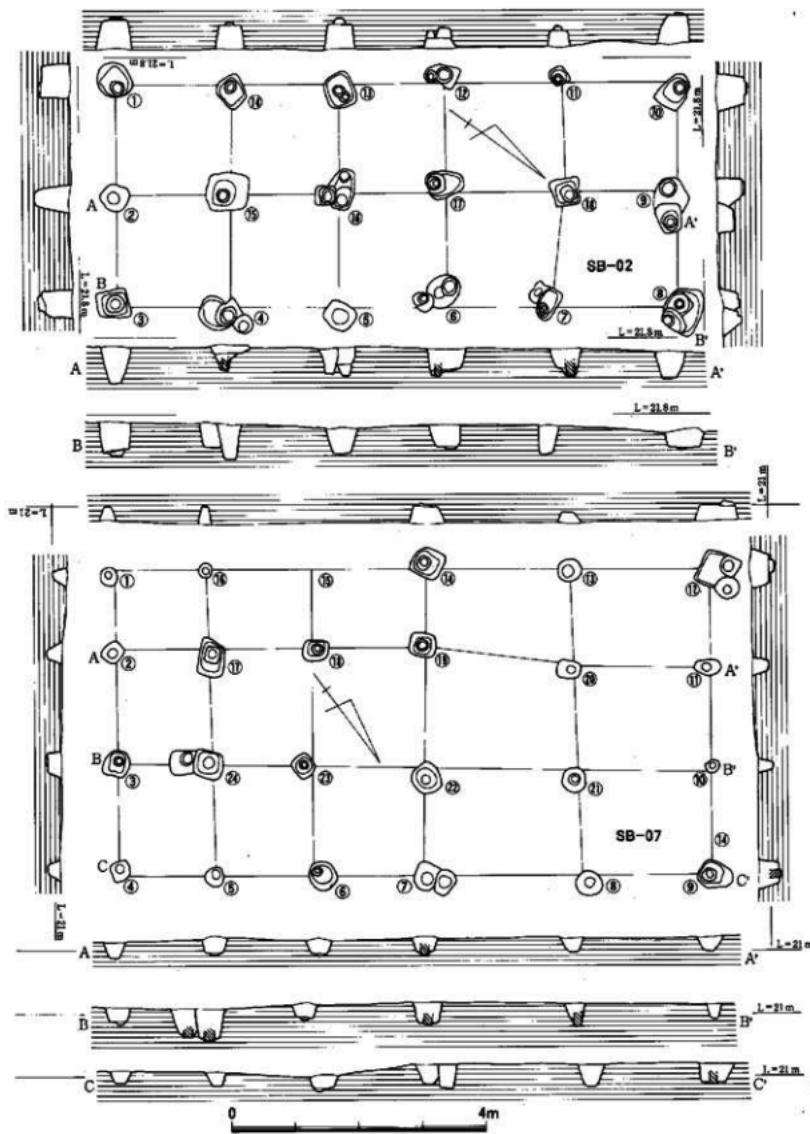


Fig. 50 VII 区据立柱建物実測図-6 (縮尺1/80)

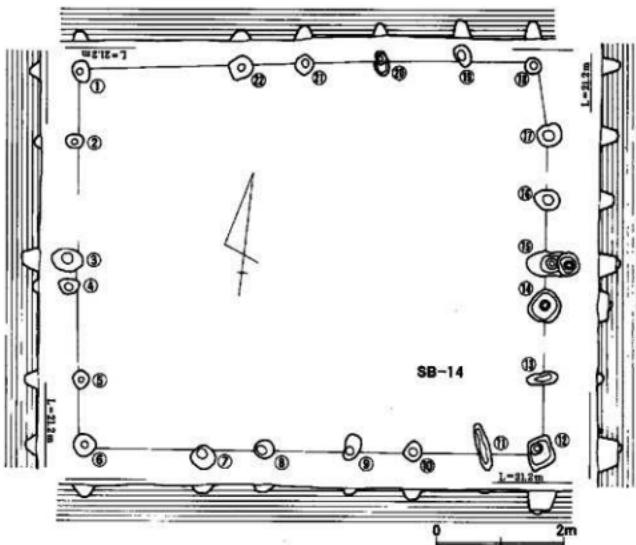


Fig. 51 VIII区掘立柱建物実測図-7(縮尺1/80)

群にもみられ、また主柱穴はかなり大きいため問題はないと思われる。

2間×2間の掘立柱建物 (Fig. 48・49 Tab. 7・8 PL. 14 ~ 16)

2間×2間の掘立柱建物は5棟検出された。SB-25 調査区中央部から検出され、SB-2 1・24と接し、SB-09との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、中央部②・⑥・⑨がややずれた間隔を呈し、また、④～⑤、⑦～⑧の間隔が狭く1.8mしかない。2間×2間であるが柱間が異なり、主柱穴は深いが、中央部の柱穴は浅い。主軸は南東-北西、長軸方向はN-64°-Wである。規模は4.8m×5.06mで、床面積24.28m²を測る。SB-19 調査区北側のSD-02の北に位置し、市道田・飯盛線の調査で検出された遺構及びIX区の掘立柱建物群との関係が考えられる一群である。SX-19との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形で、すべての柱穴が二段掘りされている。四隅が深く中心部が浅い形状を示す。主軸は北-南、長軸方向はN-6°-Wである。規模は3.2m×3.7mで、床面積11.84m²を測る。SB-12 調査区西側隅から検出された総柱掘立柱建物である。SB-11・13と切り合い関係がある。柱穴の形状は1つを除いて円形であり、主柱は深く柱が残っているものもある。すべて一段掘りであるが、⑤に柱痕が残っており径が12cm、長さ15cmである。また、3ヶ所に脇柱がある。主軸は南東-北西、長軸方向はN-58°30'-Wである。規模は3.0m×3.0mで、床面積9m²を測る。SB-18 調査区北側SD-02より北に位置し、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形であり、主軸は南西-北東、長軸方向はN-27°-Eである。規模は3.4m×3.8mで、床面積12.92m²である。SB-11 調査区西側端から検出され、SB-12・13と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、主軸は北西-南東、長軸方向

はN-73°-Wである。規模は2.7m×3.5mで、床面積9.45m²を測る。

2間×3間の掘立柱建物 (Fig. 49 Tab. 6・7 PL. 13・15)

2間×3間の掘立柱建物は2棟検出された。SB-16 調査区北側SD-02の南側から検出され、建替えを行っているが同じSB-16とした。SX-11との間に切り合い関係がある。2間×2間の可能性が高いが西側に柱間の狭い柱穴群が並ぶことで一応2間×3間とした。しかしながら基本的には2間×2間と考えられることから倉庫としては考えにくい建物である。柱穴の形状は方形が主で、柱痕が残っていたものは③・⑨・⑩の3ヶ所で、径が12~15cm、長さが15~18cm前後ある。柱間隔が、①と②、⑧と⑨、⑩と⑪は60cmしかない。主軸は東-西、長軸方向はN-86°-Eである。規模は3.4m×4mで、床面積13.6m²を測る。切り合い関係からSD-11が古くSB-16が新しい。また出土遺物から古墳時代中期の時期と考えられる。SB-08 調査区中央西側から検出され、SB-07・10との間で切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・不整形であり、主軸は西-東、長軸方向はN-89°-Wである。規模は5m×5mで、床面積25m²を測る。この柱穴には脇柱が多く6柱穴検出され、ほとんど二段掘りを行っている。

2間×5間の掘立柱建物 (Fig. 50 Tab. 6 PL. 13・14)

2間×5間の掘立柱建物は1棟検出された。SB-02 調査区南側端から検出され、SB-03との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は方形が主で、8ヶ所の柱穴が脇柱を持つ。柱痕が現存しているのは⑯・⑰・⑱の3ヶ所で、⑯は残りがよく径15cm、長さ20cmを測る。そのほとんどの柱穴が二段掘りを行っており、深さも深い。主軸は北西-南東、長軸方向はN-36°-Wである。規模は3.5m×9mで、床面積31.5m²を測る。桁行の柱穴が一直線上にならばないが、主柱穴はかなり大きいため問題はないと思われる。検出された建物で3番目に大きな建物である。

3間×5間の掘立柱建物 (Fig. 50 Tab. 6 PL. 13~15)

3間×5間の掘立柱建物は1棟検出された。SB-07 調査区中央部から検出され、SB-08・10との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱を持つ柱穴は3ヶ所で、柱痕が6ヶ所(⑨・⑩・⑫・⑬・⑭は脇柱とも)あり、そのほとんどが径15cm、長さ10~15cm程度残っていた。中心部⑯と⑰との間の方向がざれている。ただ⑯の柱穴がないことが気になる。北西-南東、長軸方向はN-54°-Wである。規模は4.8m×9.4mで、床面積45.12m²を測る。柱穴は深く掘り下げている。検出された建物は1番大きな建物である。

4間×6間の掘立柱建物 (Fig. 51 Tab. 7 PL. 13~16)

4間×6間の掘立柱建物は1棟検出された。SB-14 調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形が主で、脇柱を持つ柱穴は2ヶ所である。柱間がまちまちであるが、柱穴が列ぶこと、この周辺にはこの柱穴群しかないことから一番先に判明した掘立柱建物である。主軸は東-西、長軸方向はN-84°30'-Eである。規模は6m×7.3mで、床面積43.8m²を測る。検出された建物で2番目に大きな建物である。柱穴自体は大小あるが、柱痕跡から10cm前後の柱であったことが窺える。

ここで建物の方向性・時期を考えてみる。

方向が一致するものとして SB-14とSB-16・SB-19がN-85°-E前後で合致する。

SB-07とSB-27・SB-28がN-55°-W前後で合致する。

SB-02とSB-03・SB-15がN-35°-W前後で合致する。

SB-25とSB-18・SB-20がN-25°-W前後で合致する。

SB-29とSB-13・SB-19・SB-23がN-75°-W前後で

合致する。

以上のように5つの方向を持つグループに分けたが、もう一つ大型建物を中心とした配置を考える必要がある。調査区は限られており多少無理が生じるが、SB-02を中心としたグループ、SB-07を中心としたグループ、SB-14を中心としたグループに分けられ、ほぼ布留併行期から小型丸底塗までの3時期と考えられる。

次に時期的に考察をすると、柱穴掘方から出土する土器は土師器・須恵器で、不整形土壙（SX）から出土する土器と時期差はない。土師器では布留併行期のものが主で、新しい時期としてSX-16・18から出土する小型丸底塗であり、須恵器では、Ⅱ式からⅢ式が主である。また、掘立柱建物と不整形土壙との切り合い関係のあるSB-16とSX-11、SX-19とSB-19、SX-02とSB-22を見るとSB-16とSX-11はSB-16がSX-11を切る形状を呈し、SX-11は第Ⅱ式の須恵器が出土している。これからしてSB-16はこれより新しいことが判明した。またSB-19とSX-19との関係も、SX-19が古くSB-19が新しい。SX-19からの出土遺物は新しい段階の布留式土器であることからSB-19はこれよりも新しいことが窺える。SB-22とSX-02との切り合いも、SX-02から第Ⅱ式の須恵器が出土していることからSB-22がこれよりも新しいと考えられる。ただⅦ区ではSX-16・18の小型丸底塗が最も新しく、柱穴から出土する土器も布留式が主である。

これからして掘立柱建物は新布留式土器の時期か、それより僅かに新しい時期を設定しても良いと考えられる。

参考文献

- | | | | |
|---------|--------------------|-----------|-------|
| 古武塚原古墳群 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 | 福岡市教育委員会刊 | 1980年 |
| 田村遺跡群Ⅲ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 | 福岡市教育委員会刊 | 1987年 |
| 田村遺跡群Ⅳ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 | 福岡市教育委員会刊 | 1987年 |
| 田村遺跡群Ⅴ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 | 福岡市教育委員会刊 | 1988年 |
| 田村遺跡群Ⅵ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 | 福岡市教育委員会刊 | 1989年 |
| 田村遺跡群Ⅶ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 | 福岡市教育委員会刊 | 1990年 |
| 古武遺跡群Ⅰ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 | 福岡市教育委員会刊 | 1986年 |
| 吉武遺跡群Ⅱ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 | 福岡市教育委員会刊 | 1989年 |
| 古武遺跡群Ⅲ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 | 福岡市教育委員会刊 | 1995年 |
| 吉武遺跡群Ⅳ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 | 福岡市教育委員会刊 | 1996年 |
| 古武遺跡群Ⅴ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 | 福岡市教育委員会刊 | 1997年 |
| 古武遺跡群Ⅹ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集 | 福岡市教育委員会刊 | 1998年 |
| 吉武遺跡群Ⅺ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集 | 福岡市教育委員会刊 | 1999年 |
| 古武遺跡群Ⅻ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 | 福岡市教育委員会刊 | 1986年 |
| 四箇遺跡 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 | 福岡市教育委員会刊 | 1987年 |
| 入部V | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集 | 福岡市教育委員会刊 | 1995年 |
| 入部VI | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 | 福岡市教育委員会刊 | 1996年 |
| 橋本榎田遺跡 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集 | 福岡市教育委員会刊 | 1997年 |

S X (不整形土壙)・井戸状遺構

S X (不整形土壙) (Fig. 52 ~ 54 Tab. 14 PL. 13 ~ 18)

不整形土壙は30基検出したが、図示したものは29基である。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 14に表示しているので、参照していただきたい。

(Fig. 52, 55 ~ 61 Tab. 14 PL. 13 ~ 18)

S X - 01 調査区の南東隅から検出され、半分が調査区外である。ほぼ円形を呈し、掘り方は浅い。中央部に楕円形の形状を呈する粘土の貼り床が施されている。出土遺物は89002 ~ 89005, 89046 (Fig. 60) が出土している。須恵器ばかりの出土で、形式的にも占いタイプである。

S X - 02 調査区南側中央部から検出され、S B - 22と切り合い関係を持つ。やや変則な方形を呈し、S B - 22南東隅の柱穴③との切り合いがあり、S B - 22が切る。出土遺物は須恵器で89006 (Fig. 60) が出土している。形式的にも古いタイプである。これにより、S B - 22は須恵器のⅡ式より新しい時期と考えられる。**S X - 04** 調査区の南西隅、S X - 03の南側から検出され、半分は調査区外である。ほぼ楕円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**S X - 05** 調査区の南西隅から検出され、S X - 03の西側に位置する。楕円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**S X - 07** 調査区の南西隅から検出され、S X - 06の北、S E - 01の南西に位置する。長方形を呈し、切り合いがあり、深さは深い。出土遺物は土師器・須恵器で89051, 89054 ~ 89056 (Fig. 55) が出土している。またS X - 06から出土した89050と接合する。

S X - 08 調査区の南西から検出され、S B - 11 ~ 13の北側に位置し、S B - 08の西側から検出された。変則的な楕円形を呈し、深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**S X - 13** 調査区中央部から検出され、S X - 12を切る。形状は楕円形を呈する。出土遺物は89012 ~ 89014他 (Fig. 60 ~ 62) の須恵器と土師器が出土している。これらの遺物はS X - 11・12・15との接合資料で、すべて同時期と考えられる。また、S X - 10からS X - 15までの一連の土壙は溝か部分的な掘り込みによるものと考えられる。

S X - 19 S D - 02の北西側から検出され、S B - 19と切り合い関係がある。形状は隅丸方形を呈する。出土遺物は89091 ~ 89094 (Fig. 58) の土師器が出土している。S B - 19の南側中央の柱穴②がS X - 19を切る。時期的には差はないものと考えられるがS X - 19よりS B - 19の方が新しいことが窺える。**S X - 17** S D - 02の北側に位置し、南西隅のS D - 02を切る形で検出され、約1/3は調査区外である。楕円形を呈し、深さは深い。出土遺物は土師器89074 ~ 89077 (Fig. 57) と89029 (Fig. 61) の須恵器が出土している。**S X - 23** S D - 02の北側に位置し、S X - 22と切り合い関係がある。変則的な楕円形を呈し、深さは深い。S X - 23がS X - 22を切る形で検出された。出土遺物は土師器の89122 ~ 89124 (Fig. 58) と89030, 89031, 89041 (Fig. 61) の須恵器が出土している。**S X - 20** S D - 02の北側、S X - 19と接して検出された。約半分は調査区外で、楕円形を呈し、深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**S X - 22** S D - 02の北側、S X - 23から切られる状態で検出された。楕円形で中に方形の掘方がある。これは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、この柱穴を使用する建物はなかった。深さは浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、S X - 23より占いことは確実である。他の不整形土壙とほぼ同時期と考えられる。**S X - 18** S D - 02の北側に位置し、S B - 18の南側から検出され、変則的な楕円形を呈する。この中でも方形な土壙と柱穴によって中央部を破壊されている。出土遺物は土師器が多量に出土しており、89078 ~ 89088, 89090, 89128,

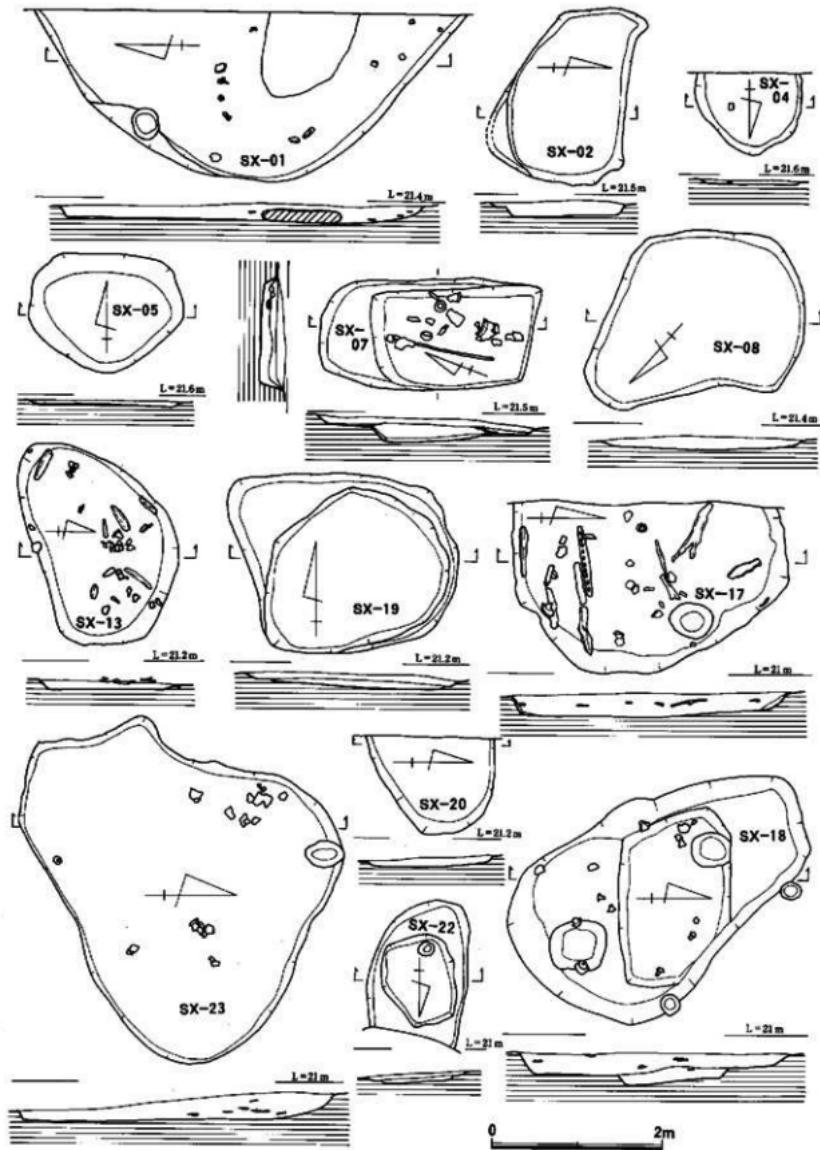


Fig. 52 VII 区不整形土壤実測図-1 (縮尺1/60)

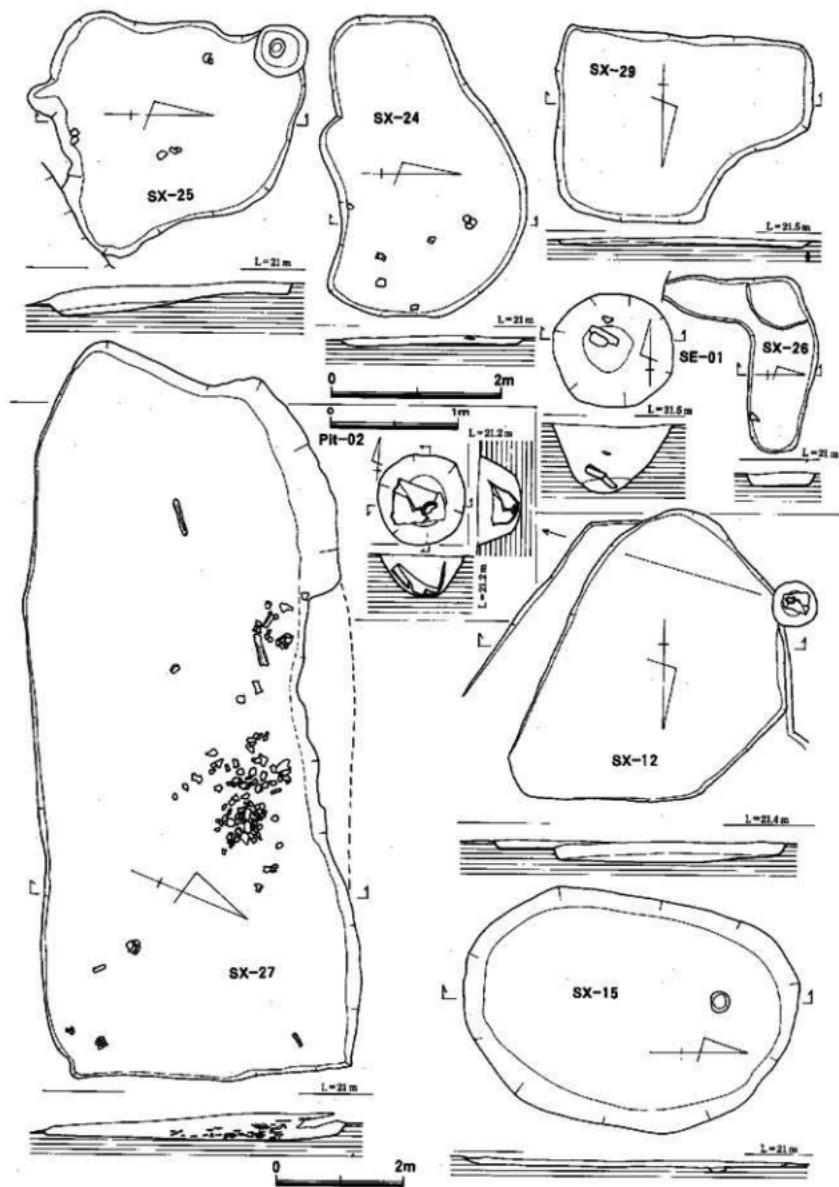


Fig. 53 VII区不整形土壤実測図-2(縮尺1/40,1/60,1/80)

89129 (Fig. 57) の 14 点を図示した。また、PL. 32 の種子類も出土した。

(Fig. 53, 55 ~ 62 Tab. 14 PL. 13 ~ 14 ~ 18)

S X - 25 SD - 02 の北側に位置し、S X - 27 との切り合い関係がある。変則的な方形を呈し、深さはやや深い。S X - 27 が S X - 25 を切る形で検出された。遺物は土師器で 89119 ~ 89121 (Fig. 58) と 89042 (Fig. 61) の須恵器が出土している。**S X - 24** SD - 02 の北側、S X - 25 の北側から検出された。変則的な精円形を呈し、深さは浅い。遺物は土師器で 89114 ~ 89118 (Fig. 58) が出土している。**S X - 12** SD - 02 の南側、S X - 13 から切られる状態で検出された。また S X - 11 を切る形で検出された。S X - 13 で記載したように S X - 10 から S X - 15 までの一連の土壙は溝か部分的な掘り込みによるものと考えられ同時期と考えられる。深さはやや深く、西側の Pit 2 によって切られている。遺物は土師器で 89057 ~ 89058 (Fig. 56) と 89011 (Fig. 60) の須恵器が出土している。Pit - 2 S X - 12 の西側から検出され、円形を呈する。床面に須恵器の胸部を配置しており、その上に須恵器の环身を埋納状態で配置されていた。出土遺物は須恵器で 80501, 80504 (Fig. 61, 62) の 2 点である。**S E - 01** S X - 07 の北側に位置する。円形を呈し、深さは深いが、現況では漏水しているがこの深さで漏水したかどうかは定かでない。遺物は土師器で 8500 1 ~ 85003 (Fig. 55) が出土している。**S X - 15** SD - 02 の南側、S X - 14, 16 と近接して検出された。精円形を呈し、深さは浅い。遺物は多量に出土している。89062 ~ 89069 (Fig. 56) の土師器と 89021 ~ 89028, 89037, 89048, 890135 (Fig. 61) の須恵器を図示した。**S X - 27** SD - 02 の北側に位置し、S X - 25 に切られる。SD - 02 が完全に埋没した段階で造られている。隅丸方形を呈し、深さは浅い。出土遺物は土師器が 89095 ~ 89109, 89131 (Fig. 58, 59) と 8903 2 ~ 89036, 89044, 89130 (Fig. 61, 62) の須恵器を図示した。89032 は S X - 25 の遺物と接合する。

(Fig. 53, 55 ~ 60 Tab. 14 PL. 15 ~ 17)

S X - 11 SD - 02 の南側に位置し、SB - 16, S X - 10, 12 との切り合い関係がある。形状は変則的な長方形を呈する。遺物は、須恵器 89010 (Fig. 60) が出土した。深さは浅い。

S X - 9, 10 SD - 02 のすぐ南側、S X - 11 との切り合い関係がある。S X - 9 が S X - 10 を切り、S X - 10 が S X - 11 を切る。S X - 9 が方形、S X - 10 が精円形を呈し、両方とも浅い。遺物は S X - 9 から種子、S X - 10 から種子と土師器 89127 (Fig. 56) が出土した。

S X - 16 SD - 02 の南側、S X - 15 の東側に位置する。形状は精円形で、深さは浅い。遺物は土師器 89070 ~ 89073 (Fig. 56, 57) が出土した。**S X - 14** SD - 02 の南側、S X - 13 と S X - 15 に挟まれ S X - 28 に接して検出された。変則的な精円形を呈し、深さは浅い。南側に柱穴が新しく掘り込まれているが、掘立柱建物の柱穴にはならなかった。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とはほぼ同時期と考えられる。**S X - 28** SD - 02 の南側、S X - 14 と接して検出された。形状は精円形を呈し、深さは非常に浅い。出土遺物がないため時期を確定できないが、他の不整形土壙とはほぼ同時期と考えられる。**S X - 03** 調査区の南側西隅から検出され切り合い関係はない。形状は変則的な隅丸長方形を呈する。出土遺物は土師器が 89110 ~ 89112 (Fig. 55) と 89007 ~ 89049 (Fig. 60) の須恵器を図示した。**S X - 06** SD - 02 の南側端の西隅から検出され一部は調査区外である。北に S X - 07 があるが、土壙によってつながる形状を呈する。形状は「逆 L 字状」を呈し、深さは浅い。出土遺物は土師器が 89052, 89053 (Fig. 55) と 89008 (Fig. 60) の須恵器を図示した。

出土遺物

畠区からは井戸・不整形土壙・掘立柱建物の柱穴から遺物が出土したが、掘立柱建物からの柱穴は

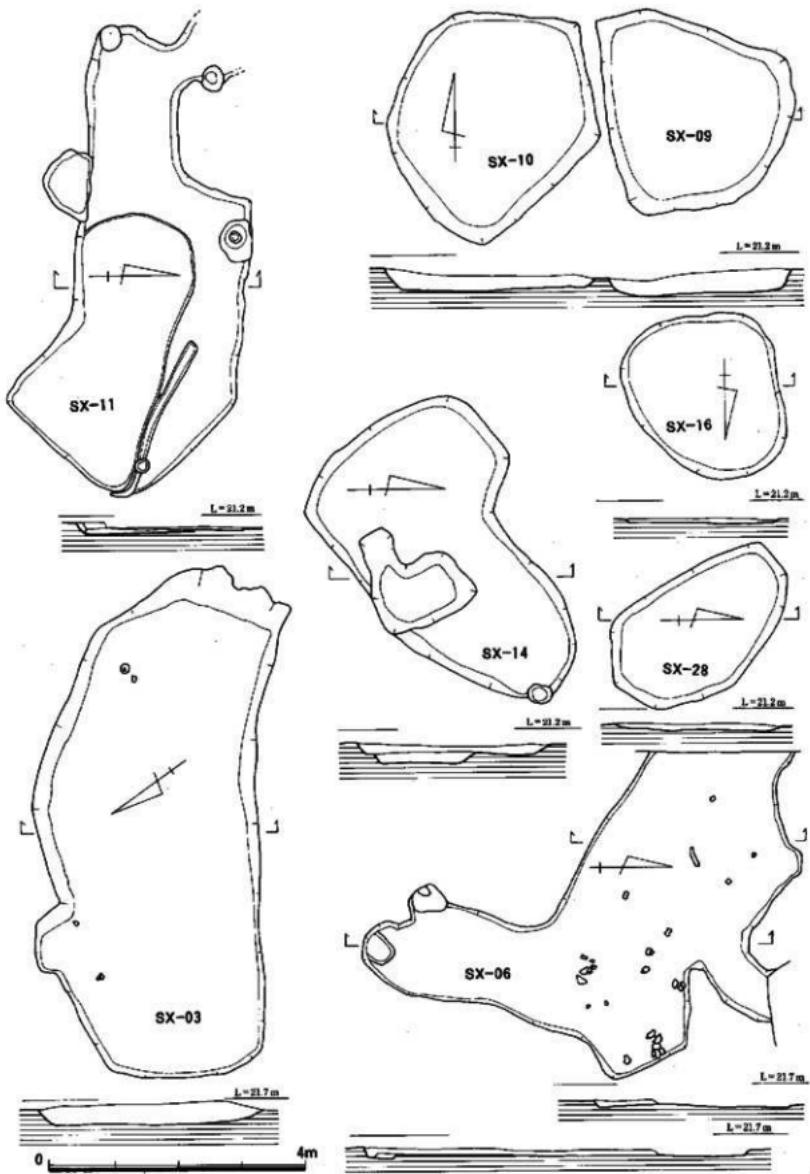


Fig. 54 VII区不整形土壤实测图-3 (缩尺1/80)

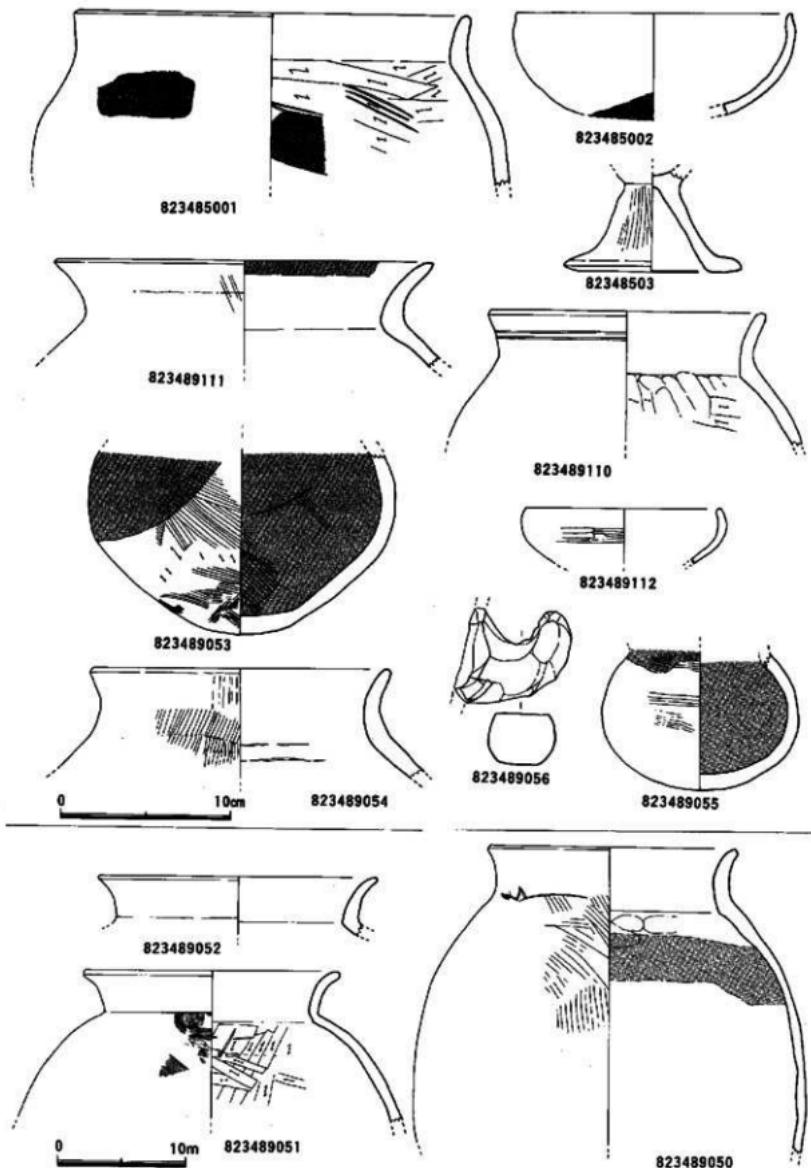


Fig. 55 VII 区出土遺物実測図一(縮尺1/3,1/4)

細片で実測に耐えるものはなかったが、その殆どが古式土師器・須恵器で不整形土壙から出土する遺物とは時期的に差はない。柱の抜き後からも同様の遺物が出土している。これらの遺構の遺物は時期的に大差なく古墳時代前期から中期前半にかけての時期と考えられる。記載は挿図・遺構ごとに土師器・須恵器の順に行う。

S E - 01 出土の土器 (Fig. 55)

Fig. 55 に掲示した 3 点 (85001 ~ 85003) が出土した。85001 土師器の中型壺で頭部が縮まらず口縁がほぼ垂直に立ち上がるタイプで、外面はナデ調整、内面は口縁部がナデ・胴部が範削りを行っている。口径 23.4cm。胎土は 1mm 前後の砂粒を含み、色調は内外面とも暗褐色・黒斑がある。85002 土師器の壺で底部が欠損している。外面ともナデ調整を行っている。口径 16cm。胎土は 2 ~ 3mm 大の石英粒を含み、色調は内外面とも明赤茶褐色、外面に黒斑がある。85003 土師器の高壺の脚部である。外面は綴刷毛目、内面は横からの範削りである。脚径 10.4cm。色調は内外面とも明肌色を呈する。

S X - 03 出土の土器 (Fig. 55 · 60)

Fig. 55 の 3 点 (89110 ~ 89112) と Fig. 60 の 2 点 (89007 · 89049) が出土した。85110 · 111 2 点とも土師器の中型壺で口縁が「く」字状を呈する。頭部は 89111 の方が良く縮まる。外面は綴刷毛目の後ナデ調整、内面は口縁部がナデ・胴部が範削りである。110 の口径 16.2cm、111 が 22.2cm。色調は両方とも内外面とも明褐色を呈する。89112 土師器の壺で底部が欠損している。外面とも範削き調整を行っている。口径 11.6cm。色調は内外面とも暗黒褐色を呈する。89007 須恵器の壺蓋である。受部が高く 2.1cm を測り、天井部は左回りの範削りで、受部は回転ナデで仕上げている。口径 13cm、器高 4.2cm。色調は外面が灰色、内面が白灰色を呈する。89049 須恵器の壺の口縁部である。頭部が縮まり口縁が大きく外反する。外面は口縁部付近は回転ナデ仕上げ、胴部は平行叩き、内面は胴部から同心円文の叩きを施している。口径 16.2cm。色調は内外面とも淡灰色を呈する。

S X - 06 出土の土器 (Fig. 55 · 60)

Fig. 55 の 3 点 (89050 · 89052 · 89053) と Fig. 60 の 1 点 (89008) が出土した。89050 これは S X - 06 と S X - 07 との遺物が接合したものである。土師器の中型壺で口縁がほぼ直立し、口唇部が僅かに外反する。胴部は撫肩で、底部を欠損する。外面は荒い刷毛目調整、内外面の口縁部はナデ・内面胴部は指押さえと範削りを行っている。口径 19.2cm、残存高 23.5cm。色調は内・外面とも暗褐色を呈し、内面の一部に黒斑がある。

89052 土師器の壺の口縁部で、表面が摩滅して調整は不明。口径 21.8cm。色調は内外面とも黄褐色 + 淡赤褐色を呈する。89053 土師器の胴部から底部にかけて遺存していた。底部は丸底で、内外面とも刷毛目を施し、最大径 18.2cm を測る。色調は外面が暗褐色と黒斑、内面が黒褐色を呈する。

89008 須恵器の壺身で底部を欠損している。受部がやや内向しながら真直ぐに立ち上がり高さ 1.8cm を測る。外面は左回転の範削りと回転ナデ、内面は回転ナデを施す。口径 11.6cm、胎土は 0.5mm ~ 1mm 大の砂粒を多く含む。色調は内外面とも明白灰色を呈し、外の一部に黒斑がある。焼成は良好。

S X - 07 出土の土器 (Fig. 55 · 60 PL. 30)

Fig. 55 の 4 点 (89051 · 89054 ~ 89056) と Fig. 60 の 1 点 (89009) が出土した。89051 S X - 06 と 07 から出土したものが接合した資料である。土師器の中型の壺で胴部下は欠損している。11 縁部は外反しながら口唇部で更に大きく跳ねる。外面はかなり摩滅しているが、一部に刷毛目が残っている。内面の口縁はナデ、胴部は範削りを行っている。口径 20.2cm で、色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈する。89054 土師器の中型壺で、口縁部のみである。外面は刷毛目、内面はナデ + 範削りを施す。口径 17.6cm を測る。胎土・色調は 89051 に類似する。89055 土師器の小型丸底壺で口縁が欠損し

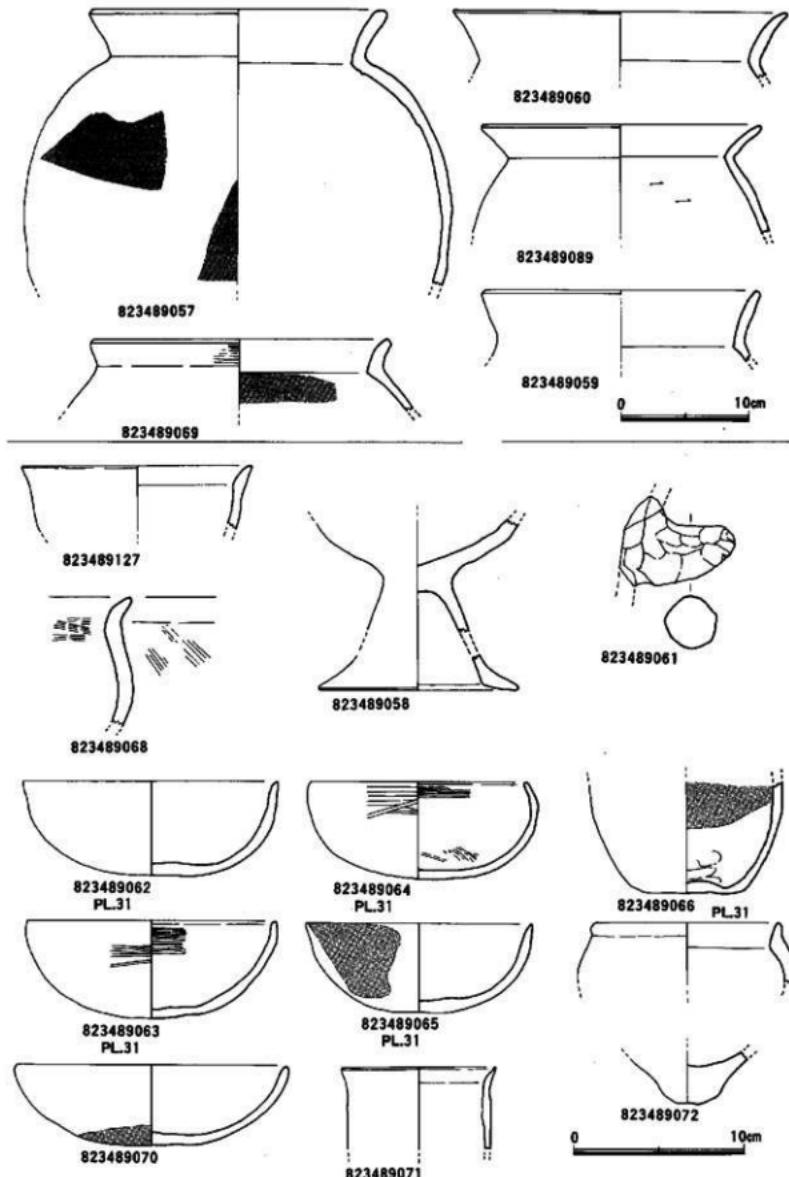


Fig. 56 VII区出土遗物实测图—2(缩尺1/3,1/4)

ている。内面はナデで煤が付着している。外面は刷毛目で一部に煤が付着している。**89056** 振の把手である。**89009** 須恵器の坏蓋である。天井部は右回りの箇削りを行っており、受部は回転ナデで仕上げている。口径14.3cm、器高4.8cmを測る。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は内外面とも青灰色を呈する。

S X - 10 出土の土器 (Fig. 56) S X - 10からは**89127**を1点だけ図示した。上部器の鉢形土器で腹部下はない。胴部から立ち上がり口唇部で更に外反する。外面はナデ、内面はナデ+箇削りを行っている。口径は13.4cmを測る。胎土は細砂・赤色粒を含み、色調はない外面とも明茶褐色を呈する。

S X - 12 出土の土器 (Fig. 56 - 60)

Fig. 56に図示した2点(89057・89058)とFig. 60に図示した1点(89011)が出土した。

89057 土師器の中型壺で底部を欠損する。口径は21.8cmで、外面は摩滅が著しいが一部に刷毛目が認められる。内面は横ナデ+箇削りを行っている。**89058** 土師器の高坏で口縁部が欠損している。調整は摩滅により不明である。脚径11.6cm。**89011** S X - 12とS X - 13から出土した資料が接合したもので、須恵器の高坏である。脚部は欠損しているが、坏部が残る。受部は高く、1.8cm程ある。口縁部付近は左回りの回転ナデを施し、底面にはカキ目を施す。口径10.5cm、坏部高4.2cmを測る。脚部の一部が現存するが、方形の透かしがある。色調は内外面とも明青灰色を呈する。

S X - 13 出土の土器 (Fig. 56 - 60 - 61 - 62 PL. 30)

Fig. 56の4点(89059～89061・89089)とFig. 60～62の16点(89012他)が出土した。

89059・60 2点とも上部器の中型壺の口縁部で胴部ドを欠損する。11径は59が22cm、60が26cmである。両方とも外面はナデ仕上げ、内面は横ナデ+箇削りを行っている。**89089** 土師器の壺の把手である。**89012** 須恵器の高坏である。脚部は欠損しているが、坏部が残る。口縁部下に三条沈線を廻らし二本目と三本目の間に波状文を施す。他は回転ナデを施し、全体的に深い緑色の自然釉がかかる。口径15.2cm、坏部高7cmを測る。**89013・14・43・134** 4点とも高坏の脚部で、長方形・三角形・円形の透かしが入るタイプで、14は陶質土器である。13の脚径は13cm、14は8cm、134は11.6cm、43は9.4cmである。調整は回転ナデで、胎土は精製された粘土を使用している。**89047** 高坏の坏部と思われる。胴部に三条の沈線を廻らし、口縁部は外に跳ね上げている。口径は10.8cmで胎土・焼成・文様等から陶質土器と考えられる。**89015・16** 2点は坏身である。15はS X - 13・15から出土した資料が接合したものである。15の口径は10.5cm、16は11.2cm、器高は15が4.9cm、16が5.5cm、受部は15が1.65cm、16が1.95cmである。両方とも精製された粘土を使用し、箇切り部分が高く、左回りの回転によって削り、ナデを行っている。**89010・17～20・38・39・45** 8点は坏蓋である。全体的に受部が高く、口縁端部はシャープな仕上げである。箇削りは右回転が17・19・20・38・45で他は左回転である。口径・器高は10が13.6・3.9cm、17が12.4・3.9cm、18が12.5・4cm、19が12.8・4.9cm、20が12.6・5.1cm、38が13.4・4.4cm、39が12.2・4.4cmである。45はつまみ付の坏身で、つまみ中央部は窓むタイプである。全体的に精製された粘土を使用しており、自然釉がかかる38以外は灰色を呈する。**89040** 須恵器の小型壺である。胴部に二条の沈線を廻らしその間と口縁部に波状文を配する。内側底面は指押えを行う。外面と、内面口縁部はナデ仕上げを行っている。口径8.1cm、器高8cm、胴部最大径10.6cmである。**89133** 須恵器の特殊器台で坏部が欠損している。恐らく壺状になるタイプと思われる。脚部から内湾しながら立ち上がるが、二条の沈線により凹凸をつけ、三角突起となす。それをほぼ等分に配置し三段、三区画を造る。脚部の透かし部分と交差する部位に長方形の透かしを配列する。透かし以外は櫛描波

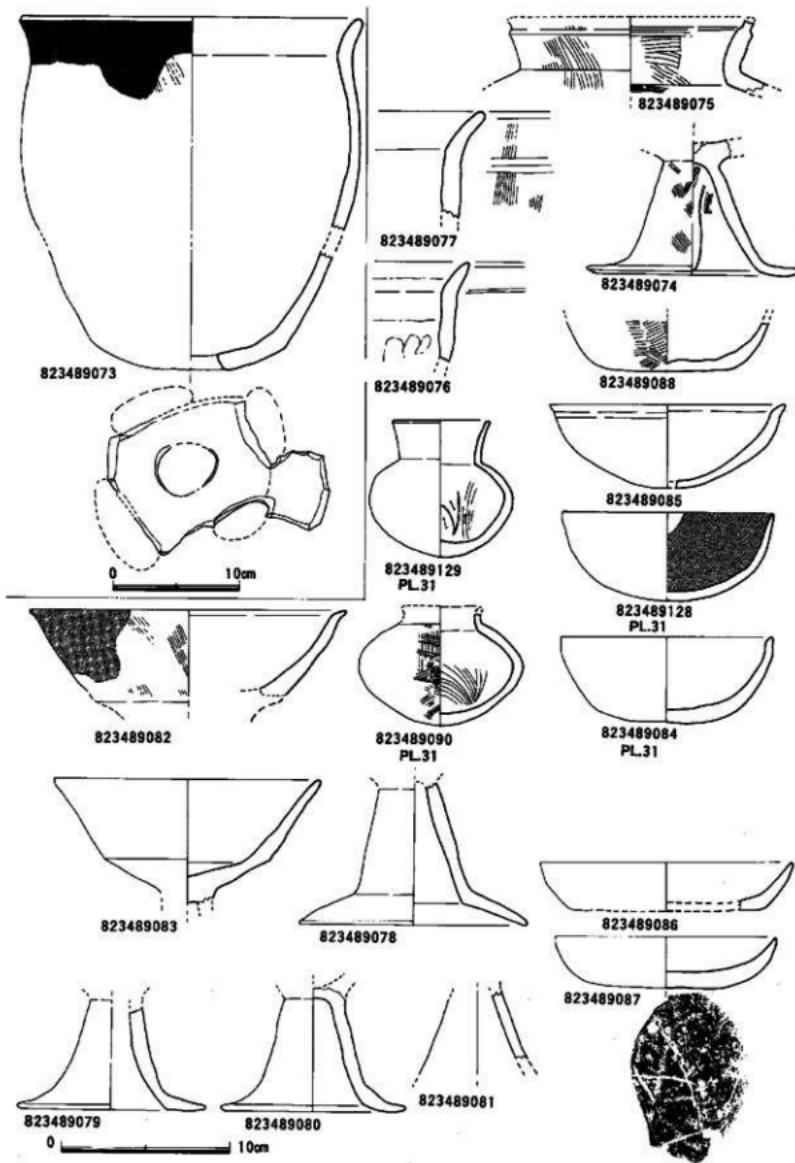


Fig. 57 VII 区出土遺物実測図-3 (縮尺1/3,1/4)

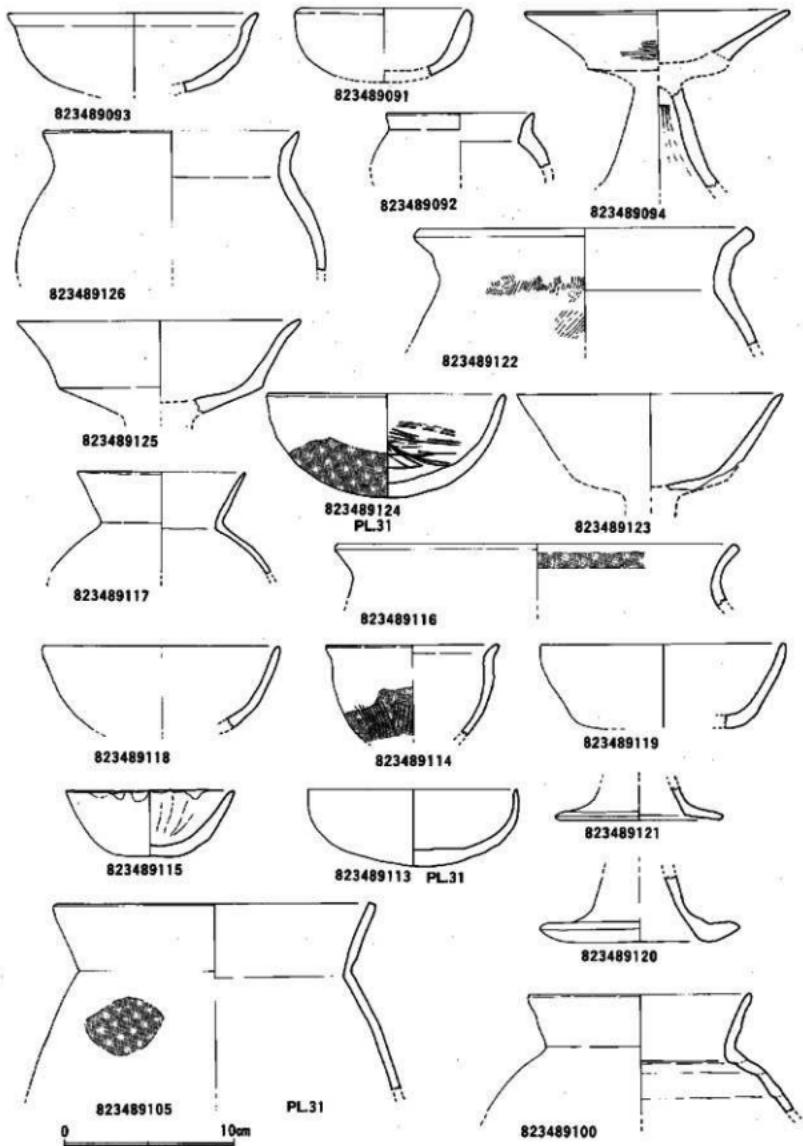


Fig. 58 VII区出土遺物実測図一(縮尺1/3)

状文にて装飾している。内面は横ナデできれいに仕上げている。口径23.8cm、残存高34.7cm、中央突帯部径12.4cm、透かし三角形は底辺2.5cm、高さ3~3.5cm、長方形の長さ3.7~4×0.7cmを測る。

S X-15 出土の土器 (Fig. 56・61 PL. 30)

Fig. 56の8点(89062~069)とFig. 61の11点(89021~028・037・048・135)が出土した。

89068・69 2点とも土師器の壺で、068は胴部から内湾しながら直線的に立ち上がり口縁部で外反する。069は胴部から大きく内湾し、頸部で外に開く「く」字状になるタイプである。068は内外面とも刷毛目、内面胴部は範削り、069は内面は範削り、外面が刷毛目、胴部を磨きで仕上げている。口径10.6cmが23.8cm。**89062~065** 4点とも土師器の壺である。口縁が内に入るタイプ063・064と外に広がるタイプ062・065とに区別される。これらのタイプは調整でも同一手法をもつ。063タイプは内外面との窓磨きを施すのに対して062タイプはナデ仕上げである。062の口径・器高は15.5cm、063は14.6・5.7cm、064は12.6・5.8cm、065は13.2・5.2cmを測る。**89066・067** この2点は土師器の壺形土器である。066は口縁部を欠損。平底を呈し、外面に火を受けた痕跡がある。内面は指押えと範削りを行い、外面はナデ仕上げを行っている。底径6cmを測る。067は底部を欠損し、口縁はほぼ直立するタイプで、外面ナデ、内面範削りを施す。口径10.6cmを測る。**89022~025・037** 5点は須恵器の壺身である。受部が高く、口唇部もシャープな造りである。調整は右回りの回転による範削りとナデである。口径・器高は022が11.6・4.5cm、023が10.8・4.8cm、024が11.4・5cm、037が11.3・5.4cmを測る。胎土は精製された粘土を使用しており、色調も青灰色・灰色を呈する。037に自然釉がかかる。**89026~028・135** 4点は須恵器の壺蓋である。135を除いて受部が高く、口縁端・後等がシャープな造りである。135はつまみ付の壺蓋である。つまみ上部が平坦で僅かに内に窪む形状を呈する。調整は右回りの回転による範削りとナデである。口径・器高(推定)は026が12.4cm、027が12.6・3.5cm、024が14.4・3.9cmを測る。胎土は精製された粘土を使用しており、色調も青灰色を呈する。026に自然釉がかかる。026と037はセットと考えられる。**89021・048** 2点とも須恵器の高壺である。021は壺部、048は脚部である。021は胴部下に一条の沈線を巡らし口縁部と胴部下に波状文を配する。口径は10.3cmで、口唇部は窪む。調整は右回りの回転ナデである。048は脚部で壺部は欠損している。口径13cmを測る。

S X-16 出土の土器 (Fig. 56・57)

Fig. 56の4点(89070~073)が出土した。**89070** 土師器の壺である。口径16cm、器高4.7cmを測り、調整は全体的にナデ仕上げである。**89071** 土師器の鉢形土器である。胴部以下が欠損する。表面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面はナデと範削りを施す。胴部から垂直に立ち上がり口縁部が外反する。口径は9cmで内外面とも暗赤褐色を呈する。**89072** 土師器の手すくね上器の底部である。

89073 十輪器の瓶である。胴部で接合できなかったが、同一個体であることから復元した。底部には5個の楕円形の穴を開け、端部は指押さえを行っている。胴部から緩やかに外反しながら胴部上位で内向し、頸部で緩やかに外反し口縁端部を丸く納めている。外面は刷毛目を施し、内面は口縁がナデ、胴部が範削り。外面口縁部に黒斑がある。内外面とも明褐色を呈し、口径26.6cm、復元器高28cm。

S X-17 出土の土器 (Fig. 57・61)

Fig. 57の4点(89074~077)とFig. 61の1点(89029)が出土した。**89074** 土師器の高壺で壺部が欠損している。外面は摩滅が著しいが一部に刷毛目が残る。内面はナデ・刷毛目を施す。口径12.8cmを測る。**89075** 土師器の特殊な壺である。口縁部だけであるが大きく胴の張るタイプである。口唇部が欠損しているが、一条の沈線を巡らすと思われる。須恵器の壺にあるタイプである。内面とも刷毛目を施し外面はその後ナデ調整を行っている。色調は淡白肌色を呈する。推定口径14.4cm。**89076・077** 土師器の壺の破片である。形態的に類似するもので、076は内外面ともナデ仕上げ、

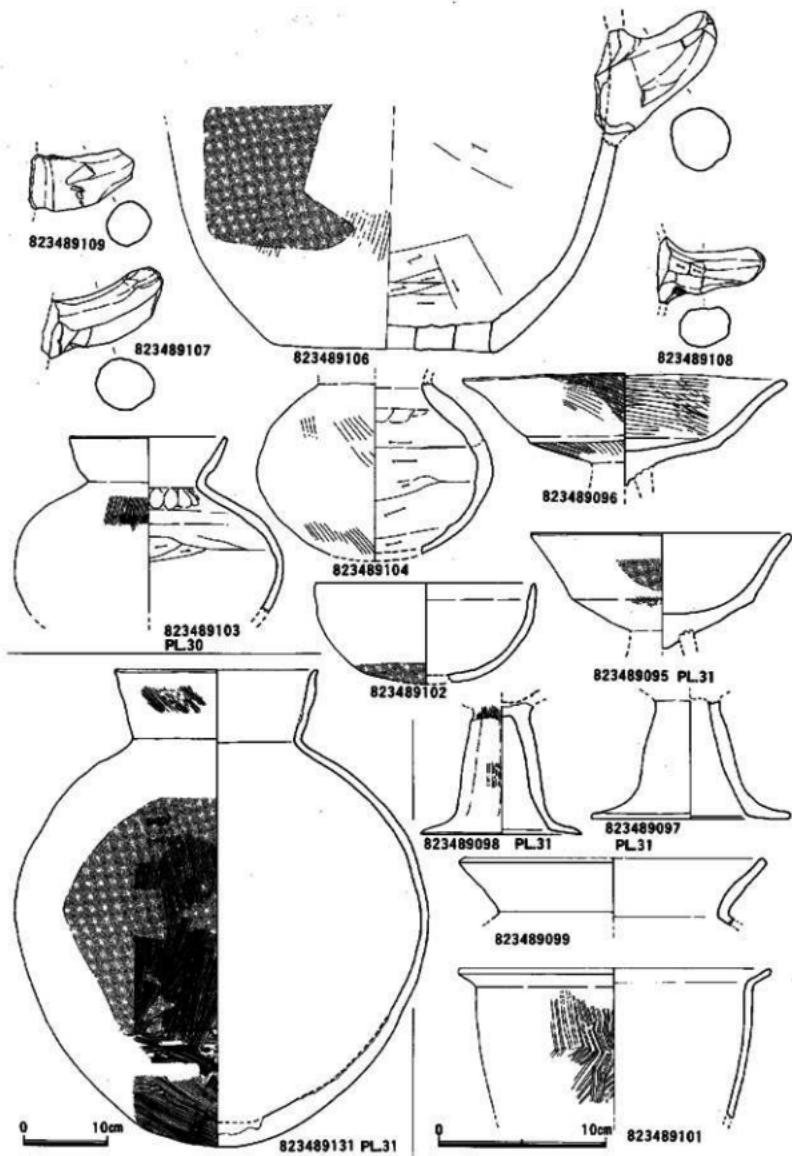


Fig. 59 VII 区出土遺物実測図-5 (縮尺1/3,1/6)

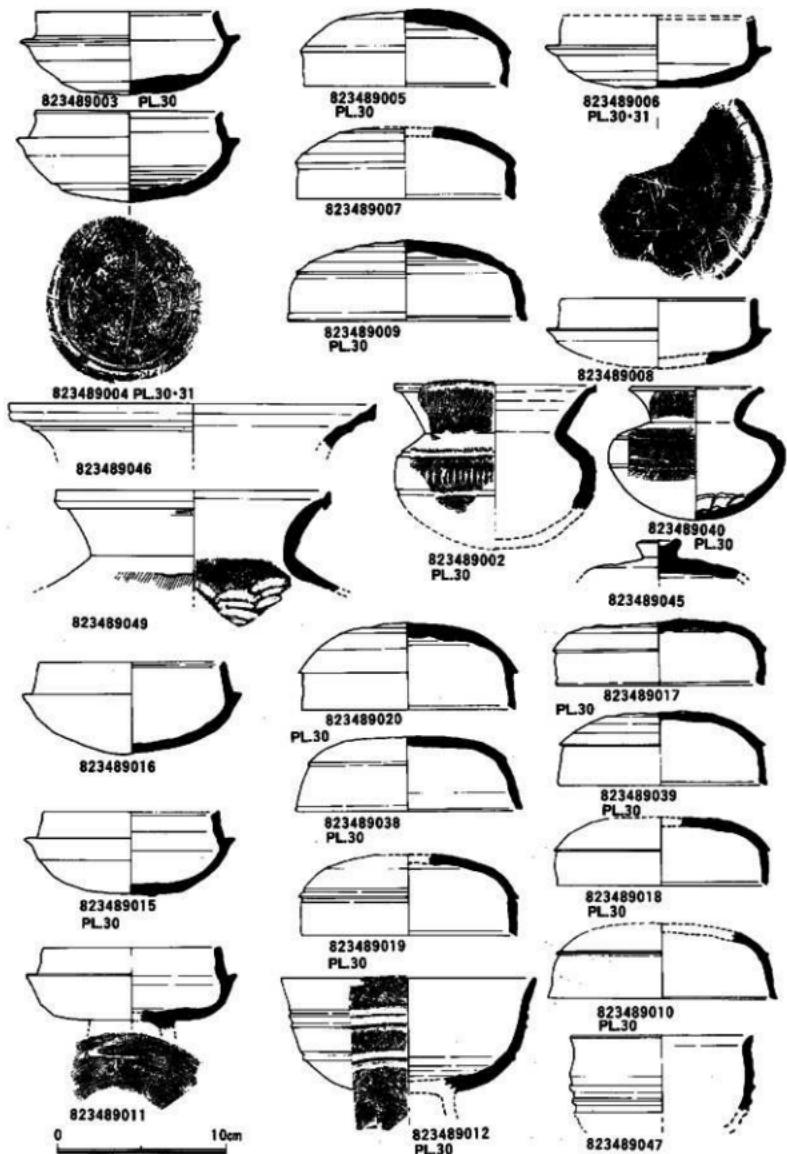


Fig. 60 VII区出土遺物実測図-6 (縮尺1/3)

077は外面が刷毛目・ナデ、内面はナデと範削りを施す。89029 須恵器が1点だけ出土した。坏蓋で左回転の範削り、ナデを施している。復元口径は13.4cm、復元器高は4.35cmである。

S X-18 出土の土器 (Fig. 57 PL. 31)

89078～088・090・128・129 (Fig. 57) の14点が出土した。89078～89083 高坏の・坏部と脚部である。078～081は脚部のみで、脚の形態がそれぞれ違う。078は脚が途中から大きく開くタイプ、079は下についてから開くタイプでそれぞれの端部はシャープである。これに対して080は脚が下についてから開くタイプではあるがシャープさがない。脚径は078が13.4cm、079が11cm、080が11cmである。082・083は坏部であるが、082の口縁端部が外反するに対して083は直線的に開く。調整は082は外面刷毛目、内面ナデ仕上げ、083は内外面ともナデ仕上げである。口径は082が19cm、083が16cmを測る。

084～088・128は壺形土器である。086・087は皿状を呈するが、一応壺とした。口縁部が外反するもの(085・128)と内湾するもの(084)とに分けられる。調整は基本的にナデであるが、088は外面が刷毛目を施している。底部は088・084が平底、085・128が丸底である。口径・器高は084が12.6・5.3cm、085が14.5cm、128が12.6・5.3cmを測る。086は口径15cm、087が13・3.2cmで底部に×の範記号がある。

S X-19 出土の土器 (Fig. 58)

89091～094 (Fig. 58) の4点が出土した。須恵器の出土はない。89091・89093 壺形土器で、093の口縁端部が外反するに対して091は直線的に開き丸みをもつ。調整は内外面ともナデを施す。口径・器高は091が10.4cm、093が14.8cmを測る。89092 土師器の壺形土器の口縁部である。頸部が厚く外反しながら外へ延びるが端部は鋭く納める。調整はナデ仕上げ、口径は8.8cmを測る。

89094 高坏の坏部と脚部であるが、坏部は底面が、脚部は裾部がない。しかし同一固体であることから図上で復元した。調整は坏部が範削りの後ナデ、脚部はナデと範削りを施す。口径16cm。

S X-21 出土の土器 (Fig. 58)

89125・126 (Fig. 58) の上師器2点が出土した。須恵器の出土はない。89125 高坏の坏部である。ナデ調整と思われるが、器面磨耗のため定かでない。口径16.8cmを測る。89126 壺形土器の口縁部である。脚部の半分から下は欠損している。外側の器面調整は磨耗しているため不明。内面はナデと範削りを行っている。内面に焼が付着し黒色に変化している。口径は15.2cmを測る。

S X-23 出土の土器 (Fig. 58・61 PL. 30)

89122～124・89091～094 (Fig. 58) の七師器3点と89030・031・041 (Fig. 61) の須恵器3点が出土した。89122 壺形土器の口縁部である。頸部はあまり綺まらず外反しながら口唇部でさらに外へ延び端部を丸く納める。外側の器面調整はナデと細かい刷毛目、内面はナデと範削りを行っている。口径20.4cm。89123 高坏の坏部である。内外面の器面調整は磨耗しているため不明。口径16cm。

89124 壺形土器である。器面調整は外面がナデと範削り、内面はナデと範状工具による磨き及びナデを施す。口径は14.2cm、器高6.2cmを測る。89030 須恵器の坏身である。受部は高く2cmを測り、内面回転ナデ、外面左回りのロクロ回転による範削りとナデを行っている。底部はないが、復元器高は5cm、口径11.4cmを測る。89031 つまみを持つ坏蓋である。つまみは中央が凹むが中心で僅かに上がるタイプで、受部は高い。外面は左回りのロクロ回転によるナデ・範削り、内面は回転ナデと押えを行っている。口径12.8cm、器高5.1cmを測る。89041 小型の高坏の坏部と思われる。形状がS X-15から出土した89021に類似する。沈線を一条巡らすが、その下に櫛波波状文を施す。口径12cm。

S X-24 出土の土器 (Fig. 58 PL. 31)

89113～118 (Fig. 58) の土師器6点が出土した。須恵器の出土はない。89113・115・118 3点とも壺形土器である。113はS X-24と25との資料が接合したものである。器面調整は磨耗の

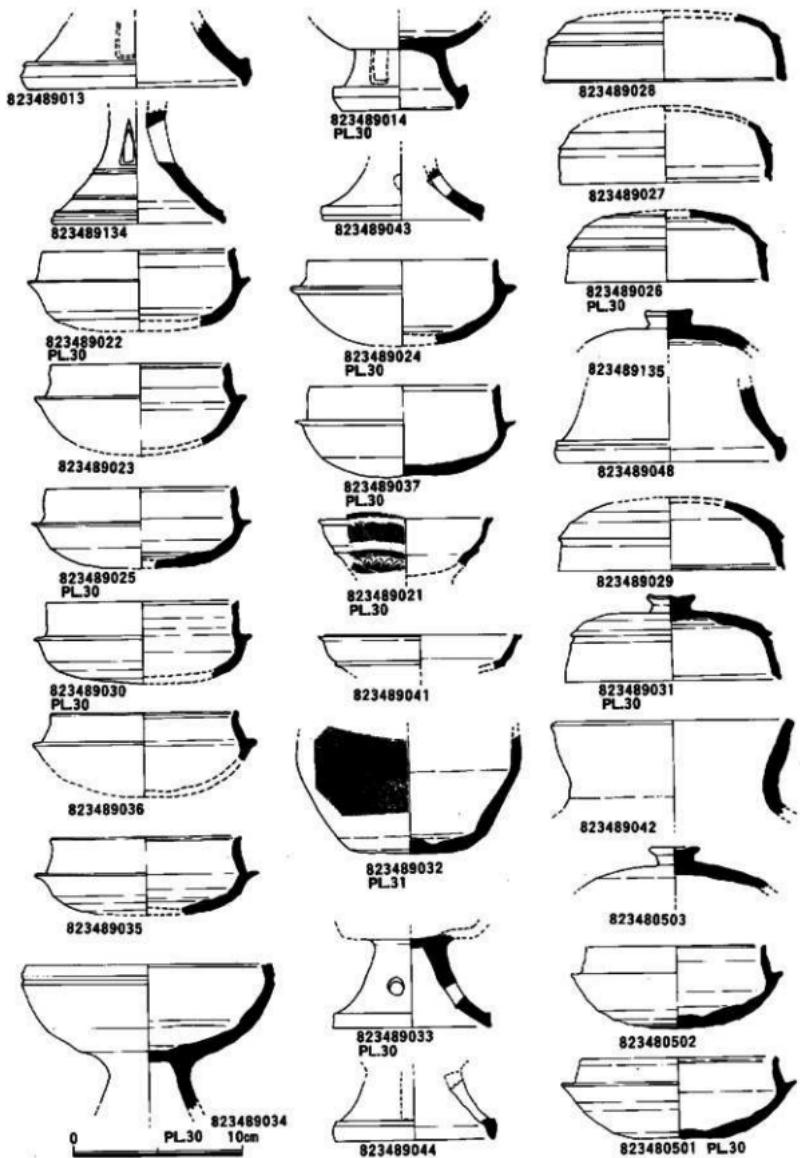


Fig. 61 VII区出土遺物実測図-7(縮尺1/3)

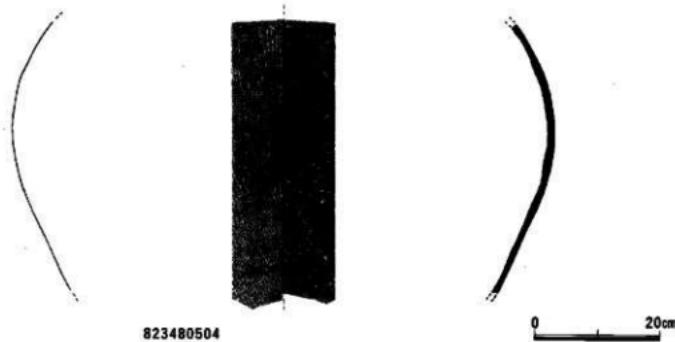
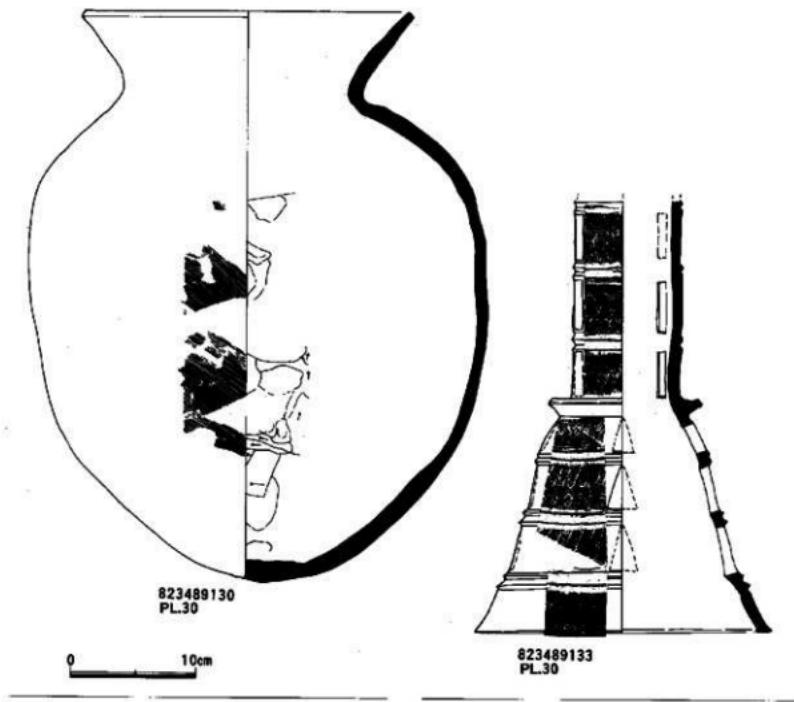


Fig. 62 VII区出土遺物実測図一8(縮尺1/4,1/8)

ため不明。口径12.6cm、器高4.6cm。115は口縁に指揮えの痕跡が残りその上からナデを施す。口径10cm、器高4cm。118は底部が欠損したもので、口径14cmを測る。89114 鉢形土器で、底部が欠損している。胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、端部を鋸くまとめる。外面は刷毛目とナデ、内面はナデ調整を施す。口径10.4cm。116は壺形土器の口縁部である。口径23.8cm。117は壺形土器の口縁部である。「く」字口縁を呈し、外面ナデ、内面ナデと範削りを施す。口径10cm。

S X - 25出土の土器 (Fig. 58・61 PL. 31)

89119～121 (Fig. 58) の土師器3点と89032・042 (Fig. 61) の須恵器2点が出土した。89119 土師器の壺形土器である。調整は器面摩滅のため不明。口径14.8cm。89120・121 高坏の脚部である。脚径は120が12cm、121が10cm。89032 須恵器の壺形土器の底部である。口縁部が欠損している。器面調整は外面が回転ナデと撚拂波状文を配し、内面は回転ナデである。底径7cm。胴部下に粘土帯を貼り付けた痕跡がある。89042 壺形土器の口縁部である。口径14.4cmを測る。

S X - 27出土の土器 (Fig. 58・59・61・62 PL. 30・31)

89095～109・131 (Fig. 58・59) 16点の土師器と89033～036・044・130 (Fig. 61・62) 6点の須恵器を図示した。

土師器 壺形土器 99・100・105・131の4点を図示した。99・100・105は口縁が「く」字口縁となるタイプである。外面はナデ調整、内面がナデ・範削りを行っている。口径は99が18.4cm、100が13.4cm、105が19.4cmである。131は全体的に器壁が薄い。1cm前後であるが、焼成は良い。口縁部がやや外に傾くがほぼ垂直に近い。外面は細かな刷毛目調整を行っている。内面は剥落しているため不明であるが、口縁部はナデ仕上げである。口径24.4cm、器高57.3cm、最大径4.9cmを測る。鉢形土器 101の1点を図示した。底部は欠損しているが、頸部が跡まらず口縁は大きく外へつまみ出されている。外面の器面調整は緩と斜めの叩きである。内面は丁寧なナデ仕上げを行う。口径25cm。高坏 坏部2点と脚部2点を図示した。095の外面は横ナデと刷毛目、内部は磨耗しており不明。口径15.6cm。096は内外面とも刷毛目調整を施し、口径19.6cmを測る。097・098は脚部で、097の脚部径12cm、098が9.6cmである。

壺形土器 103・104を図示した。103は底部を欠損、104は口縁部を欠損する。両方とも外面は刷毛目、内面はナデと範削りを施す。103の口径は9・6cmを測る。壺形土器 102の1点を図示した。底部を欠損するが、全容は知り得る。内外面ともナデ調整で、口径13.2cm、器高6cmを測る。

瓶 89106～109 107～109は瓶の把手である。106 口縁部と左把手部分を欠く。底部に楕円形を呈する穴を有する。外面は刷毛目で、一部に黒斑がある。内面は範削りを施す。底径13cmである。

須恵器 坏身 035・036の2点を図示した。035は底部を欠損するが、受部が高く2.1cmで、シャープな造りである。口径11.4cmで、右回転のロクロで範削り・ナデ調整を行っている。036はほぼ口縁部のみで、035ほど受部は高くない。口径11.2cmである。高坏 033・034・044 033・044は脚部である。033には外から穿った3個の穿孔(1×1cm)がある。両方とも内外面とも回転ナデを施す。034は脚部が欠損する陶質土器である。口縁外面に一条の沈線を巡らし、口縁端は内湾する形状を呈する。口径14.6cm。

壺形土器 130 瓦質に近い陶質土器である。IX区のS D - 07出土の資料と接合した。底部は丸底で、形は張る。頸部は締まり口縁は大きく外反する。外面は細かな刷毛目、内面は指ナデ・範削りと回転ナデである。口径26.3cm、頸部径18.9cm、最大径36cm、器高45.9cmで焼成は甘く、淡青灰色。

Pit - 02 出土の土器 (Fig. 61・62 PL. 30)

S X - 12 を切る形で検出されたPit - 2からは、80504の大型壺形土器の胴部を打ち欠き外面を下にして検出されたが、その直上から80501の坏身も出土した。口径11.4cm、器高4.8cmで、左回りの回転でナデ・範削りを施す。80504 外面縦方向の叩き、内面同心円文の後ナデ、最大径86.4cmで自然釉あり。

第六節 第二次調査IX区 一古墳時代の遺構一

検出遺構

IX区からは堅穴住居址・溝・掘立柱建物・不整形土壙・井戸状遺構等が検出された。IX区は7,100m²を調査し、全体で一番広域を行っている。南側には市道田・飯盛線(吉武遺跡群I 福岡市埋蔵文化財調査報告書 127集 1986年 福岡市教育委員会刊)の遺構があり、さらに南側には畠区が抜がる。IX区はSD-01(旧河川:おそらく旧日向川及びその支流と思われる)とSD-02(SD-01と同様に旧河川)に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代初期にかけての遺構が重複している。特に古墳時代初期の遺構はIX区全域に広がっている。

住居址 (Fig. 63・65 Tab. 3 PL. 19・20)

IX区から1軒だけ検出された。全体の削平が著しいためかろうじて残ったものと思われる。このため1間×1間の掘立柱建物は堅穴住居址の可能性が高い。

S C - 80 調査区西側中央部から検出された。中央部を後世の溝により切られているが、このほかには方形及び円形の柱穴が認められるが他の切り合い関係は無い。形状は長方形を呈し、四隅にベット状遺構を配する。ベット状遺構の形状は長方形を呈し、その面積は①が2.6m²・②が3.6m²・③が3.15m²・④が3.15m²である。主軸は北東-南西、長軸方向はN-45°-Eである。規模は6.2m×7.7mで、床面積47.74m²を測る。遺構の遺存状態は悪く深さ0.14mしかない。主柱穴は3穴で、円形3(他は新しい方形の柱穴で破壊されている)で構成される。出土遺物は細片であるが、須恵器・土師器片が覆土内より出土している。

掘立柱建物 (Fig. 63～64・66～76 Tab. 9～13 PL. 19・20)

IX区より検出された掘立柱建物は64棟であるが、図示したのは61棟である。このほかにも時期が確定できない建物もあるが、今回は除外した。また、柱穴内の覆土から出土した土器を基準とはせず、柱根内から出土したものを基準としているため、時期が多少下がる可能性がある。建物の内、1間×1間も図示したが、削平が著しいため住居址の柱穴の可能性もある。遺構番号はSB-50からを古墳時代の掘立柱建物の番号としている。挿図に沿って説明する。

1間×1間の掘立柱建物 (Fig. 66・67 Tab. 9～13 PL. 19・20)

SB-63～67, 70, 73～75, 79, 80, 91, 95, 96 (Fig. 66・67 Tab. 9 PL. 19・20)

1間×1間は14棟検出した。Fig. 66 SB-63 調査区中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-64・62との間に切り合い関係がある。桁行・梁行の間隔・柱穴の大きさ・深さはTab. 9～13に表示しているが、形状は円形であり、全体的に著しく削平を受けており遺存状態は悪い。主軸は北-南、長軸方向はN-4°30'-Wである。規模は2.5m×3.1mで、床面積7.75m²を測る。柱根内より土師器片が出土している。SB-64 調査区中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-63・65・66との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は北-南、長軸方向はN-6°-Eである。規模は2.61m×3.0mで、床面積7.83m²を測る。柱根内より土師器片が出土している。SB-65 調査区中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-64・66・67との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。③を除いて二段掘りをしている。主軸は北-南、長軸方向はN-3°30'-Eである。規模は2.38m×3.1mで、床面積7.38m²を測る。SB-66 調査区中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-64・65との間に切り合い関係がありSB-63と接する。柱穴の形状は円形である。主軸は北東-南西、長軸方向はN-43°-Eである。規模は2.90m×3.1mで、床面積8.99m²を測る。SB-67 調査区中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-65・68との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であ

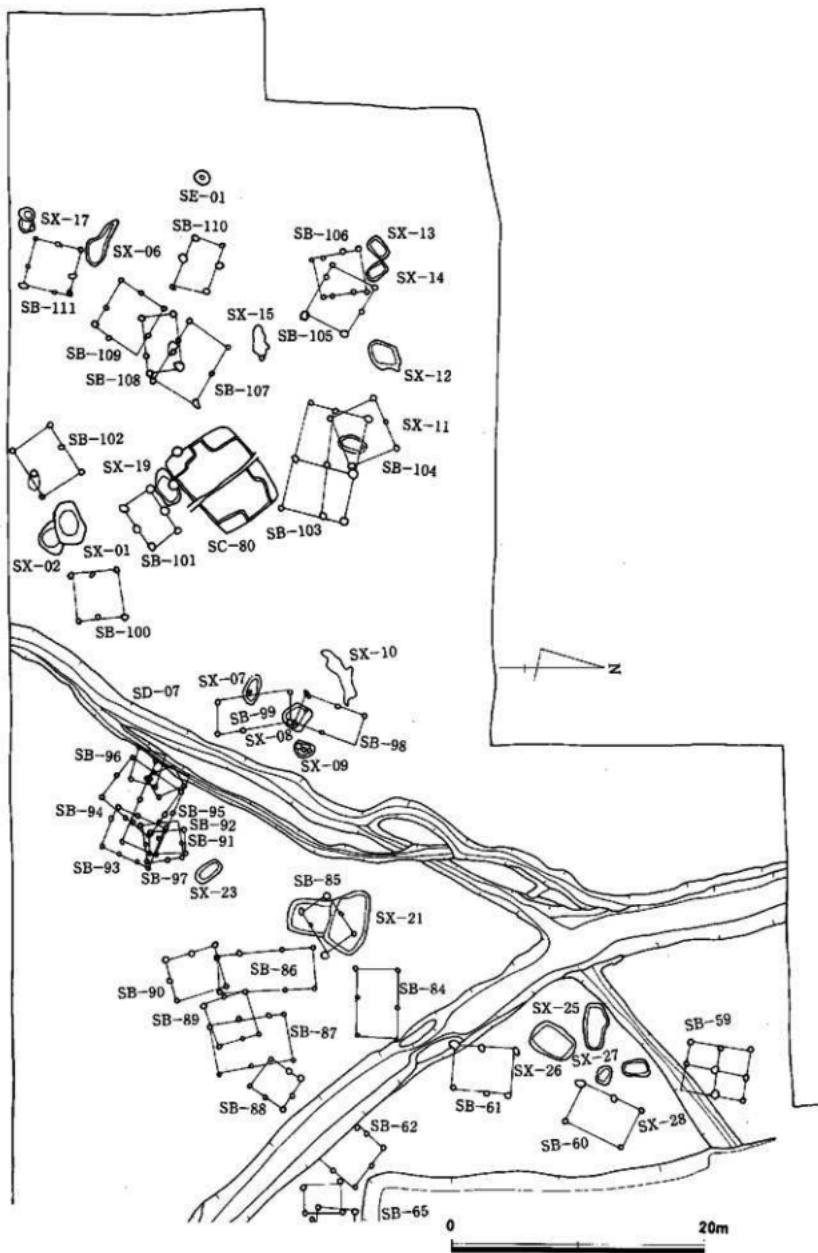


Fig. 63 IX区構造検出状態-1(縮尺1/400)

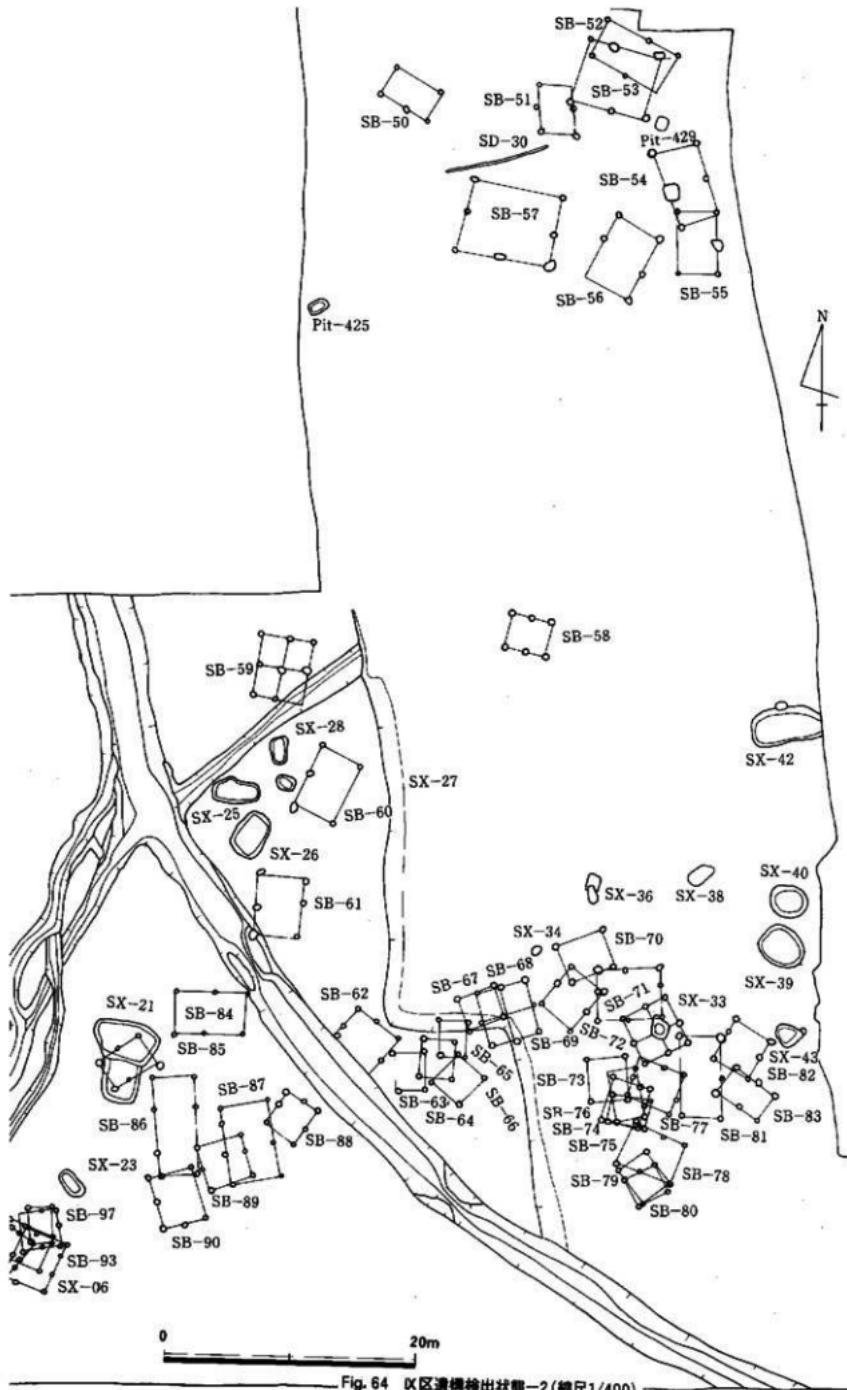


Fig. 64 IX区構造検出状態-2(縮尺1/400)

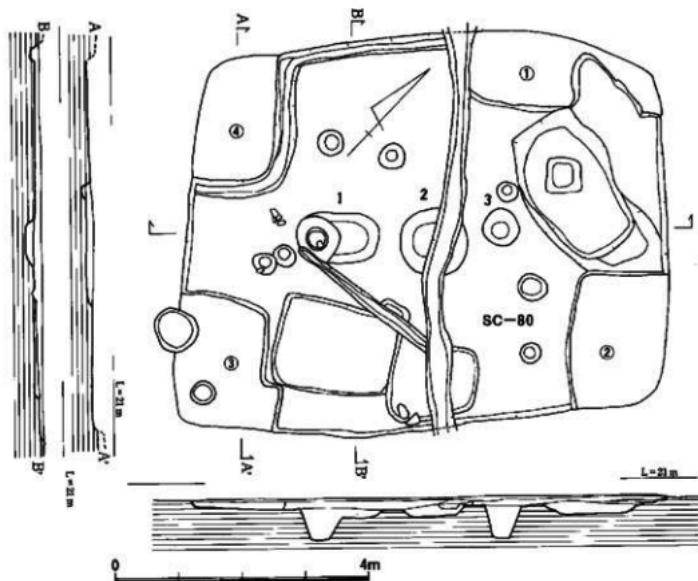


Fig. 65 IX区検出堅穴住居社実測図(縮尺1/80)

る。主軸は北東—南西、長軸方向はN-61°-Eである。規模は2.7m×3.1mで、床面積8.37m²を測る。

S B - 70 調査区南東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 69・71との間に切り合い関係がある。隣接してS X - 34がある。柱穴の形状は円形である。主軸は東—西、長軸方向はN-69°-Eである。規模は3.16m×4.04mで、床面積12.77m²を測る。**S B - 73** 調査区南東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 74・76との間に切り合い関係があり、SB - 77と接する。柱穴の形状は円形である。主軸は北—南、長軸方向はN-4°-Wである。規模は3.0m×3.42mで、床面積10.26m²を測る。

S B - 74 調査区南東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 73・76・78との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は北—南、長軸方向はN-13°30'-Eである。規模は3.06m×3.56mで、床面積10.89m²を測る。

Fig. 67 S B - 75 調査区南側東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 73・74・76・77との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形である。主軸は東—西、長軸方向はN-79°-Wである。規模は2.34m×3.02mで、床面積7.07m²を測る。柱窓内より土師器片が出土している。

S B - 79 調査区南側東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 60・78・80との間に切り合い関係があり、柱穴の形状は円形である。主軸は北西—南東、長軸方向はN-36°30'-Wである。規模は2.7m×3.24mで、床面積8.75m²を測る。柱窓内より土師器片が出土している。

S B - 80 調査区南側東部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB - 78・79との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、主軸は北東—南西、長軸方向はN-63°30'-Eである。

規模は $2.5m \times 2.9m$ で、床面積 $7.25m^2$ を測る。SB-91 調査区南側東中央部市道田・飯盛線の隣接部分から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-93・97・94・95との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、主軸は北-南、長軸方向はN-2°-Wである。規模は $1.9m \times 3.0m$ で、床面積 $5.7m^2$ を測る。柱痕内より土師器片が出土している。SB-95 調査区南側中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-92・94・96との間に切り合い関係があり、SD-07の支流により切られている。このため柱穴④は検出されなかった。柱穴の形状は円形である。主軸は北西-南東、長軸方向はN-27°-Wである。規模は $1.9m \times 2.24m$ で、床面積 $4.3m^2$ を測る。

SB-96 調査区南側中央部から検出された1間×1間の掘立柱建物である。SB-92・94・95との間に切り合い関係があり、SD-07の支流により切られている。柱穴の形状は円形である。主軸は北西-南東、長軸方向はN-74°30'-Wである。規模は $2.04m \times 2.92m$ で、床面積 $5.96m^2$ を測る。

1間×2間の掘立柱建物 (Fig. 67 ~ 72 Tab. 9 ~ 12 PL. 19 ~ 20)

1間×2間の掘立柱建物はIX区で一番多く30棟検出された。

SB-50 調査区北側隅から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形であるが、削平が著しい。長軸の⑥が現存しないが、削平が著しいため削平された可能性が高い。主軸は北西-南東、長軸方向はN-59°-Wである。規模は $2.68m \times 4.04m$ で、床面積 $10.83m^2$ を測る。SB-51 調査区北側中央部から検出され、SB-53との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、東上柱④が削平され検出されていない。主軸は北-南、長軸方向はN-3°-Eである。規模は $2.94m \times 3.96m$ で、床面積 $11.64m^2$ を測る。柱穴③と⑥は二段掘り、他は一段掘りである。SB-52 調査区北側東隅から検出され、SB-53との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、南東主柱⑥が削平され検出されていない。脇柱があるのは①と②である。主軸は北西-南東、長軸方向はN-63°-Wである。規模は $3.3m \times 6.44m$ で、床面積 $21.25m^2$ を測る。柱穴①と②は二段掘り、他は一段掘りである。

Fig. 68 SB-53 調査区北側東隅から検出され、SB-51・53との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは①だけである。主軸は北西-南東、長軸方向はN-76°-Wである。規模は $5.3m \times 6.04m$ で、床面積 $32.01m^2$ を測る。柱穴②と③は二段掘り、他は一段掘りである。柱穴③と⑥、特に③は柱穴②との距離は $3.78m$ あるのに対して柱穴④との距離は $1.92m$ しかない。これはSB-50にも見られたことで、ここの特長かもしれない。SB-54 調査区北東側東隅から検出され、SB-55との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは②と④にある。主軸は北西-南東、長軸方向はN-20°30'-Wである。規模は $3.5m \times 6.42m$ で、床面積 $22.47m^2$ を測る。柱穴③は大きなPitで方形の $1.12m \times 1.24m$ ある。二段掘りは①、②、③で、他は一段掘りである。SB-55 調査区北東側東隅から検出され、SB-54との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向はN-1°30'-Wである。規模は $3.4m \times 4.94m$ で、床面積 $16.8m^2$ を測る。柱穴⑤は方形の大きなPitで $0.8m \times 1.1m$ ある。柱②は削平のためか現存しない。SB-58 調査区の東側中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-74°30'-Wである。規模は $2.7m \times 3.28m$ で、床面積 $8.86m^2$ を測る。二段掘りは③と⑤・⑥で、他は一段掘りである。

SB-60 調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴は円形・橢円形で、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-24°-Eである。規模は $3.5m \times 5.42m$ で、床面積 $18.97m^2$ を測る。柱穴⑥は削平のためか現存しない。二段掘りは⑤だけで、他は一段掘りである。SB-76 調査区南側東隅から検出され、SB-73~75・77・78との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向はN-11°-Wである。規模は $2.3m \times 3.92m$ で、

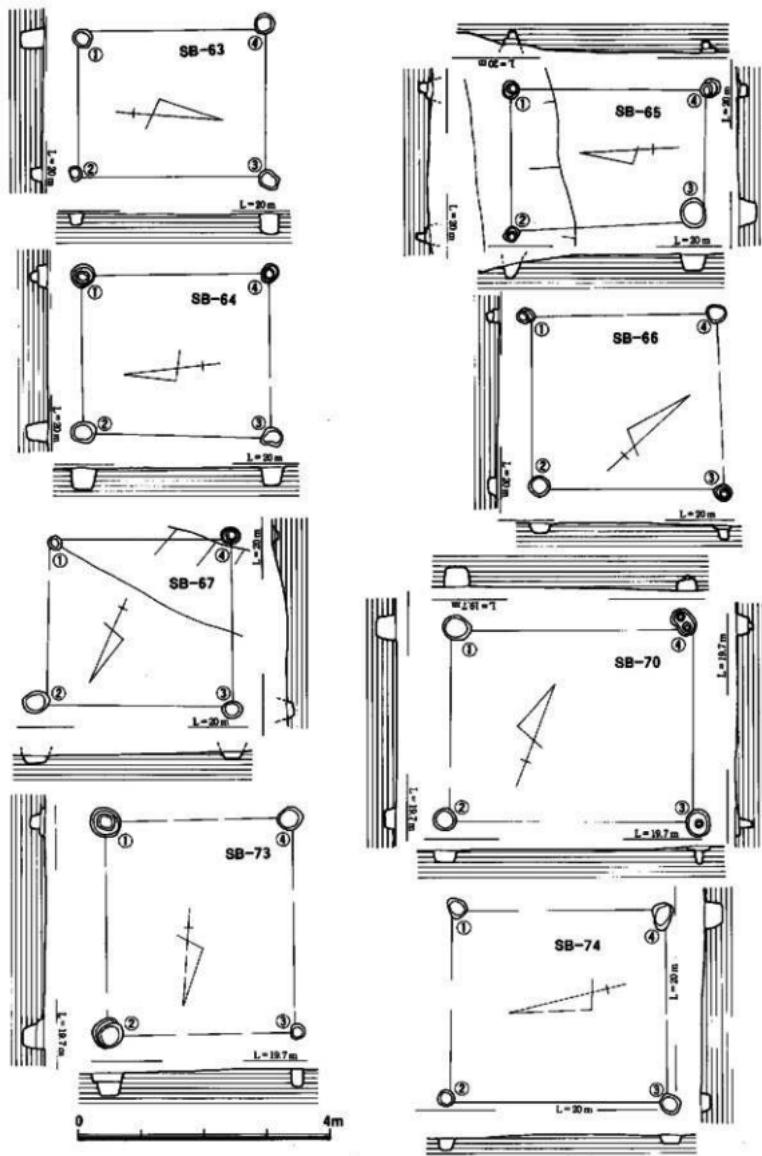


Fig. 66 IX区据立柱建筑物实测图—1(缩尺1/80)

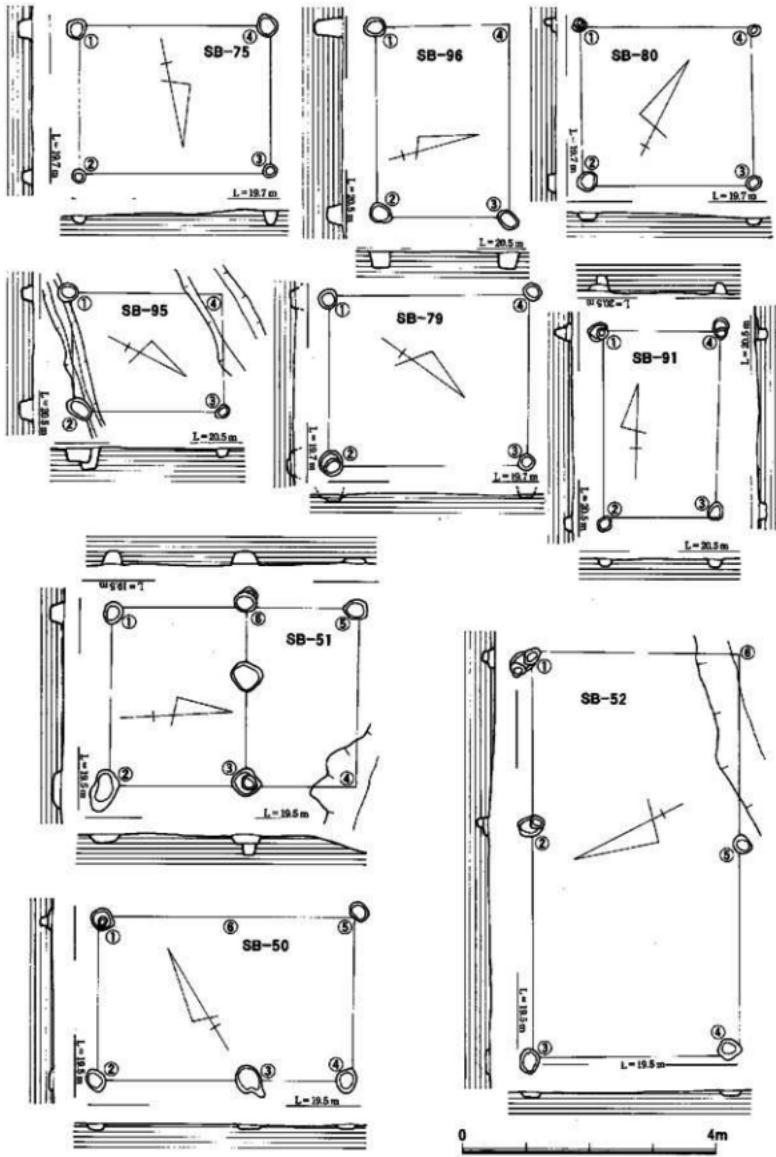


Fig. 67 IX区据立柱建物実測図-2(縮尺1/80)

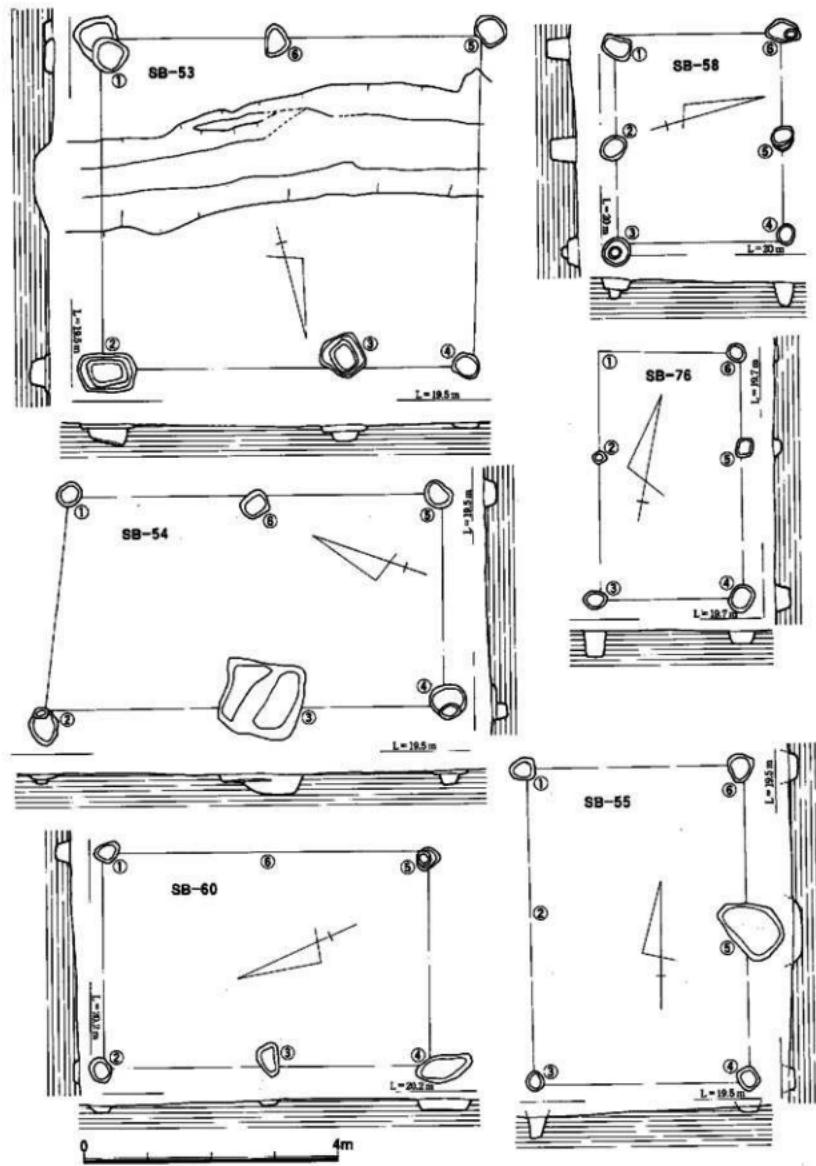


Fig. 68 IX区埋立柱建物実測図—3(縮尺1/80)

床面積9.02m²を測る。柱穴①は削平のためか現存しない。柱痕内より土器片が出土している。

Fig. 69 SB-56 調査区北側東隅から検出され、切り合い関係はない。隣接してSB-54・55・57がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは①だけである。主軸は北東-南西、長軸方向はN-28°-Eである。規模は3.78m×5.7mで、床面積22.80m²を測る。柱穴①は二段掘り、他は一段掘りである。柱穴①と②、②と③、④と⑤、⑤と⑥の柱穴との間隔が異なる。これはSB-50にも見られたことで、ここの特長かもしれない。⑥の柱穴は削平により確認できない。

SB-61 調査区中央部から検出され、切り合い関係はない。隣接してSB-60・SX-26がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱があるのは④と⑥である。主軸は北-南、長軸方向はN-4°-Eである。規模は3.6m×5.02mで、床面積18.07m²を測る。柱穴④と⑥は二段掘りで、他は一段掘りである。①と②の間隔と②と③の間隔が異なり、②が外にずれている。これは田村遺跡群でも検出されている。**SB-69** 調査区南東側から検出され、SB-70・71との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-40°-Eである。規模は3.3m×3.86mで、床面積13.79m²を測る。柱穴③が二段掘りで、他は一段掘りである。**SB-78** 調査区南側東隅から検出され、SB-79・80・74・75との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形で、脇柱は⑥にある。主軸は北西-南東、長軸方向はN-57°-Wである。規模は3.6m×4.56mで、床面積16.42m²を測る。二段掘りは④で、他は一段掘りである。柱間が①と②、④と⑤かほぼ同じで、②と③、⑤と⑥が同じ間隔をもつ。**SB-81** 調査区南側東端から検出され、SB-82・83・77・72との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱は⑤と⑥にある。主軸は北-南、長軸方向はN-1°-Eである。規模は3.1m×6.36mで、床面積19.72m²を測る。この建物の柱間は均等である。二段掘りは⑤と⑥だけで、他は一段掘りである。**SB-83** 調査区南側東隅から検出され、SB-81・82との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱は②と④と⑥にある。主軸は北西-南東、長軸方向はN-54°30'-Wである。規模は2.5m×4.04mで、床面積10.67m²を測る。この建物の柱間もほぼ均等である。二段掘りは②と④と⑥で、他は一段掘りである。

Fig. 70 SB-84 調査区中央部南側から検出され、切り合い関係はない。隣接してSX-21・SB-85がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-89°30'-Wである。規模は3.5m×5.85mで、床面積20.48m²を測る。柱穴④と⑤と⑥は二段掘り、他は一段掘りである。これも柱間がずれる。これは他の掘立柱建物でも見られたことで、ここの特長かもしれない。

SB-85 調査区中央部南側から検出され、SX-21との切り合い関係がある。柱穴の形状は方形・円形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-58°-Eである。規模は2.55m×4.1mで、床面積10.46m²を測る。二段掘りは③と④で、他は一段掘りである。柱穴④と⑤、⑤と⑥の間隔が等間隔ではない。**SB-89** 調査区中央部南側から検出され、SB-86・87と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-71°30'-Eである。規模は3.7m×3.6mで、床面積13.32m²を測る。柱穴②から③、③から④は約1.8m前後であるのに対して、柱穴⑤から⑥、⑥から①の間隔は2.2mと1.62mである。**SB-98** 調査区西側中央部SD-07付近から検出され、SX-08との切り合い関係があり、SB-99・SX-09・10と接近している。柱穴の形状は梢円形・円形であり、脇柱は②にある。主軸は北東-南西、長軸方向はN-20°30'-Eである。規模は2.74m×5.2mで、床面積14.25m²を測る。二段掘りは①で、他は一段掘りである。柱穴③がやや中に入る。柱間にも統一性がない。**SB-100** 調査区西南中央部から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-81°30'-Eである。規模は3.96m×3.84mで、床面積15.21m²を測る。二段掘りは②だけで、他は一段掘りである。

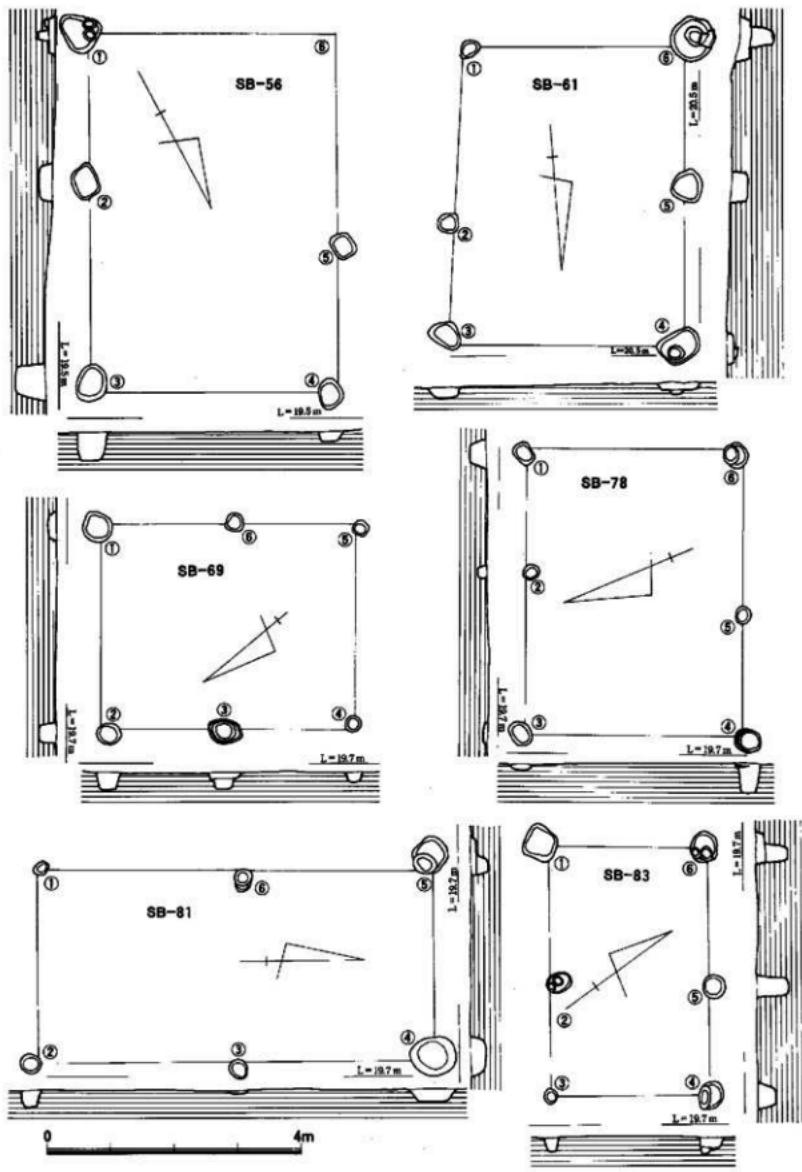


Fig. 69 IX区据立柱建物実測図-4(縮尺1/80)

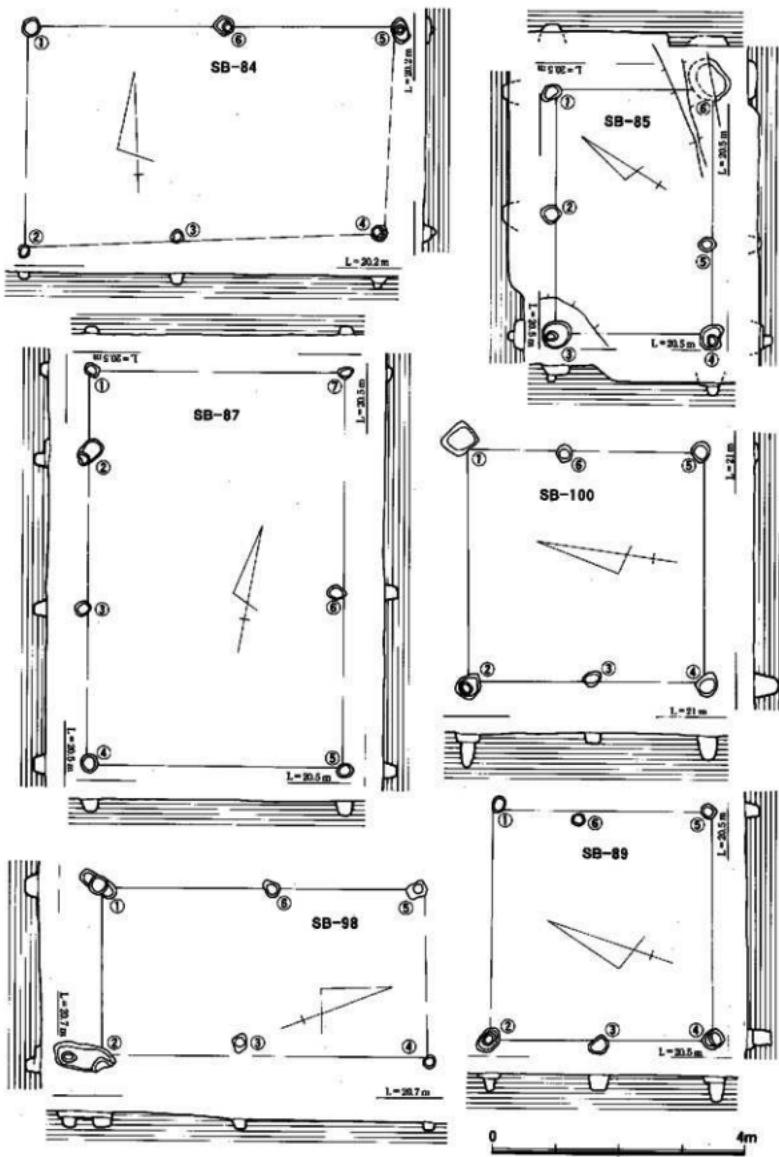


Fig. 70 IX区据立柱建物実測図—5(縮尺1/80)

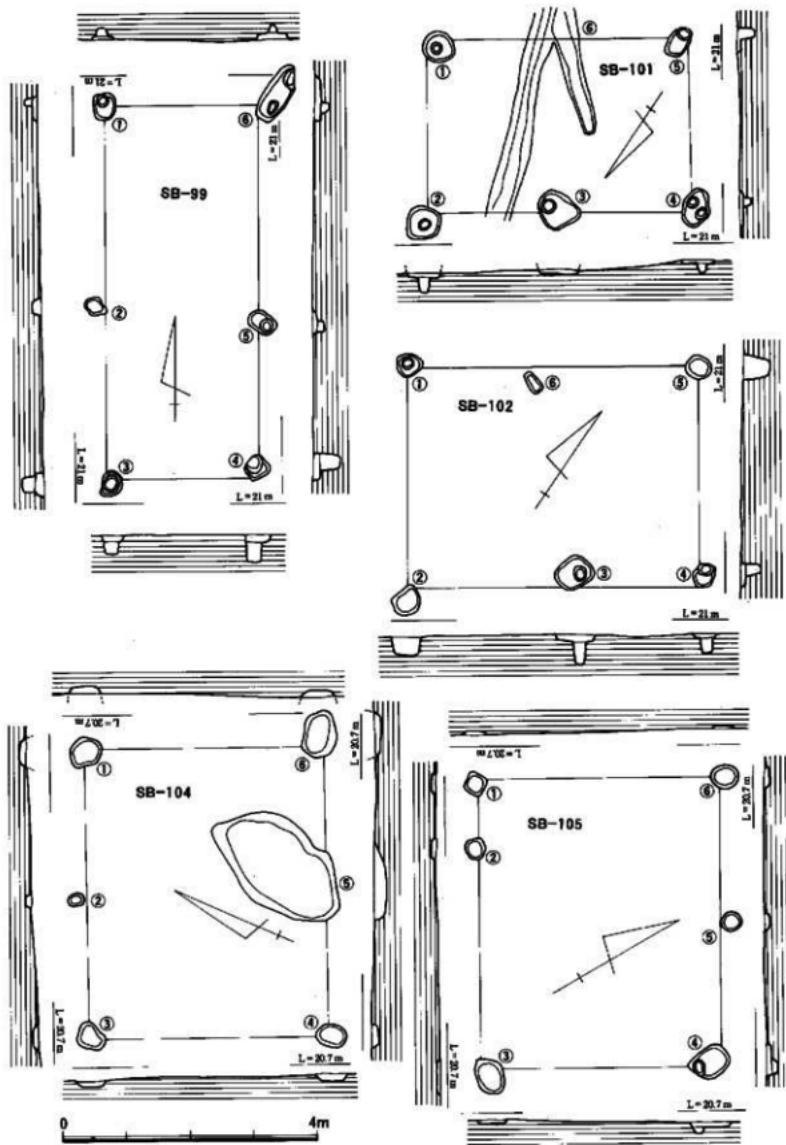


Fig. 71 IX区探査柱建物実測図-6(縮尺1/80)

Fig. 71 SB-99 調査区西側中央部から検出され、S X - 07・08との間に切り合い関係がある。隣接して S D - 07・S B - 98・S X - 09がある。柱穴の形状は方形・円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向は N-1°30'-Wである。規模は 2.7m × 5.58m で、床面積 16.47m² を測る。二段掘りは①と③と④～⑥で、②だけが一段掘りである。この建物の柱間は等間隔である。

S B - 101 調査区西側中央部から検出され、切り合い関係はないが、隣接して S C - 80・S X - 19 がある。柱穴は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向は N-55°30'-E である。規模は 2.8m × 4.36m で、床面積 12.21m² を測る。この柱穴はすべて二段掘りを行っている。

S B - 102 調査区西側南隅から検出され、南に市道田・飯盛線の調査地点がある。切り合い関係はない。柱穴は方形・円形で、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向は N-55°30'-E である。規模は 3.8m × 4.72m で、床面積 17.94m² を測る。二段掘りは①と③と④で、他は一段掘りである。柱穴③と⑥が中に入り、柱間の間隔も異なる。**S B - 104** 調査区西側北から検出され、S C - 80 の北側に位置する。S X - 11・S B - 103 と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向は N-65°30'-E である。規模は 3.8m × 4.8m で、床面積 18.24m² を測る。すべて一段掘りである。**S B - 105** 調査区西側北隅から検出され、S B - 106 との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③がある。主軸は北西-南東、長軸方向は N-60°-W である。規模は 3.94m × 4.64m で、床面積 18.28m² を測る。柱間が①と②が 1m、②から③が 3.64m と間隔が広い。二段掘りは④で、他は一段掘りである。

Fig. 72 SB-107 調査区西側から検出され、S B - 108 との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③がある。主軸は北西-南東、長軸方向は N-58°-W である。規模は 3.88m × 5.68m で、床面積 22.04m² を測る。二段掘りは②で、他は一段掘りである。

S B - 108 調査区西側から検出され、S B - 107・S B - 109 との間に切り合い関係がある。柱穴の形状は楕円形・円形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向は N-81°30'-E である。規模は 2.68m × 4.56m で、床面積 12.22m² を測る。二段掘りは①と③と④で、他は一段掘りである。これも①から②の間隔が 3.06m に対し、②から③が 1.5m と狭い。**S B - 110** 調査区西側から検出され、切り合い関係はない。柱穴の形状は方形・円形・楕円形であり、脇柱はない。主軸は北西-南東、長軸方向は N-70°30'-W である。規模は 2.6m × 4.26m で、床面積 11.08m² を測る。二段掘りは②と③と⑤で、他は一段掘りである。

1間×3間の掘立柱建物 (Fig. 70・72 Tab. 9～12 PL. 19)

1間×3間の掘立柱建物は 3 棟検出された。

Fig. 70 SB-87 調査区南側中央部から検出され、S B - 88・89 と切り合い関係がある。隣接して同じ方向の S B - 90 がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向は N-10°30'-W である。規模は 4.0m × 6.26m で、床面積 25.12m² を測る。柱穴①と③の間に柱穴②があるが、その間隔は 1m である。しかし、対応する梁行の柱穴⑥と⑦の間に柱穴がない。柱間は 3.46m であることなどから調査時に精査したが、削平されているのか、もともとないのかの判断はつかなかった。柱穴②があることから一応 1間×3間の範疇にいた。

Fig. 72 SB-86 調査区南側中央部から検出され、S B - 89・90 と切り合い関係がある。隣接して同じ方向をもつ S B - 87 があり、北側に S X - 21 がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向は N-5°-W である。規模は 3.3m × 7.78m で、床面積 25.67m² を測る。二段掘りは①～④と⑥と⑧で、他は一段掘りである。**S B - 106** 調査区西側北隅から検出され、S B - 105 と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北-

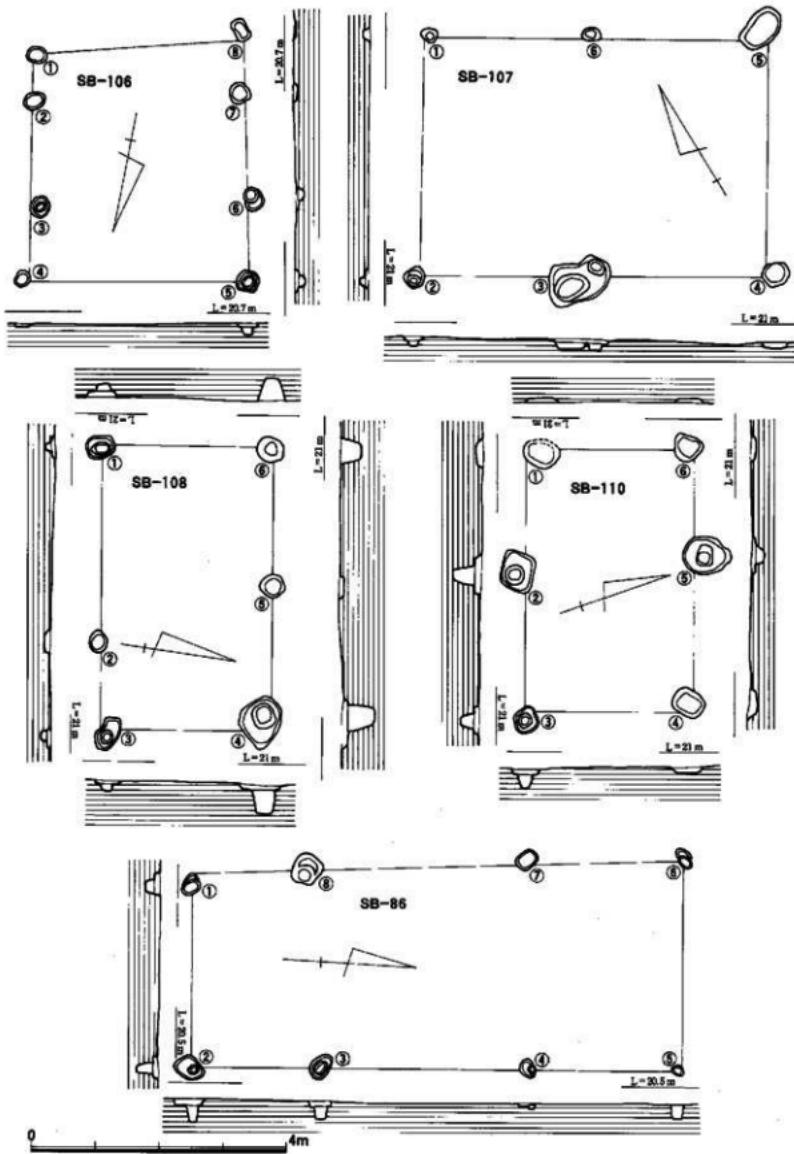


Fig. 72 IX区据立柱建物実測図-7(縮尺1/80)

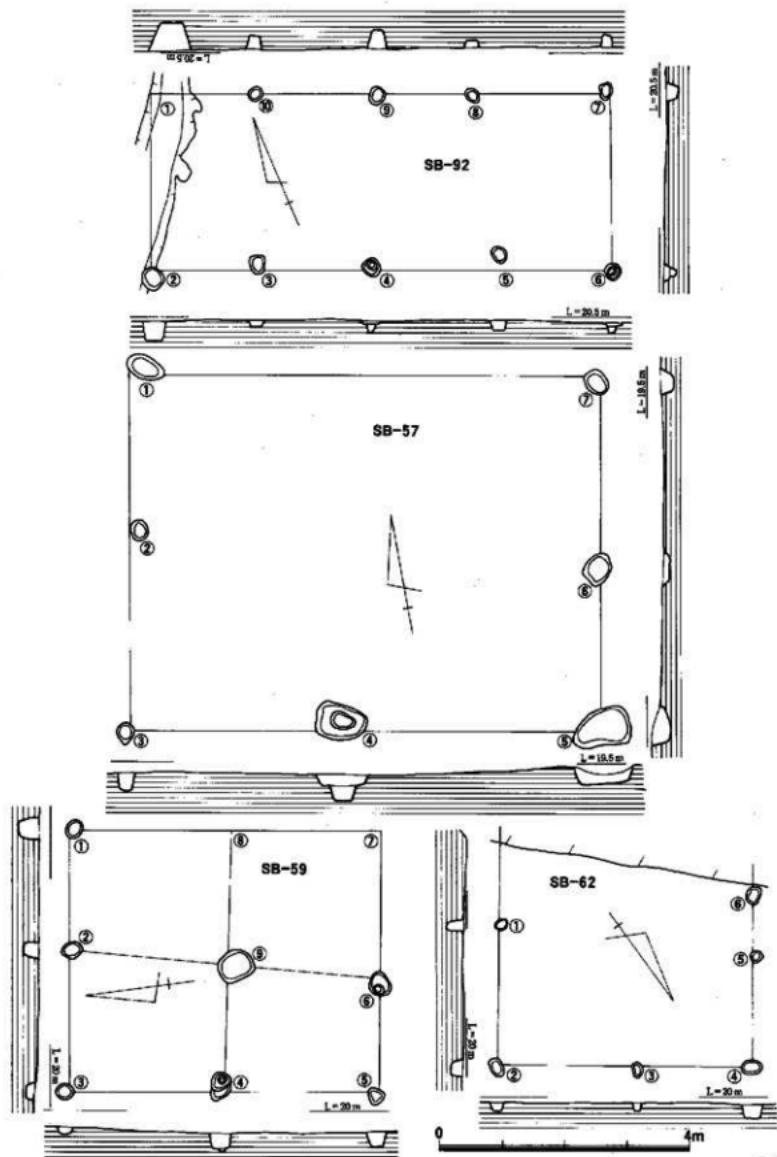


Fig. 73 IX区据立柱建物実測図-8 (縮尺1/80)

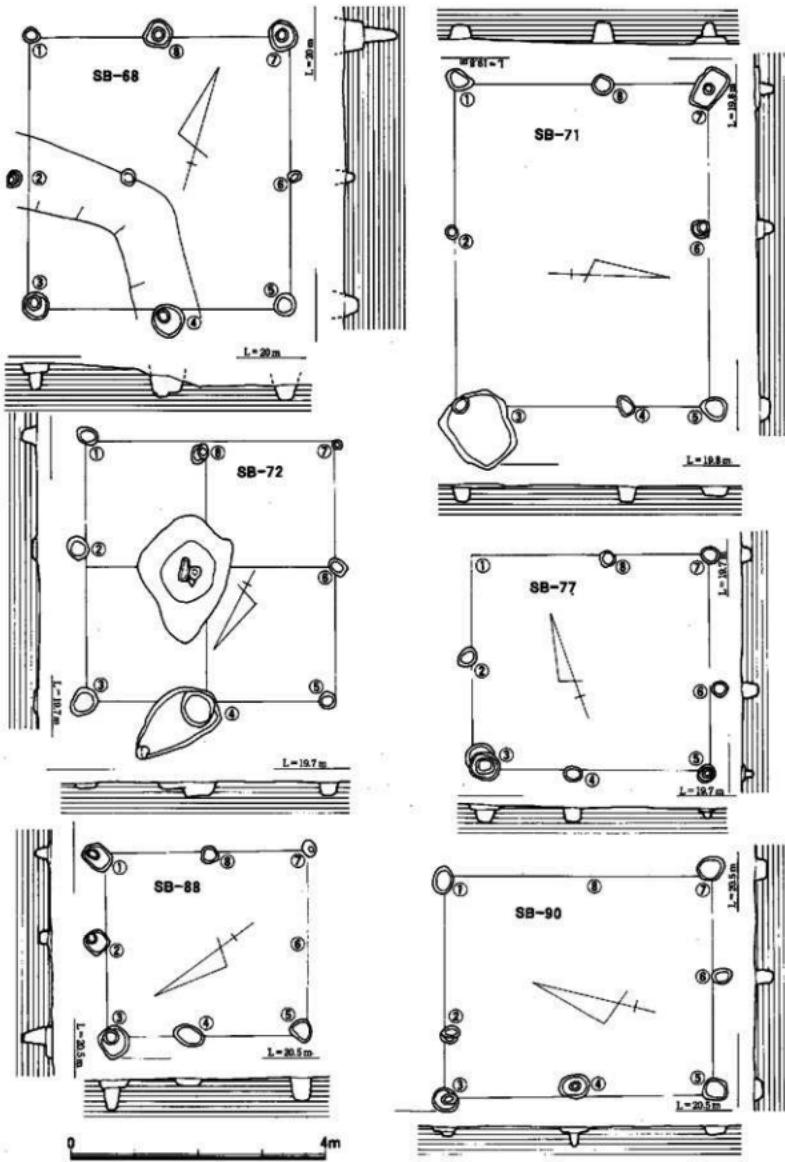


Fig. 74 IX区振立柱建物実測図-9 (縮尺1/80)

南、長軸方向はN-12°-Wである。規模は3.66m×3.98mで、床面積14.572m²を測る。柱間は柱穴①～②が0.74m、②～③が1.66m、③～④が1.18mである。これに対して⑤～⑥が1m、⑥～⑦が1.6m、⑦～⑧が1mと間隔が非常に狭い。

1間×4間の掘立柱建物 (Fig. 73 Tab. 9～12)

1間×4間の掘立柱建物は1棟検出された。

Fig. 73 SB-92 調査区南側中央部から検出され、SB-91・93～97及びSD-07の支流と切り合い関係がある。SD-07の支流がSB-92から切られる。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北西-南東、長軸方向はN-67°-Wである。規模は3.0m×7.3mで、床面積21.90m²を測る。柱穴④・⑥が二段掘りで、他は一段掘りである。

2間×2間の掘立柱建物 (Fig. 73～76 Tab. 9～12 PL. 19・20)

2間×2間の掘立柱建物は20棟検出された。

Fig. 73 SB-57 調査区北側中央部から検出され、切り合い関係はないが、隣接する造構はSB-56である。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-80°-Eである。規模は5.88m×7.62mで、床面積44.81m²を測る。柱穴が1個足りないが、この部分は削平が著しくその痕跡はなかった。二段掘りは④だけで、他は一段掘りである。**SB-59** 調査区中央部北側から検出され、弥生時代の溝をきるが、調査時にその痕跡まで掘削してしまった。他の切り合い関係はない。縦柱建物で、柱穴の形状は円形であり、脇柱は④にある。主軸は北-南、長軸方向はN-8°-Eである。規模は4.22m×5.0mで、床面積21.10m²を測る。**SB-62** 調査区中央部から検出され、SD-05によって切られている。隣接する造構は、SB-63である。柱穴の形状は円形で、脇柱はない。主軸は北西-南東、長軸方向はN-53°30'-Wである。規模は4.06m×3.6m+αで、床面積11.21m²+αを測る。

Fig. 74 SB-68 調査区南側東隅から検出され、SB-67と切り合い関係がある。縦柱建物で、柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-15°-Wである。規模は3.96m×4.2mで、床面積17.11m²を測る。中央部の柱穴が著しくずれるが、問題はないと思われる。二段掘りは柱穴②・③・④・⑦・⑧である。他は一段掘りである。**SB-71** 調査区南側東隅から検出され、SX-33・SB-69・70・72との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。柱間の間隔③と④が2.64m④と⑤が1.4mと異なるが、問題はないと思われる。主軸は東-西、長軸方向はN-88°-Eである。規模は4.04m×5.12mで、床面積20.68m²を測る。二段掘りしているのは③・⑥・⑦で、他は一段掘りである。**SB-72** 調査区南側東隅から検出され、SX-33・SB-71・77・81との切り合い関係がある。縦柱建物と思われるが、中央部の柱穴がSX-33によって破壊されているため定かでない。柱穴の形状は円形であり、脇柱は②にある。主軸は北西-南東、長軸方向はN-27°30'-Wである。規模は3.84m×4.2mで、床面積16.63m²を測る。二段掘りは④と⑧で、他は一段掘りである。**SB-77** 調査区南側東隅の一一番切り合いのある場所から検出され、SB-72～76・81と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③にある。主軸は北西-南東、長軸方向はN-70°-Wである。規模は3.46m×3.5mで、床面積12.11m²を測る。柱穴①が削平されて現存しないが、建物として考えても良いであろう。中央部の柱穴は桁行・梁行とも均等ではなくずれしているが、Ⅶ区・Ⅸ区の建物のはほとんどがこのタイプであることから、この遺跡の特長と考えられる。**SB-88** 調査区中央部南側から検出され、SB-87との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-35°-Eである。規模は2.9m×3.46mと小型で、床面積10.03m²を測る。二段掘りは①～③で他は一段掘りである。柱穴⑥が削平されて確認できなかった。

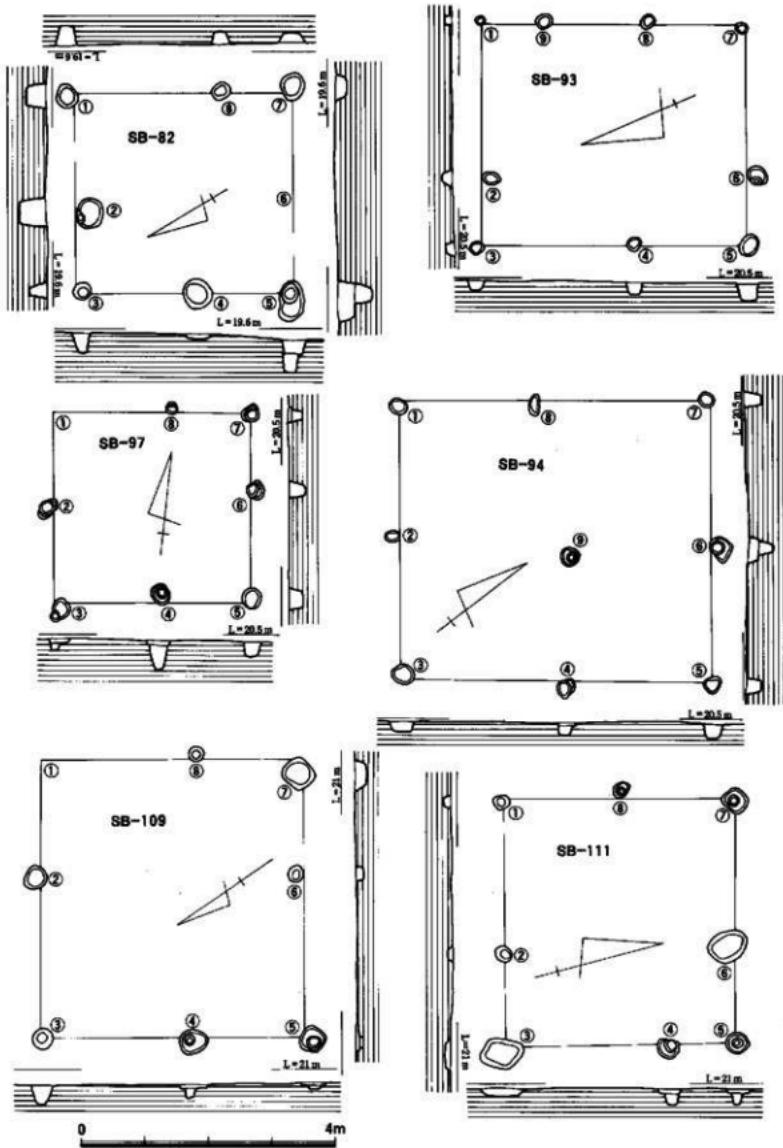


Fig. 75 IX区攝立柱建物実測図-10(縮尺1/80)

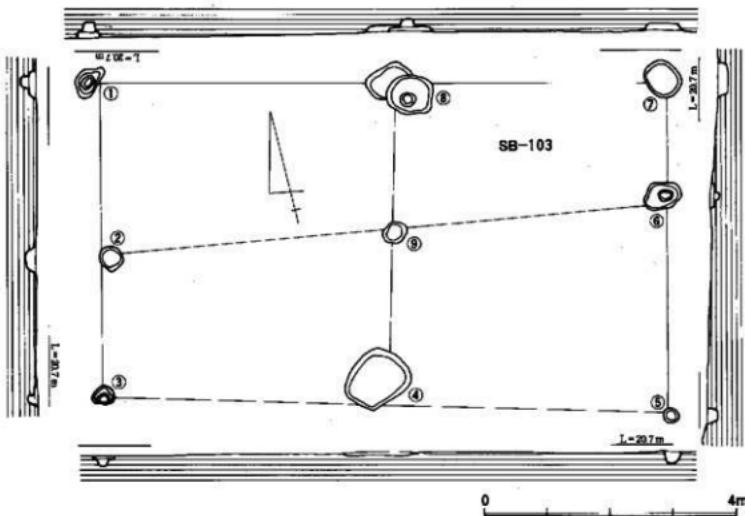


Fig. 76 IX区掘立柱建物実測図-11(縮尺1/80)

SB-90 調査区中央部南隅から検出され、SB-86と切り合い関係がある。柱穴は円形・方形で、脇柱はない。主軸は北-南、長軸方向はN-14°-Wである。規模は3.54m×4.2mで、床面積14.87m²を測る。柱穴①と②との間隔は2.4mに対し、②と③は1.06mと狭い。また桁行の中間部の柱穴⑧が削半が著しいために検出できなかった。二段掘りは②～④で、他は一段掘りである。

Fig. 75 SB-82 調査区南側東隅から検出され、SB-81・83と切り合い関係があり、隣接してSX-43がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-31°-Eである。規模は3.3m×3.56mで、床面積11.75m²を測る。柱穴⑥が精査しても検出できなかった。四隅の柱穴は深いが、中間の柱穴は浅いものもある。柱間の間隔がずれる⑧や、内に入る柱穴②もある。柱穴内覆土から土師器の細片が出土している。二段掘りは⑤のみで、他は一段掘りである。

SB-93 調査区南側中央部から検出され、SB-91・92・94・97と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-24°-Eである。規模は3.6m×4.3mで、床面積15.48m²を測る。中間の柱の間隔がずれている点と柱穴⑦と①の間に2個の柱穴が配置されていることが気にかかるが、柱がずれている点は間隔が2.4m前後であり、両面とも同じ間隔であることから問題はないと思われる。また柱穴⑦と①の間に2個の柱穴が配置されている点は間隔が1.7m・1.5m・1mであり、柱間の違いで生じたものと思われる。二段掘りは⑥のみで、他は一段掘りである。**SB-97** 調査区南側中央部から検出され、SB-91～94との切り合い関係がある。柱穴の形状は円形であり、脇柱は③にある。主軸は北-南、長軸方向はN-7°-Wである。規模は3.12m×3.22mと小さく、床面積10.05m²を測る。主柱穴である①が精密に精査しても検出できなかった。配列からして2間×2間の建物としたが、1間×1間の可能性も否定できない。二段掘りは②～④と⑥～⑧で、⑤だけが、一段掘りであった。④と⑥の柱穴覆土から細片の上師器壺脣部が出土している。**SB-94** 調査区南側中央から検出され、SB-91～97と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、総柱の建物である。脇柱はない。主軸は北東-南西、長軸方向はN-

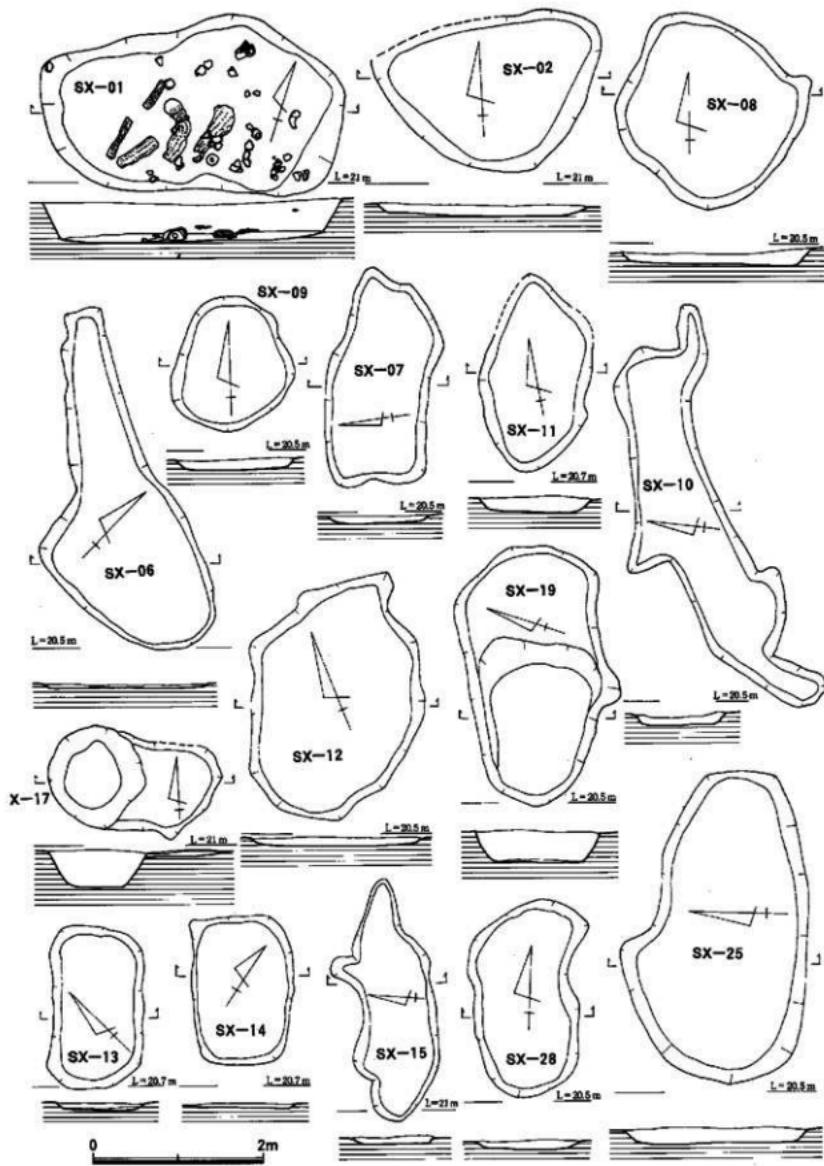


Fig. 77 IX区不整形土壤実測図-1 (縮尺1/60)

37° - Eである。規模は4.52m × 4.86mで、床面積21.972m²を測る。柱間は殆ど等間隔であるが、⑧だけがずれる。①と⑧の間隔が2.14mに対し⑦から⑧の間隔は2.7mと広い。二段掘りは④と⑥と⑨で、他は一段掘りである。④・⑥・⑨の覆土から細片の土師器が出土している。**SB-109** 調査区西側南隅（市道田・飯盛線の調査区の北側に位置する）から検出され、SB-108と切り合い関係がある。柱穴の形状は円形・方形であり、脇柱はない。主軸は北西-南東、長軸方向はN-54°30'-Eである。規模は4.28m × 4.38mで、床面積18.75m²を測る。主柱穴である①が総密に精査しても検出できなかった。配列からして2間 × 2間の建物としたが、1間 × 1間の可能性も否定できない。二段掘りは④と⑤で、他は一段掘りであった。④と⑥の柱穴覆土から細片の土師器胴部が出土している。

SB-111 調査区西側南隅（市道田・飯盛線の調査区の北側に位置する）から検出され、切り合い関係はないが、SX-16・17と隣接する。柱穴は円形・方形で、脇柱はない。主軸は東-西、長軸方向はN-75°30'-Wである。規模は3.7m × 4.0mで、床面積14.8m²を測る。柱間の間隔がずれるのは③から⑤の間の④で、③から④の間隔は2.68mであるのに対して④から⑤は1mである。二段掘りは①・⑤と⑦・⑧で、他は一段掘りである。⑤と⑦の柱穴覆土から細片の土師器胴部が出土している。

Fig. 76 SB-103 調査区西側中央部から検出され、SX-11・SB-104と切り合い関係があり、SC-80と隣接する。柱穴の形状は円形・方形で、脇柱は⑧がある。主軸は東-西、長軸方向はN-77°30'-Wである。規模は5.3m × 9.08mで、床面積48.12m²を測る。柱間の間隔がずれるのは⑤から⑦の間の⑥で、⑤から⑥の間隔は3.48mであるのに対して⑥から⑦は1.82mである。二段掘りは①・⑥・⑧で、他は一段掘りであった。

以上がIX区の掘立柱建物であるが、SD-07・05によって台地が3分割される。建物の配置をみると4つの区割りが考えられる。

1、SC-80を中心としたSD-07から西側の掘立柱建物群

2、SD-07・05によって区分される掘立柱建物群

3、SD-05より東側の掘立柱建物群

4、調査区北側の掘立柱建物群

建物群の方向性をみると

SC-80と方向を同じくするものは SB-79・85・101・102

SD-07と平行に建てられたものは SB-50・52・56・60・78・93・105・107・109

SB-93と方向を同じくするものは SB-77・78・92・98・110

SB-86と方向を同じくするものは SB-55・71・73・84・87・91・97・100・106

SB-53と方向を同じくするものは SB-58・98・110

SB-57と方向を同じくするものは SB-59・103

とに区分できるが、市道田・飯盛線の調査及び畠区の建物群の配置を考察する必要性があるが、まとめの章で考えてみたい。

SX(不整形土壙)・井戸状遺構

井戸状遺構 (SE-01)

Fig. 79に図示した。調査区の西隅から検出され、切り合い関係はない。形状は円形を呈し、径2.25m、深さ1.55mを測る。底面から僅か30cmの所から湧水する。出土した土器はFig. 81 (95001～95007)に図示した。変形土器・高坏・壺等が出上しているが、1点変形土器で平底を呈する土器がある。出土遺物から古墳時代の井戸状遺構である。

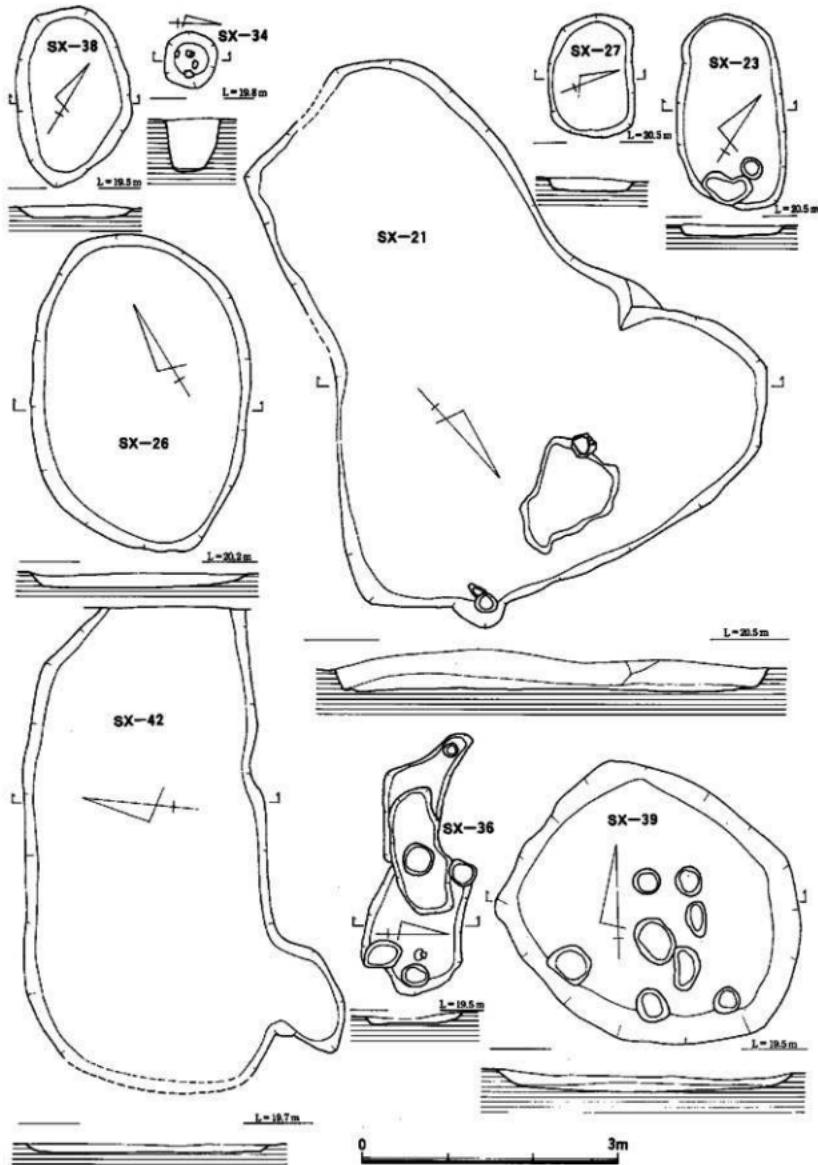


Fig. 78 IX区不整形土壤实测图—2 (缩尺1/60)

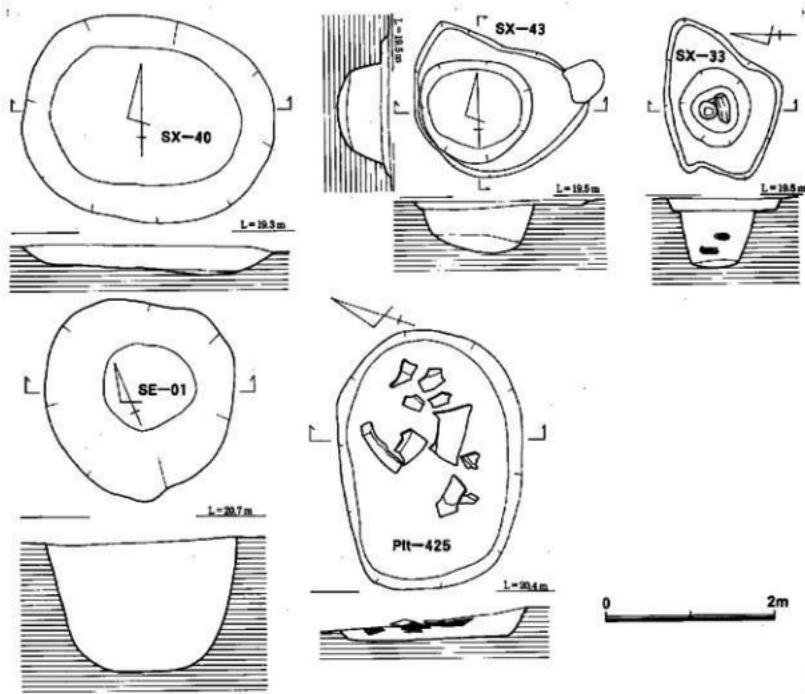


Fig. 79 IX区不整形土壌実測図-3(縮尺1/60)

S X (不整形土壌) (Fig. 77 ~ 79 Tab. 14 PL. 19 · 20)

不整形土壌は43基検出したが、図示したものは28基である。形状は様々で方形・隅丸長方形・円形等がある。規模等はTab. 14に表示しているので、参照していただきたい。遺物が出土している土壌だけ記述する。

S X - 01 調査区の西側南隅から検出され、S X - 02との切りあい関係がある。S X - 01がS X - 02をきる形をとる。形状は梢円形を呈し、深さは0.5mと浅い。出土遺物は上器・炭化物等が出土したが、Fig. 95(99073)の土器を図示した。韓式土器と呼ばれる土師質の壺形土器で、形式的にも古いタイプである。**S X - 21 · 22** 調査区南側中央部から検出され、S B - 85との切り合い関係を持つ。やや変則な方形を呈し、方形の土壠が2つあり、SB - 85の西北隅①と②、③・④と⑤によって切られている。

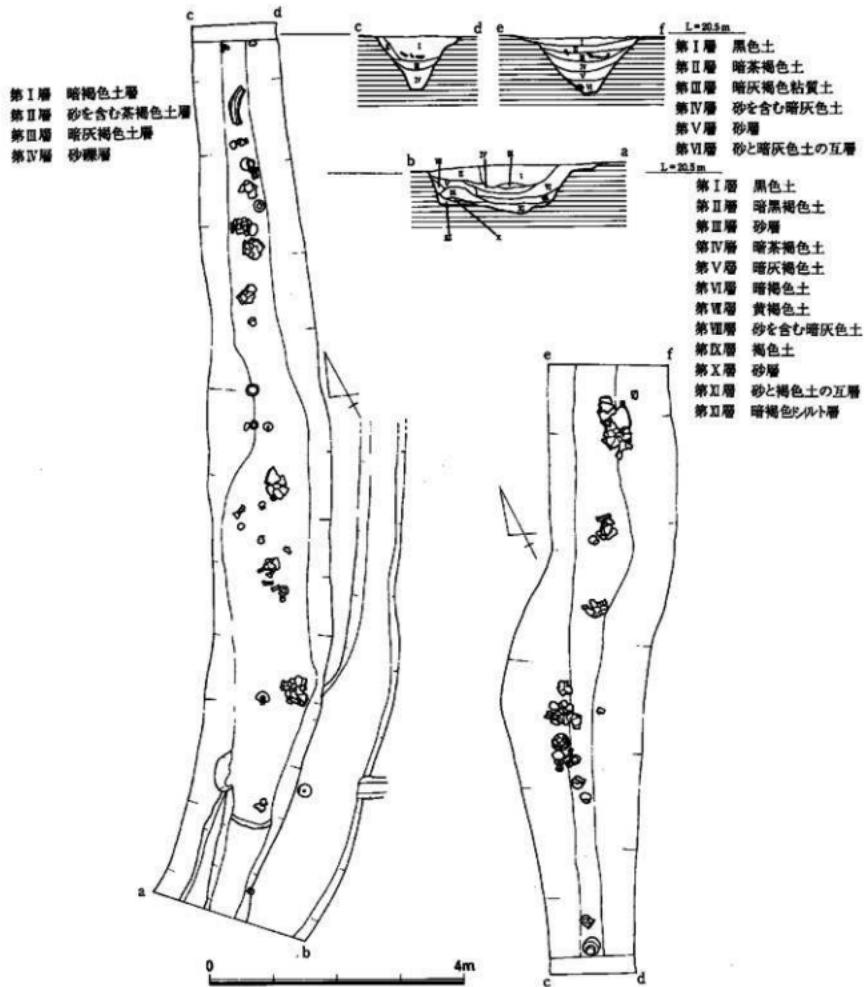


Fig. 80 IX区検出SD-07平面・断面図(縮尺1/80)

出土遺物は須恵器でFig. 96(92167)が出上している。これはSD-07から出土した資料と接合するもので、格子の叩きと三本の沈線を巡らす壺形土器である。形式的にも古いタイプである。これにより、SB-85はこの須恵器の時期より新しい時期と考えられる。深さは0.3mで浅いほうである。

S X-33 調査区東側中央部から検出され、恐らくPitと考えられるが、SB-72の2間×2間の縦柱建物の中央部に位置する。検出状態から柱穴の可能性もあるが、SB-72の他の柱穴と異なるため上層として捉えた。しかし中央部の円形が、柱穴で、まわりの部分だけが土壤かもしれない。中央底面に柱材と思われる木片が検出されている。切りあい関係はSB-71・81がある。

Fig. 77に図示した不整形土壙は殆どが著しく削平を受け出土遺物も上師器の細片ばかりで図示できるものはなかったが、古墳時代の土壙であることは間違いない。

Pit (Fig. 79 Tab. 14)

調査区の北側西端で検出されたPit-425を図示した。楕円形を呈し、深さは0.3m程度で、表面から大型壺形土器の須恵質の韓式土器が出土した。この土器は90502(Fig. 97)でPit-429から出土した資料と接合する。Pit-429は調査区北側東端に位置し、SB-53の東側に位置する。

溝状造構 (Fig. 80)

IX区には弥生時代を含めて34条の溝が確認されている。この内、古墳時代に属する溝状造構は23条検出された。この内、出土遺物が多く、台地を二分するSD-07・30・34について記載する。

SD-07 SD-07は南限をSD-02に流れ込む状態で検出される。SD-02は弥生時代前期に旧河川を利用して一部人工的に手を加えたものとして報告(吉武遺跡群IX 1997 福岡市教育委員会刊)したが、古墳時代にも僅かながら使用された形跡がある。SD-05からSD-08までは基本的に弥生時代の溝として造られたものであるが、継続時間は古墳時代まで使用されている。これは遺物の出土状態からその事実が窺える。このたび古墳時代の溝として、SD-05から07を登録する。SD-07はSD-05から波及した溝である。SD-05は北西から南東に流れ、これは、旧河川SD-01から旧河川SD-02へ水を引くための導水溝である。このSD-05から波及した溝はSD-06と07である。07には支流と考えられる溝を持つ。また、SD-05からSD-07へ水を送る導水溝が2条ある。これは両方もSD-05の堰状造構から派生する溝である。この他にSD-07から派生する溝がSD-02に流れ込む状態で検出された。

SD-07からは土師器・陶質土器・須恵器等が多量に出土(Fig. 83~97)している。出土状態は上部からの検出で、下層には弥生時代の土器群が検出され(吉武遺跡群IX 1997 福岡市教育委員会刊P137・138 SD-05・06 出土土器を掲載)しており、弥生時代から古墳時代まで使用していたことが窺える。出土遺物をみると多量の瓶が出土しており、その形状も種々ある。また、小型丸底壺・壺形土器・壺形土器・高杯・須恵質の韓式土器・須恵器がある。量的には土師器が須恵器を大幅に上まわり韓式土器群が多量に出土していることから、Ⅸ・Ⅹ区の造構は特殊な工人集団と考えられる。

SD-30 調査区北側から南西から北東に流れる形状で検出されたが、削平が著しく遺存状態は非常に悪い。深さ10cm程度で、溝としての認定をしがたいものであった。しかし須恵器・土師器が出土しており溝として認定した。

SD-34 調査区北側に検出された北西から南東に流れる溝で、弥生時代の溝として報告(吉武遺跡群IX 1997 福岡市教育委員会刊)したが、上部から須恵器が出土していることから、古墳時代まで溝として使用していたことが窺える。

出土遺物

IX区からは竪穴住居址・井戸・溝状造構・不整形土壙・掘立柱建物の柱穴等から遺物が出土した

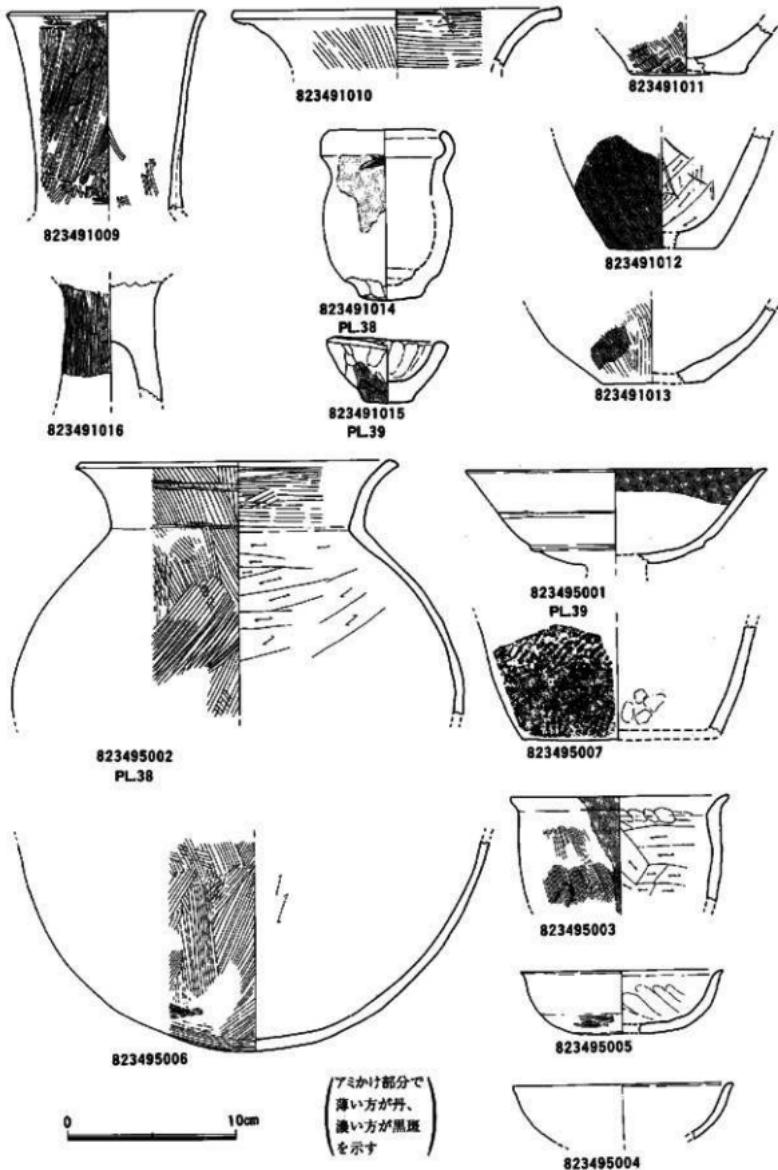


Fig. 81 畑区出土遺物実測図一(縮尺1/3)

が、掘立柱建物からの柱穴は細片で実測に耐えるものではなかった。しかしその殆どが古式土師器・須恵器で不整形土壙から出土する遺物とは時期的に差はない。柱の抜き後からも同様の遺物が出土している。これらの遺構の遺物は時期的に大差なく古墳時代前期から中期前半にかけての時期と考えられる。記載は挿図・遺構ごとの順に行う。

S C - 80 出土の土器 (Fig. 81 PL. 39)

S C - 80 からは、Fig. 81に図示した8点(91009～91016)以外にも数多く出土したが図示したものは弥生時代後期の遺物、古墳時代前期の遺物でこれ以外は図示できなかった。

91009 土師器の長頸壺の口縁部で、口縁下位には粘土を貼り付けている。器壁が非常に薄く上端部が緩やかに外反し縫部は稜をつけて納める。外面調整は範磨きと上部は横ナデ、内面はナデと一部範磨きを施す。上部口径11.9cm。胎土は1mm前後の砂粒を含み、色調は内外面とも淡明黄褐色を呈する。

91010 豊形土器の口縁部で、朝顔形に開く。外面が継刷毛目、内面が横刷毛目を施している。口径19.5cm。胎土は2～3mmの大石英・長石粒を含み、色調は内外面とも淡白灰褐色を呈し、焼成は良好である。91011 豊形土器の底部片である。やや上げ底を呈し、外面は斜めの刷毛目、内面はナデ調整を行っている。底径6.8cm。胎土は1mm前後の砂粒及び3～5mmの大石英粒・雲母を含む。色調は内面が明茶褐色、外面は明黄褐色である。底部の一部に黒斑がある。91012 平底を呈する豊形土器の底部片である。底面はやや丸味を持ち、端部も丸味を持つ。外面は斜めの刷毛目を施し、内面は板状工具による削り、及びナデを施す。底径6.6cm。胎土は2mm前後の砂粒及び石英粒・雲母を含む。色調は内面が暗褐色、外面は灰黃褐色である。91013 壺形土器の底部片で、外面調整は刷毛目、内面はナデ調整を施す。復元底径は6.2cmを測り、胎土は0.5mm前後の石英・長石を含む。色調は内外面とも暗褐色で外面に黒斑を有する。91014 小型の手すくね土器である。底部は粗い指オサエによる整形で、平底を呈する。外面は口縁部のみがナデで、他は範磨きである。内面は指によるナデを施す。頸部はやや締まるが、口縁部は一度外に張り出し端部で内に入り丸く収める。色調は外面が明茶褐色を呈するが、一部に丹塗りが認められる。内面も明茶褐色を呈する。口径6.8cm、底径3.7cm、器高10cmを測る。

91015 小型の手すくね土器である。内外面とも指引きによる調整で、色調は内外面とも明黄褐色を呈するが、一部に黒班が認められる。口径7.2cm、底径3cm、器高3.9cmを測る。

91016 高坏の脚部である。外面の一部に丹塗りが認められる。これらの土器以外に土師器の壺・壺形土器片が出土しており、S C - 80の時期は一番新しい時期、古墳時代前期と考えられる。

S E - 01 出土の土器 (Fig. 81 PL. 39)

Fig. 81 の7点(95001～95007)が出土した。95001 土師器の高坏の坏部で、脚部は欠損している。内外面はナデ仕上げを施し、外面に一条の沈線を巡らし、底面近くに一条の稜をもつ。口径17.8cm、色調は内面は暗茶褐色+黒斑、外面が明赤茶褐色+黒斑を呈する。95002 土師器の壺形土器で、頸部が締まり、口縁部は大きく外反する。いわゆる「く」字口縁を呈する。外面調整は、継刷毛目・斜め刷毛目を施す。口縁部に二条の沈線を巡らす。内面は口縁部は横刷毛目、脚部は斜削りを施す。胎土は2～3mmの大石英・長石を多く含む。大粒7mmの大石英粒及び細かな金雲母・赤色粒も含む。口径19.2cm。色調は内面が明赤茶褐色、外面が暗黒褐色+黒斑を呈する。95003 土師器の鉢形土器で底部は欠損する。脚部からやや内湾しながら立ち上がり口縁部近くで、大きく外反し縫部を丸く収める。外面は脚部が刷毛目調整、口縁部がナデ調整を施し、内面は口縁部がナデ、頸部が指オサエ、脚部が範削りを施す。胎土は2～5mmの大砂粒を多く含み、赤色粒・雲母も混入している。口径13cm。色調は外面が灰褐色、内面が暗黄褐色を呈する。95004 土師器の壺形土器であるが底部は欠損する。外面の調整は表面剥落のため調整は不明。内面はナデ仕上げである。口径13cm。色調は内面が淡褐

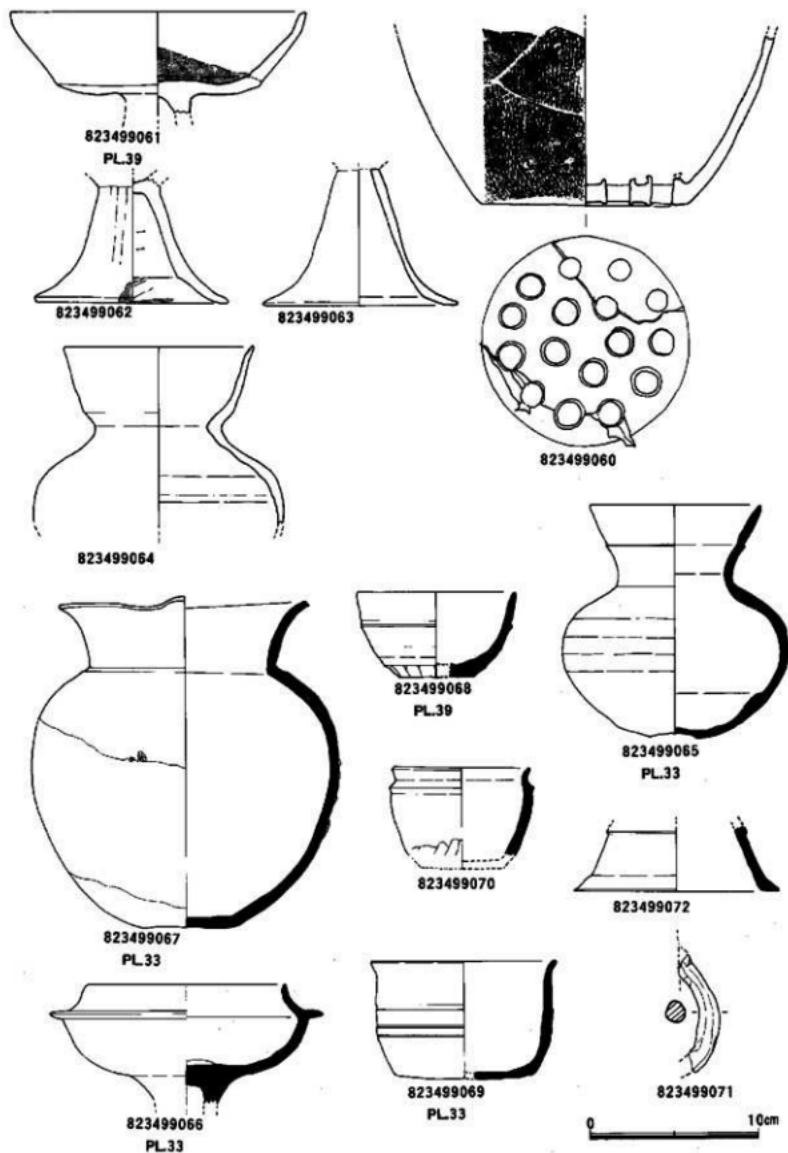


Fig. 82 IX区出土遺物実測図一2(縮尺1/3)

色、外面が淡青褐色を呈する。胎土は細砂・赤色粒・金雲母が混入している。95005 上師器の壺形土器であるが底部の一部が欠損する。外面は底部近くが刷毛目、口縁部付近がナデ仕上げを行う。内面は指引きの後、ナデ仕上げを行う。口径が12.15cm、器高が3.75cmを測る。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土は細砂・赤色粒・金雲母が混入している。95006 上師器の壺形土器底部である。丸底の形状を呈し、外面調整は丁寧に刷毛目を施す。内面は綫方向の範削りを施す。胎土は2~4mm大の石英・長石粒・雲母を含む精製された粘土を使用している。95002と同一個体と思われたが、径が異なることから別個体と判断した。95007 鉢形土器の底部で口縁部の形状は不明。底部も欠損しているが、恐らく平底となると思われる。外面調整は斜めの叩きを施し、内面はナデと指オサエを施している。胎土は1mm大の砂粒・雲母を含む精製された粘土を使用している。色調は外面が暗赤茶褐色と暗褐色を呈し、内面は暗赤茶褐色を呈する。復元底径は11cmと推定される。

S X - 37 出土の土器 (Fig. 82 PL. 33)

Fig. 82 の 7 点 (99060 ~ 99063 · 99065 · 99066 · 99072) が出土した。99060 壺の底部付近で口縁部は欠損している。平底の底面に径1.5cmの円形孔を16個配し、瓶としている。外面調整は全面に繩帯文の叩きを施し、内面はナデ調整である。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、精製された粘土を使用している。色調は外面が明茶褐色を呈し、内面は暗褐色+明茶褐色+淡褐色を呈する。底径12.2cm。99061 上師器の高坏の坏部で脚部は欠損する。外面は表面剥落しているため調整は不明。内面はナデ調整で、内部に黒斑がある。口径17.2cm。胎土は0.5mm大の砂粒と4~5mm大の石英・長石粒を混入している。色調は内外面とも暗赤褐色を呈する。99062 · 99063 2点とも土師器の高坏の脚部である。062は外面がナデ調整、内面が横からの範削りを施す。脚径は11.5cmを測る。063は外面が表面剥落のため調整不明である。内面はナデ調整である。脚径は11.5cmを測る。99065 須恵器の直口壺で、頸部が締まり口縁部に向けて外反し、口縁部を丸く納める。口縁部と頸部の中間に一段の稜を有する。外面の調整は口縁部付近が回転ナデ、胴部は範削り底部付近は静止ナデである。内面は横ナデを施している。底部は基本的には丸底を呈するが、底部中心に窪みを入れ平坦面を造りだし安定感をだしている。口径10cm、器高13.9cm、底径2.7cm、胴部最大径13.7cmを測る。胎土は細砂粒と黑色粒を多く含む精製された粘土を使用している。口縁部及び胴部の一部に空気が入った小さな膨らみが数箇所みられる。底部付近に不純物が付着し器面がザラザラしている。色調は外面が淡灰色+暗灰色、内面は明淡灰色を呈する。99066 須恵器の高坏の坏部である。脚部は欠損している。受部が中に入るタイプで、受部自体は高い。外面の調整は回転ナデ、水引を施している。内面は指ナデ・押え・回転ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む精製された粘土を使用している。全体的に空気が入った小さな膨らみが数箇所みられる。色調は内外面とも白灰色を呈するが一部に自然釉がかかる。口径11.8cmを測る。

99072 須恵器の高坏の脚部である。脚部はシャープに作り上げ透かしの下段に稜を有する。透かしは方形を呈すると思われるが、遺存していないので、定かではない。全面に自然釉がかかり不純物も付着している。内外面の調整は回転ナデを施す。胎土は細砂粒及び2mm大の砂粒を少量含む。脚部径12.2cmを測る。

S X - 36 出土の土器 (Fig. 82 PL. 33)

S X - 36からは99064の土器1点を図示した。S X - 37から出土した99065に類似する形態を有する直口壺である。頸部が締まり外反しながら立ち上がるが、頸部直上で外面に稜を持つ。このためやや内湾しながら立ち上がる。外面の調整はナデ、内面は範削り・ナデを施す。胎土は細砂粒・金雲母を多く含む。色調は内外面とも淡明赤褐色を呈する。口径11.2cmを測る。

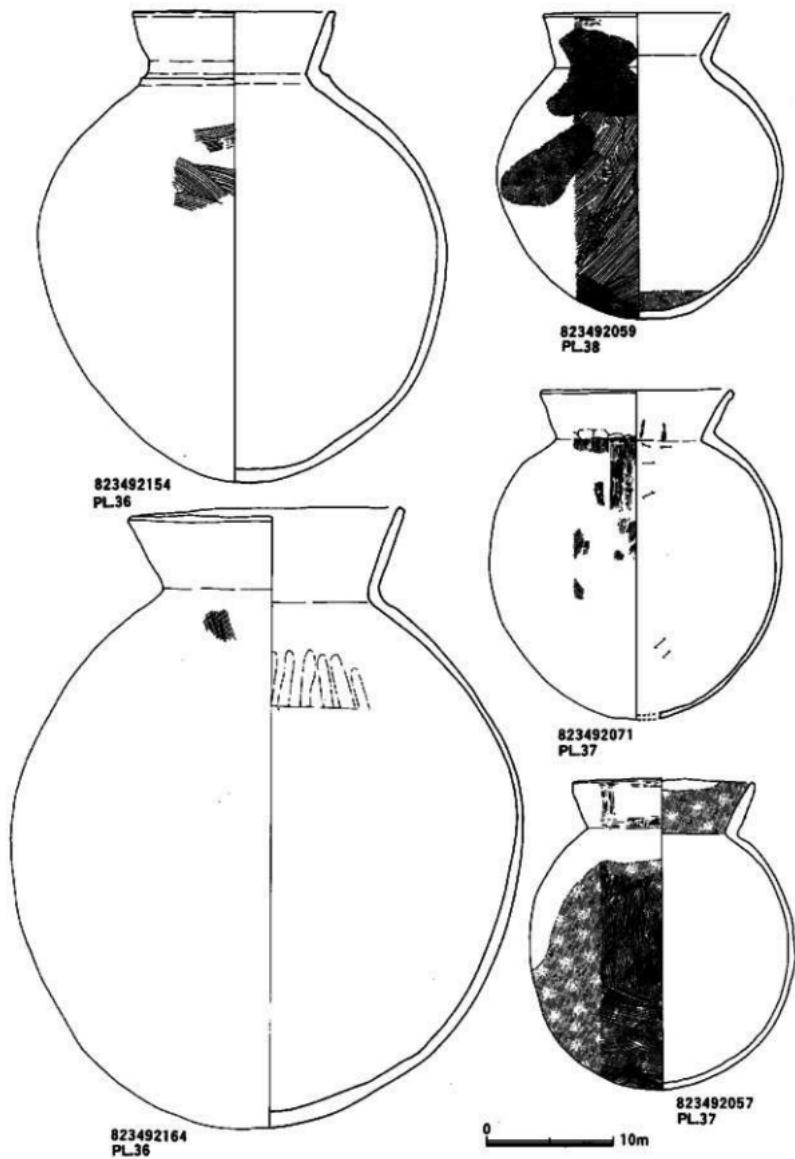


Fig. 83 仪区出土遗物实测图—3 (缩尺1/4)

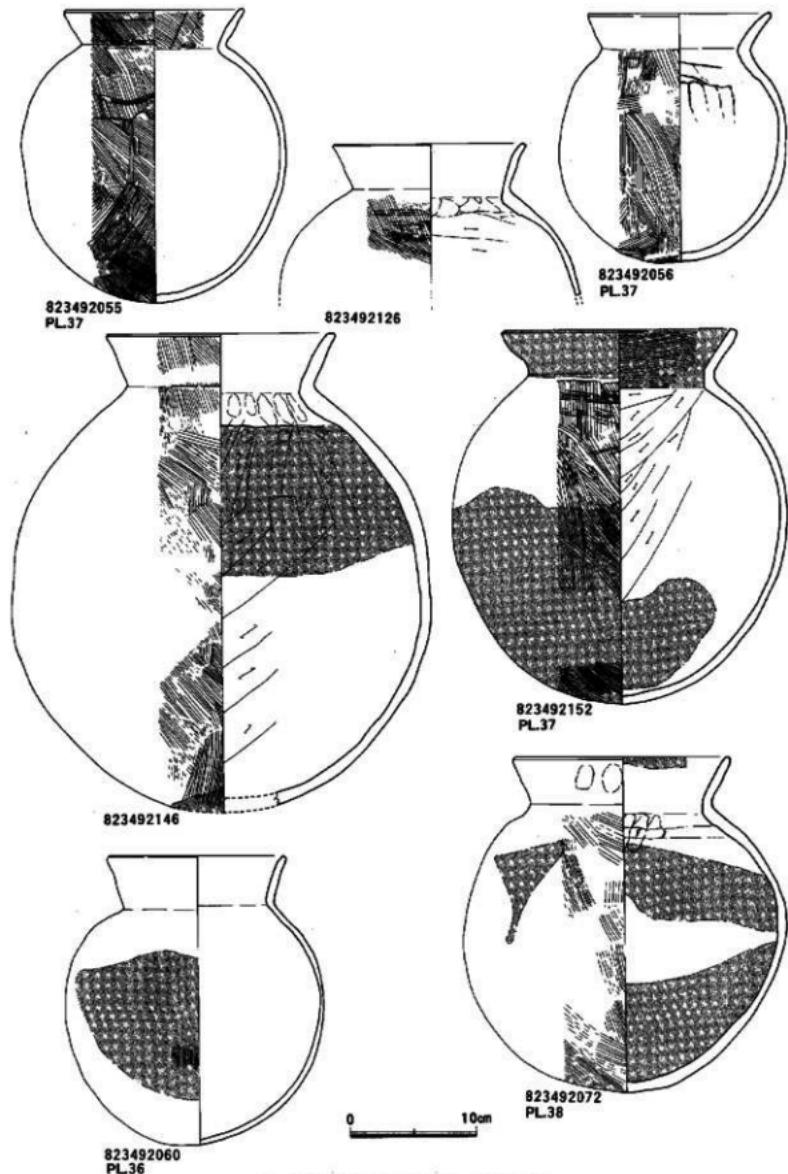
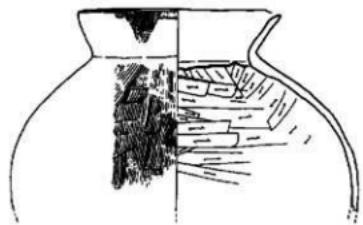
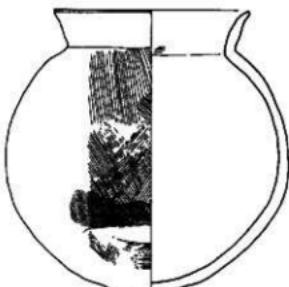
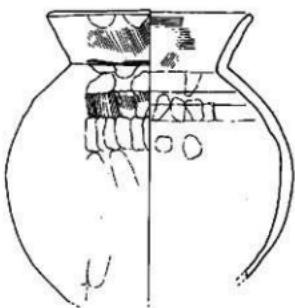
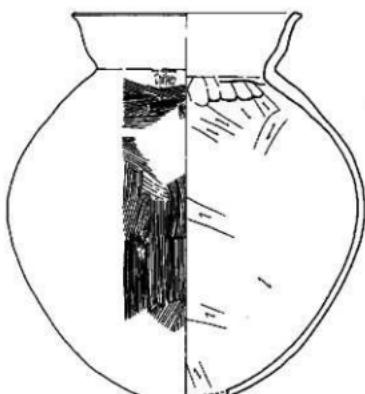
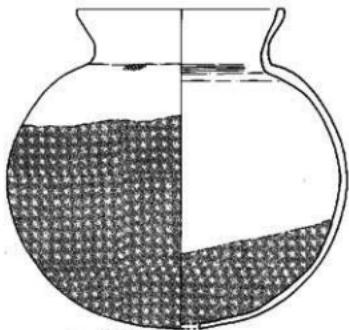


Fig. 84 IX区出土遺物実測図-4(縮尺1/4)

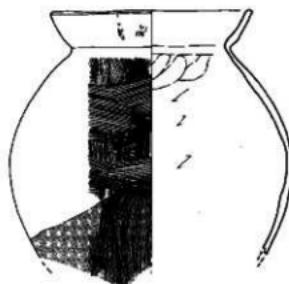


823492130

823492070
PL.36823492069
PL.36823492153
PL.37

823492151 PL.37

0 10cm



823492073 PL.37

Fig. 85 IX区出土遺物実測図-5(縮尺1/4)

S X - 13 出土の土器 (Fig. 82 PL. 33)

99067 須恵器の壺形土器で完形品である。胴部最大径は中位にあり、頸部は締まる。頸部から外反しながら立ち上り、口縁は大きく外へ開く。外面は丁寧なナデ、内面は回転ナデ・指ナデを施している。内面・外面上部まで自然釉がかかり不純物も混ざる。底部は平底で、底部近くでは一部生焼け状態を示す赤褐色を呈する部分がある。胎土は精製された粘土を使用している。口径14.5cm、器高19.5cm、胴部最大径18.2cm、底径5.6cmを測る。

S X - 21 出土の土器 (Fig. 82 PL. 33)

3点図示した。99068 小型の壺形土器で、外面に一条の稜を巡らす。調整は外面が時計回り(右まわり)の回転ナデと範削りを施す。内面は静止ナデと回転ナデを施している。胎土は細砂を多く含む。色調は外面が暗黒灰色、内面が暗灰色で散発的に自然釉がかかる。口径9.4cm、器高5cmを測る。99070 小型の壺形土器で、外面に一条の稜を巡らす。形状は99068と同様であるが、口縁部近くで稜を巡らすため、口縁部は外に聞く形状を呈する。調整は外面が時計回り(右まわり)の回転ナデと範削りを施す。内面は回転ナデを施している。胎土は細砂を含む。色調は内外面とも灰色、内面に不純物が付着している。口径8.2cmを測る。99071 須恵器の把手である。99069タイプにつくのか中型の壺形土器につくかは不明であるが、大きさから中型の壺形土器に付くものと思われる。全体的に指ナデで仕上げており、径は1.35cmある。胎土は細砂・白色粒を含み、色調は白淡灰色である。

S X - 40 出土の土器 (Fig. 82 PL. 33)

99069 小型の壺形土器で、外面胴部に三条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。調整は内外面ともナデを施す。胎土は細砂と1~2mm大の石英粒を多く含む。色調は内外面とも淡灰色を呈する。口径11cm、器高7cmを測る。

S D - 07 出土の土器 (Fig. 83 ~ 97 PL. 33 ~ 39)

S D - 07からは多量の出土遺物が出土した。できる限り図示したが、割愛した土器も多い。Fig. 83 ~ 95までの119点(89055他)の土師器とFig. 96 ~ 97の18点(92002他)の須恵器を図示した。点数が多いため器種別に土師器・須恵器の順で記述する。また器種の多い壺形土器・小型丸底壺・高壺に関しては紙面の都合上タイプ別に記述した。

壺形土器 (Fig. 83 ~ 86 PL. 36 ~ 38)

壺形土器は多量に出上したが、図示したものはFig. 83 ~ 86の26点である。この内Fig. 86の8点はやや特殊である。これは個別に記述していくが、紙面の都合上壺形土器はタイプ別に記述する。

壺形土器の内大型のものと中型のものに分けられる。大型は30cm以上あるもので、146,154,164の3点で最大は164の49.6cmである。他は中型に属し、20~30cmの範囲にはいる。口縁部の形態で区別すると4つに分類される。Aタイプ 口縁部がやや外反するが、直立するタイプ 154,059,164,060,126の5点。Bタイプ 口縁部が「く」字状を呈するタイプ 071,057,055,056,146,072,069の7点。Cタイプ 口縁部が外反して「く」字状を呈するが、口縁端部が内に入るため口縁部中央部が膨らみを持つタイプ 152,151,073,133の4点。Dタイプ 口縁部が「く」字状を呈するのはB・Cタイプと同じであるが、口縁部が一度膨らむが、口縁端部が外反するタイプ 130,070,153の3点である。

調整は基本的には器壁は薄く仕上げられているが、頸部は、粘土を貼り付けやや厚く仕上げられ指押を行っている。外面調整は、凹凸が激しいが細かな刷毛目を施し、内面は口縁部がナデ、胴部は範削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、1~5mm大の石英・長石および赤色・黄母粒を含む。色調は内外面とも黄茶褐色+暗茶褐色を呈する。ただ外面に黒斑のあるものは、059,057,055,14

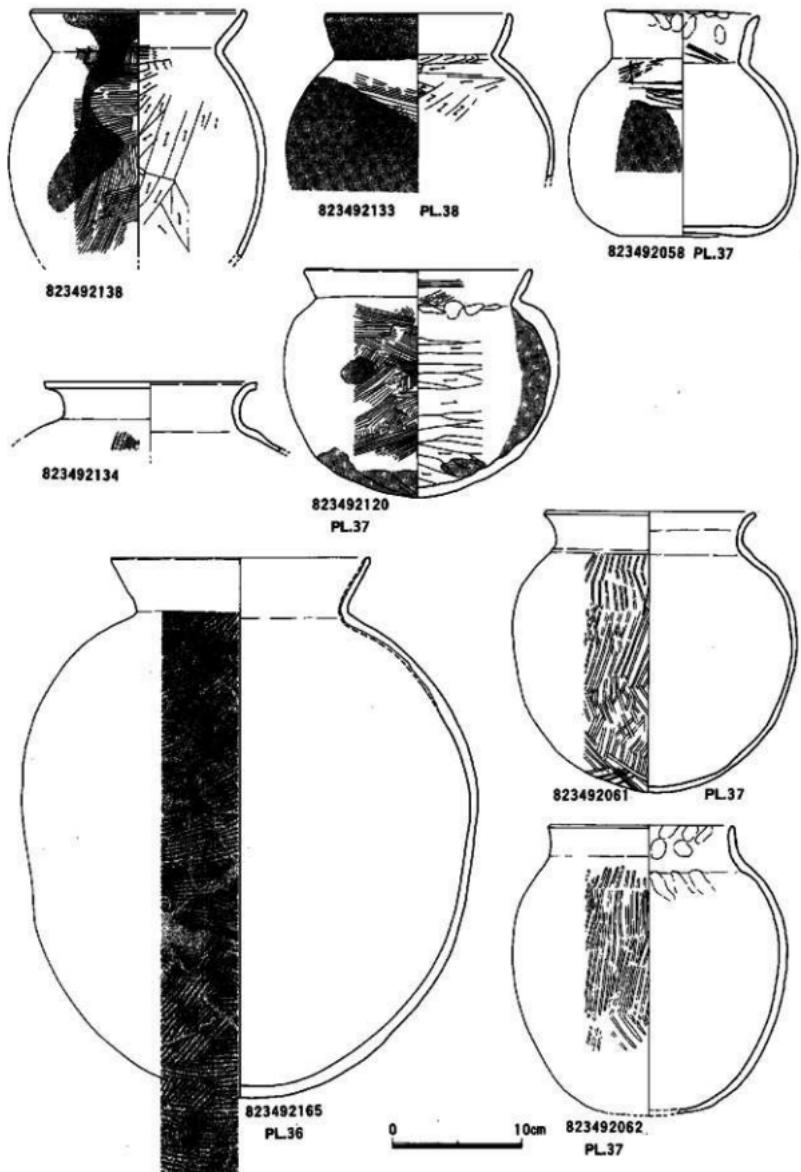


Fig. 86 IX区出土遺物実測図-6 (縮尺1/4)

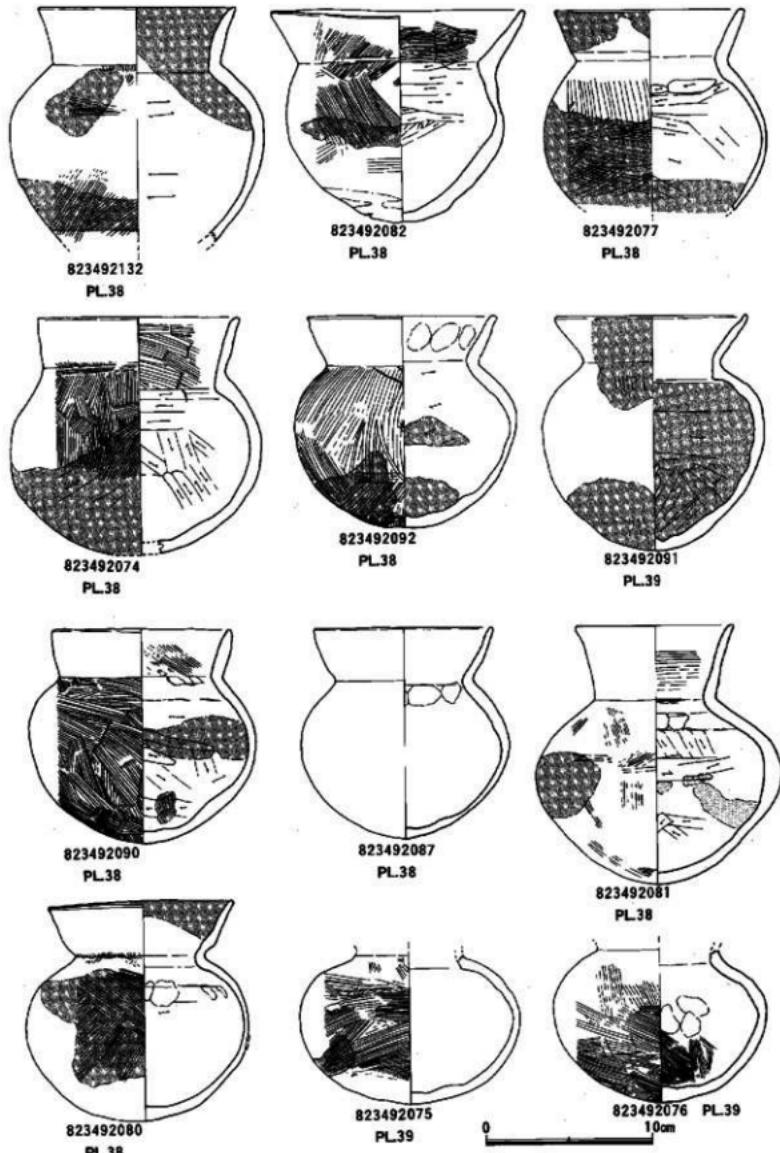


Fig. 87 D区出土遺物実測図-7 (縮尺1/3)

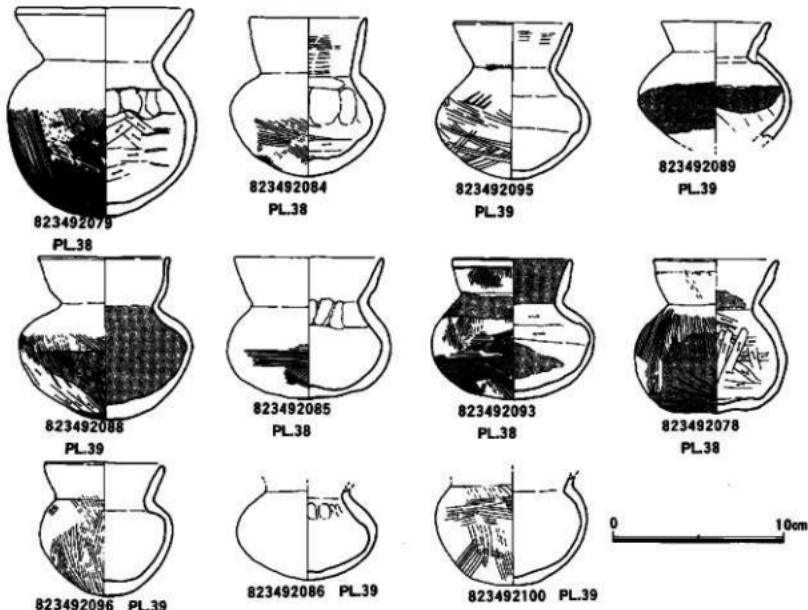


Fig. 88 IX区出土遺物実測図-8(縮尺1/3)

6,152,060,072,130,070,151,073で、内面にあるものは151,057,146,152,072である。内面調整で口縁部に刷毛目を施しているものは069,055,152,071の4点にある。

タイプ別に記載したが形態のあるもの（Fig. 86に図示した）を個別的に記載する。

92138 土師器の中型の壺で、底部が欠損する。長胴形を呈し、胴部の膨らみは小さく最大径は胴部中位下にあり、頸部での縮まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに立ち上がり、口縁部に達する。いわゆる「く」字口縁を呈するが、口縁端部が内に入り嘴状を呈する。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、縦・斜め・横の刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部にナデ、頸部に刷毛目、胴部に削りを行っている。胎土は細砂粒・雲母粒を多く含み、3～4cm大の石英・長石を含む。色調は外面が淡赤褐色+黒斑、内面は明褐色を呈する。口径は17cm、最大径21cmを測る。**92058** 土師器の中型の壺で、完形品である。胴部は膨らまず最大径は胴部中位にあり、頸部での縮まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに直立して口縁部に達し、端部が僅かに外反し納めるタイプで壺形土器のタイプ別でいえばDタイプに属する。しかしこの土器は平底で、底面が上げ底を呈する。器壁は全体的にやや厚めに仕上げられている。外面調整は、範状工具で削られている。内面は口縁部に指押えの後ナデ、頸部に刷毛目、胴部に削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、3～4cm大の赤色粒・雲母粒を含む。色調は外面が明赤褐色+黒斑、内面は明黄赤褐色を呈する。口径は12.1cm、器高17.5cm、最大径18.1cmを測る。**92120** 上師器の中型の壺で、完形品である。肩の張る形状で、丸みの強い土器である。胴部は膨らみ最大径は胴部上位にあり、頸部

の緒まりはあまりない。頸部から外反しながらやや開きぎみに立ち上がり口縁部に達する。いわゆる「く」字口縁を呈する。器壁は薄い部分と厚い部分に分けられ頸部付近が一番厚く器面自体に凹凸があり、造りが雑である。外面調整は、斜め・横の刷毛目を荒く施し、内面は口縁部に刷毛目の後ナデ、頸部に指押え痕、胴部に横からの窓削りを行っている。胎土は細砂粒を多く含み、1~2cm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色+黒斑、内面は明赤褐色+暗赤茶褐色を呈する。口径は17.8cm、器高17.9cm、最大径21.5cmを測る。92134 土師器の中型の壺で、口縁部のみである。須恵器の壺形土器を思わせる形態を呈する。頸部は締まらず頸部から大きく外反しながら開きさらに口縁端部は外反し納める。口縁端部は稜をもち、器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、叩き、内面は摩滅しているため調整は不明。胎土は細砂粒を多く含み、3~4cm大の石英・長石・赤色・雲母粒を含む。色調は外面が明淡褐色、内面が淡白桃色である。口径は16.8cmを測る。

92165 土師器の大型の壺で、完形品である。胴部は膨らみ長胴形を呈する。最大径は胴部中位上にあり、頸部は縮まる。頸部から外反しながらやや開きぎみに口縁部に達し、いわゆる「く」字口縁を呈す。口縁端部は丸く納め、器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、1cm中約3本の斜め方向の叩きと横方向の叩きにより格子状を呈する部分が多く、頸部から底部まで胴部中央付近は横・縦の方向に施文する。これにより下位（底部）は基盤の目状に叩きが施されている。内面は表面が剥落のため調整は不明である。胎土は細砂粒を多く含み、2~5cm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡肌色+暗褐色+一部煤付着+赤褐色（赤色顔料？）、内面は明黄褐色+淡明肌色を呈する。口径は20.2cm、器高42.6cm、最大径35.5cm。92061 土師器の中型の壺で、完形品である。胴部は膨らみ最大径は胴部上位にある。頸部は締まらず、頸部から大きく外反しながら開き更に開いて口縁部に達する。壺形土器のタイプ別で行くとDタイプである。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、口縁部が横ナデ、胴部全体に縦方向の叩きを施している。内面は口縁部・胴部ともナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含み、1cm大の石英・長石粒を含む。色調は外面が明肌色+暗褐色+黒斑、内面は暗灰褐色を呈する。口径は16.6cm、器高22cm、最大径22.4cmを測る。

92062 土師器の中型の壺で、底部の一部を欠損する。胴部は膨らまず長胴形を呈し、最大径は胴部上位にある。頸部は締まらず、頸部から内済しながら直立に立ち上がり端部は丸く納める。器壁は全体的に薄く仕上げられている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縦の叩きを施し、内面は口縁部に指押えあとナデ、胴部は指押えの後窓ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、1cm大の赤色・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色+赤褐色+一部煤付着、内面は暗赤褐色+黒斑を呈する。口径は14.7cm、器高23cm、最大径21.5cmを測る。

小型丸底壺 (Fig. 87 ~ 88 PL. 38 · 39)

小型丸底壺も多量に出土したが、図示したものはFig. 87~88の23点である。大別して10cm以上のものと10cm以下のものとの二種類に分けられる。また、形態的には口縁部が「く」字状を呈する077, 079, 080, 082, 087, 089, 091, 095と口縁部が外反するが直立するもの074, 078, 081, 084, 085, 088, 090, 092, 093, 096, 132である。底部は丸底が074~076, 080, 081, 084, 086, 087, 090~092, 095, 100、やや平底で安定のあるものが小型に多く085, 088, 093, 096で尖り底が082と1点だけである。調整は口縁部の内外面はナデ一部刷毛目を施す074, 081, 082, 084, 090, 093, 095があるが、これもその後ナデを施す。胴部は外面が刷毛目、内面が窓削りを施す。

瓶・把手 (Fig. 89 ~ 91 PL. 34 · 35)

瓶・把手は多量に出土したが、図示したものはFig. 89~91の20点である。92147 口縁部の一部を欠損するが、復元完形である。底部は被打つが平底に近い形状を呈する。胴部中位で把手を付け

るが、胴部中央に一条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けてある。把手はやや上がり気味に取り付け、端部が上を向く。頸部は締まらず、口縁部は外反しさらに端部に向けて外反する。口縁端部は「コ」字状を呈し、把手と把手の中間で呑み口状に垂れ下がる。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縱・斜めの叩きを丁寧に施し、内面はナデである。口縁部の一部に丹塗りの痕跡が見られる。把手は丁寧に範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、1~2mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡赤褐色、内面は淡白褐色+丹塗りを呈する。口径は34.5cm、器高24.5cm、胴部の最大径32.8cmを測る。**92148** **92147**と形状は類似する。口縁部の一部を欠損するが、復元完形である。底部は平底に近い形状を呈し、胴部中位で把手を付けるが、胴部中央に二条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けてある。把手は横に伸びる形状を呈する。頸部まで内溝しながら立ち上がり、口縁部は頸部から大きく外反し、さらに端部に向けて外反し、外につまみ出されて平坦面を造り納める。口縁部は把手と把手の中間で呑み口状に垂れ下がる。外面調整は、口縁部がナデ、胴部が縱叩きとナデを交互に施す。口縁部の一部に丹塗りの痕跡が見られる。内面はナデと横位の範削り、指によるナデを施す。把手は丁寧に範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、4~8mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明淡肌色、口縁部に丹塗り、内面は明肌色+汚肌色を呈する。口径は31.9cm、器高20.6cm、胴部の最大径30.5cmを測る。**92162** 両方の把手を欠損する。復元完形である。底部は丸底を呈し、胴部中位上で把手を付けた痕跡があり、胴部中央に一条の沈線を巡らしており、これが把手の中心部にくるように貼り付けるものと思われる。口縁部は僅かに外反し、端部は丁寧に仕上げている。底部に外側から径15mm前後の円形の孔を18個穿っている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで繩蓆文の叩き、内面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、5~7mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が淡青灰褐色+淡明黄褐色+黒斑、内面は明茶褐色を呈する。口径は28cm、器高25.7cmを測る。**92068** 完形の瓶である。底部は平底を呈し、中央部が上げ底になるもので、底部に外側から径15mm前後の円形の孔を16個穿っている。中央に5個、周辺に11個を規則正しく配列している。把手は胴部中位に位置し、横に伸びる形状で貼り付けている。胴部中央に一条の沈線を巡らし、これが把手の中心部に位置している。口縁部は大きく外反し、端部は丁寧に仕上げている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで繩蓆文の叩き、内面はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、3~5mm大の石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも明茶褐色+暗褐色+黒斑を呈する。口径は25.7cm、器高21.4cm、底径12.5cmを測る。

Fig. 90 92149 復元完形の瓶である。底部の一部が欠損している。底部は平底を呈し外側から径24mm前後の円形の孔を7個穿っている。中央に1個、周辺に6個を規則正しく配列している。把手は胴部中位に位置し、下に下がる形状で貼り付けている。この瓶には沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものは不明である。口縁部は開きぎみに垂直に伸び、端部は丁寧に仕上げている。外面調整は、口縁部・胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明黄茶褐色+黒斑、内面が暗茶褐色+明茶褐色を呈する。口径は30cm、器高22.5cm、底径10.8cmを測る。

92066 この上器は把手のつかないタイプで、復元完形の瓶である。底部は丸底を呈し、底部に外側から径8mm前後の円形の孔を15個以上穿っている。欠損しているので全容が把握できないが、規則性はないと思われる。頸部が内溝し、その反動で口縁部は大きく外反し、端部は丸く納める。外面調整は、口縁部・胴部中位まで刷毛目、胴部から底部までが範削りの後ナデと指押えを施す。内面は口縁部がナデと刷毛目、胴部が範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、石英・赤色粒・雲母粒を含

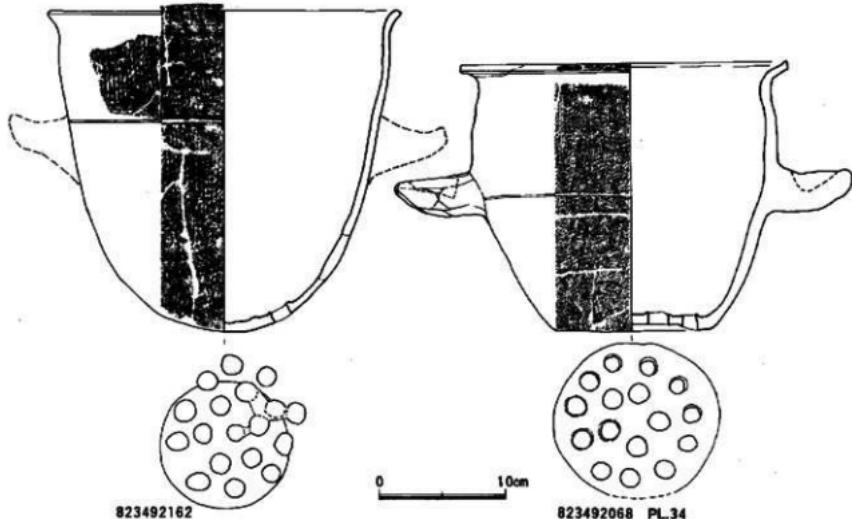
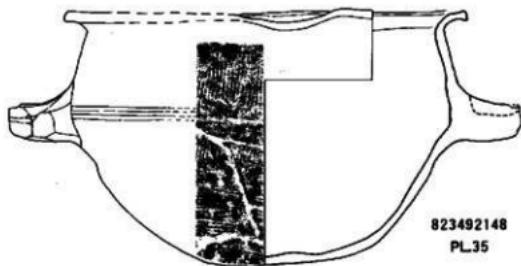
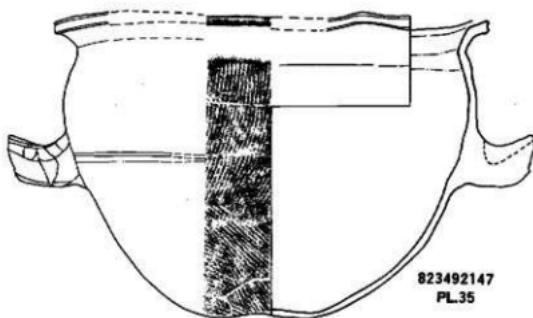


Fig. 89 IX区出土遺物実測図一9(縮尺1/4)

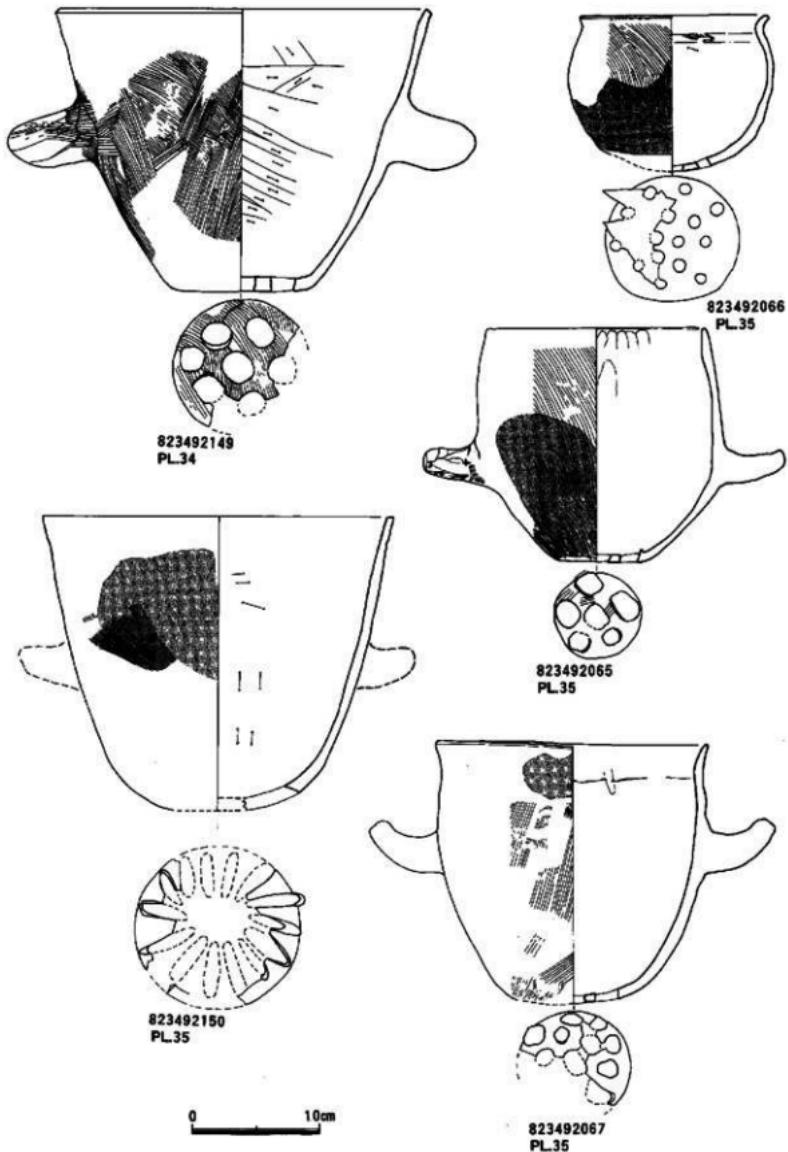


Fig. 90 IX区出土遺物実測図—10 (縮尺1/4)

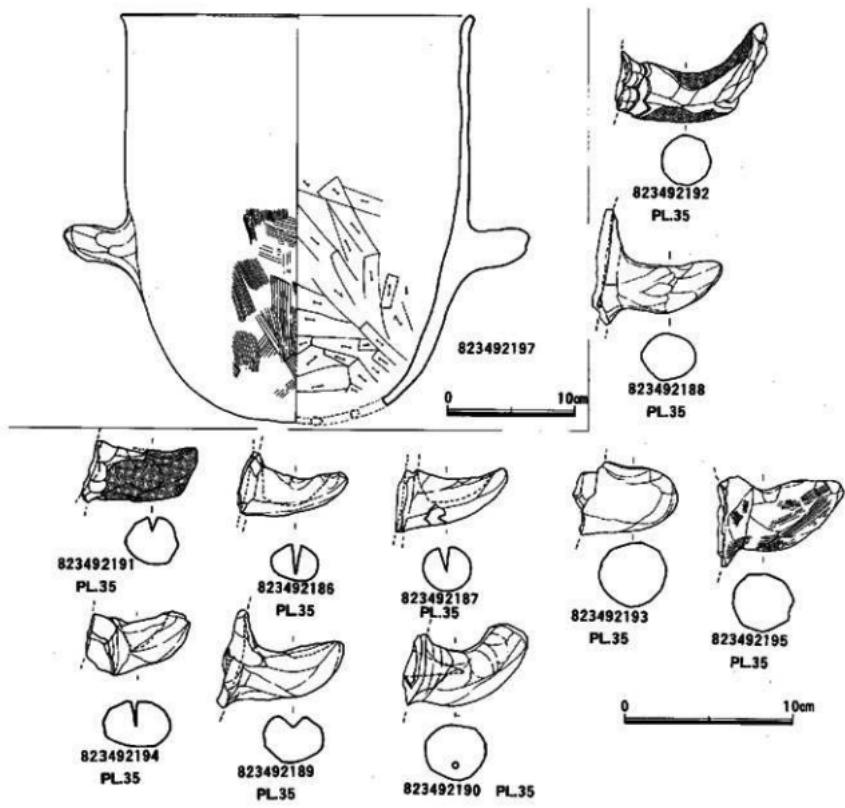


Fig. 91 IX区出土遺物実測図-11(縮尺1/3,1/4)

む。色調は全体に火を受けて黒ずんでおり、内外面とも濃い暗赤褐色+黒斑を呈する。口径は14.7cm、器高12.4cm、最大径16.1cmを測る。

92065 復元完形の瓶である。底部は平底を呈し、外側から径19mm前後の円形の孔を6個穿っている。中央に1個、周辺に5個を配列している。把手は胴部中位下に位置し、横に延びる形状で貼り付けている。この瓶には胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものは不明である。口縁部は胴部から内湾しながら垂直に立ち上がり、一度内湾を修正するため直立させ口縁部に達する。端部は丸く仕上げている。外面調整は、口縁部が刷毛目の後ナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部が指押えの後ナデ、胴部が窓削りを施す。把手は窓による成形後刷毛目を施す。胎土は細砂粒を多く含み、4~5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗明茶褐色+黒斑を呈する。口径は17.3cm、器高18.7cm、底径6.9cmを測る。

92150 底部が欠損するが、復元完形の瓶である。底部はやや丸みをもつ平底を呈し、外側から横円形の孔を花弁状に14個穿っている。それぞれの大きさは異なるが、長さ1.9~4.5cm、幅0.8~1.4

cmで、中央部は残す形状を呈する。把手は欠損しているが、取り付けている場所は胴部中位に位置し、恐らく横に延びる形状で貼り付けていたものと思われる。この瓶には胴部中央に沈線の痕跡が確認出来ないが、これは、外面調整のために失われたのか、もともとないものは不明である。口縁部は胴部から外反しながら垂直に立ち上がり口縁部に達する。端部は平坦に仕上げている。外面調整は、口縁部がナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部がナデ、胴部が縱と斜めの範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2~5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明褐色+黒斑、内側が明褐色を呈する。口径27.8cm、器高23.5cmを測る。92067 左の把手・底部を欠損するが、他はほぼ復元完形の瓶である。底部は平底を呈し、径15mm前後の円形の孔を10個穿っている。底部が欠損しているため、定かではないが不規則に配列している。把手は胴部中位上に位置し、上に跳ね上げて納めるタイプである。この瓶にも胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ない。口縁部は胴部から内湾しながら垂直に立ち上がり、口縁部付近で緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。外面調整は、口縁部が横ナデ、胴部から底部が刷毛目、内面は口縁部がナデ、胴部が範削りを施す。把手は範による成形を施す。胎土は細砂粒を多く含み、4~5mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が明褐色+黒斑、内面が明褐色を呈す。口径は21.6cm、器高21cm、底径9.0cmを測る。

Fig. 91 92197 復元完形の瓶である。底部はやや丸みを持った平底を呈し、外側から円形の孔を6個穿っている。把手は胴部中位下に位置し、横に延びる形状で貼り付けている。この瓶にも胴部中央の沈線の痕跡が確認出来ない。口縁部は把手を貼り付けた部分から垂直に立ち上がり、口縁部端部付近で僅かに外反し、端部を丸く納めている。外面調整は、口縁部が刷毛日の後ナデ、胴部から底部まで刷毛目を丁寧に施し、内面は口縁部がナデ、胴部が範削りを施す。把手は範による成形を施す。胎土は細砂粒を多く含み、3~4mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が淡肌色+黒斑、内面が明淡褐色を呈する。口径は27.8cm、器高31.8cmを測る。

把手 (Fig. 91)

把手は10点図示した。瓶でも記述したが、3つのタイプに区分できる。

- 1 把手の端部が上に跳ね上がるもの 92192.92187.92190
- 2 把手の端部が横に伸びるもの 92188.92191.92186.92195.92194.92189
- 3 把手が下に下がり端部が丸くなる 92193

成形は範削りが殆どで、中には刷毛目を施すもの、ナデ仕上げのものもある。

高坏 (Fig. 92~94 PL. 39~40)

高坏も多量に出土したが、図示したものはFig. 92~94の3点である。高坏は形態分類して特徴のあるものについて記述する。大型の92104~92116を除いて中型（口縁が15cm前後）のものが大半を占める。大型2点について記述する。92104 口径が23.7cm、器高が15.2cm、脚径が16.3cmを測る大型の高坏で、坏部の下段に段を有する。口縁部は胴部から直線的に外へ開くが、口縁端部で外反し丸く納める。脚部は膨らまずに裾付近で外に開き端部を丸く納める。外部調整は、坏部が刷毛目調整、内面は表面剥落のため調整不明。脚部は外面がナデ、内面ナデと範削りを行う。

92116 口径23cmを測る大型の高坏であるが、脚部の一部を欠損する。坏部の胴部下位で稜を持つが巡らない。口縁部は胴部から外反しながら外へ開くが、そのまま立ち上がり口縁端部で丸く納める。外部調整は、坏部が内外面とも刷毛目調整、脚部は外面がナデ、内面ナデと範削りを行う。

中型の高坏は坏部の形状・脚部の形状により5つに区分した。

- 1 大型にも代表される形態で、坏部に沈線から段を有し、脚部が端部しか接しないタイプ

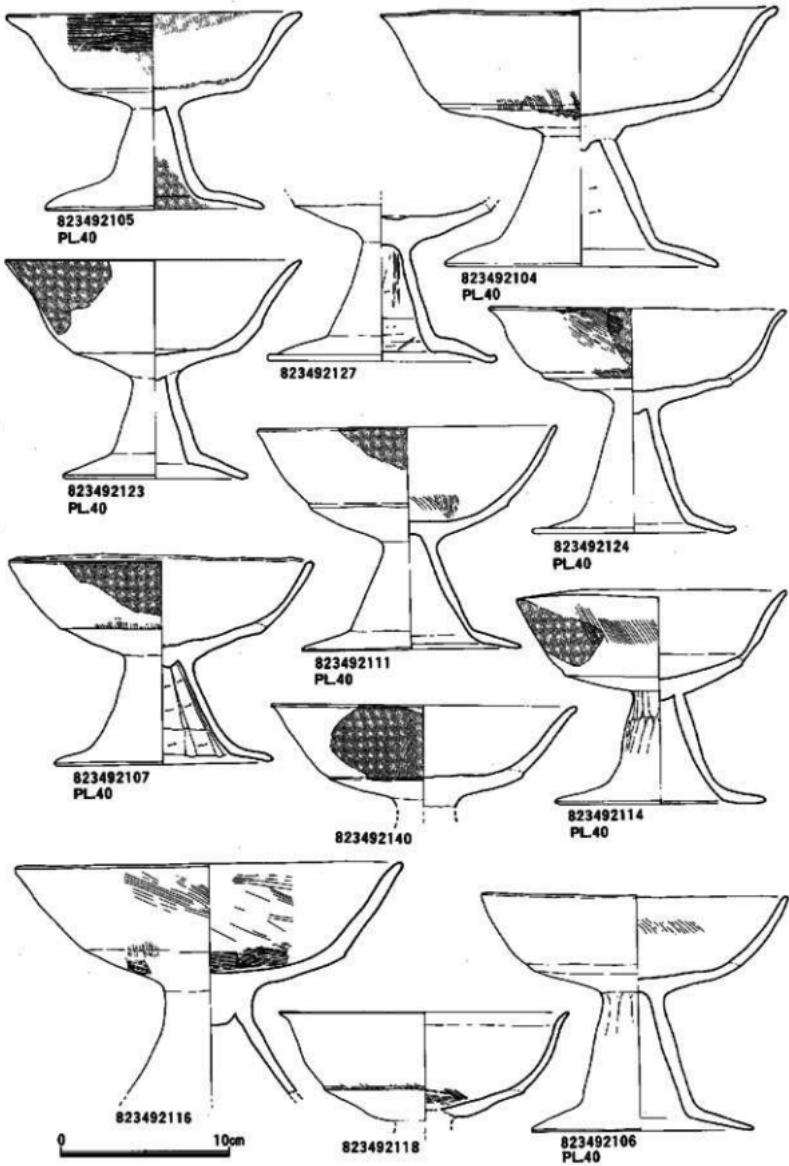


Fig. 92 DK区出土遺物実測図—12 (縮尺1/3)

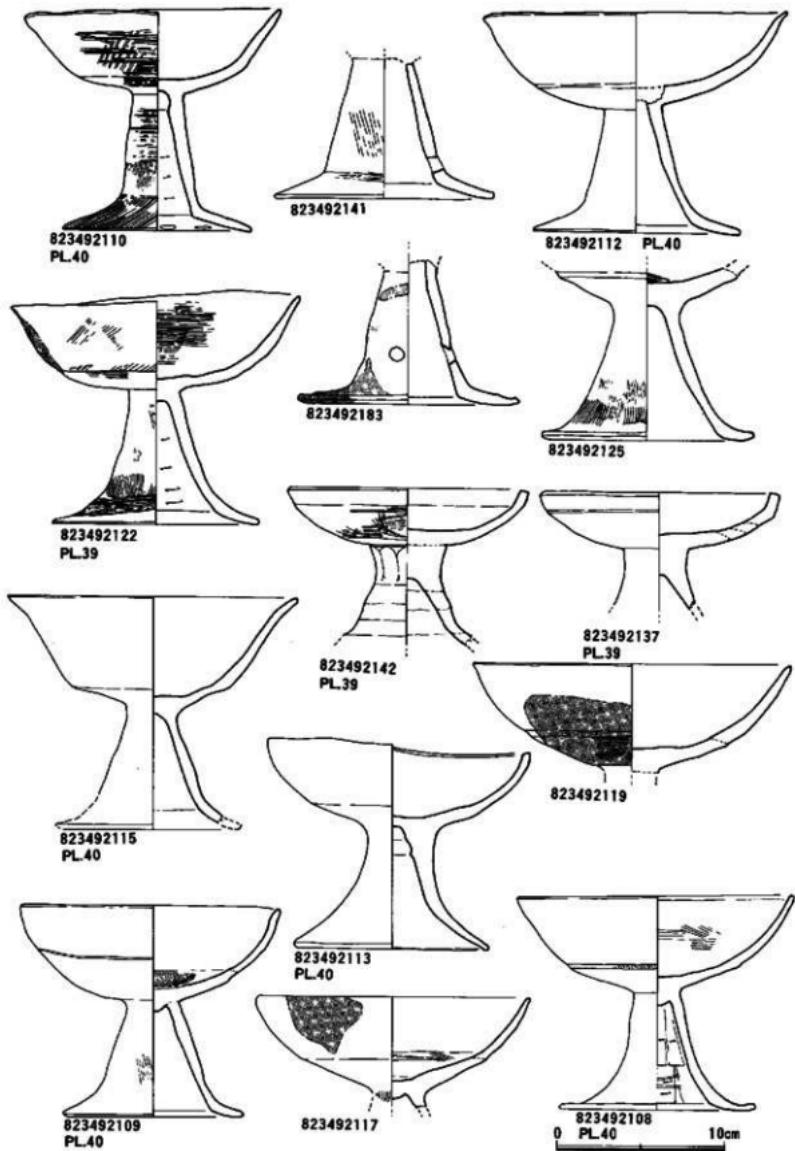


Fig. 93 次区出土遺物実測図—13(縮尺1/3)

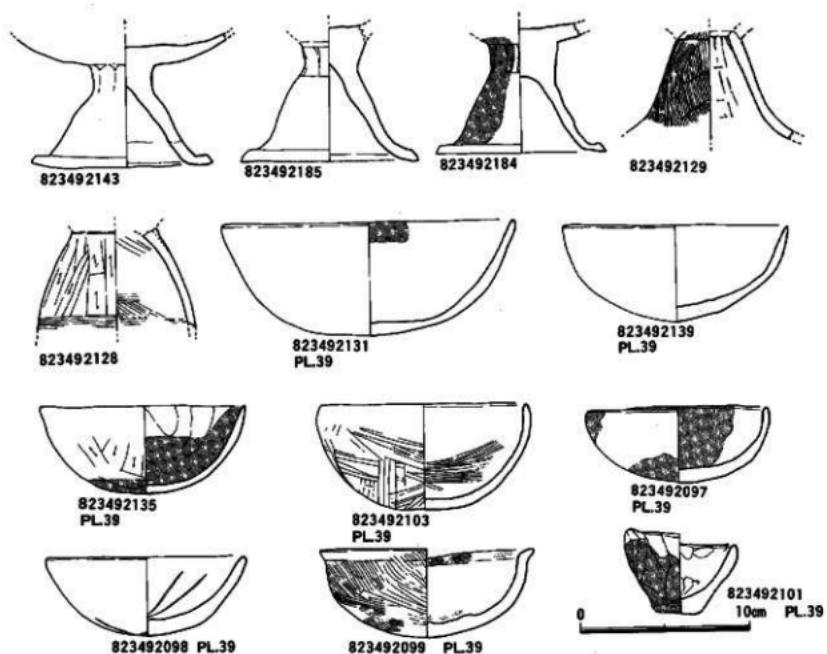


Fig. 94 IX区出土遺物実測図一4(縮尺1/3)

92105. 92111. 92123. 92107. 92118. 92106. 92115. 92119. 92110

2 1と類似するが、脚部端部が折り曲げか端部以外も接するタイプ
92127. 92124. 92114. 92125. 92183

3 坏部に沈線・稜等がなく、坏部が宛形を呈するタイプ
92113. 92109. 92112. 92142. 92137

4 2の脚部をもち、3の坏部を有するタイプ
92108

5 脚部が膨らみ長さが短い小型の高坏
92143. 92185. 92184. 92129. 92128

宛形土器・手づくね土器 (Fig. 94 PL. 39)

宛形土器は7点、手づくね土器1点を図示した。92131 底部が丸底で、口径17cm、器高6.6cmを測り、外側調整は口縁部付近がナデ、脚部下が荒い範削りを施す。92139 底部が丸底で、口径13.3cm、器高5.7cmを測り、外側調整は表面剥落のため調整不明。内面はナデ仕上げを行っている。

92135 底部が丸底で、口径12cm、器高5.2cmを測り、外側調整は口縁部付近がナデ、脚部下が荒い範削りを施す。内面は指押えの後ナデ調整。92103 底部は丸底か、丸みを持った平底で、口径12cm、

器高6.1cmを測り、外面調整は口縁部付近がナデ、胴部下が刷毛目、内面が範磨きを施す。92097～92099は小型の壺で、口径10.7cm・11.8cm・12.5cm、器高が4.5cm・4.6cm・5.2cmを測る。塊形土器の胎土は細砂粒を多く含み、1～3mm大の石英・長石・雲母粒を含む。手づくね土器は口径6.5cm、器高5cm。

土師質の特殊遺物 (Fig. 95 P.L. 33・34・36・38)

Fig. 95に図示した遺物は形態的・製作技法・文様形態等が在地の土器とは異なり、韓半島の影響を受けて製作されたか、工人が吉武地区に移住したか、搬入されたものかは定かではないが、吉武遺跡群の中でⅡ次調査だけではなく、Ⅲ～Ⅵ次調査内からも同様の特殊遺物が出土している。

92094 鉢形の形状を呈する土器で、底部は平底であるが、僅かに上げ底を呈する。底部端部は範削りを施し丁寧に仕上げている。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位で内湾し頸部で大きく外反する。口縁部は外に開き、端部は稜を作り丸く納める。外面調整は口縁部がナデ、頸部から底部にかけて格子の叩きを全面に施す。内面は口縁部がナデ、他は範削りを施す。口径15.9cm、器高13.3cm、底径9.6cmを測り、格子の大きさは0.5cm×0.3cmである。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・赤色粒・雲母粒を含む。色調は外面とも暗褐色+黒斑を呈する。92160 これも形態的には92094と同じ鉢形土器である。底部は平底、底部端部は範削りを施し丁寧に仕上げている。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位で内湾し頸部で大きく外反する。口縁部は外に開き、端部は稜を作り「コ」字状に納める。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部上位から胴部下位にかけて縦方向の叩きを全面に施す。内面は全面ナデを施す。口径12.5cm、器高11cm、底径8cmを測る。胎土は細砂粒を多く含み、1mm大の石英・赤色粒・雲母粒を含む。色調は外面とも明黄褐色+黒斑、内面が明黄褐色を呈する。92121 92121も上記の2点と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、内面中央部は盛り上がり、底部端部はシャープな造りである。底部から外反しながら胴部中位まで立ち上がり、上位でやや内湾し、頸部で一度外反する。口縁部は頸部からさらに外に開き端部を納める。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縦刷毛目を全面に施す。内面は全面にナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗赤褐色+明赤茶褐色+黒斑、内面が明肌色+黒褐色を呈する。口径14.8cm、器高14cm、底径8.4cmを測る。

92083 92083も上記の3点と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、底部端部はやや雑な造りである。底部から内湾しながら垂直に立ち上がり頸部で大きく外反し、口縁部に達する。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縦刷毛目のあとナデ仕上げ、底部が範削り、内面は口縁部がナデ、他は範削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、2mm大の石英・長石・雲母・赤色粒を含む。色調は内外面とも暗褐色+明褐色を呈する。口径14.4cm、器高12.9cm、底径8.5cmを測る。

92064 これも同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で、外面中央部がやや上げ底状になる。胴部は内湾しながら外に開きそのまま立ち上がるが胴部中位で内向して頸部に達する。頸部から大きく外反して口縁部に達するいわゆる「く」字状を呈する。外面調整は口縁部から頸部がナデ、胴部が縦の叩きの後ナデ仕上げを施す。内面は全面がナデである。胎土は細砂粒を多く含み、4mm大の石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗褐色+明肌色+黒斑を呈する。口径16.9cm、器高18.5cm、底径9.4cmを測る。92145 口縁部のみの出上であるが、胴部に縦の叩きを施す壺形土器である。口縁部は「く」字口縁を呈す。口縁部・内面はナデを施す。胎土は細砂粒・雲母粒を含む。色調は外面が暗褐色、内面が黒色を呈する。口径14.4cm。92163 薄い鉢形土器で、口縁部が欠損している。底部はやや上げ底を呈し、底部端部はシャープな造りである。底部から大きく外反し、胴部中位で内湾しながら頸部に達する。口縁部は欠損するが、おそらく外に開くタイプであろう。外面調整は、胴部が縦叩きの後二条の沈線を巡らす。内面は全面にナデを施す。胎土は細砂・赤色・雲母粒を含む。色

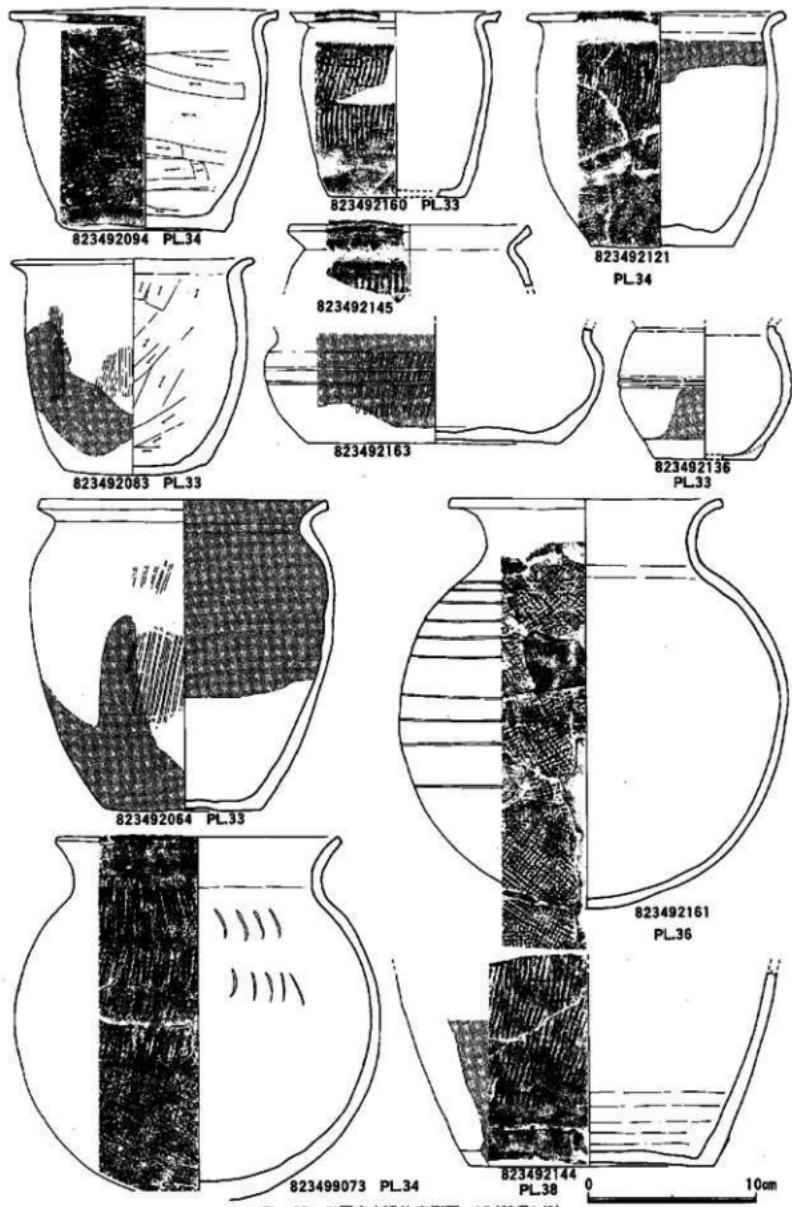


Fig. 95 IX区出土遺物實測圖—15(縮尺1/3)

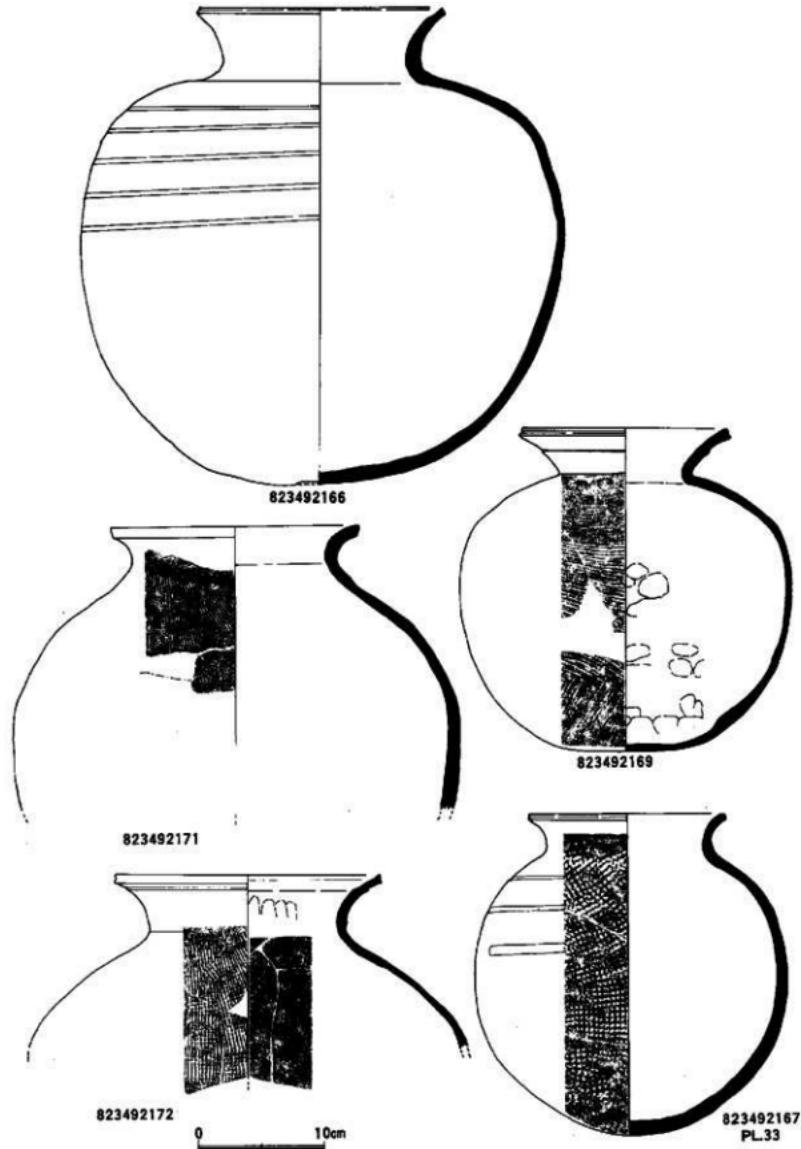


Fig. 96 IX区出土遺物実測図-16(縮尺1/4)

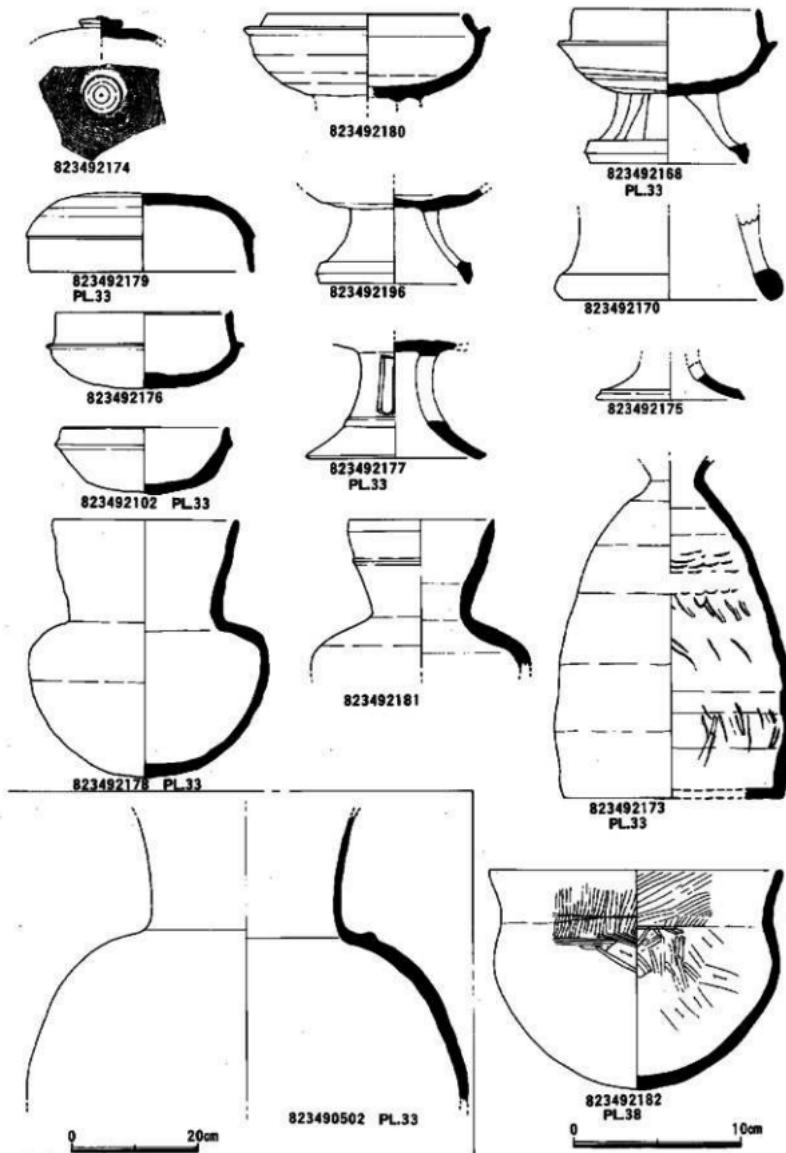


Fig. 97 IX区出土遺物実測図—17(縮尺1/3,1/8)

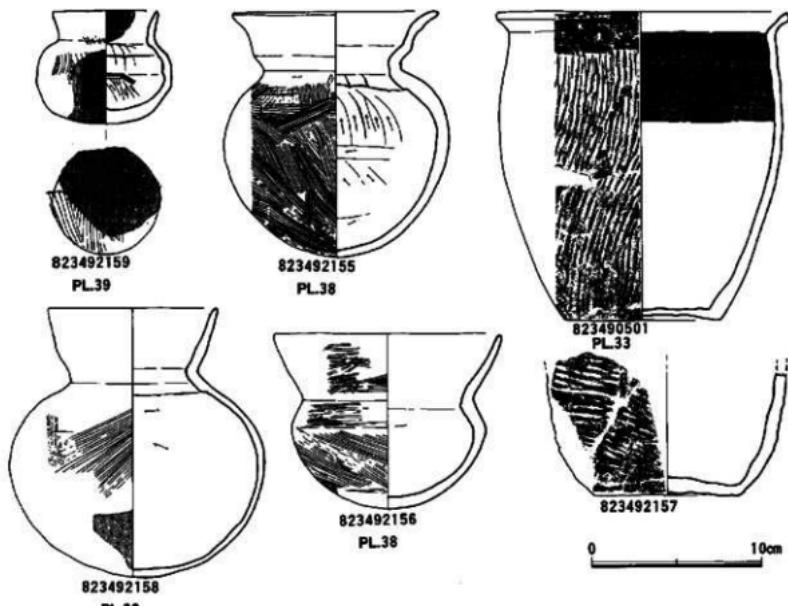


Fig. 98 IX区出土遺物実測図-18(縮尺1/3)

調は外面が淡茶褐色+黒斑、内面が明黄褐色を呈する。胴部最大径14cm、底径15cmを測る。

92136 口縁部・底部の一部を欠損する鉢形土器である。底部は薄く仕上げ胴部は厚い。胴部中位に二条の沈線を巡らし、「コ」字の突帯状に仕上げている。外面調整は外表面ともナデを施す。胎土は細砂・赤色粒を多く含む。色調は外面が暗黄褐色+黒斑、内面が明赤黄褐色を呈する。底径6cm。

92144 口縁部・頸部を欠損するが、これも92160と同様な形態を呈する鉢形土器である。底部は平底で外面中央部がやや上昇底状になる。胴部は内湾しながら外に開きそのまま立ち上がる。外面調整は胴部が継ぎの叩きを施す。内面は全面がナデ、底部近くは粘土帯が観察できる。胎土は細砂粒を多く含み、細かな石英・雲母粒を含む。色調は外面が淡赤褐色+暗褐色+黒斑、内面が淡黄褐色+黒斑を呈する。底径14.5cmを測る。92161 中型の変形土器である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的には5mmの厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部中位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達し、頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で外に開き端部を丸く納める。外面調整は、格子の叩きを施文後、頸部下に十条の沈線を巡らしている。口縁部から頸部が横ナデ、内面は全面がナデである。胎土は細砂粒を多く含み、4mm大の石英・長石・雲母粒を含む。赤色粒も微量であるが含まれている。色調は外面が明茶褐色+黒斑、内面が明黄茶褐色+暗褐色を呈する。口径16.2cm、器高24.3cm、胴部最大径23.3cmを測る。92073 S X-01から出土した小型の変形土器で復元完形である。底部は丸底で、底部の器壁は厚いが、胴部・口縁部は薄くほぼ5mm前後の厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部下位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達するが、92161ほど胴部も張らず頸部の締まりも悪い。口縁部は外に開き端部を丸く納める。外面調整は純扁文を施している。口縁部から頸部が横ナデ、内面は全面がナデであるが、爪跡状に工具痕が残る。胎土は細砂粒を多く含み、2~

3mm人の石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が暗茶褐色+暗黒褐色、内面が暗茶褐色+黒斑を呈する。口径16.5cm、器高21.6cm、胴部最大径21.9cmを測る。

須恵器 (Fig. 96 - 97 PL. 33 - 38)

S D - 07から出土した須恵器を18点図示した。土師質の特殊遺物と同じように明らかに在地の土器とは異なる形態・製作技法・文様等が見られ、韓半島の影響を受けて製作されたか、工人が吉武地区に移住したか、搬入されたものかは定かではないが、吉武遺跡群にはⅡ次調査だけではなく、Ⅲ～Ⅵ次調査、市道の調査である田・飯盛線、野方・金武線、吉武古墳群からも同様の土器が出土している。

92166 中型の壺形土器で陶質土器である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的には6mmの厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部中位で最大径を持つ。そこから内向し頸部に達し、肩が張り締まる。頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で外に開き端部を上方に摘み上げ納める。外面調整は縁口の叩きの後横方向に範ナデを施し、胴部に五条の横沈線を巡らす。胴部下は範ナデを施す。口縁部から頸部は逆時計まわりの横ナデ、内面は叩きの後ナデ消しを施している。胎土は細砂粒を多く含み、石英・長石・雲母粒を含む。色調は外面が濃い青灰色、内面が赤みを帯びた青灰褐色を呈する。口径17.7cm、器高38.2cm、胴部最大径38.2cm、頸部径15.6cmを測る。92169 中型の壺形土器で復元完形である。底部は丸味をもつ平底で、器壁は薄く全体的には9mmの厚さで口縁部が約1.4mmと一番厚い。胴部は球胴形を呈し、頸部は肩が張り締まる。頸部から大きく外に開き口縁端部を上方に摘み上げ「コ」字状に成形する。口縁端部と頸部の間に一条の沈線を巡らすが、そのため沈線の下は接をなす。外面調整は胴部中位まで横方向の叩き、下位は斜め方向の叩きを施し、口縁部から頸部は逆時計まわりの横ナデ、内面は指で成形後回転ナデを施している。胎土は細砂粒・黒色粒を含む。色調は青灰色を呈し、内外面とも一部に濃い緑色の自然釉と不純物が付着する。口径16.8cm、器高25.8cm、胴部最大径26.3cm、頸部径10.6cmを測る。92167 この土器はS D - 07とS X - 22から出土した資料が接合した、中型の壺形土器で復元完形である。底部は丸底で、器壁は底部がやや厚く1.6mm、胴部から口縁部にかけては薄く全体的には7mmの厚さがある。胴部はやや球胴形を呈し、肩はあまり張らず頸部の締まりも悪い。頸部から外に開き口縁端部を上方に摘み上げ成形する。外面調整は口縁部が逆時計回りの回転ナデを施し、胴部は格子の叩きを底部まで施す。その後、胴部上位に土器を回転させ螺旋状に三条のナデ磨り消しを巡らしている。内面の口縁部は回転ナデ、胴部から底部までは、当て具痕の磨り消しを行っている。胎土は細砂粒・黒色粒を含む。色調は内外面とも青灰色を呈する。口径14.8cm、器高25.3cm、胴部最大径24.3cm、頸部径13.2cmを測る。92171 これは在地の土器で、中型の壺形土器の口縁部である。胴部は張り、頸部は締まる。頸部から垂直に立ち上がり口縁端部を外へ摘み上げ成形する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が綫方向の細かな平行叩きと、叩きの後ナデを施す。内面は回転ナデを施す。胎土は細砂粒・黒色粒、1mm前後の石英粒を含む。色調は内外面とも灰色を呈し、外面に黒斑が見られる。口径19.7cmを測る。92172 これも在地の土器で、中型の壺形土器の口縁部である。胴部は張り、頸部は締まる。頸部から垂直に立ち上がり口縁端部を外へ大きく開き、口縁端部下で一条の沈線を有し、そのため段を持つ形状を呈する。端部は水引きによって成形する。外面調整は口縁部が回転ナデ、胴部が綫方向の細かな平行叩き、内面は口縁部が指押えの後回転横ナデ、胴部は同心円文の叩きを施す。胎土は僅かに細砂粒・黒色粒、1mm前後の石英粒を含むが精製された粘土を使用している。色調は内外面とも灰色を呈し、外面の一部に自然釉が見られる。口径21cmを測る。

高坏 (Fig. 97 PL. 33)

高坏は92180・92168・92196・92170・92177・92175の6点を図示した。代表的な92168は胴部の透かしが台形状を呈し、三方向に配列している。坏身部分は受身部分が1.9cmと高い。外面

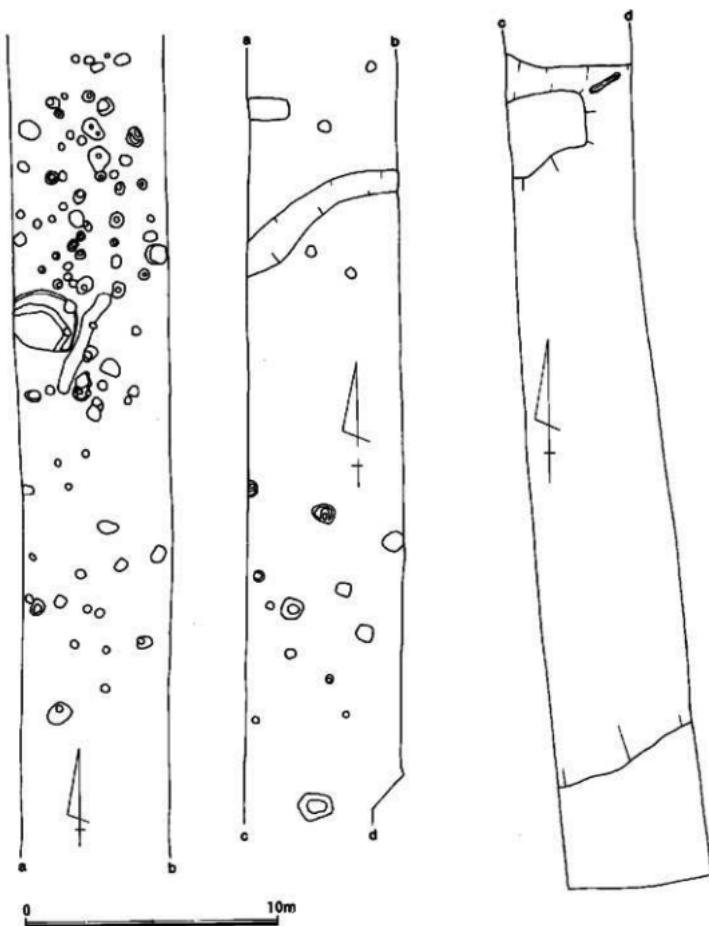


Fig. 99 X区遺構検出状態(縮尺1/200)

調整は壺身部分の底辺部が回転範削り、他は回転ナデを施す。内面は底辺部が静止ナデ、他は回転ナデを施す。胎土は1~2mmの大石英等を含むが、精製された粘土を使用している。色調は内外面とも灰色+白灰色を呈し、脚部の一部に焼成の悪い部分が認められる。口径11cm、器高9.1cm、脚径9.3cm、脚高4cmを測る。他は脚部、及び壺部で、時期差もある。

壺蓋2点(92174・92179)・壺身2点(92176・92102)を図示した。92102は生焼け土器で、全体が赤褐色を呈する。形状からこの土器と92174の土器が一番新しい時期である。

92178 小型の直口壺である。底部は丸底で、器壁は薄く全体的には6mmの厚さである。胴部は内湾しながら外に開き胴部上位で最大径を持つ。そこから大きく内向し頸部に達し、肩が張り締まる。頸部はやや外反しながら垂直に立ち上がり口縁部を丸く納める。内外面の調整は回転ナデを施し、外面に焼成時に付着した不純物がみられる。胎土は細砂粒が多く含み、石英・長石を含む。色調は内外面とも灰色を呈する。口径10.9cm、器高15.2cmを測る。92173 形状は徳利形を呈する土器で陶質土器と考えられる。底部は平底で、底部からやや内湾しながら頸部まで達し、頸部は締まる。頸部から大きく外反し口縁部に達すると思われるが、口縁部が欠損しているため不明。外面調整は横・縦のナデ、内面は工具痕と爪跡痕・横ナデを施す。胎土は細砂粒が多く含み、3~6mmの大石英粒も含む。色調は内外面とも青灰色を呈する。底径13.2cmを測る。92182 生焼けの鉢形土器である。底部は丸底で、胴部の最大径は上位にあり、内向してすぐに頸部に達する。頸部は僅かに締まるが、そのまま外反し口縁部を丸く納める。外面調整は胴部が縦の刷毛目と範削り、内面は口縁部が刷毛目、胴部が範ナデを施す。胎土は細砂粒が多く含み、細かな石英・雲母粒を含む。色調は内外面とも淡灰色を呈する。口径17.5cm、器高12.9cmを測る。

Pit出土の土器 (Fig. 97・98 PL. 33)

90502 Pit425と429から出土した資料が接合した大型の壺形土器で、口唇部・底部を欠損するが陶質土器と考えられる。胴部は球形を呈し、頸部は垂直に立ち上がり口縁部付近で僅かに外に開き端部を納めるものと思われる。頸部下に小突起を有するが、形態から頸部下に3個付くものと思われる。外面調整は口縁部は横方向のナデ、頸部は範ナデ、胴部は範削り後ナデを施し、内面はナデと範削りを施す。胎土は3~4mmの大石英・長石を含む。色調は内外面とも淡黄褐色を帯びた灰色+淡灰色を呈する。口縁部付近の径35.2cm、胴部最大径70.4cm、頸部径30.4cmを測る。90501 Pit25から出土した土師質土器で、口縁部と底部(上げ底)が異なるが形状・調整・胎土・色調等はFig.95の92121に非常に類似する。口径17.1cm、器高18cm、底径9.1cmを測る。

S D - 18 • 30出土土器 (Fig. 97・98 PL. 38)

S D - 30からは須恵器が1点(92181)と土師器4点(92155~92158)を図示した。

92181 須恵器の直口壺で胴部より下が欠損する。口縁部と頸部の間に一条の稜(三角帯)を巡らす。外面調整は口縁部と胴部が逆時計まわりの回転によるナデ、頸部が静止ナデ、内面は口縁部が回転ナデ、胴部が静止ナデである。胎土は微砂粒の精製された良質な粘土を使用している。色調は内外面とも暗青灰色を呈する。口径8.6cmを測る。土師器は鉢形土器(92157)、小型壺形土器(92155・158)、埴(92156)がある。92157の鉢形土器の底径は8.4cm、小型壺の92155の口径は12cm、器高14.4cm、92158は口径が9.8cm、器高が15.7cm、92156は口径が13.4cm、器高10.3cmを測る。

S D - 18からは小型丸底壺が出土した。全面に刷毛目を施し、口径は6.1cm、器高6.6cmを測る。

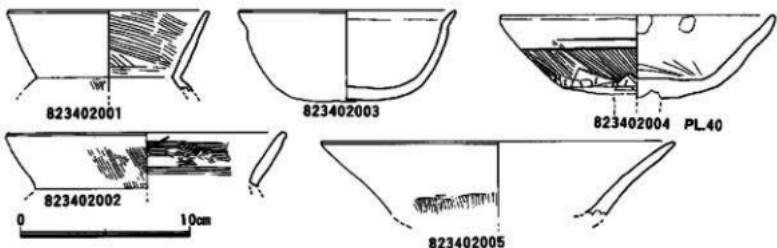


Fig. 100 X区出土遺物実測図(縮尺1/3)

第七節 第二次調査X区—古墳時代の遺構—

検出遺構

X区は第二次調査地点の柵区から約100m西側に位置し、市道田・飯盛線と直角に交わる幅10mの農業用道路部分の調査である。調査区のすぐ西に日向川が流れていることから遺構の流失も考えられたが、遺構の密度・遺存状態は悪いが、溝・柱穴不整形土壙が検出された。調査範囲は第3期圃場整備事業範囲の幅10m、長さ100mで、調査面積1,000m²である。

溝状遺構

日向川の支流に属する旧河川と思われる大溝が一条検出された。幅27m、深さ1mで西から東に流れる状況と考えられる。柵区からは100mほどの距離があるが、柵区から検出したSD-02と合流する可能性が高い。この他に幅1.5m、深さ0.5m、長さ7mの小溝を大溝の北側から検出した。不整形土壙2基、Pit等を検出したが、Pitは調査範囲が狭いため建物と認定できるものはないが、大きさ・規模等から掘立柱建物の可能性を考えられるPitもある。

出土遺物 (Fig. 100)

X区からはSD-02上層から出土した5点の土器を図示した。下層からは遺物は出土していない。他の溝・柱穴及び不整形土壙からは遺物は出土していない。X区の遺物番号は0を基本にした。

02001 土師器の壺形土器の口縁部である。頭部が締まり、口縁部はいわゆる「く」字状を呈するが、壺形土器と違い口縁と頭部の間が膨らむ形状を呈する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が刷毛目を施し、内面は口縁部が刷毛目、胴部が箒削りである。胎土は細砂及び2mm大の石英・長石・雲母粒を含む。色調は内外面とも茶褐色を呈する。口径12cmを測る。**02002** 土師器の壺形土器の口縁部である。頭部はあまり締まらず、口縁部は「く」字状を呈する。調整は内外面とも斜めの刷毛目調整を施す。胎土は細砂及び3~4mm大の石英・赤色・雲母粒を含む。色調は内外面とも明茶褐色を呈する。口径16.6cmを測る。**02003** 土師器の壺形土器の復元完形品である。端部が丸まった平底を呈し、やや内湾し外に開きながら立ち上げ、頭部で更に外反させ口縁端部を丸く納める。外面調整は口縁部が横ナデ、胴部から底部が箒ナデを施す。内面は口縁部がナデ、胴部下が指押えである。胎土は細砂及び1mm大の石英・赤色・雲母粒を含む。色調は内外面とも暗褐色を呈する。口径13cm、器高5.4cmを測る。**02004** 土師器の高杯の坏部で、脚部を欠損する。外面に二条の沈線を巡らし、下の沈線部分から刷毛目を施す。また底部近くには箒削り・指押え・箒ナデを施し、口縁部のみナデを行っている。内面は口縁部が指押え後箒ナデ、胴部が箒ナデである。胎土は細砂及び1~2mm大の石

英・長石・雲母粒を多く含む。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。口径16.2cmを測る。

02005 土師器の高坏の坏部で、坏部の底面と脚部を欠損する。外面調整は口縁部がナデ、胴部が刷毛目を施す。内面は全面ナデ仕上げを行っている。胎土は細砂及び1~3mm大の赤色粒・雲母粒を多く含む。色調は内外面とも明茶褐色を呈する。口径21cmを測る。

第四章 ま と め

今回の報告で吉武遺跡群第Ⅰ・Ⅱ次調査の報告は終了するが、飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）のなかで、その対象がすべて遺跡群の範疇で、改良組合の方々にはほんとうにご迷惑をかけた。

今回の報告で、第Ⅱ次調査のV区から検出した縄文時代の貯蔵穴、第Ⅰ次調査の古墳時代の掘立柱建物群・住居址等、第Ⅱ次調査のⅣ・Ⅴ区から出土した陶質土器、Ⅵ区から検出した条里制の溝等多くの発見を報告できたことは喜びに堪えない。

そのまとめとして時代ごとに問題点を導き出し今後の研究課題になれば幸いである。

縄文時代の遺構

ここでは貯蔵穴の時期、切り合い関係と時期について多少触れておく。出土した土器から中期がSU-02、05、08、10、11、13、20、22、28~31、33~36、38~41、43、45、46で、後期初頭に位置づけられるものとしてSU-09、15、16、32、44がある。

弥生時代の遺構

第Ⅰ・Ⅱ次調査で検出した壺棺墓は合計で227基であるが、この結果、前期に属する壺棺墓が69基、中期壺棺墓139基、後期壺棺墓19基である。特にⅡ区は46基中44基が前期末であり、列埋葬である。これに対してⅣ区では、一ヶ所に埋葬されている。時期的にはⅣ区が古く、同時期にⅡ区とⅣ区に埋葬されている所から別々の集落が営まれていたことが窺える。中期はⅡ区には小兒壺棺墓2基しか検出されず、Ⅲ・Ⅳ区に集中的に見られる。後期はⅣ区に19基検出され散発的な広がりが見られる。

豊穴住居址・掘立柱建物はⅡ区から住居址が49軒（前期9、中期21、後期12、不明7）、掘立柱建物が34棟（中期27、後期7）、Ⅳ区から住居址が24軒（前期16、中期8）、掘立柱建物が7棟（前期5、中期2）がある。

Ⅴ区からは環濠集落と考えられる遺構が検出されたが、豊穴住居址は検出されていない。Ⅸ区からは中期の住居址が3軒、溝が8条、壺棺1基、掘立柱建物19棟が検出され、後期には溝5条、掘立柱建物21棟が検出された。大溝（SD-01）がⅡ区とⅣ区との間、Ⅸ区の西側に流れるが、市道田・飯盛線には検出されず西に流れを変えることが判明している。Ⅶ区とⅨ区との間に流れる大溝（SD-02）はⅩ区に検出されている。両方とも弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土していることからそれ以前から流れていたと考えられる。

弥生時代の住居址は第一次調査Ⅱ・Ⅳ区に集中している。二~六次調査においては散発的にしか検出されていない。壺棺墓をみると六次までで数千基に及ぶが、その痕跡である住居址があまりにも少ない。削平が著しい部分があるとしてもあまりにも少ない。今後周辺部で検出される可能性が高く、それは大集落であり、吉武遺跡群の人々の生活空間がいかに広かったかを物語ることになる。

古墳時代の遺構

I・II次調査で、古墳時代の中心的遺構はⅦ区とⅨ区・市道田・飯盛線の調査範囲で検出された掘立柱建物、溝、住居址等である。ここで方向が一致する建物をみると

第1グループ Ⅳ区のSB-14を基本とするとSB-16・19が同一方向で、Ⅸ区ではSB-86グ

- ループSB-55・71・73・84・87・91・97・100・106が合致
- 第2グループ** VII区のSB-07を基本とするとSB-27・28が同一方向で、IX区ではSB-62・66・69が合致
- 第3グループ** VII区のSB-02を基本とするとSB-03・15が同一方向で、IX区ではSC-80グループSB-79・85・101・102、市道SB-04が合致
- 第4グループ** VII区のSB-25を基本とするとSB-18・20が同一方向で、IX区ではSD-07と平行に建てられたものSB-50・52・56・60・78・93・105・107・109が合致
- 第5グループ** VII区のSB-10を基本とするとSB-13・29・23が同一方向で、IX区ではSB-93グループSB-77・78・92・98・110が合致する。

以上のように5つの方向を持つグループに分けた。これらの建物の時期を出土遺物より考察してみた。柱穴掘方から出土する土器は土師器・須恵器で、不整形土壙(SX)から出土する土器と時期差はない。土師器では布留併行期のものが主である。新しい時期として小型丸底壺があり、須恵器では、II式からIII式が主である。VII区ではSX-16・18出土の小型丸底壺が最も新しく、IX区でも同様なことがいえる。これからして掘立柱建物は新布留式土器の時期か、それより僅かに新しい時期を設定しても良いと考えられる。VII区及びIX区から出土した土器で在地の土器とは考えにくい一群が出土した。いわゆる陶質土器及び朝鮮半島系土器と称せられる土器に類似する一群である。これらの土器群は吉武遺跡群第III・IV次調査からも出土している。土師器では鉢形土器・瓶・壺形土器・甕形土器に縦席文や平行叩き・格子叩きを施し、焼成・胎土・色調も在地の土器とは異なり一目でその違いが明らかである。

須恵器では高杯・坏蓋・坏身・壺形土器・壺形土器・德利形土器等が見られる。これらのことは何を物語るものであろうか今後の研究課題として取り上げれば面白い課題となろう。

奈良時代以降

第VI区から磁北N1°Wの方向を持つSD-20が検出された。南北が調查範囲外であったため追跡調査はできなかったが、早良区の奈良時代の条里制の方向は南北基区軸線方向は国土地理院座標軸北から7°20'西に偏していることから国土地理院磁針方位は西偏6°20'であり、これを加算すると検出された溝は条里制の区割り溝の可能性が高い。まだ調査されていない部分もあることから今後この溝の延長上の区割り溝が検出される可能性がある。

参考文献

- | | | |
|---------|--|------------------|
| 古武塚原古墳群 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 | 福岡市教育委員会刊 1980年 |
| 田村遺跡群Ⅲ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 | 福岡市教育委員会刊 1987年 |
| 田村遺跡群Ⅳ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 | 福岡市教育委員会公刊 1987年 |
| 田村遺跡群Ⅴ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 | 福岡市教育委員会刊 1988年 |
| 田村遺跡群Ⅵ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 | 福岡市教育委員会刊 1989年 |
| 田村遺跡群Ⅶ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 | 福岡市教育委員会刊 1990年 |
| 吉武遺跡群Ⅰ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 | 福岡市教育委員会刊 1986年 |
| 吉武遺跡群Ⅳ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 | 福岡市教育委員会刊 1989年 |
| 吉武遺跡群Ⅴ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 | 福岡市教育委員会刊 1995年 |
| 吉武遺跡群Ⅵ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 | 福岡市教育委員会刊 1996年 |
| 吉武遺跡群Ⅷ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 | 福岡市教育委員会刊 1997年 |
| 吉武遺跡群Ⅹ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集 | 福岡市教育委員会公刊 1998年 |
| 吉武遺跡群Ⅺ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集 | 福岡市教育委員会刊 1999年 |
| 吉武遺跡群Ⅻ | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集 | 福岡市教育委員会刊 2000年 |
| 四箇遺跡 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 | 福岡市教育委員会刊 1987年 |
| 入部V | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集 | 福岡市教育委員会刊 1995年 |
| 入部VI | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 | 福岡市教育委員会刊 1996年 |
| 橋本複田遺跡 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集 | 福岡市教育委員会刊 1997年 |
| 武末純一 | 「朝鮮半島系の土器」「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書124集1995年 抜刷 | |

Tab. 3 1・2次(Ⅱ区・Ⅳ区)住居址計測一覧
1次Ⅱ区

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規格 幅×横×深さ(m)	床面積 (m ²)	形状	柱穴形状	柱穴規格(cm)			押固 番号	備考
									長径	短径	深さ		
1次Ⅱ区	SC-1000	北東-南西	N 22°30' E	3.15×3×0.12	9.6	方形		円形	16	16	9		Fig. 9
		1						円形	24	20	19		
		2						円形	24	24	26		
		3						方形	48	46	20		
	SC-1001	北西-南東	N-66°30'-E	3.6×3.3×0.13	11.9	方形		方形	44	40	10		Fig. 9
		1						方形	24	20	4		
	SC-1002	西-東	N-90°-E	3.8×3.5×0.2	12	方形							Fig. 8
	SC-1003	北-南	N-8°-W	5.18×1.2+ _a ×0.1	6.21+ _a	方形							Fig. 9
SC-1004	SC-1004	北西-南東	N-44°-W	4.7×4.5×0.1	21.15	方形		方形	78	66	24		Fig. 8
		1						不整形	40	34	16		
		2						方形	68	52	34		
		3						方形	44	40	20		
	SC-1005	北西-南東	N 40° E	3.9-a×2.55×0.1	9.95+ _a	長方形							Fig. 8
		SC-1006	北東-南西	N-34°-E	4.3×3.7×0.22	15.91	方形						Fig. 8
		1						不整形	28	26	14		
		2						方形	46	38	24		
	SC-1007	北-南	N-12°30'-E	3.46×2.56×0.1	8.02	長方形							Fig. 9

2次Ⅱ区

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規格 幅×横×深さ(m)	床面積 (m ²)	形状	柱穴形状	柱穴規格(cm)			押固 番号	備考
									長径	短径	深さ		
2次Ⅱ区	SC-80	北東-南西	N-45°-E	6.2×7.7×0.14	47.74	方形		複円形	130	80	50		Fig. 65
		1						円形	110	105	20		
		2						円形	60	60	50		
		3											
					ペット状遺構								
					長方形	2.6							
					長方形	3.6	合計						
					長方形	3.15	12.5m ²						
					長方形	3.15							

Tab. 4 1次 II 区掘立柱建物計測一覧

施設名	建物番号	柱穴番号	建物方司	長軸方向	規 格		横 行		梁 行		床面標		形 状	柱穴規模(cm)	押 固 書 号	備 考	
					横行X縦行	支間(m)	柱高(m)	柱幅(m)	柱幅(m)	(cm)							
1水J区	SB-50	1	東-西	N-90°-E	2×2			3.6	1.9	15.1			楕円形	40 32 26		Fig.11	
		2							1.7				方形	34 32 24			
		3				4.2	1.6						方形	54 52 34			
		4					2.6						方形	48 40 44			
		5						3.6	1.2				方形	60 54 44			
		6							2.4				方形	36 36			
		7				4.2	1.9						円形	20 20			
		8					2.3						円形	26 24			
SB-51		1	北-南	N-15°-E	1×1				2.5	2.5	6.5			不規則形	48 44		Fig.10
		2				2.6	2.6						方形	36 36	10		
		3						2.5	2.5				小半円形	40 34 8			
		4				2.6	2.6						楕円形	44 30 10			
SB-52		1	北西-南東	N-52°30'-W	2×1				2.16	2.15	12			長方形	36 30 20		Fig.10
		2				4	2						方形	54 50 12			
		3					2						長方形	52 44 8			
		4						2.8	2.8				長方形	44 40 12			
		5				4.3	2						楕円形	52 38 12			
		6					2.3						不規則形	50 48 12			
SR-53		1	北西-南東	N-34°-W	1×1				2.8	2.8	11.2			楕円形	58 42 12		Fig.10
		2				4	4						圓形	88 66 14			
		3						2.8	2.8				方形	70 66 16			
		4					4						楕円形	80 62 16			
SB-54		1	北西-南東	N-17°30'-W	2×1				2.8	2.8	13.4			方形	42 36	10	Fig.10
		2				4.7	2.5						方形	38 36	10		
		3					2.2						楕円形	54 32 8			
		4						2.8	2.8				長方形	56 42 10			
		5				4.8	2.3						長方形	78 60 10			
		6					2.5						円形	40 34 10			
SB-55		1	西-東	N-B1-E	1×1				2.7	2.7	7.8			不規則形	74 54 14		Fig.10
		2				2.9	2.9						不規則形	58 48 28			
		3						2.7	2.7				長方形	50 40 14			
		4				2.9	2.9						楕円形	70 52 14			
SB-56		1	西-東	N-80°-W	1×1				2	2	4.6			楕円形	36 32 20		Fig.10
		2				2.3	2.3						長方形	100 62 14			
		3						2	2				小半円形	56 42 10			
		4				2.3	2.3						小半円形	58 48 10			
SB-57		1	北-南	N-6°-E	2×1				3.1	3.1	10.9			圓二角形	54 42 20		Fig.11
		2				3.5	2						方形	38 38 34			
		3					1.5						圓三角形	92 90 18			
		4						3.1	3.1				圓三角形	50 42 10			
		5				3.5	1.5						楕円形	56 49 12			
		6					2						楕円形	44 34 6			
SB-58		1	西-東	N-75°-W	3×1				4	2	25.2			四角形	58 54 16		Fig.11
		2						2					長方形	100 68 6			
		3				6.25	1.65						円形	40 40 4			
		4					1.8						楕円形	54 36 40			
		5				2.8							円形	40 31 10			
		6						3.9					方形	40 40 26			
		7					不明						小半円形	102 64 26			
		8				6.3	2.1						小半円形	64 50 26			
		9					2						楕円形	64 56 26			
		10					2.2						圓形	60 56 32			
S3-59		1	北西-南東	N-67°-W	2×2				3.6	1.8	13.7			圓形	56 52 40		Fig.11 延住
		2							1.8				方形	52 50 32			
		3				3.8	2						長方形	62 48 48			
		4					1.8						圓二角形	110 90 42			
		5						3.6					圓形	60 56 32			
		6					不明						圓形	48 44 42			
		7					不明						圓三角形	90 84 40			
		8				3.8	1.8						圓形	48 44 20			
		9					2						楕円形	36 34 20			
SB-60		1	西-東	N-90°-E	2×2				3.8	1.8	16			楕円形	46 34 18		Fig.11 鶴住
		2							1.9				圓形	52 36 8			
		3				4.2	2.1						円形	36 36 16			
		4					2.1						四角形	40 38 28			
		5						3.8	2				長方形	70 66 10			
		6							1.8				円形	58 52 28			
		7				4.2	2.1						長方形	48 40 10			
		8					2.1						小半円形	48 44 20			
		9											圓形	36 34 20			
SB-61		1	西-東	N-86°-W	2×1				2.5	2.5	8.5			圓形	46 40 28		Fig.10
		2							1.8				方形	32 30 26			
		3				3.4	1.6						長方形	36 28 20			
		4						2.5	2.5				円形	40 36 38			
		5				3.4	1.85						圓形	48 48 18			
SB-62		1	北西-南東	N-15°30'-E	1×1				2.6	2.6	6.2			圓形	28 22 25		
		2							2.6	2.6				方形	68 60 24		
		3							2.4	2.4				不規則形	62 54 15		
		4							2.6	2.6				長方形	86 72 18		

Tab. 5 I 次 II 区不整形土壤剖面一览

地 区 名	剖 面 号	形 状	柱 穴 规 格 (cm)			剖 面 号	備 考
			長	徑	規		
I 次 II 区	SK-01	不整形	230	120+e	16	Fig.12	
	SK-04	長方形	200	85	20		
	SK-05	橢圓形	150	80	6	Fig.12	
	SK-06	橢圓形	160+e	80	20	Fig.12	
	SK-08	長方形	180	85	42	Fig.12	
	SK-09	長方形	70	40	34		
	SK-12	不整長方形	210	65	28	Fig.12	
	SK-13	不整長方形	90	50	12	Fig.12	
	SK-14	不整長方形	205	120	10	Fig.12	
	SK-16	長方形	215	120	32	Fig.12	
	SK-24	長方形	315	85	28	Fig.12	
	SK-28	長方形	130	75	12	Fig.12	
	SK-100	方形	175	174	12	Fig.12	
	SK-101	方形	208	166	12	Fig.12	
	SK-1C2	梅円形	190	90	12	Fig.12	
	SX-01	長方形	380	280	46	Fig.12	
	SX-02	円形	280	270	12	Fig.12	
	SX-03	不整橢円形	300	200	44	Fig.13	
	SX-04	不整形	230	185	16	Fig.13	
	SX-05	不整形	260	210	14	Fig.13	
	SX-06	円形	235	210	30	Fig.13	
	SX-07	兩丸方形	260	200	32	Fig.13	
	SX-08	兩丸三角形	270	260	48	Fig.13	
	SX-09	椭円形	240	120+e	32	Fig.13	
	SX-10	椭円形	230	130	12	Fig.14	
	SX-11	不整長方形	270	80	12	Fig.13	
	SX-12						
	SX-13	不整長方形	176	78	20	Fig.14	
	SX-14	不整長方形	400	252	35	Fig.14	
	SX-15	不整長方形	260	120	32	Fig.13	
	SX-16	長方形	250	190	15	Fig.14	
	SX-17	長方形	254	135+e	16	Fig.14	
	SX-18	梅円形	260	122	12	Fig.14	
	SX-19						
	SX-20	長方形	240	200	20	Fig.13	
	SX-22	不整二角形	110	85	10	Fig.14	
	SX-23	梅円形	254	250	20	Fig.14	
	SX-24						
	SX-25	方形	230	210+e	10	Fig.13	
	SX-26	方形	310	270	36	Fig.14	
	SX-27	橢圓形	495	340	12	Fig.14	
	SX-28	不整形	180+e	180	14	Fig.13	
	SX-29	不整形	222	210+e	12	Fig.15	
	SX-30	不整形	198	170	18	Fig.15	
	SX-31	不整形	130	114	16	Fig.15	
	SX-32						
	SX-33	方形	320+e	232	12	Fig.14	
	SX-38	不整橢円形	340	295	8	Fig.15	
	SX-39	方形	260	206	14	Fig.15	
	SX-42	方形	250	240	12	Fig.15	
	SX-43	兩丸長方形	318	230	12	Fig.15	
	SX-45	不整形	300	220	20	Fig.15	
	SX-46	不整形	200+e	140	8	Fig.15	
	SX-47	方形	196	195	15	Fig.15	

Tab. 6 2次面区掘立柱建物計測一覧-1

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸方向	規 模 柱行×棟行	折 行	梁 行	床面積 (m ²)	形 状	柱穴規模(cm)		博 国 番 号	備 考	
										柱径(m)	柱間(m)			
2次面区	SB-01	1	北西-南東	N-48°30'-W	1×1	3.1	3.05	3	良方形	44	34	62	Fig.45	
		2						2.95	方形	44	40	46		
		3						3.1	良方形	40	32	40		
		4						3	方形	40	40	54		
SB-02	SB-02	1	北西-南東	N-36°-W	5×2	9		3.5	1.7	31.5	椭円形	56	50	52 Fig.50
		2								1.7	不整方形	44	40	58
		3				4.2	1.8				方形	50	46	56
		4					1.7				不整方形	44	3	58
		5					1.7				扇形	50	44	42
		6					1.5				不整方形	50	48	38
		7					2.2				不整方形	50	30	46
		8						1.8			扇形	74	60	32 ²
		9						1.7			不整方形	60	54	44
		10					1.9				良方形	56	44	50
		11					1.6				方形	28	26	30
		12					1.7				不整方形	50	34	32
		13					1.7				良方形	54	45	48
		14					1.6				扇形	56	40	42
		15					1.86				方形	66	60	42
		16					1.52				不整方形	62	40	44
		17					2.2				長方形	60	44	42
		18									方形	44	42	44
SB-03	SB-03	1	南東-北西	N-32°30'-W	2×1	2.5	1.28	2	5	長方形	65	50	40 Fig.46	
		2					1.22				方形	42	42	40
		3						2			方形	52	36	40
		4					1.2				不整方形	64	46	40
		5					1.2				方形	44	42	36
		6						2			扇形	56	48	46
SB-04	SB-04	1	北東-南西	N-42°-E	1×1	2.9		2.6	2.6	7.54	地方形	65	50	36 Fig.45
		2					2.9				方形	76	62	34
		3						2.5			扇形	34	26	20
		4					2.78				方形	38	34	24
SB-05	SB-05	1	東-西	N-90°-W	1×1	2	2	2	4	椭丸形	26	22	18 Fig.45	
		2						2			凹形	30	30	14
		3						2			方形	30	28	25
		4						2			凹形	30	30	28
SB-06	SB-06	1	東東-北東	N-41°-W	1×1	2	2	1.9	3.8	椭丸形	22	20	26 Fig.45	
		2					25.36				方形	26	26	22
		3						2			凹形	26	24	38
		4						1.6			不整方形	26	20	20
SB-07	SB-07	1	東西-西東	N-54°-W	3×3	9.4		4.6	1.2	45.12	方形	30	26	22 Fig.50
		2						1.6			方形	34	22	25
		3						1.6			方形	40	38	26
		4						1.5			方形	30	30	20
		5						1.6			凹形	30	28	24
		6						1.7			门形	46	42	28
		7						2.5			方形	42	36	30
		8						2.1			门形	42	40	36
		9						1.7			不整方形	55	42	32 (柱倒)
		10						1.55			凹形	22	22	22
		11						1.55			椭円形	42	26	22
		12						2.2			不整方形	56	56	28
		13						2.3			门形	36	32	18
		14						1.8			方形	48	46	30
		15						1.7						
		16						1.34			凹形	24	22	30
		17						1.66			方形	60	40	28
		18						1.64			方形	42	40	28
		19						2.4			方形	40	38	28 (柱倒)
SB-08	SB-08	20							1.72		長方形	38	30	24
		21									凹形	38	38	36 (柱倒)
		22									方形	46	44	34 (柱倒)
		23									方形	36	34	26 (柱倒)
		24									方形	48	45	50 (柱倒)
		1	西-東	N-80°-W	3×2	5	1.5	5	25		不整方形	36	34	25 Fig.49
		2					1.65				方形	38	36	35
		3					1.85				椭円形	55	38	26
		4						2.5			方形	64	60	48
		5						2.5			不整方形	40	36	38
		6						1.9			椭円形	80	56	44
		7						1.6			不整方形	56	48	26
		8						1.5			不整方形	56	30	28
		9							2.5		不整方形	48	40	30
		10							1.5		方形	70	70	38
		11							1.66		不整方形	54	50	36
		12									方形	35	32	26

Tab. 7 2次基盤区掘立柱建物計測一覧 - 2

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	長軸 方向	短 軸 方向	床 領 柱間X柱距 長度(m)	柱 領 柱間(m)	梁 行 梁間(m)	梁 行 梁間(m)	床面積 (m ²)	形 状	柱穴規模(cm)	押 固 番 号	備 考	
SB-09	1	北東-西西	N-39° E	4×1		6	3.2	2.9	18.3		方形	60 60	34	Fig.45	
	2						2.8				圓形	50 42	22		
	3						3.2				圓形	50 40	20		
	4										方形	48 44	30		
	5							3.2			六角形	80+ 60	24+		
	6								1.3		圓角方形	50 42	24+		
	7										圓形	32 24	22		
SB-10	1	北東-南西	N-16° E	3×1		5	2.5	2.5	12.5		方形	42 36	20	Fig.47	
	2						1.7		1.8		方形	42 36	22		
	3					3.8	1.55				圓形	50 35	20		
	4						1.75				円形	32 32	20		
	5							2.5			隅丸方形	46 44	30		
	6						1.54				方形	42 38	26		
	7						1.74				円形	28 28	18		
	8						1.72				長方形	40 40	26		
SB-11	1	北東-南西	N-73° W	2×2		3.5	1.8	2.7	9.45		方形	28 28	20	Fig.49	
	2						1.7				方形	32 28	22		
	3							1.4			圓形	32 24	30		
	4							1.3			南北方形	54 30	15		
	5						1.7				方形	45 42	30		
	6						1.8				円形	32 30	30		
	7							1.3			円形	40 40	18		
	8						1.82		1.4		円形	20 20	10		
	9						1.7				円形	32 30	30		
SB-12	1	東東-西北	E-58°30' W	2×2		3	1.5	3	9		圓形	36 30	34	Fig.48	
	2						1.5				長方形	46 30	42		
	3							1.4			圓形	35 28	30		
	4						1.6				方形	32 30	32		
	5						1.5				圓形	65 65	42	凹底あり	
	6						1.5				圓形	75 65	42		
	7							2.9			円形	75 56	18		
SB-13	1	北西-南東	N-74°30' W	2×1		4.2	1.9	2.4	10.05		方形	42 40	16	Fig.46	
	2						2.3				長方形	22 22	20		
	3							2.4			馬蹄形	58 30	30		
	4						2.3				蛇腹形	54 40	34		
	5						1.9				円形	34 34	26		
	6							2.4			円形	32 32	18		
	7										六角形	49 32	30		
SB-14	1	東東-西西	E-81°30' E	6×4		7.3			6		1.3	43.8	42 28	18	Fig.51
	2							1.9			長方形	28 20	12		
	3							0.4			鈍角方形	50 34	30		
	4							1.5			馬蹄形	58 45	12		
	5							1.1			蛇腹形	36 28	20		
	6						1.95				方形	36 36	18		
	7						0.95				圓形	36 36	18		
	8						1.35				圓形	30 28	12		
	9							1			馬蹄形	40 25	10		
	10						1.1				圓形	30 25	18		
	11						0.95				鈍角圓形	76 18	6		
	12							1.1			方形	48 42	36		
	13							1.16			鈍角圓形	48 18	10		
	14							0.64			円形	50 50	22		
SB-15	1	東東-西西	N-50°30' E	2×1		4.5			2		1		82 36	34	
	2							2.2			方形	40 32	25		
	3						1.31w				馬蹄形	40 25	25		
	4								0.81w		鈍角方形	40 32	25		
	5										馬蹄形	50 26	36		
	6							2.4			方形	32 30	45		
	7										鈍角圓形	50 26	36		
	8										圓形	82 36	34		
	9										馬蹄形	40 32	25		
	10										鈍角方形	40 32	25		
	11										馬蹄形	40 32	25		
	12										鈍角方形	40 32	25		
SB-16	1	東東-西西	N-86° E	3×2		4	0.6	3.4	13.6		1.14		40 32	25	起立建物
	2							1.9			方形	34 30	34		
	3							1.5			方形	44 36	36		
	4								1.7		馬蹄形	80 42	34		
	5								1.7		鈍角方形	40 30	45		
	6										馬蹄形	62 50+4	56		
	7										馬蹄形	50 36	40		
	8							0.7			円形	34 28	30		
SB-17	1	北東-南西	N-74°30' E	2×1		3.4	1.66	3.4	10.89		鈍角方形	40 28	26	Fig.47	
	2						1.74				円形	30 30	20		
	3								3.4		円形	26 26	20		
	4							1.7			円形	42 40	25		
	5							1.6			鈍角方形	68 36	42		
	6										馬蹄形	82 60	18		
	7										円形	40 34	40		

Tab. 8 2 次調査掘立柱建物計測一覧 - 3

地区名	建物番号	柱穴番号	造物方向	長軸 方向	規 模	断 行	梁 行	床面積 (m ²)	形 状	柱穴規模(cm)	博 国 番 号	備 考		
					断行×梁行	長軸(m)	柱間(m)	梁長(m)	柱間(m)	長径	短径	深さ		
SB-18	1		南西-北東	N-27°-E	2×2	3.5	2	3.4	12.92	円形	40	40	28	
	2						1.8			円形	35	36	10	
	3							1.7		円形	54	32	8	
	4								1.7	円形	27	20	12	
	5						1.9			方彌形	45	30	24	
	6						1.9			方彌形	55	30	24	
	7							1.7		方彌形	30	30	24	
	8						1.86			円形	38	38	26	
	9									楕円形	45	36	20	
SB-19	1		北-南	N-6°-W	2×2	3.7		3.2	1.6	11.84	楕円形	45	34	30
	2							1.6		方彌形	30	26	20	
	3						1.9			方彌形	35	38	20	
	4						1.8			円形	30	28	26	
	5							1.6		方彌形	40	36	30	
	6							1.6		不規形	40	34	24	
	7									方彌形	58	56	30	
	8							1.6		椭丸方彌形	44	32	34	
	9									椭丸方彌形	42	34	26	
SB-20	1		南西-北東	N-24°30'-E	3×1	8		2.9	2.9	28.2	椭丸方彌形	42	28	26
	2							1.6		円形	42	40	25	
	3						3.5			方彌形	40	34	30	
	4						2.9			方彌形	42	40	34	
	5							2.9		椭丸方彌形	30	26	35	
	6						3			椭丸方彌形	45	40	34	
	7						2.85			椭丸方彌形	45	44	30	
	8						2.15			方彌形	64	60	32	
	9									円形	20	20	22	
SB-21	1		北西-南東	N-49°30'-E	2×1	3.5		2.3	2.3	8.05	円形	45	44	14
	2						1.8			円形	24	22	14	
	3						1.7			方彌形	22	20	20	
	4							2.3		椭丸方彌形	34	28	22	
	5						1.7			椭丸方彌形	26	20	22	
	6							1.1		円形	15	14	14	
	7									方彌形	25	26	20	
	8									方彌形	38	23	18	
	9									方彌形	50	22	28	
SB-22	1		北西-南東	N-25°-W	1×1	2.9	2.9	2.85	8.26	方彌形	34	32	32	
	2							2.8		方彌形	38	23	18	
	3						2.9			方彌形	50	22	28	
	4							2.85		方彌形	42	42	38	
SB-23	1		南東-北西	N-75°-W	1×1	3	3	3	9	椭丸方彌形	56	44	50	
	2							2.8		方彌形	42	42	35	
	3						3			方彌形	44	42	35	
	4							3		方彌形	46	42	32	
SB-24	1		北東-南西	N-22°-E	2×1	5.5		2.8	2.8	15.4	円形	50	50	10
	2						2.9			不規形	30	25	18	
	3						2.6			方彌形	34	24	16	
	4							2.8		長方形	44	30	25	
	5						2.6			不規形	60	58	12	
	6						2.9			方彌形	35	30	26	
SB-25	1		南東-北西	N-64°-W	2×2	5.05	2.18	4.8	24.28	長方形	50	36	34	
	2						2.62			椭円形	52	36	28	
	3							3		円形	32	32	34	
	4							1.8		円形	36	30	10	
	5						2.96			長方形	44	30	34	
	6						2.1			方彌形	38	32	10	
	7							1.7		方彌形	50	40	44	
	8						2.1			円形	40	38	10	
	9									円形	26	24	22	
SB-26	1		北東-南西	N-74°-E	1×1	2.25	2.25	1.5	3.38	椭丸方彌形	40	30	6	
	2							1.5		椭丸方彌形	50	36	14	
	3						2.26			方彌形	65	40	14	
	4							1.5		方彌形	80	60	18	
SB-27	1		北東-南西	N-94°-E	2×1	6.4		3.2	3.2	17.28	円形	12	12	32
	2						2.9			長方形	66	54	32	
	3						2.76			椭丸方彌形	44	42	16	
	4							3.2		椭丸方彌形	64	40	32	
	5						2.7			椭丸方彌形	36	30	12	
	6						2.7			方彌形	28	28	15	
SB-28	1		南東-北西	N-49°-W	2×1	3.12		3	3	9.6	方彌形	74	70	68
	2						1.55			椭丸方彌形	74	48	52	
	3						1.6			不規形	40	40	34	
	4							3		長方形	54	54	28	
	5						1.5			長方形	70	54	54	
	6						1.7			不規形	84	75	68	
	7									方彌形	104	95	30	
SB-29	1		北-南	N-9°-E	3×1	4.8	1.3	1.6	7.58	方彌形	42	34	42	
	2							1.8		椭丸方彌形	46	40	30	
	3						1.7			椭丸方彌形	50	28	36	
	4							1.6		長方形	32	26	30	
SB-30	1		北西-南東	N-24°30'-W	2×1	3.3		1.6	1.6	2.64	長方形	50	30	36
	2							1.6		不規形	54	40	36	
	3							1.7		椭丸方彌形	65	38	40	
	4									不規形	40	34	34	

Tab. 9 2次区划据立柱建筑物計測一覽 - I

地区名	植物番号	往六番号	建物方向	長軸方向	規格 柱径×壁厚	幅 米(m)	行 米(m)	段 米(m)	東西端 面積(㎡)	形 状	柱穴規格(cm)	打 入 長 さ cm 短 径 名 号	打 入 強 度 kg	備 考		
2次区	SB-50	1	北-東	N-59°-W	2×1			2.5	2.5	10.83	方形	40	34	18	Fig.67	
										不整方形	38	32	8			
						3.98	2.42				不整方形	50	38	6		
							1.56				不整方形	40	30	10		
								2.68	2.68		椭円形	34	24			
						4.04										
	SB-51	1	北-南	N-3°-E	2×1			2.94	2.78	11.64	椭丸形	34	28	24	Fig.67	
						3.96	2.26				不整形	66	36	14		
										椭丸形	42	38	32			
						3.84	1.74				椭丸形	36	36	10		
							2.1				椭円形	40	24	20		
										椭丸形	46	12				
											不整形	58	30	20	Fig.67	
	SB-52	1	東-西	N-63°-W	2×1	6.44	2.64		21.25		不整形	42	32	18		
							3.8				不整形	56	32	8		
								3.18	3.18		椭丸形	32	30	10		
						6.26	3.24				不整形	32	24			
											不整形	32	24			
								3.3								
	SB-53	1	北-北東	N-76°-W	2×1			5.02	5.02	32.01	椭丸形	60	54	14	Fig.68	
						5.7	3.78				椭円形	90	64	34		
							1.92				椭円形	70	60	24		
								5.3	5.3		椭丸形	42	34	10		
						6.04	3.4				椭円形	50	44			
							2.64				椭円形	50	38			
	SB-54	1	北-北東	N-20°30'-W	2×1			3.5	3.5	22.47	椭丸形	40	34	Fig.68		
						6.42	3.7				椭円形	60	44	16		
							2.72				椭丸形	124	114	30		
								3.46	3.46		円形	56	52	22		
						5.82	2.88				椭丸形	44	38	20		
							2.94				方 形	44	34			
	SB-55	1	北-南	N-1°30'-W	2×1	4.94			16.8		椭丸形	40	34	Fig.68		
								3.34	3.34		椭丸形	30	28	34		
						4.94	2.34				方 形	38	30	6		
							2.6				不整形	110	89	12		
								3.4	3.4		椭三角形	46	34	14		
	SB-56	1	北-東	N-28°-E	2×1	5.52	2.32		22.8		椭丸形	64	48	28	Fig.69	
							3.2				方 形	48	36	18		
								3.78	3.78		椭丸形	60	46	42		
						5.7	2.34				椭円形	50	38	16		
											長方形	40	30			
	SB-57	1	東-西	N-28°-W	2×2			5.88	2.64	44.81	椭円形	54	38	Fig.73		
								7.62	3.48		方 形	34	32			
									4.14		不整方形	80	62	42		
								5.62	2.62		不整形	96	78	28		
									3		方 形	42	40	12		
								7.3			椭円形	42	34	20		
	SB-58	1	東-西	N-74°30'-W	2×1	3.28	1.6		8.86		不整方形	50	32	36	Fig.68	
							1.68				椭円形	44	36	42		
								2.7	2.7		円形	44	42	32		
						3.16	1.56				方 形	36	26	36		
								1.6			椭円形	36	26			
								2.7	2.7		不整形	54	34			
	SB-59	1	北-南	N-8°-E	2×2			4.22	1.94	21.1	椭円形	30	26	32	Fig.73	乾化植物
									2.28		方 形	28	26	22		
						5	2.54				円形	25	26	12		
							2.46				不整形	44	30	30		
									1.7		椭三角形	25	24	24		
											不整形	36	32			
											高木花葉	55	46			
	SB-60	1	北-南	N-24°-E	2×1	4.54	2.78		18.07		椭丸形	40	30	22	Fig.68	油桿植物
							1.76				椭円形	40	32	10		
								3.6	3.6		不整形	52	32	8		
								5.02	3.36		不整形	90	46	18		
								2.38			椭丸形	49	30			
									3.54	3.54	不整形	74	64	54		
	SB-61	1	北-南	N-4°-E	2×1	4.54	2.78				方 形	36	28		Fig.69	
							1.76				不整形	46	40	16		
								3.6	3.6		長方形	62	50	18		
								5.02	2.64		不整形	50	48	28		
								2.38			椭円形	74	64	54		

Tab. 10 2次区区割立柱建物計測一覧表

地区名	調査番号	柱穴番号	建物方向	建物方向	規 模	桁 行	梁 行	床面積 (m ²)	形 状	柱穴規模(cm)		地図番号	備 考		
										柱行×棟行	柱間(m)	梁間(m)	柱間(m)	長径(cm)	短径(cm)
SB-62	1	北-東	N-53°30'-W	2×1+a			3.6	2.3	11.2±a	円形	30	18	28	Fig.73	
	2						4.06	2.24		椭円形	24	20	16		
	3							1.84		不規形	20	18	16		
	4							2.74±a	1.76	椭円形	30	26	30		
	5								0.96±a	馬蹄形	18	16	5		
	6									不規形	28	24	9		
SB-63	1	北-南	N-4°30'-W	1×1			2.12	2.12	7.75	圓角方形	32	28	28	Fig.66	
	2						3.1	3.1		圓角方形	22	20	18		
	3							2.5	2.5	圓角方形	34	28	36		
	4						2.9	2.9		圓角方形	32	32	8		
SB-64	1	北-南	N-6°-E	1×1			2.5	2.5	7.63	方形	38	32	28	Fig.66	
	2						3	3		圓角方形	38	36	36		
	3							2.61	2.61	不規形	36	26	30		
	4						3	3		椭円形	44	30	10		
SR-65	1	北-南	N-3°30'-E	1×1			2.38	2.38	7.38	馬蹄方形	30	24	22	Fig.66	
	2						2.9	2.9		長方形	24	20	22		
	3							2	2	椭円形	45	42	28		
	4						3.1	3.1		圓形	30	26	16		
SB-66	1	北東-南西	N-43°-E	1×1			2.7	2.7	8.98	圓形	28	22	18	Fig.66	
	2						2.96	2.96		方形	22	20	16		
	3							2.9	2.9	方形	26	26	22		
	4						3.1	3.1		第三種方形	30	28	19		
SB-67	1	北東-南西	N-61°-E	1×1			2.65	2.65	8.37	椭円形	44	20	24	Fig.66	
	2							3.1	3.1	馬蹄方形	42	32	12		
	3							2.7	2.7	馬蹄方形	35	20	12		
	4						2.8	2.8		圓角方形	36	26	10		
SB-68	1	北東-南西	N-15°-W	2×2	4.32	2.36			17.11	円形	24	22	10	柱柱植物	
	2					1.96				椭円形	30	20	11		
	3							3.94	2.04	方形	44	40	40		
	4								1.9	方形	52	50	34+a		
	5					4.26	2.02			方形	36	32	22+a		
	6						2.24			椭円形	29	16	14+		
	7							3.95	1.96	方形	48	40	84		
	8								2	円形	42	38	28		
	9									円形	24	22	28		
	10									円形	50	46	10	Fig.69	
SB-69	1	北東-南西	N-40°-E	2×1			3.3	3.3	13.79	圓形	34	30	28		
	2						3.86	1.82		円形	58	40	26		
	3							2.04		小腰方形	24	24	16		
	4								3.1	3.1	方形	24	22		
SB-70	1	東-西	N-69°-E	1×1			3.1	3.1	12.77	圓角方形	28	26		Fig.66	
	2						4.04	4.04		円形	42	38	30		
	3							3.16	3.16	椭円形	36	36	18		
	4						3.7	3.7		小腰方形	45	28	26		
SB-71	1	東-西	N-58°-E	2×2	5.12	2.4			20.68	不規形	42	32	22	Fig.74	
	2					2.72				円形	20	18			
	3							4.04	2.64	方形	122	96	28		
	4								1.4	不規形	32	24	24		
	5					5.08	2.88			馬蹄形	42	38	16		
	6						2.2			円形	30	30	26		
	7							3.98	1.7	長方形	66	44	30		
	8							2.25		方形	32	30	32		
SB-72	1	北东-南西	N-27°30'-W	2×2	4.2	1.78			16.63	椭円形	34	24	22	Fig.74	
	2					2.42				椭角方形	38	28	6		
	3							3.84	1.8	椭円形	48	40	8		
	4							2.04		馬蹄-三角	60	52	22		
	5					4.08	2.12			円形	28	24	22		
	6						1.96			椭角方形	30	22			
	7							3.95	2.16	円形	14	12			
SI-73	1	北-南	N-4°-W	1×1	3.42	3.42			10.26	方形	52	48	22	Fig.56	
	2							3	3	方形	46	46	36		
	3						3.41	3.41		方形	24	24	28		
	4								2.95	2.95	方形	38	36		
SI-74	1	北-南	N-13°30'-E	1×1					3.06	3.06	10.89	小腰方形	32	26	Fig.56
	2						3.56	3.56		方形	26	24	18		
	3							3	3	方形	22	20	14		
	4						3.3	3.3		不規形	41	32	28		
SB-75	1	東-西	N-79°-W	1×1			2.34	2.34	7.07	椭角方形	34	28	18	Fig.57	
	2						3.02	3.02		椭角方形	22	20	12		
	3							2.3	2.3	円形	26	20	22		
	4						3	3		椭角方形	34	32	32		
	5							1.5		円形	36	24	12		
SB-76	1	北-南	N-11°-W	2×1	3.92				9.02					Fig.68	
	2							2.24		方形	22	18			
	3							2.3	2.3	椭円形	38	28	40		
	4						3.9	2.4		馬蹄形	44	31	20		
	5							1.5		馬蹄形	36	24	12		
	6							2.2	2.2	円形	36	26	4		

Tab. 11 2次I区獨立柱建物計測一覽-3

堆立名	建物番号	柱穴番号	建物方向	梁軸方向	規格 柱行×梁行	柱行 高さ(m) [*] 柱間(m)	梁行 高さ(m) [*] 柱間(m)	床面積 (m ²)	形状	柱大頭径(cm)	押送 良径	照便 深さ	押 番号	備 考			
SB-77	1	北西-東東	N-70°-W	2×2				12.11	馬頭-圓形	32	28						
	2						1.74		端丸方彌形	48	46	28					
	3					3.5	1.4		端丸方彌形	26	22	22					
	4						2.1		馬頭三脚彌形	28	24	16					
	5							3.46	1.34	円形	22	22	24				
	6							2.12		端丸方彌形	30	26	16				
	7						1.64		端丸方彌形	30	23						
	8								端丸方彌形	34	30	22	Fig.74				
SB-78	1	北西-東東	N-57°-W	2×2	4.44	1.9		16.42	端丸方彌形	28	28	8	Fig.69				
	2						2.54		端丸方彌形	26	22	14					
	3							3.6	3.6	馬頭方彌形	40	32	8				
	4					4.56	2		端丸方彌形	40	34	48					
	5						2.56		馬頭方彌形	28	24						
	6							3.24	3.24	不整方形	40	36					
SB-79	1	北西-東東	N-36°30'-W	1×1			2.66	2.66	円形	28	28	8	Fig.67				
	2					3.06	3.06		不整方形	40	38	10					
	3							2.7	2.7	円形	24	24	4				
	4					3.24	3.24		端丸方彌形	28	28						
SB-80	1	北東-南西	E-63°39'-E	1×1			2.5	2.5	7.25	方彌形	22	20	16	Fig.67			
	2					2.64	2.64		端丸方彌形	32	30	12					
	3						2.4	2.4	端丸方彌形	44	22	12					
	4					2.9	2.9		円形	18	16						
SB-81	1	北-南	N-1°-E	2×1			3.1	3.1	19.72	方彌形	22	18		Fig.69			
	2					6.36	3.28		方彌形	30	28	26					
	3							3.08		方彌形	30	24	5				
	4							3.04	3.04	方彌形	74	62	20				
	5					6.06	2.9		方彌形	36	30	28					
	6							3.18		方彌形	28	24					
SB-82	1	北東-南西	N-31°-E	2×2			3.1	1.86	11.75	不整方形	34	34	32	Fig.75			
	2							1.24		方彌形	48	46	40				
	3					3.24	1.78		方彌形	26	26	30					
	4							1.46		方彌形	46	46	6				
	5								3.3	不整方形	58	52	54				
	6					3.56	1.14		不整方形	40	38	18					
SB-83	1	西北-東東	N-54°30'-W	2×1	4.04	2.2			16.67	不整方形	54	50		Fig.69			
	2							1.84		圓頭方彌形	40	30					
	3								2.4	2.4	方彌形	20	18	22			
	4					3.85	1.74		不整方形	50	34	28					
	5							2.1		圓形	36	34	50				
	6							2.5	2.5	端丸彌形	50	40	50				
SB-84	1	東-西	N-89°30'-W	2×1			3.5	3.5	20.48	円形	28	26	10	Fig.70			
	2					5.6	2.4		方彌形	20	14	10					
	3							3.2		円形	18	18	18				
	4								3.2	方彌形	24	20	18				
	5					5.85	2.7		端丸彌形	40	24	12					
	6								3.15	方彌形	30	28	9				
SB-85	1	北東-南西	N-58°-E	2×1	3.9	1.95			10.45	端丸彌形	34	20	10	Fig.70			
	2						1.95			方彌形	32	24	10				
	3							2.55	2.55	円形	48	40	24				
	4							1.5		不整方形	40	30	20				
	5							2.6		端丸彌形	30	24	4				
	6								2.55	2.55	先方彌形	70	52	14			
SB-86	1	北-南	N-5°-W	3×1					2.88	2.88	25.67	方彌形	36	24	24	Fig.72	
	2					7.62	2		長方彌形	44	32	36					
	3							3.32		端丸彌形	48	30	20				
	4								2.3	端丸彌形	28	24	8				
	5									圓頭方彌形	20	14	22				
	6					7.78	2.48		端丸彌形	24	14	38					
	7								3.5	長方彌形	34	26	22				
	8								1.8	不整方形	48	42	25				
SB-87	1	北-南	N-10°30'-W	3×1	6.26	1.3			25.12	方彌形	24	18	12	Fig.70			
	2						2.5			端丸彌形	46	24	24				
	3						2.46			方彌形	24	20	22				
	4								4	方彌形	28	24	20				
	5					6.26	2.8		方彌形	24	20	24					
	6						5.46			不整方形	30	18	22				
	7								4	不整方形	24	14	12				
SB-88	1	北東-南西	N-35°-E	2×2			2.9	1.32	10.03	長方彌形	46	34	24	Fig.74			
	2							1.58		方彌形	40	34	20				
	3					3.04	1.24		方彌形	50	44	46					
	4								1.8	端丸彌形	50	32	10				
	5								2.88	不整方形	36	24	36				
	6																
	7					3.46	1.64										
	8							1.84									

Tab. 12 2次区区断柱建物計測一覧-4

地区名	建物番号	柱番号	建物方向	長軸方向	規格 柱径×高さ	断行 実長(m)	梁行 柱間(m)	床面積 (m ²)	形状	柱穴規格 (cm)	神 田 番 号	備 考	
SB-83	1	東-西	N-71°30'-E	2×1	3.7 3.7			13.32	隅丸方形	28 22	21	Fig.70	
	2					3.6	1.74		馬蹄形	44 30	30		
	3						1.86		不整方形	34 24	24		
	4					3.6			方形	34 30	40		
	5						3.4	2.1	方形	26 20	24		
	6							1.3	円形	24 20	7		
SB-90	1	北-南	N-14°-W	2×2		3.46	2.4	14.87	楕円形	44 28	16	Fig.74	
	2						1.06		椭圓形	38 18	14		
	3					4.2	2		円形	40 36	14		
	4						2.2		馬蹄形	50 40	30		
	5							3.54	方形	38 34	12		
	6							1.74	長方形	30 22	28		
	7					4.2			不整方形	44 36	18		
	8												
SB-91	1	北-南	N-2°-W	1×1	3 3			5.7	不整形	32 26	26	Fig.67	
	2							1.8	方形	26 22	12		
	3					2.8	2.8		橢円三角形	28 22	14		
	4							1.9	不整圓形	26 24	18		
SB-92	1	北西-南東	N-67°-W	4×1			3 3	21.9				Fig.73	
	2					7.18	1.68		方形	38 30	32		
	3						1.84		異形	30 20	12		
	4						2.06		方形	28 26	20		
	5						1.8		方形	30 22	18		
	6							2.9	方形	24 24	14		
	7					7.3	2.16		不整圓形	24 20	22		
	8						1.5		不整圓形	24 18	12		
	9						1.94		方形	28 24	30		
	10						1.7		方形	24 26	24		
SB-93	1	北東-南西	N-24°-E	2×2			3.6 2.48	15.48		方形	16 12	12	Fig.75
	2							1.12		不整圓形	24 20	16	
	3					4.3	2.5		方形	20 18	14		
	4						1.8		方形	22 18	18		
	5							3.46	橢圓形	25 28	26		
	6							2.42	円形	32 30	10		
	7								円形	18 18	7		
	8							4.12	不整形	22 18	11		
SB-94	1	北東-南西	N-37°-E	2×2			4.22	2.04	21.97	円形	26 26	9	Fig.75
	2								2.18	椭圓形	20 18	16	
	3						1.86	2.54		不整形	38 32	16	
	4							2.32	方形	28 24	20		
	5								橢円形	28 24	24		
	6								方形	38 32	12		
	7							4.52	長方形	24 24	28		
	8							2.36	円形	28 16	7		
SB-95	1	北西-南東	N-27°-W	1×1					方形	28 28	16	Fig.67	
	2									橢円形	42 18	20	
	3									橢円形	24 16	14	
	4												
SB-96	1	北西-南東	N-74°30'-W	1×1		2.92 2.92				隅丸方形	132 30	44	Fig.67
	2							2.04	2.04	橢円形	36 28	24	
	3									橢円形	40 26	26	
	4												
SB-97	1	北-南	N-7°-W	2×2	3.22				10.05			Fig.75	
	2									不整形	38 24	16	
	3									八角形	38 28	18	
	4									方形	32 28	46	
	5					2.92	1.74			不整形	30 30	22	
	6							1.18		不整形	28 26	26	
	7									不整形	30 24	22	
	8									円形	20 18	13	
SB-98	1	北東-南西	N-20°30'-E	2×1						不整形	64 36	22	Fig.70
	2					5.2	2.2			不整異方	100 40	26	
	3						3			不整方形	32 18	14	
	4									円形	20 18	12	
	5							5.06	2.3	不整形	32 22	14	
	6								2.76	隅丸方形	30 24	12	
SB-99	1	北-南	N-1°30'-W	2×1		6.1 3.26				不整形	40 34	20	Fig.71
	2									不整形	38 30	12	
	3									不整形	40 30	32	
	4									不整方形	40 30	44	
	5									不整方形	45 30	22	
	6									不整異方	100 40	24	
SB-100	1	東-西	N-61°30'-E	2×1		3.96 3.96				方形	50 44		Fig.70
	2									不整方形	44 36	54	
	3									小等方形	30 20	16	
	4					3.7 3.7				隅丸方形	40 30	38	
	5						2.9 3.82	2.2		隅丸方形	34 28	6	
	6									隅丸方形	26 24		

Tab. 13 2次K区掘立柱建物計測一覧 - 5

地区名	建物番号	柱穴番号	建物方向	柱軸方向	底 桁	柱 行	梁 行	床面積 (m ²)	形 状	柱穴規模(cm)	附 固 番 号	備 考
					幅(m)	柱間(m)	高さ(m)	柱高(cm)				
SB-101	1	北東-西南	N-55°30'-E	2×1			2.8	2.8	12.21	方形	50 44	Fig.71
	2				4.36	1.96				方彌	60 50 30	
	3					2.4				隅丸方形	70 54 8	
	4						2.7	2.7		隅山形	66 42 18	
	5					3.9				長方形	50 32 26	
SB-102	1	北東-西向	N-55°30'-E	2×1			3.8	3.8	17.94	方彌	40 34	Fig.71
	2				4.72	2.72				不整方彌	50 40 30	
	3					2				長方形	56 46 46	
	4						3.2	3.2		不整形	40 26 30	
	5				4.6	2.6				方彌	48 34 40	
	6					2				長方形	36 20	
SB-103	1	東-南	N-77°30'-W	2×2			5.02	2.8	4R.12	不等三角形	56 38 24	Fig.76
	2						2.22			方形	40 38 16	
	3				9.02	4.32				不整方彌	34 28 16	
	4					4.7				方彌	58 78 8	
	5						5.3	3.48		円形	24 22 20	
	6						1.82			不整形	60 40 14	
	7				9.08	4.04				方彌	62 50 16	
	8						5.04			方彌	100 62 14	
	9									方彌	36 28 9	
SB-104	1	北東-南西	N 65°30' E	2×1	4.54	2.36			18.24	不整方彌	56 40 12	Fig.71
	2					2.18				圓形	24 18 10	
	3						3.8	3.8		不整方彌	50 34 8	
	4					4.8	2.7			方形	50 34 10	
	5						2.1					
	6						3.7	3.7		圓形	74 50 10	
SB-105	1	北西-南東	N-60°-W	2×1	4.84	1			18.25	方彌	30 30 8	Fig.71
	2					3.64				圓形	24 18 10	
	3						3.3	3.3		不整方彌	50 34 8	
	4					4.6	2.3			方彌	50 34 10	
	5						2.3			圓形	32 30 6	
	6						3.94	3.94		圓形	40 34 10	
SB-106	1	北-南	N-12°-W	3×1	3.58	0.74			14.57	方彌	39 24 6	Fig.72
	2					1.66				橢円形	34 26 6	
	3					1.18				方彌	32 28 6	
	4						3.66	3.66		方彌	26 20 4	
	5					3.98	1.38			方彌	34 30 18	
	6						1.6			不整形	38 26 14	
	7						1			方彌	38 30 8	
	8							3.24	3.24	絶戻方彌	34 20 4	
SB-107	1	北正-南東	N-55°-W	2×1			3.88	3.88	22.04	方彌	26 18 12	Fig.72
	2					5.68	2.46			不整方彌	34 28 14	
	3						3.22			不整形	104 54 14	
	4							3.86	3.86	方彌	44 34 8	
	5					5.24	2.7			橢方形	70 44 6	
	6						2.54			橢圓形	30 18	
SB-108	1	東-西	N-81°30'-E	2×1	4.56	3.06			12.22	方彌	34 26 10	Fig.72
	2						1.5			方彌	34 26 10	
	3						2.5	2.5		不整形	56 30 16	
	4					4.22	2.04			小整形	82 62 52	
	5						2.18			方彌	40 34 10	
	6						2.5	2.68	2.68	隅丸方形	44 38 34	
SB-109	1	北西-南東	N-34°30'-W	2×2	4.38				18.75			Fig.75
	2					2.54				圓形	38 34	
	3						4.28	2.32		圓形	32 32 32	
	4							2.96		不整方形	44 42 22	
	5					4.18	2.58			圓形	38 34 16	
	6						1.6			圓形	16 14 12	
	7						4.08	1.64		方彌	46 44 4	
	8									圓形	24 22	
SB-110	1	北西-南東	N-21°30'-W	2×1	4.26	1.94			11.08	隅丸方形	54 38 10	Fig.72
	2					2.32				方彌	60 50 44	
	3						2.6	2.6		方彌	38 34 30	
	4					4.06	2.52			隅丸方形	56 42 12	
	5						1.74			不整形	78 58 18	
	6							2.3	2.3	不整形	46 40 8	
SB-111	1	東-西	N-75°30'-W	2×2	4	2.42			14.8	方彌	24 20 12	Fig.75
	2					1.58				圓形	28 24 8	
	3						3.68	2.68		不整方彌	70 54 12	
	4							1		不整形	34 30 24	
	5					3.84	1.52			不整方彌	94 32 24	
	6						2.32			圓形	58 50	
	7							3.7	1.78	方彌	38 34	
	8								1.92	小斜面形	28 20	

Tab.14 2次(區・K区)不整形土壤・Pit・井戸計測一覧

2次區

地 区 名	進 構 番 号	形 状	柱 穴 規 様 (cm)			詳 図 番 号	備 考
			長 徑	短 徑	深 度		
2次區	SX-01	半円形	510	200+e	24	Fig.52	
	SX-02	不整長方形	210	160	20	Fig.52	
	SX-03	不整長方形	808	350	35	Fig.54	
	SX-04	半円形	125	100+e	4	Fig.52	
	SX-05	隅丸三角形	180	142	5	Fig.52	
	SX-06	不整形	470	300	10	Fig.54	
	SX-07	長方形	250	130	28	Fig.52	
	SX-08	不整形	240	182	14	Fig.52	
	SX-09	不整形	320	310	36	Fig.54	
	SX-10	不整形	365	320	30	Fig.54	
	SX-11	不整形	740	270	20	Fig.54	
	SX-12	不整形	500	460	32	Fig.53	
	SX-13	橢円形	260	165	10	Fig.52	
	SX-14	不整形	510	315	32	Fig.54	
	SX-15	橢円形	528	360	10	Fig.53	
	SX-16	不整橢円形	280	250	8	Fig.54	
	SX-17	不整形	322	200+e	28	Fig.52	
	SX-18	不整長方形	375	220	38	Fig.52	
	SX-19	隅丸方形	250	215	16	Fig.52	
	SX-20	半円形	150	115	10	Fig.52	
	SX-21	方形	285	110+e	21		
	SX-22	不整形	162+e	120	10	Fig.52	
	SX-23	不整形	415	370	30	Fig.52	
	SX-24	不整形	356	230	10	Fig.53	
	SX-25	不整形	325	290	30	Fig.53	
	SX-26	不整形	210	82	16	Fig.53	
	SX-27	長方形	1160	500	45	Fig.53	
	SX-28	不整形	304	226	10	Fig.54	
	SX-29	不整形	304	226	10	Fig.53	
	Pit-02	円形	70	65	33	Fig.53	
	SE-01	円形	144	135	82	Fig.53	

2次區

地 区 名	進 構 番 号	形 状	柱 穴 規 様 (cm)			詳 図 番 号	備 考
			長 徑	短 徑	深 度		
2次區	SX-01	不整長方形	354	220	45	Fig.77	
	SX-02	隅丸三角形	285	250	12	Fig.77	
	SX-06	不整形	420	160	5	Fig.77	
	SX-07	不整長方形	250	122	10	Fig.77	
	SX-08	不整方形	244	230	18	Fig.77	
	SX-09	円形	162	142	12	Fig.77	
	SX-10	不整形	496	86	15	Fig.77	
	SX-11	不整橢円形	235	128	18	Fig.77	
	SX-12	不整形	306	204	10	Fig.77	
	SX-13	方形	194	105	10	Fig.77	
	SX-14	方形	176	120	6	Fig.77	
	SX-15	不整形	290	86	10	Fig.77	
	SX-17	不整形	204	106	44	Fig.77	
	SX-19	不整橢円形	310	165	38	Fig.77	
	SX-21	不整形	685	550	45	Fig.78	
	SX-23	橢円形	230	125	12	Fig.78	
	SX-25	小整橢円形	370	215	20	Fig.77	
	SX-26	橢円形	380	256	18	Fig.78	
	SX-27	長方形	146	100	16	Fig.78	
	SX-28	不整長方形	236	122	10	Fig.77	
	SX-33	不整形	180	140	84	Fig.79	
	SX-34	方形	66	60	62	Fig.78	
	SX-36	不整形	318	116	10	Fig.78	
	SX-38	橢円形	216	136	16	Fig.78	
	SX-39	隅丸方形	360	320	20	Fig.78	
	SX-40	橢円形	296	245	34	Fig.78	
	SX-42	不整形	578+e	370	10	Fig.78	
	SX-43	隅丸三角形	205	170	60	Fig.79	
	Pit-425	橢円形	310	220	32	Fig.79	
	SE-01	円形	225	225	155	Fig.79	

図 版

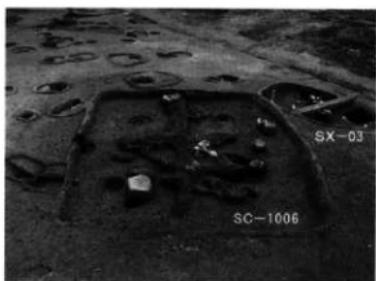
P L A T E S



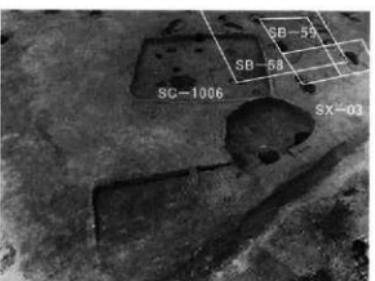
988



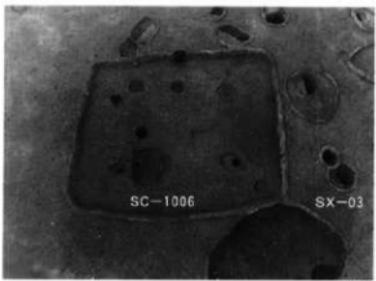
979



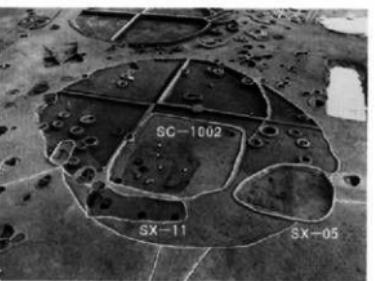
1280



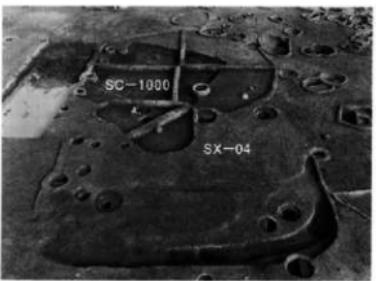
1144



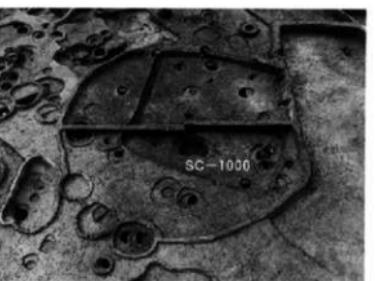
1335



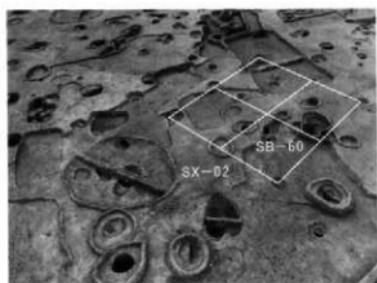
1328



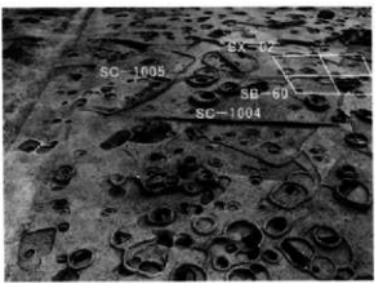
710



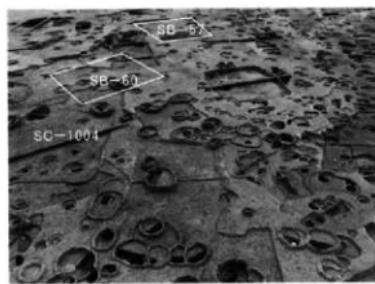
960



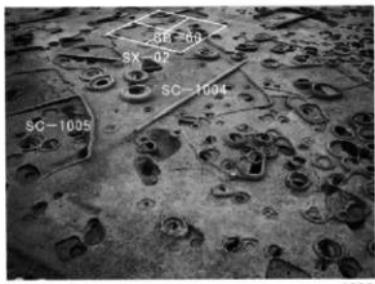
980



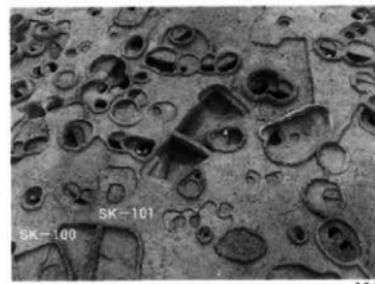
972



975



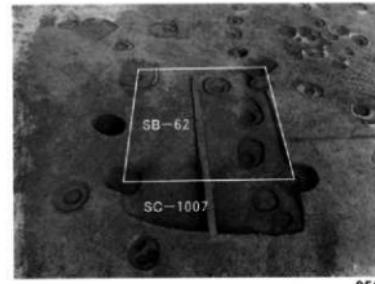
1332



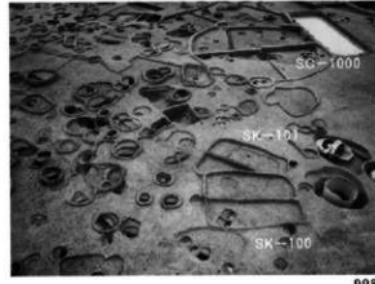
964



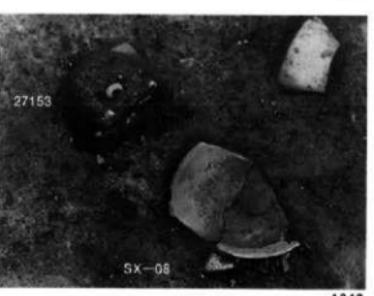
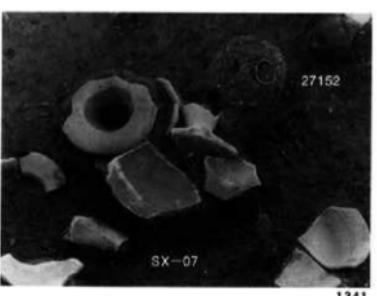
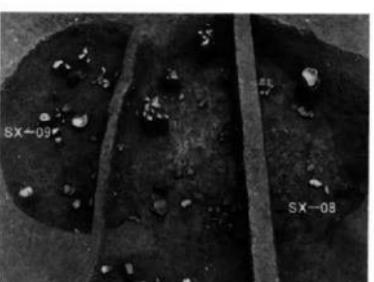
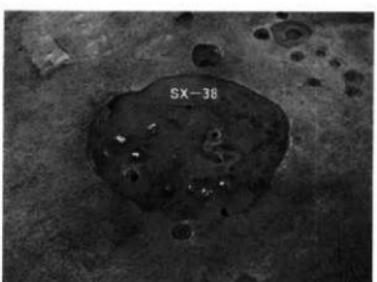
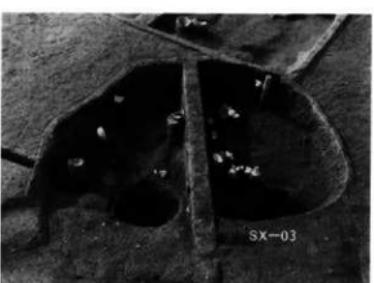
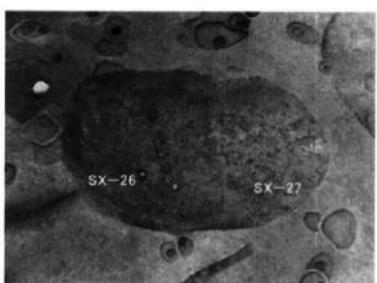
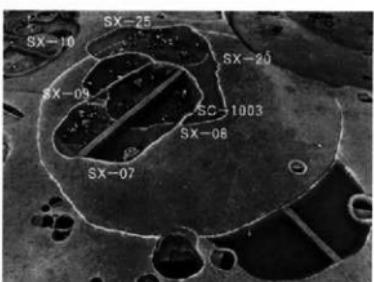
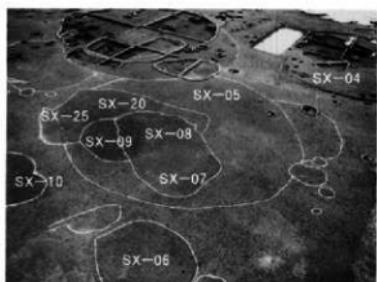
986



956



998





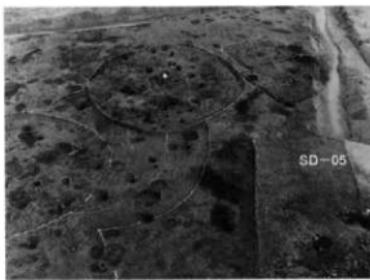
114



22



21



389



92



91



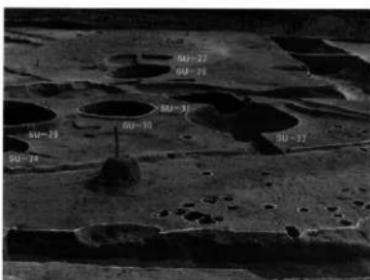
152



135



144



140



201



200



136



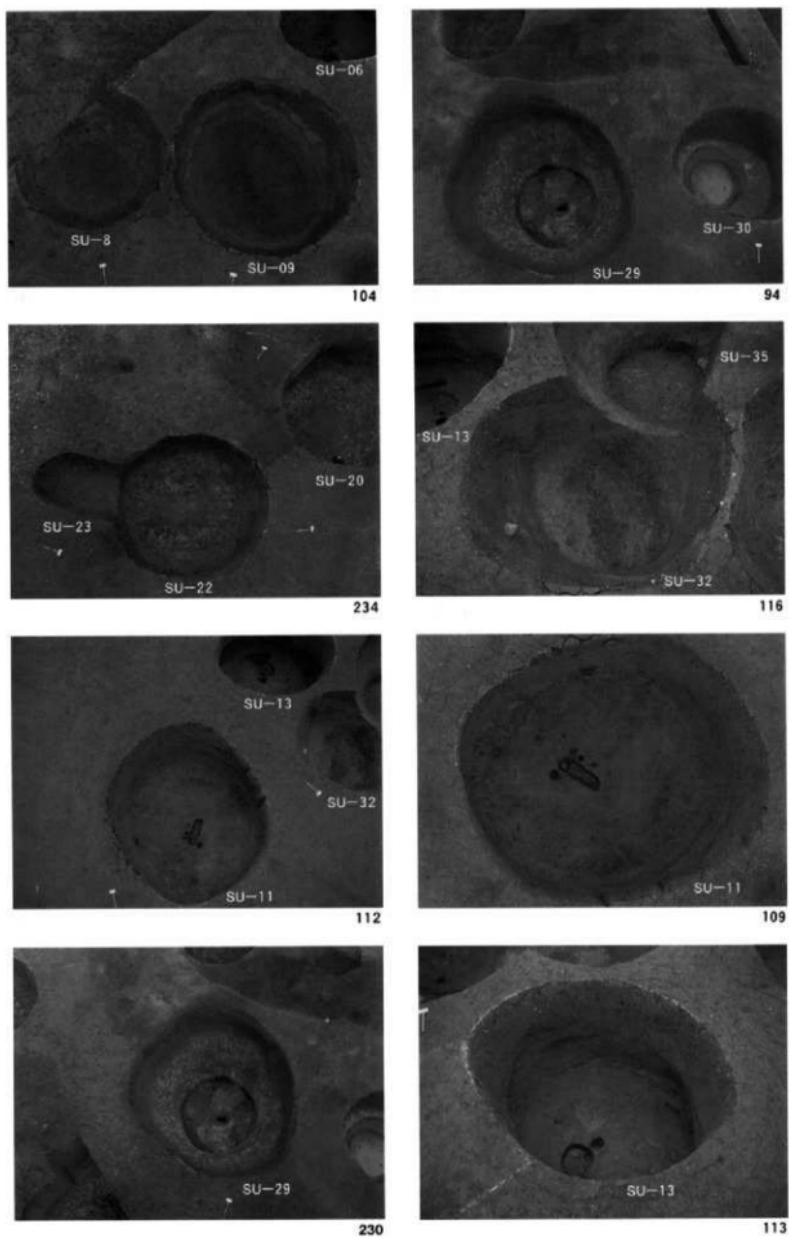
156

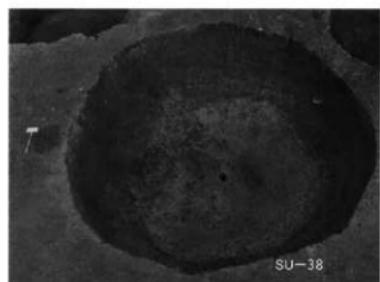


157

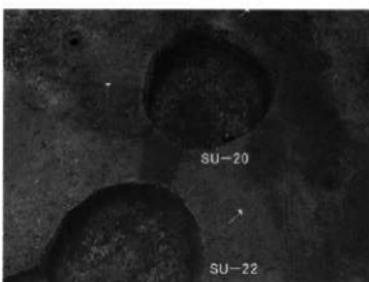


168

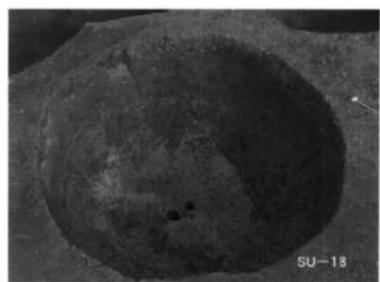




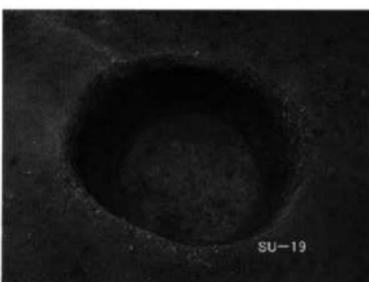
128



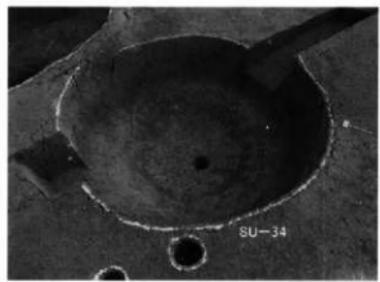
233



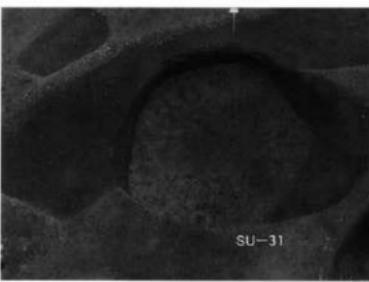
127



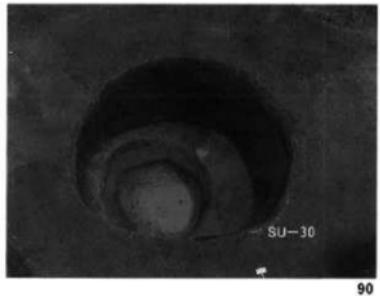
119



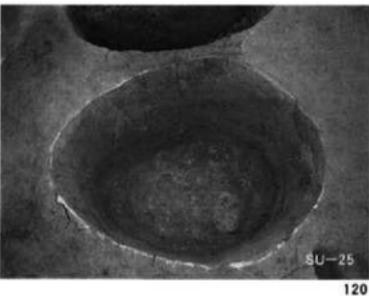
151



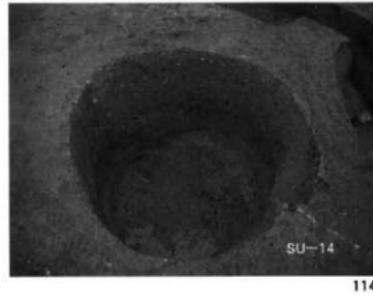
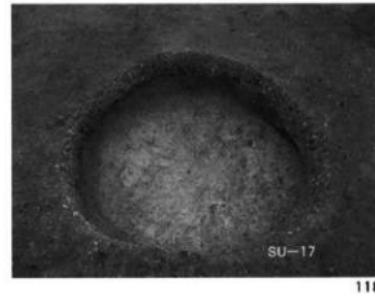
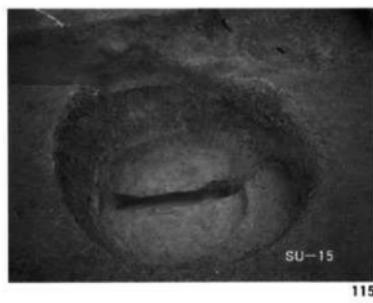
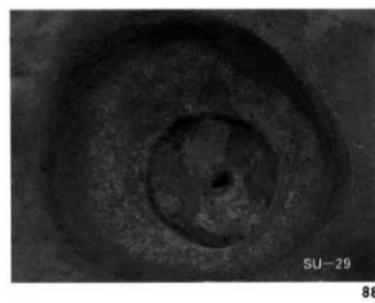
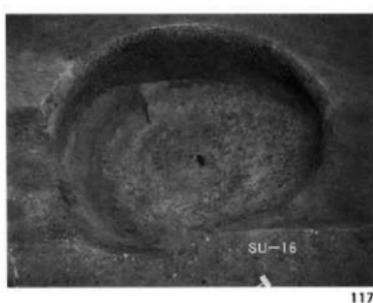
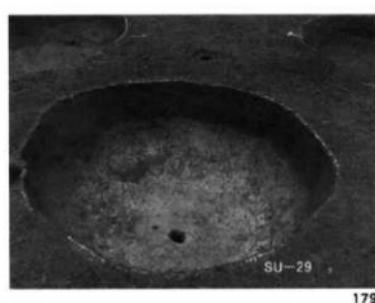
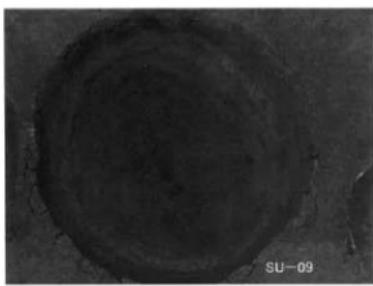
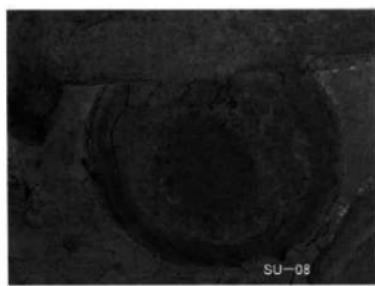
98

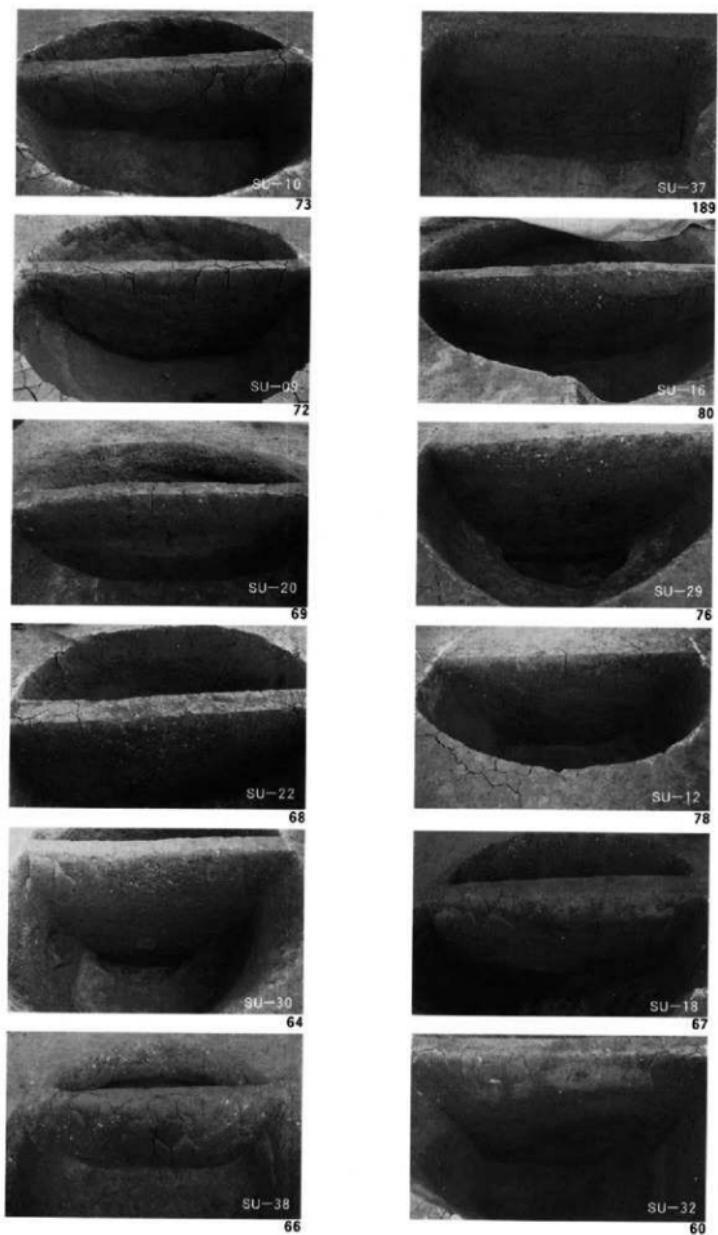


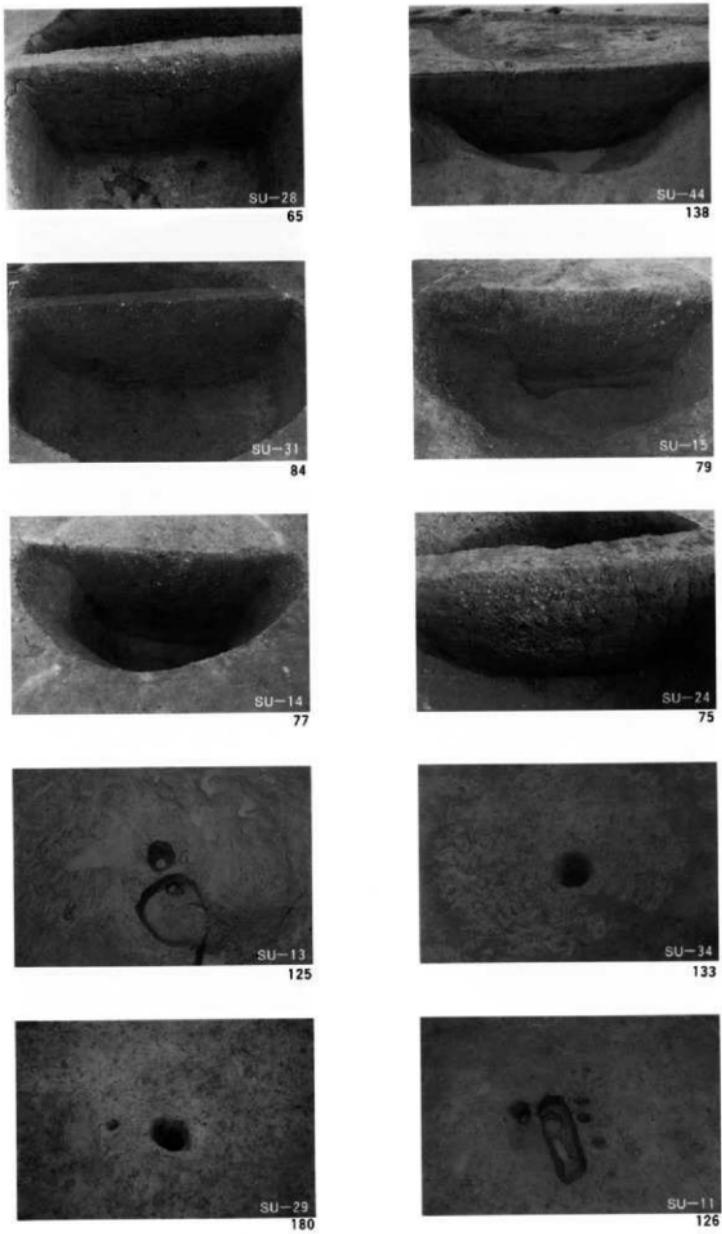
90



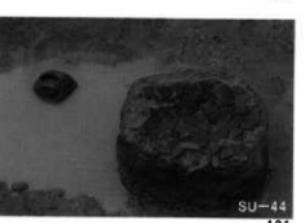
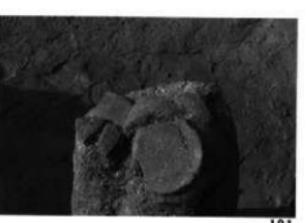
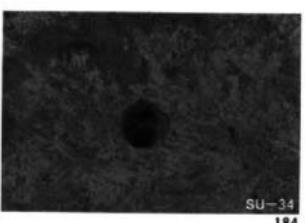
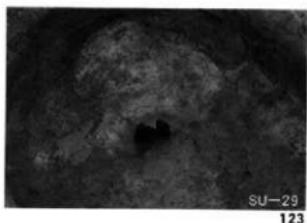
120







V区検出貯蔵穴土層断面と柱穴

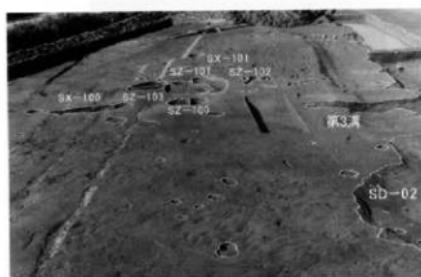




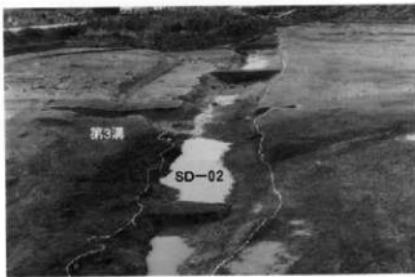
330



271



268



350



348



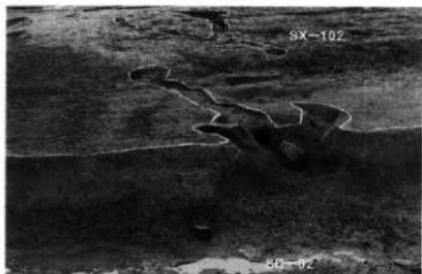
298



297



296



301



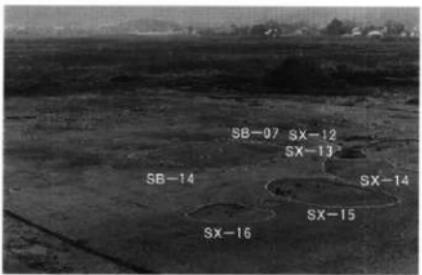
337



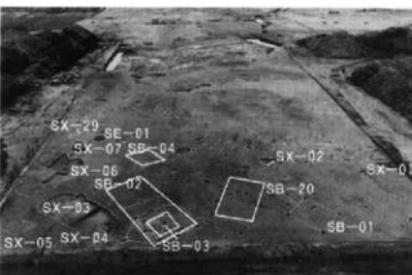
499



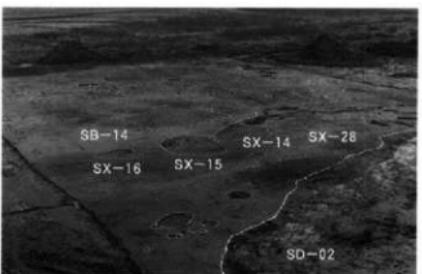
371



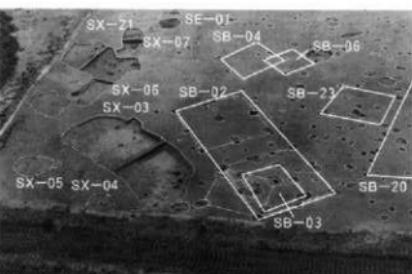
496



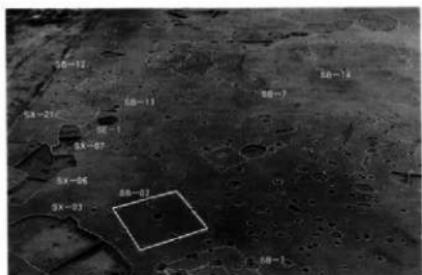
387



509



388



391



434



392



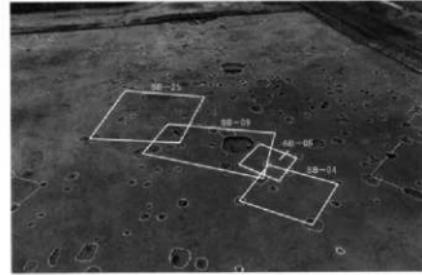
393



400



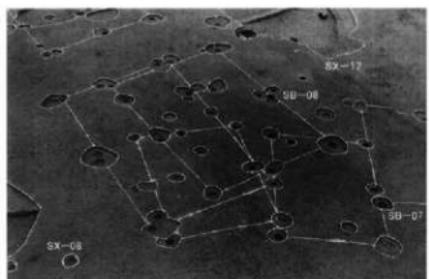
390



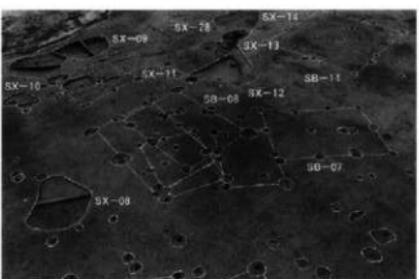
398



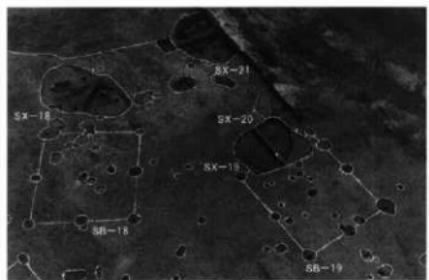
428



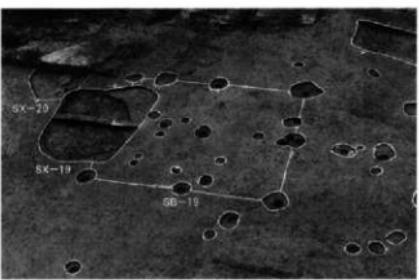
458



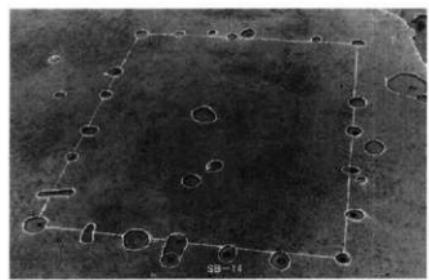
396



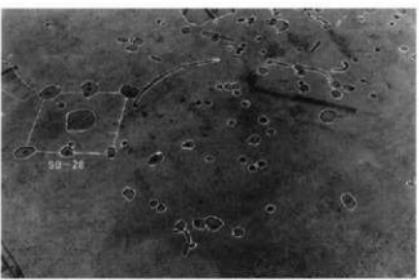
409



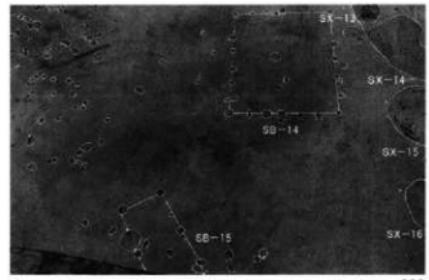
437



420



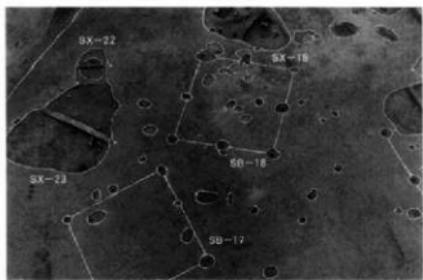
429



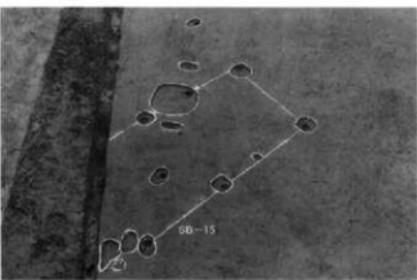
383



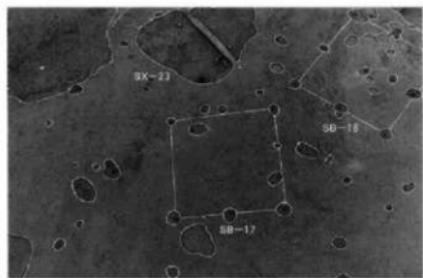
459



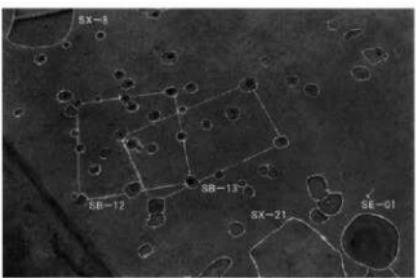
405



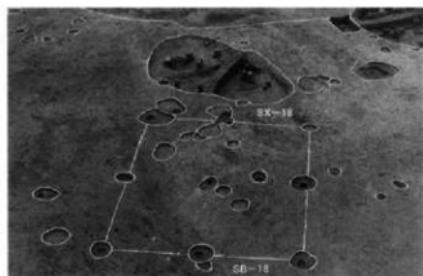
424



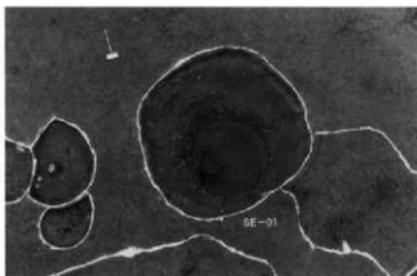
404



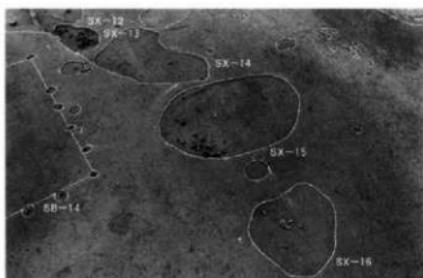
395



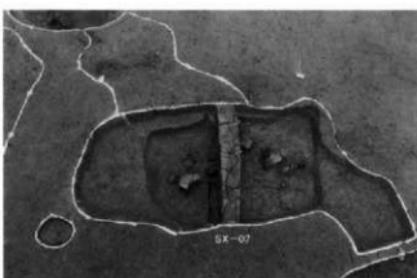
415



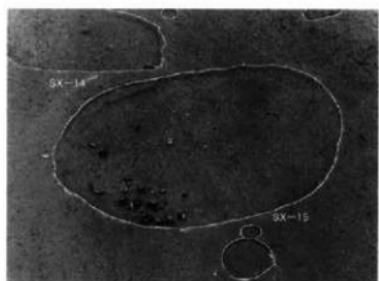
454



379



453



419



377



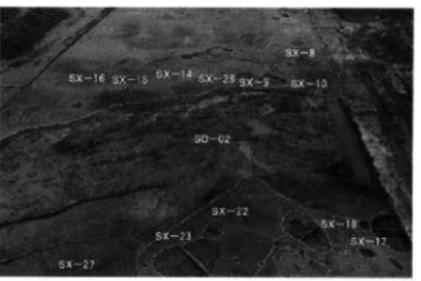
442



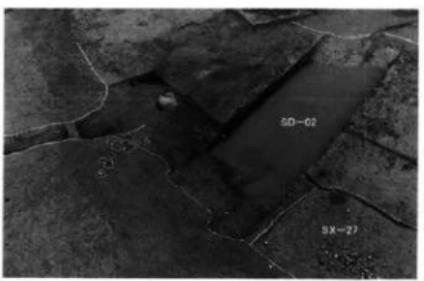
451



370



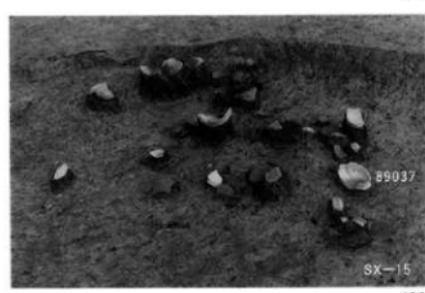
402



410

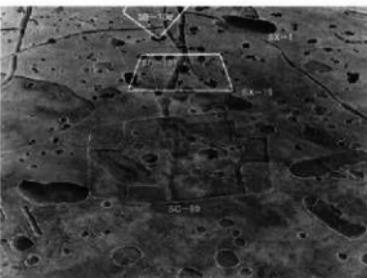


374





586



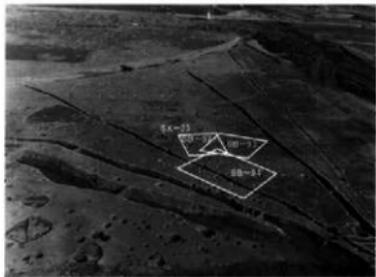
588



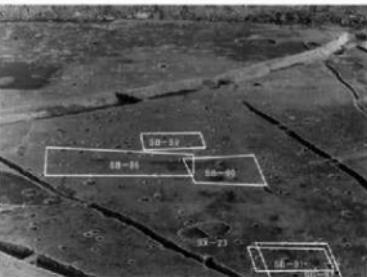
586



712



654



652



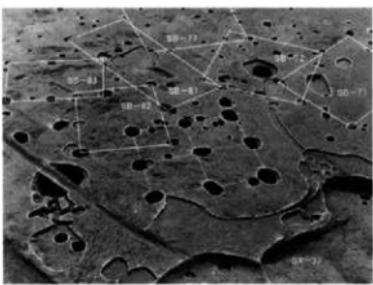
696



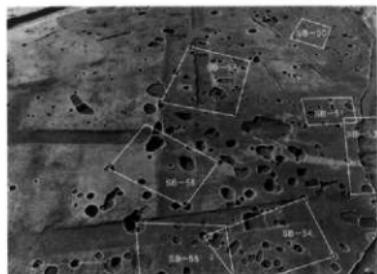
690



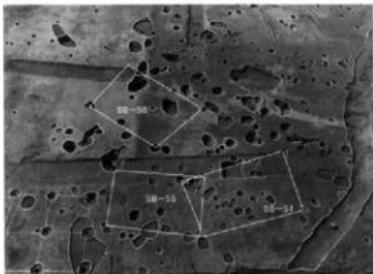
636



698



816



818



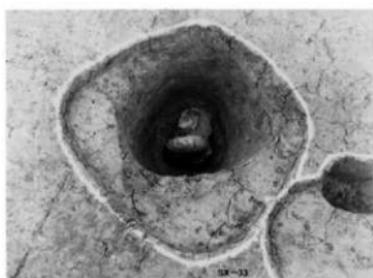
581



763



784



58-33

656



753



738



728



731

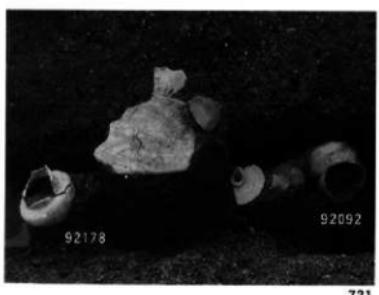


722



92147

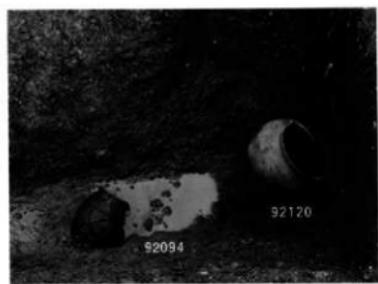
746



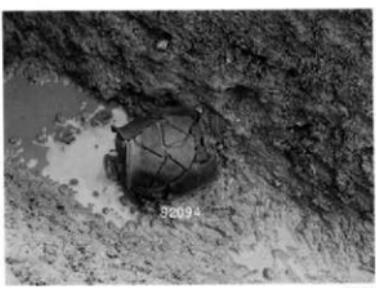
721



740



750



742



732



741



724



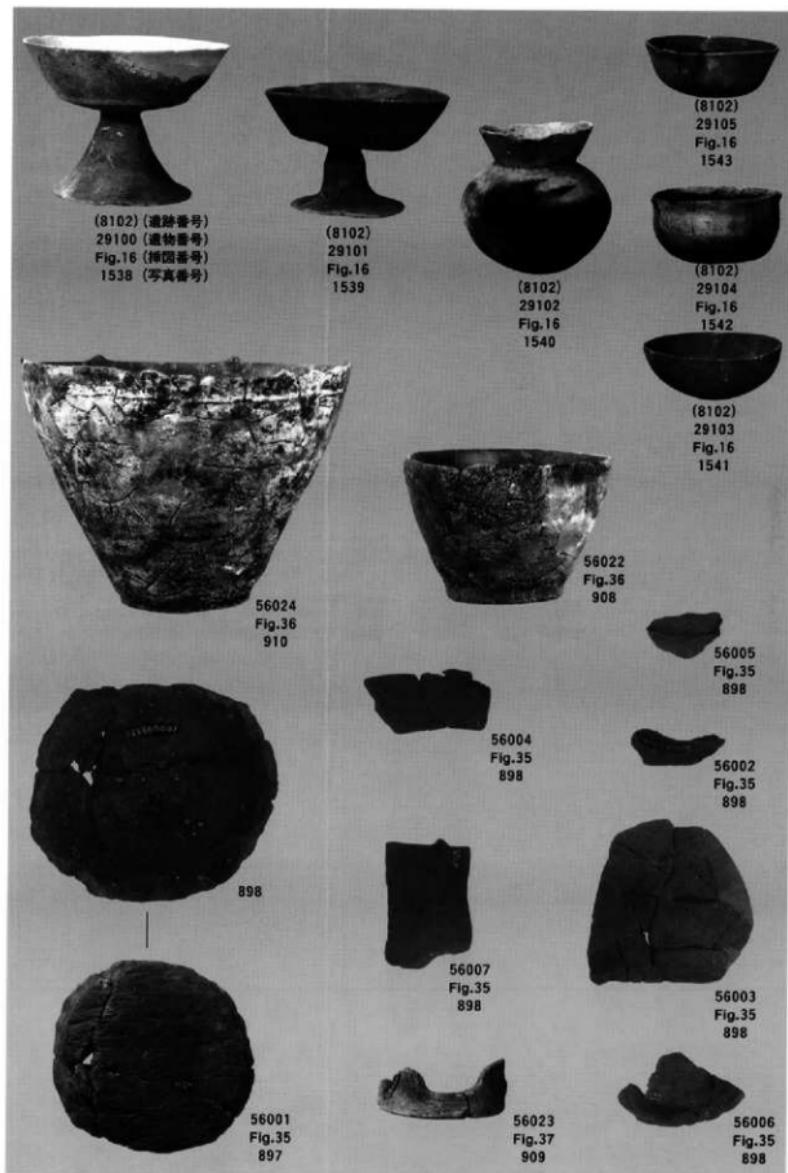
734



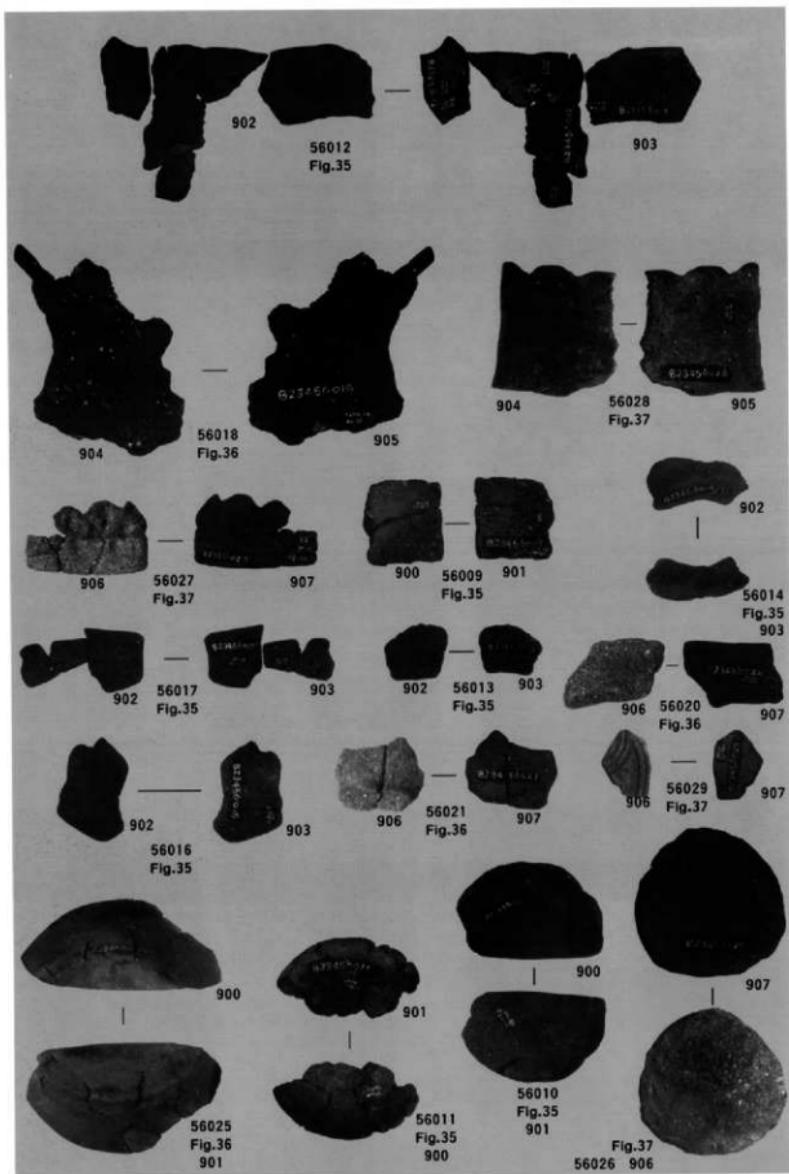
860北から



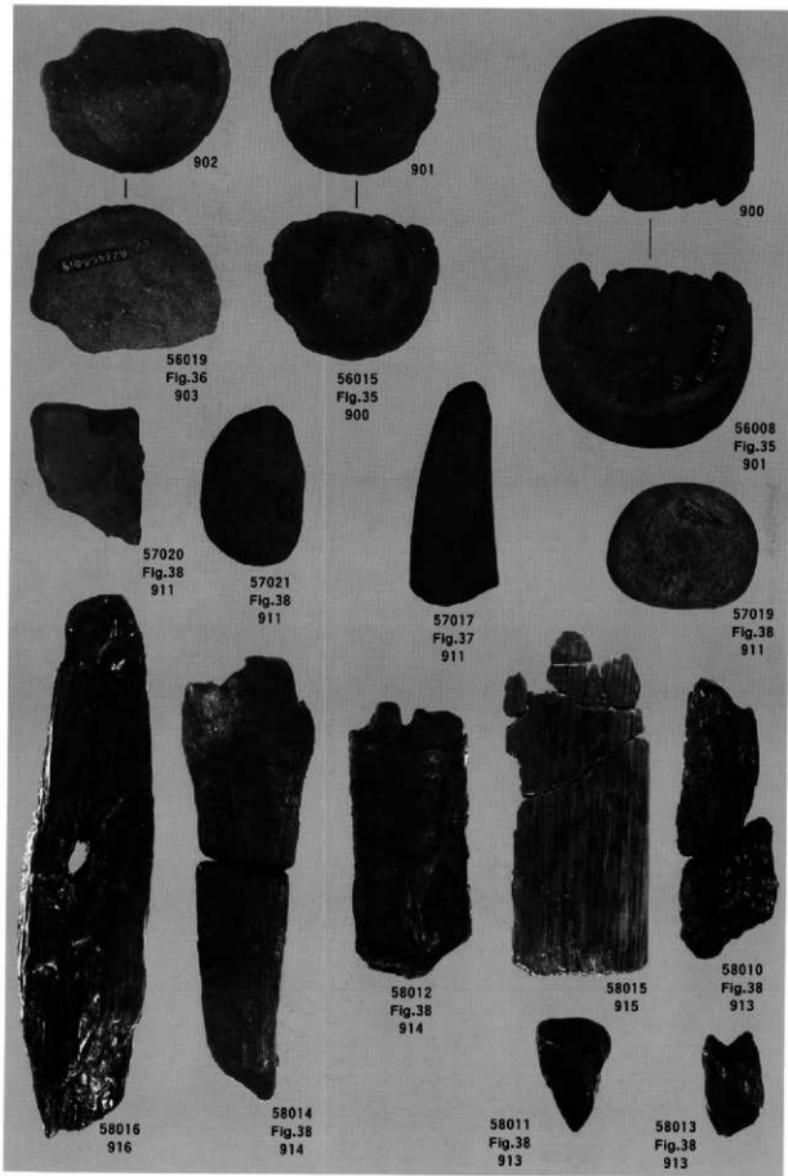
880北西



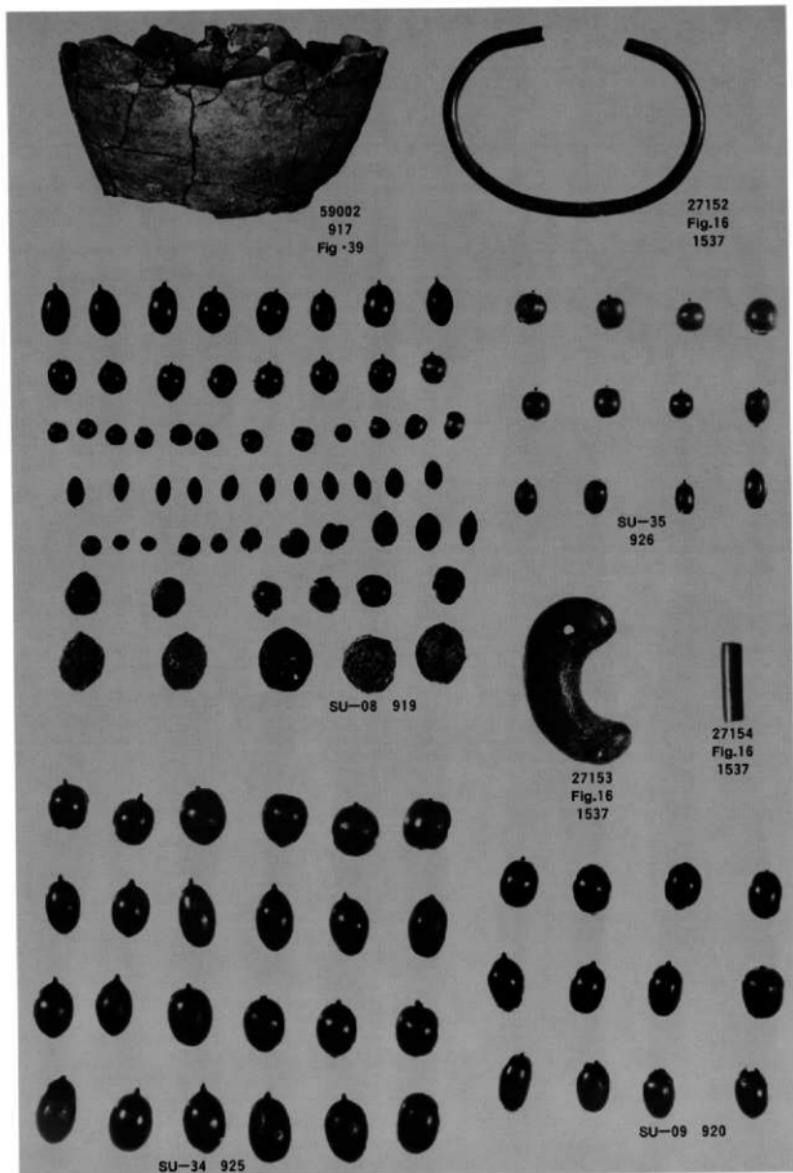
出土遺物-1(縮尺不統一)



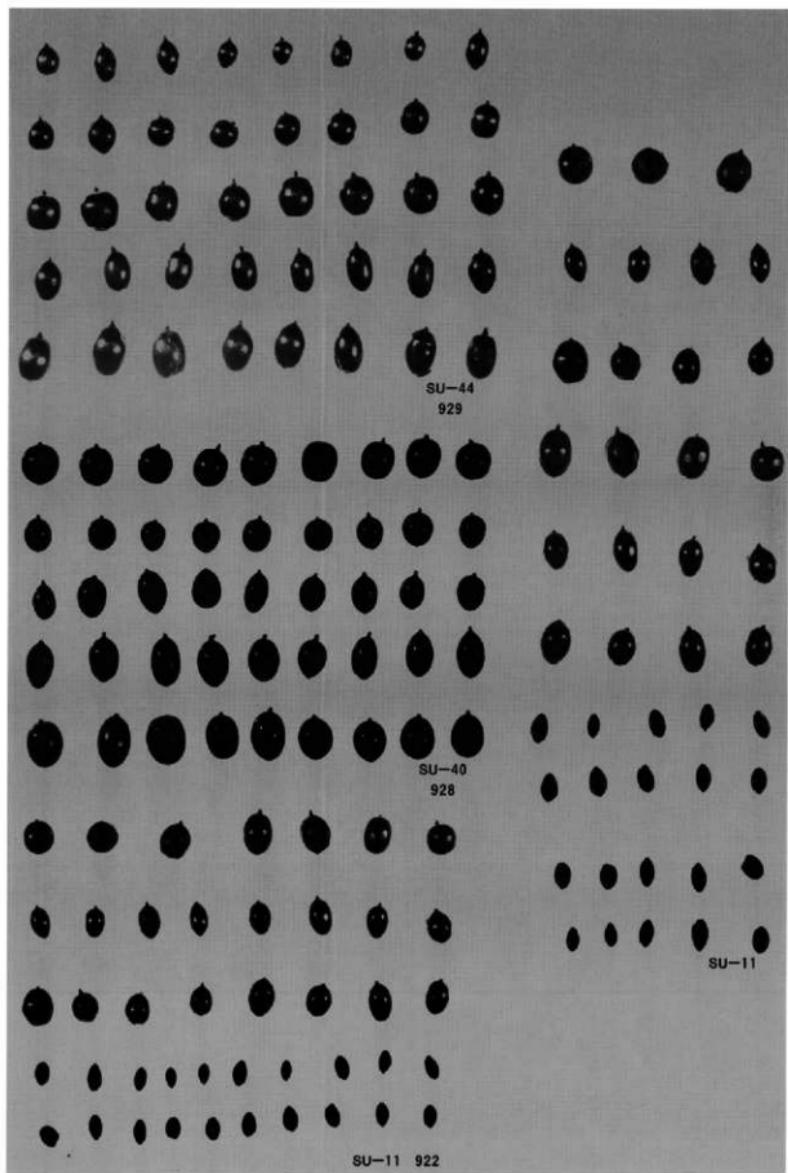
出土遺物—2(縮尺不統一)



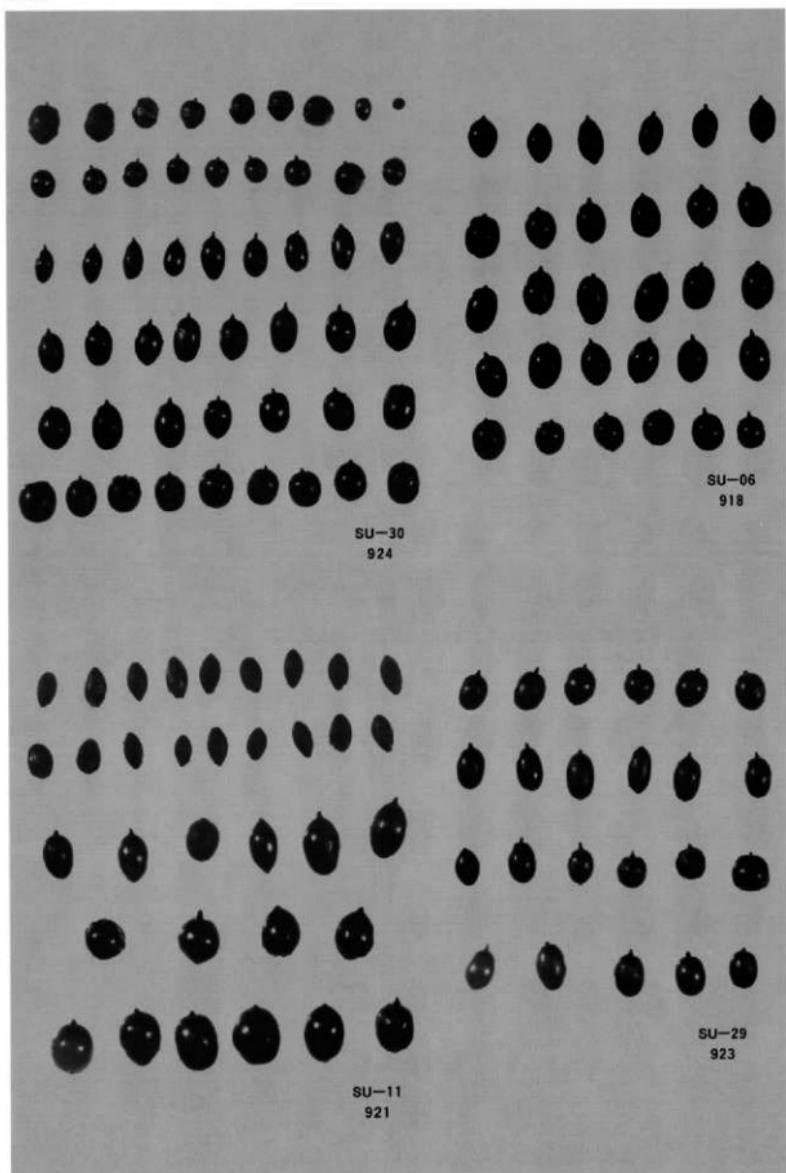
出土遺物-3(縮尺不統一)



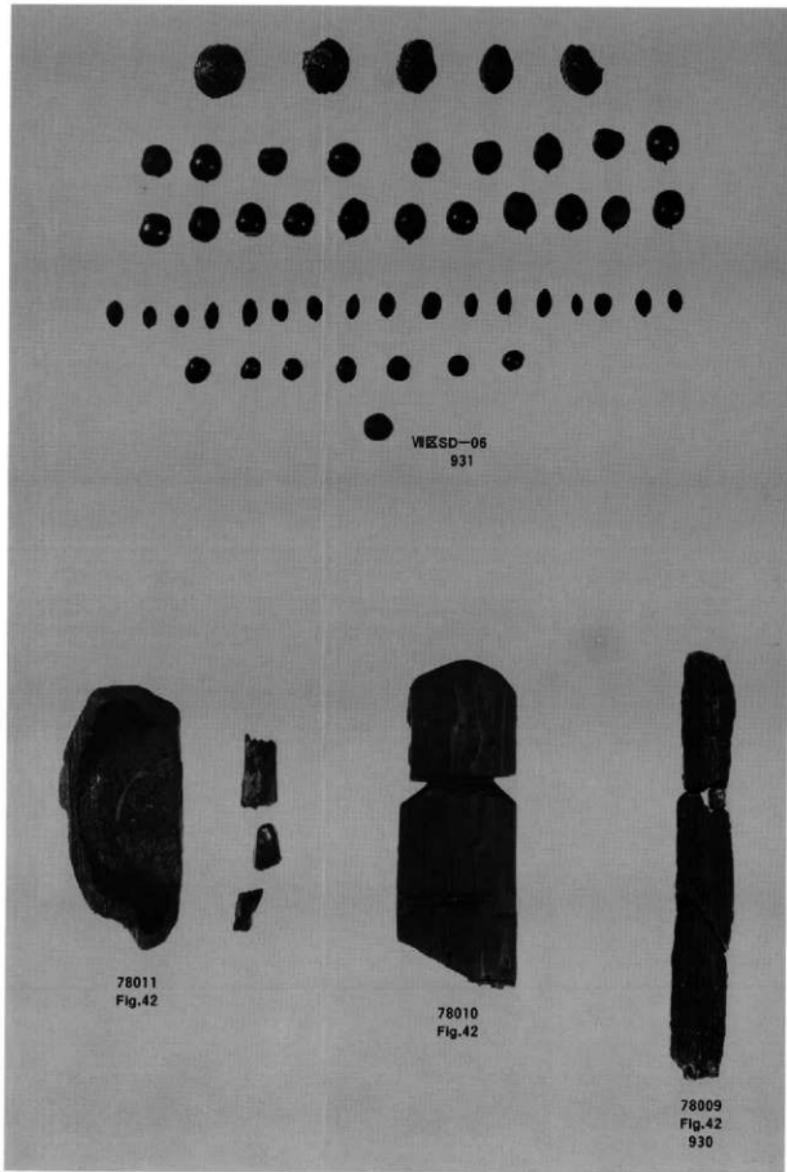
出土遺物—4(縮尺不統一)



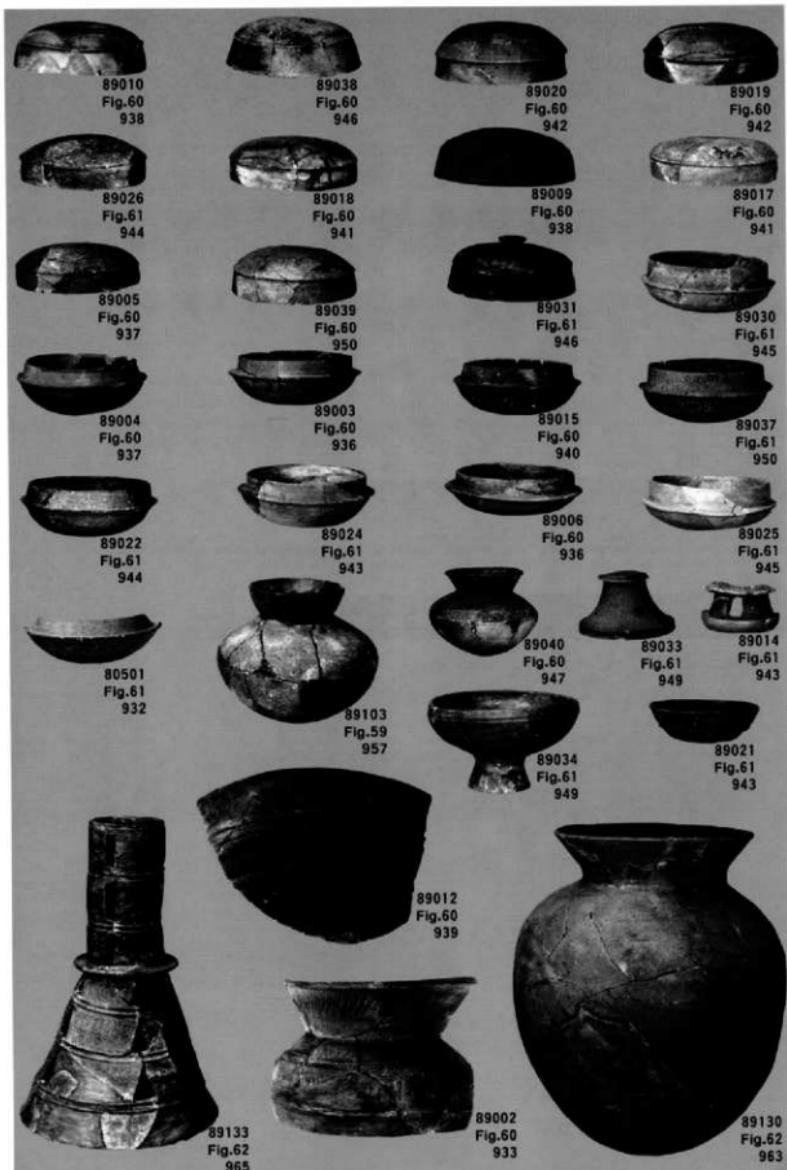
出土遺物一5(縮尺不統一)



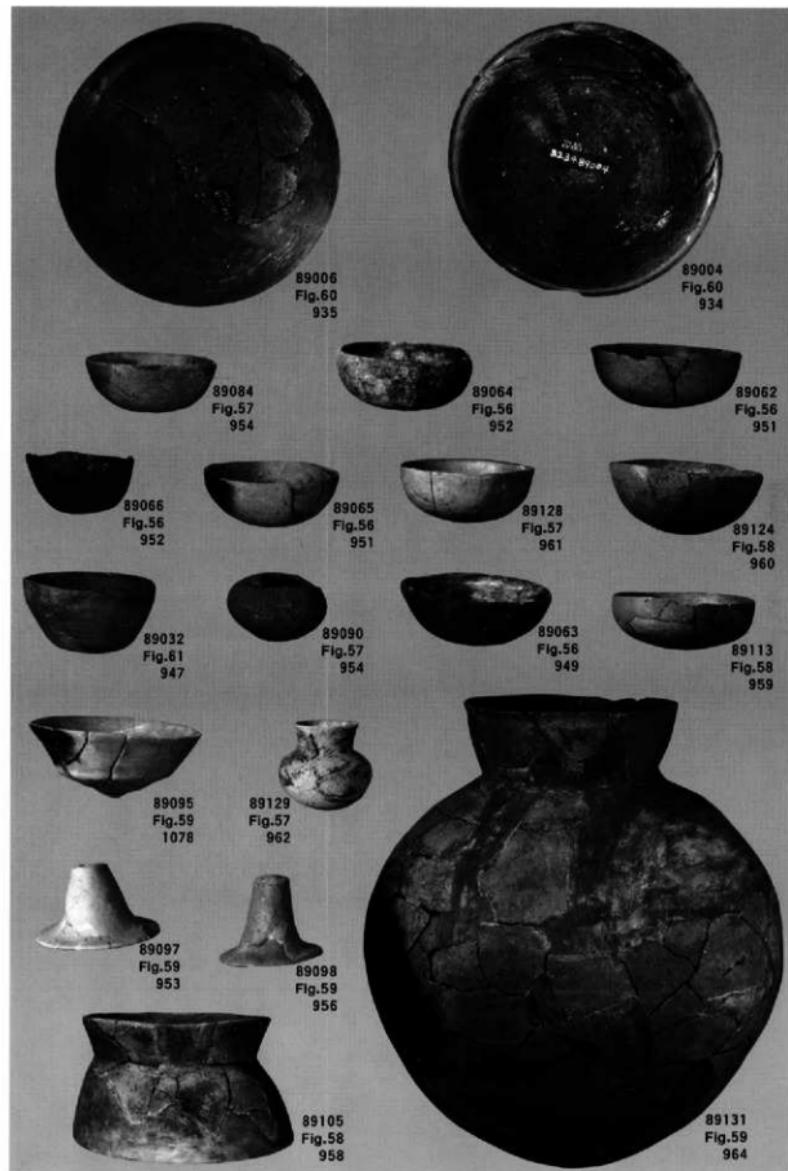
出土遺物—6 (縮尺不統一)



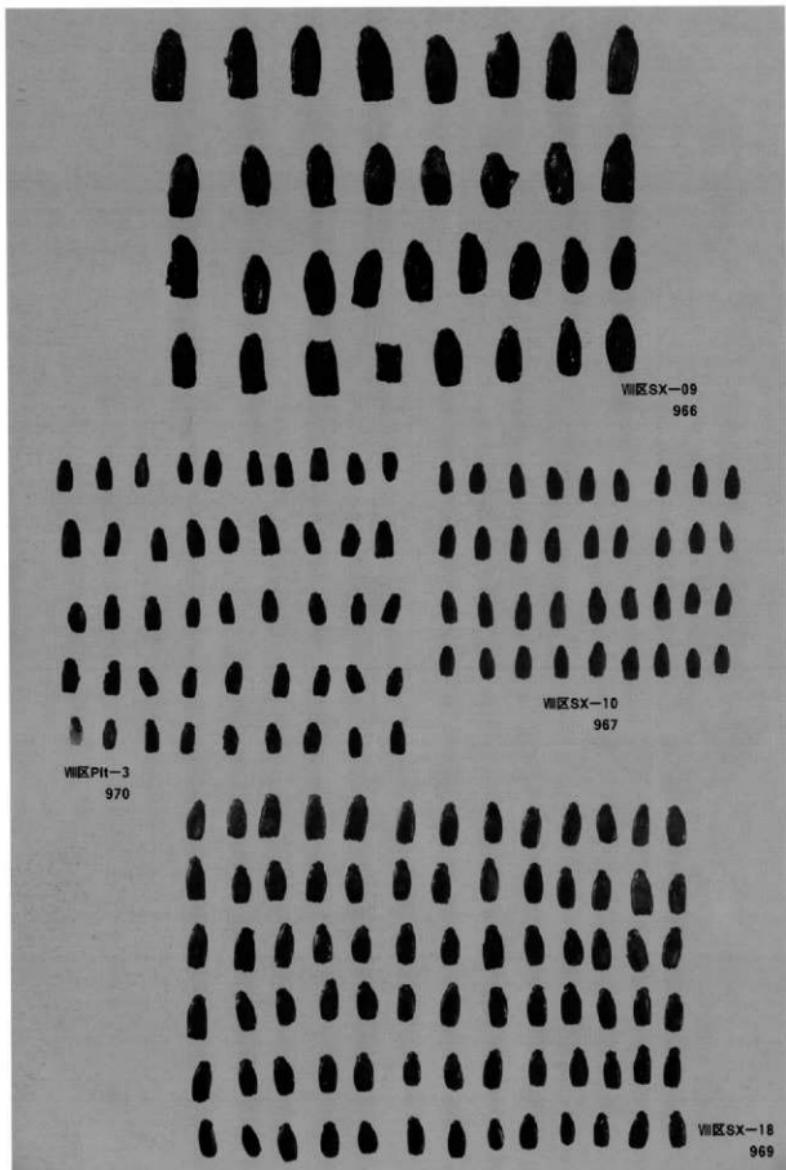
出土遺物一7(縮尺不統一)



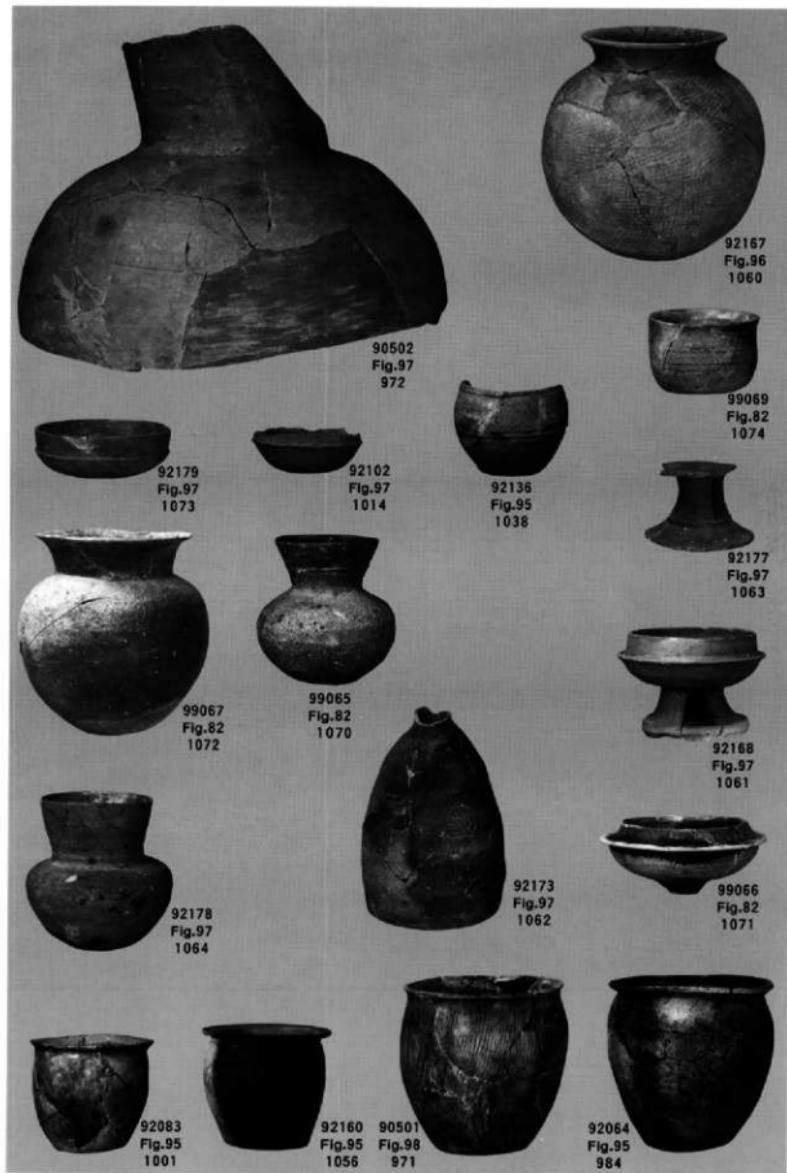
出土遺物-8(縮尺不統一)



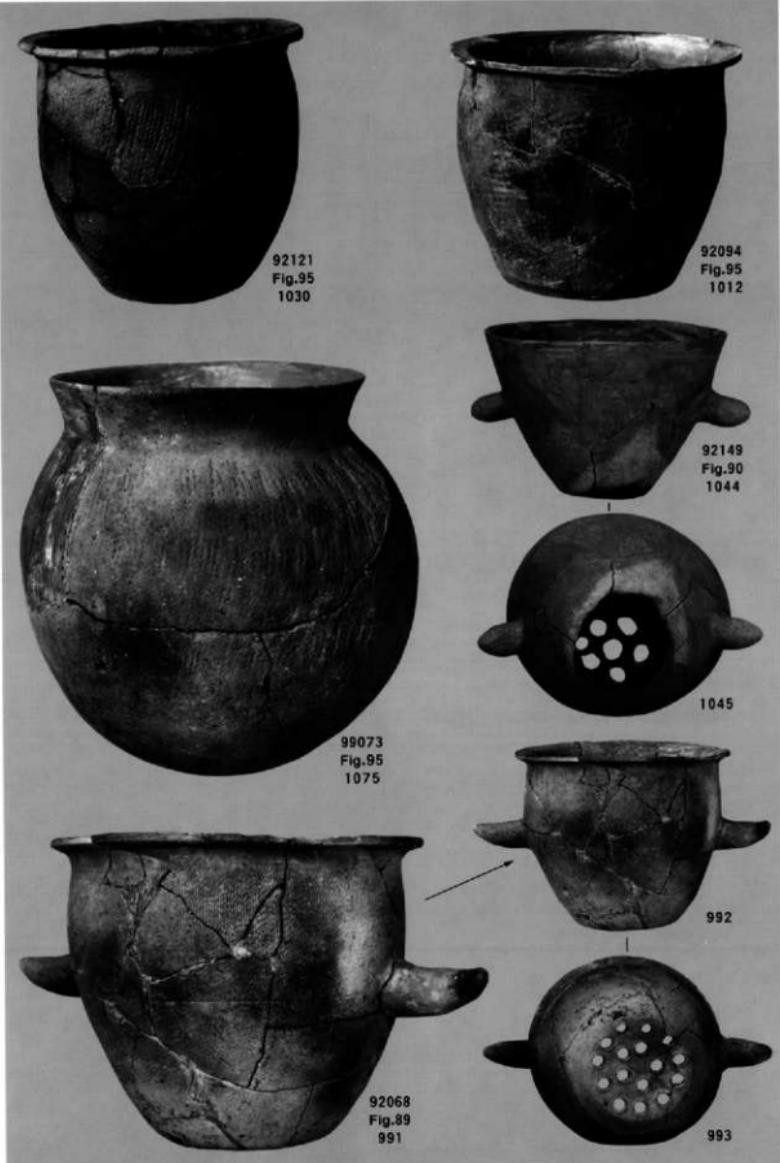
出土遺物一9(縮尺不統一)



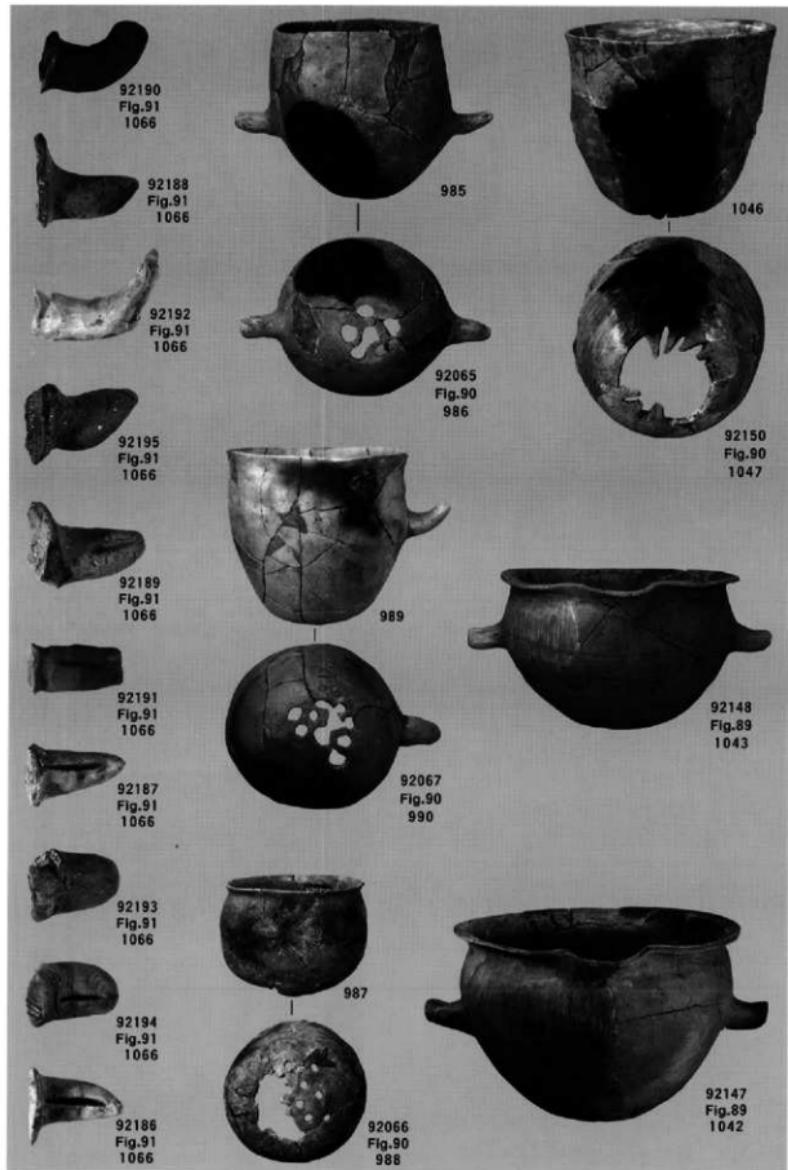
出土遺物-10(縮尺不統一)



出土遺物—11 (縮尺不統一)



出土遺物-12(縮尺不統一)



出土遺物-13(縮尺不統一)



92060
Fig.84
981



92070
Fig.85
995



92069
Fig.85
994



92161
Fig.95
1057



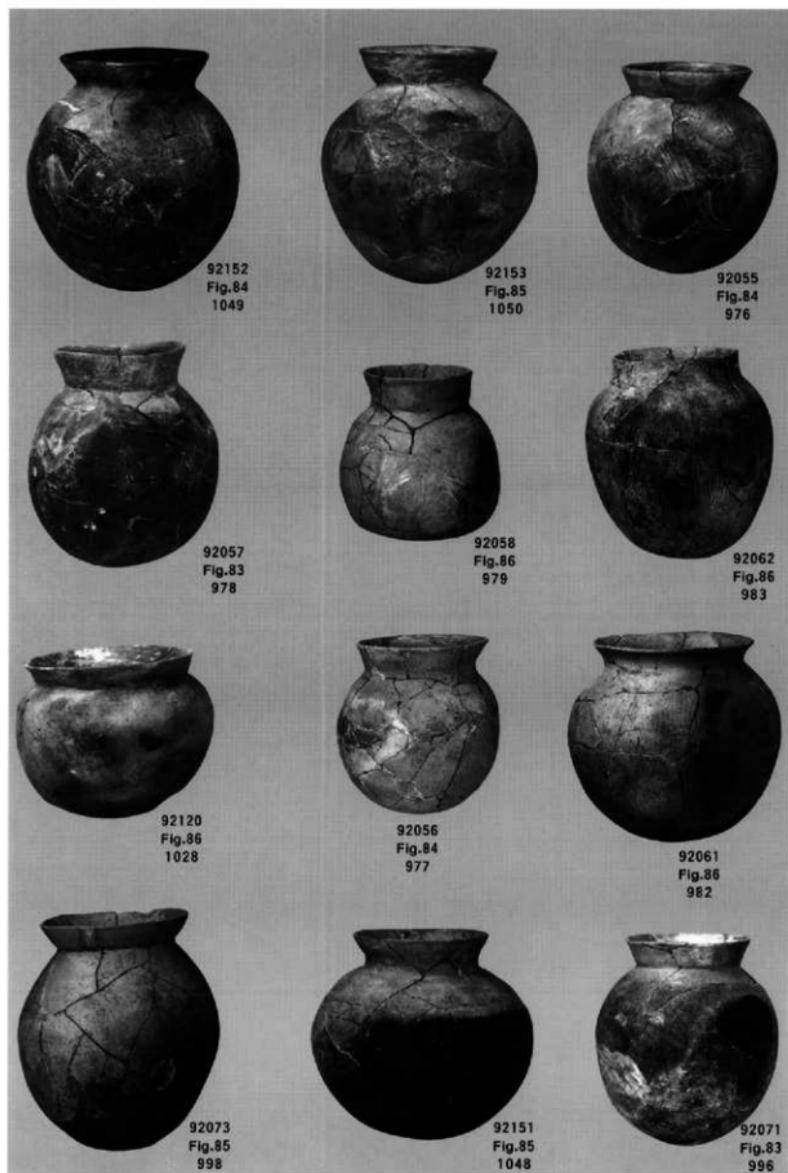
92164
Fig.83
1058



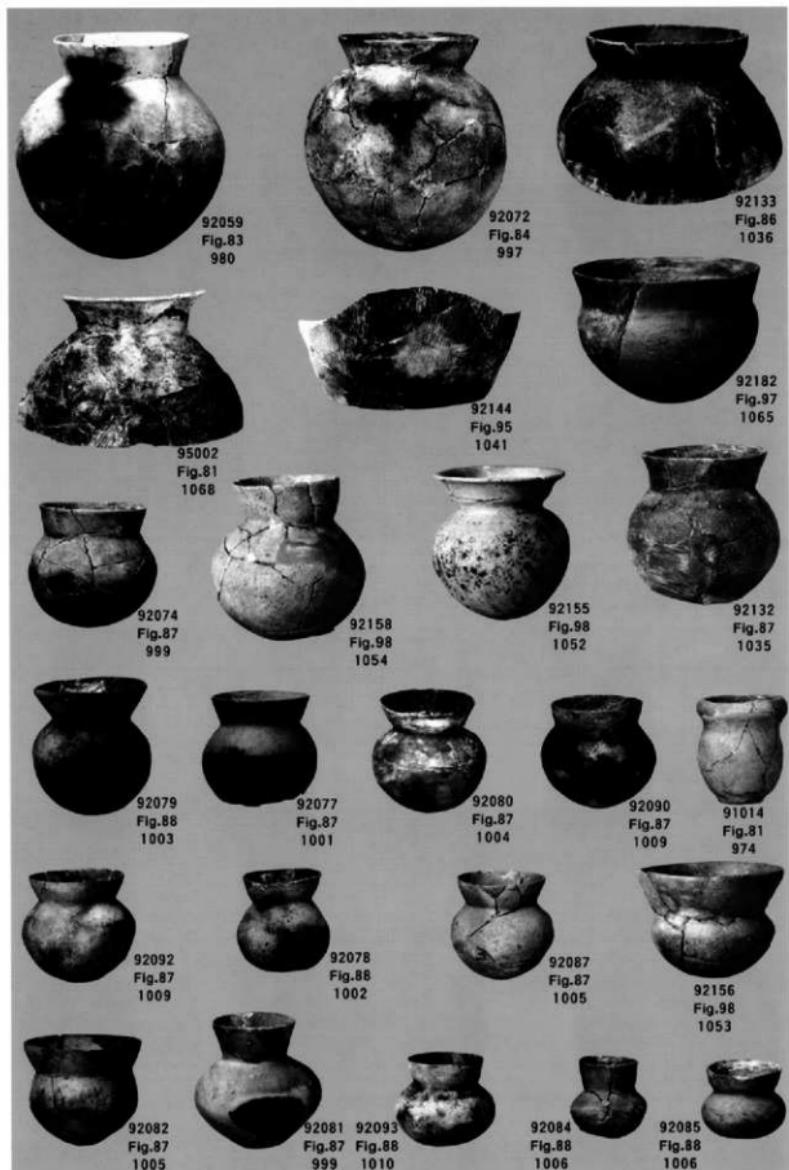
92165
Fig.86
1059



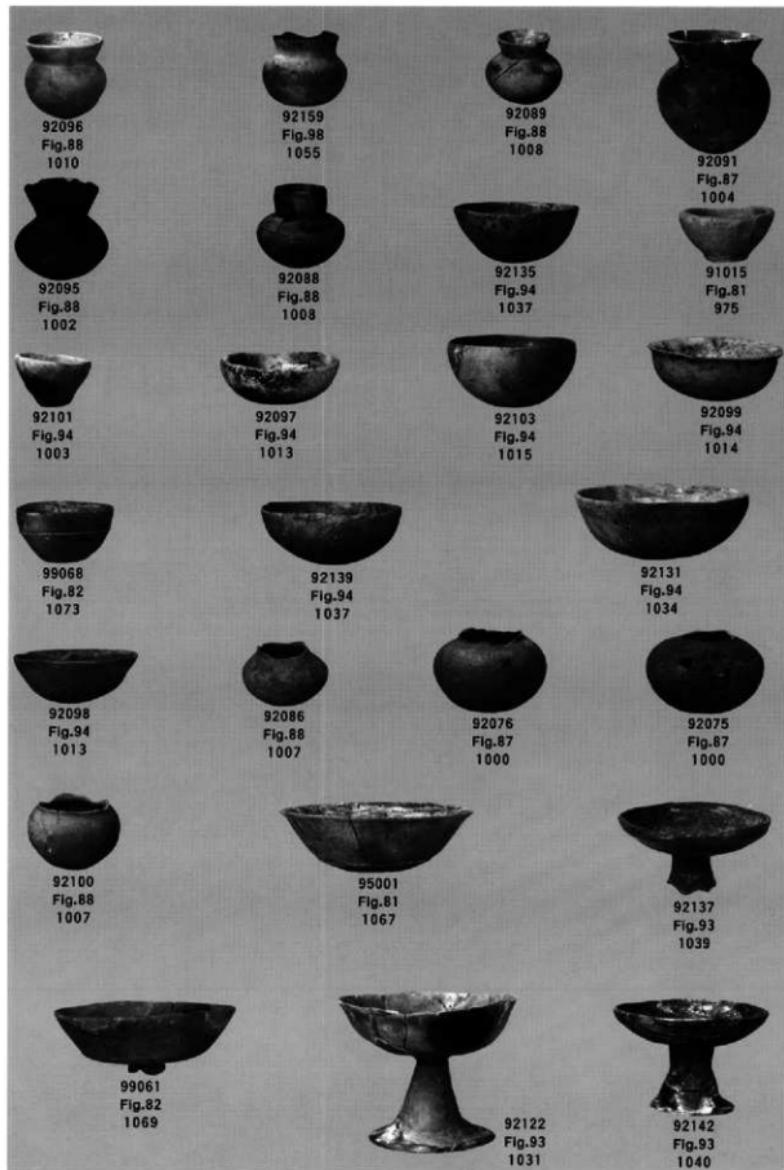
92154
Fig.83
1051



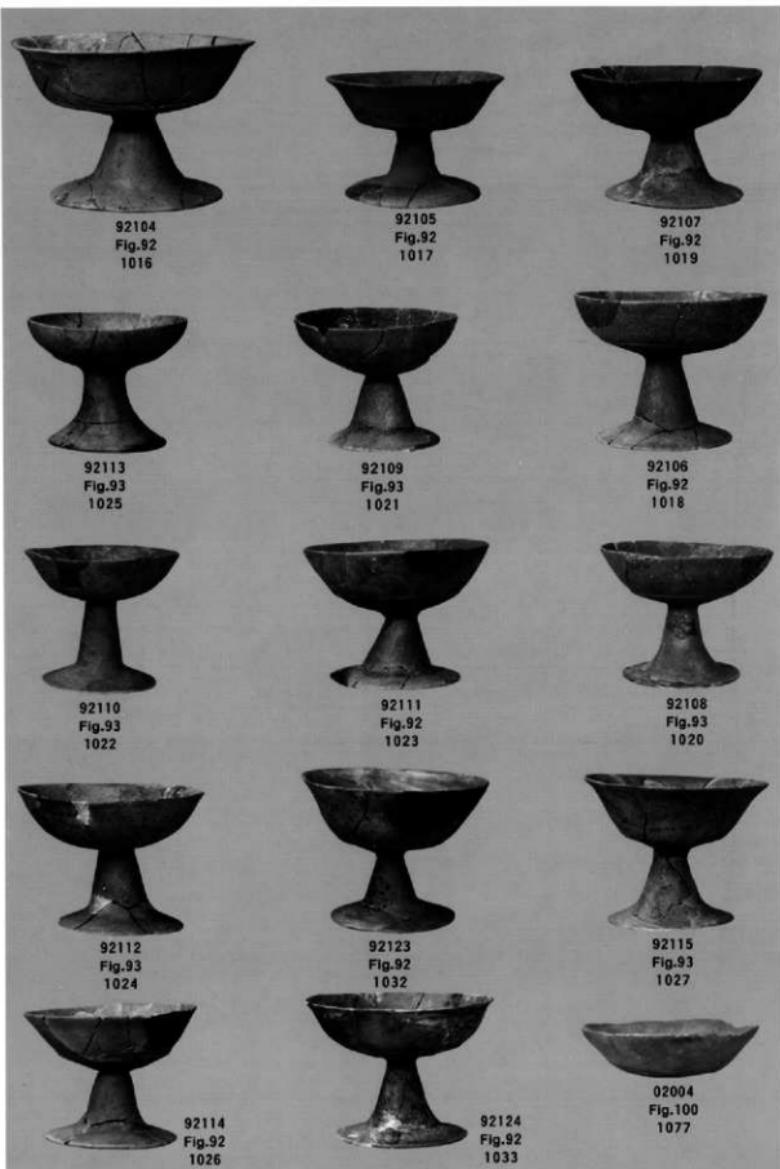
出土遺物-15(縮尺不統一)



出土遺物—16(縮尺不統一)



出土遺物-17(縮尺不統一)



出土遺物—18(縮尺不統一)

吉武遺跡群 XIII

飯盛・吉武遺跡整備事業関係調査報告書6
—第1・2次調査の縄文時代・古墳時代
から平安時代の調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集

2001年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 下川印刷有限会社
福岡市東区舞鶴口町8番27号

